SHOXX

1992
Vol.12
750 YEN
隔月刊
11月号

ヴィジュアル&ハードショック・マガジン
ショックス
VISUAL & HARD
SHOCK MAGAZINE

鮮烈なヴィジュアル&ハードショック

LIVE at BUDOKAN YOSHIKI

HIDE with KYO
魔性の館

ニューヨークが震撼した日 X in N.Y.

COLOR POSTER
MASAKI & TAIJI
LOUDNESSの野望

LUNA SEA BY-SEXUAL ZI:KILL LADIES ROOM

Cries

DieInCries

voxKYO + guitarSHIN + bassTAKASHI + drumsYUKIHIRO

NODE

SEVEN SONGS ALBUM

9/23 ON SALE

「NODE/ノード」

BVCR-2316 ¥2,300(INCLUDE TAX)
SONGS:「殺シテモ 殺シタリナイホドノ」「KOOL & MOONLIGHT」「言葉にならない…」etc.
初回特典:CD-SINGLE「RAPTURE THING」(The Central Nerve Mix)

SINGLE

9/23 ON SALE

「MY EYES—僕の瞳よ—」

C/W:「無口な夜」
BVDR-125 ¥930(INCLUDE TAX)
BONUS TRACK:「MY EYES—僕の瞳よ—」VOCALLESS VERSION

LIVE

「Systems OF NODE」

11/21(SAT)、渋谷公会堂 START 18:30
11/22(SUN)、渋谷公会堂 START 18:00
12/21(MON)、大阪サンケイホール START 18:30
¥3,914 全席指定、即日完売確実!

8/4〜9/2 悪戯の瞬間→全会場即日 SOLD OUT THANX!!
「DIE IN CRIES」に関する最新情報をお送りいたします。62円切手2枚を下記住所、「RAPTURE」係まで。
DANGER CRUE→MOVED!! 〒150 東京都渋谷区恵比寿4-5-28恵比寿ガーデン408 (有)デンジャー・クルー 03-5423-4607

DieIn

ariola

いつも新しい音楽の会社です。
BMG
BMG VICTOR, INC.

ビッグ・ニュース!!

1993
HIDE CALENDAR

93年度版・HIDEカレンダー

夢想暦（むそうれき）

独占限定発売決定!! ●きょう、9月21日から予約開始。

エックスのHIDEが自らプロデュースとタイトル考案した、初のソロ・カレンダーは音楽専科社が独占販売。ハードショック写真集『無言激』で世間を騒がしたHIDEが、さらに衝撃的なヴィジュアル・コンセプト（コンピューター・グラフィック処理）に挑戦！その大きさだけでなく、"9枚つづり"という変則的な枚数に何故なっているのか………その目で確かめよ!!

第1回締切：10月10日（当日消印有効）
発送開始：10月中旬
サ イ ズ：B2（タテ728ミリ、ヨコ515ミリのビッグ・サイズ）オールカラー、9枚つづり
価　　格：2,000円（送料は何本でも500円）

▶お申し込みの方は、2500円（1本の場合）を現金書留、又は郵便為替で、
〒104　東京都中央区銀座5-1-7数寄屋橋ビル5F 音楽専科社・経理部
「HIDEカレンダー／夢想暦」係まで急いでお申し込み下さい。

CONTENTS

発行所：株式会社音楽専科社
〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F
☎03-3574-0201
発行人：荒井敏行
編集人：星子誠一
製版・印刷：株式会社プロスト
発行日：1992年11月1日
定価●750円（本体728円、送料260円）

Vol.13（1月号）は
11月21日発売

万一乱丁や落丁があった場合はお取りかえします。本誌の記事および写真の無断転載放送複写は固くお断りします。

SHOXX

COVER MODEL:KIDE(X) &
KYO (Die In Cries)

STAFF ▶
Editorial Direction:Seiichi Hoshiko
Editors:Seiichi Hoshiko
Naoko Endo/Reika Iwashita
Art Direction:Page
Design:Page/Katsunori Miyake
Sakaguchi Ken Factory
Chiharu Doi

Vol.12(11月号)

HIDE with KYO
X Die In Cries

魔性の館

MASHOU-NO-YAKATA

初めて耳にしたメロディーは、母親の胎内。やがて生まれ来る魂を守り導いた賛美歌。
初めて口にしたメロディーは、異国の戦地。罪ない命を切り捨てる、偽りの正義のマーチ。
美しき幻影も時は思い出へ連れ去り、祝福に満たされていた魂は、いつしか社会の歯車と錆びていた。
流され続ける血を吸って、きしみながら回る歯車。無意味な長い戦いの果てに、敗れた兵士は夢を見た。
闇が渦巻く死骸の山に、立ち尽くす聖なる者。安らぎが彼をとりまき、ぬくもりが彼を抱く。
その姿に救世主を見た兵士は、彼に、ゆっくりと歩み寄った。彼が消えた。
兵士は泣き崩れた。その日から、面影の復刻は始まった。愛を求める、片目のエゴイストのモノローグ。

PHOTOGRAPHY & COMPUTER GRAPHICS:
HIDEO CANNO & DUB-FACTORY
HAIR & MAKE UP:TETSUYA KAMEYAMA
STYLING(HIDE):EMI TAKAHASHI
STYLING(KYO):KAORU SUTOH
ESSAY:FUZUKI WATANABE

HIDEHIDE
XX

どれほど眠りを重ねても、同じ夢には出逢えなかった。
窓の外の季節は変わり、時間は音もなく過ぎていった。
訪問者もない館の中を空虚な憂鬱だけが漂う。

WITH WITH
KYOKYO
DieInCries DieInCries

聖者を模したマリオネットと、独り遊びを繰り返す兵士。
孤独な悲しみに幾度も襲われ、涙も声も生気も枯れ、
それでも祈りは失われなかった。

MASHOU NO YAKATA

奇跡は不意に訪れた。
兵士の視界に聖者が現われた。
景色が色を取り戻した。
「オマヘハ、何者ダ？」
兵士の愚問に聖者は答える。
「私は、貴方の私です」
足音が近付いてくる。
驚愕と愛憎が、嘔吐のように込み上げる。
無理矢理に飲み下す。
聖者は声もなく笑った。

KYO

DieInCries

ithKYO
n Cries

「オマヘハ、ソノ瞳デ何ヲ見ルノダ？
ソノ胸デ何ヲ思ヒ、
ソノ腕デ何ヲ抱クノダ？
オマヘハ、何ノタメニ俺ヲ惑ワスノダ？」
細胞を熱い体液が流れる
片目の中のエゴイストが騒ぐ

HIDE W

X Die I

平衡を失い、戸惑う兵士
サーベルの使い方も忘れた今、
身を守る術は何もない。
強く噛んだ唇から、紅の雫が落ちた。

「唯一、貴方を救いに来たのです
それ以外、
私に何の意志があるというのでしょう
私に意志があるとすれば、
それは、すべて貴方の意志です
私のすべてが、貴方の心のままなのです」
マリオネットの聖者の言葉は、

X DieInCries

HIDE X WITH KYO DieInCries

HIDE
X
WITH
KYO
DieInCries

X DieInCries

罪を知らない
それが兵士をより苦しめる。
冷たい指先が触れ合う。

MASHOU NO YAKATA

極まる愛しさが欲望を覚まし、
征服欲へと形を変える。
行き場のない感情に、首をもたげる衝動。
魔性の呼吸が館に響く。
狂宴が妖しく幕を開ける。

操り、操られながら、
マリオネットたちの糸が絡まる。
そして、離れられなくなる。

HIDE with KYO

HIDE X

過去の絶望を逃れた兵士と、
未来の希望を捨てた聖者。
楽園を追われた天使のように、
そっと寄り添った二つの魂。
その結び目を確かめたくて、
兵士と聖者は証拠を求め合う。
たとえ現実が目を背け、
激しく罵り拒んだとしても、
孤独も二人なら怖くはない。
果実は収穫を待たずに朽ち、床で砕けた。

MASHOU NO YAKATA

「オマヘハ、何ヲ愛スルノダ？」「唯一、貴方だけです」
「オマヘハ、何ニ愛サレルノダ？」「唯一、貴方だけです」
すべてを賭けた生涯の誓い。運命が二人を解き放った。
最期の喜びが、水面に溶けてゆく。
いつか耳にした賛美歌は、レクイエムへと旋律を変え、消えゆく魂を静かに守り導いた。

HIDE
X

WITH
KYO
DieInCries

「東京三大粗大ゴミバンド」っていわれててとにかく、評判はむちゃくちゃ悪かった。

〈KYO〉

Free Talking

HIDE with KYO

X Die In Cries

一時期、同じバンドのメンバーとして、ひとつのステージに立っていたこともあるHIDEとKYO。彼らの友情はミュージシャン同士ということを超え、ひとりの人間対人間として、熱い絆で結ばれている。抱腹絶倒のエピソードの数々から、自分たちを取り巻く状況への真剣な怒りと挑戦まで……。つらいことも楽しいことも共に経験してきた二人だからこそ語れる言葉の裏には、ずしりと重い真実が隠されている。

INTERVIEW AKEMI OHSHIMA

誰かになにかを言われても構わずに……ではなく、
ちゃんとやり返すけど(笑)、俺は俺だからさ。
(HIDE)

この人、横須賀に呼ぶのはいいんだけど、なんとか帰らせないようにするんだよ。

—KYOちゃんとHIDEちゃんは、昔、サーベル・タイガーというバンドを一緒にやってた仲だから……。

HIDE　話は、いっぱいあるよ（笑）。

—期待してます（笑）。この前はプールのなかに入って撮影をしたりしたわけだけど、二人で一緒に撮影をしたのは、初めて？

KYO　ううん、横浜文化体育館の前以来。

—横浜文化体育館って、何のとき？

HIDE　自分たちで、自分たちのプロモーション写真を、撮ったんだよ。スタジオ24を6時間くらいのオールナイト・パックで借りて、そこに、銀紙を自分たちで壁に貼ってさ。ライトも自分たちで入れて、なかでメイクをして、そこで撮影したんだ。それで、朝になったから、「表に行って、撮影しよう」っていうことになって、横浜に行ったんだ。

KYO　でも、その写真が公の場所にでることは、なかったんだよ（笑）。

HIDE　俺が作ったチラシに、使ったくらい。

—だって、プロモーション写真だったんでしょ？

HIDE　雑誌から依頼がきたら、提供してやろうかと思ってたのに、ひとつもこなかった（笑）。

KYO　RANDAM（北海道のミニコミ誌）くらいだったね。持ってっても、載らなかったし。

HIDE　俺ら、嫌われてたもんね。

KYO　かなりね。

—最初から、話はそこにいってしまうのね。

HIDE　だって、話すこと、いっぱいあるんだもん。

—じゃ、とりあえず、二人の出会いから聞きましょうか？

KYO　HIDEちゃんと最初に会ったときのことは、よく覚えてるよ。でも、サーベルのメンバーってみんな、最初から印象深かったな。いろんな意味でね。

—サーベルに入る前は、知らなかったの？

KYO　俺が、一方的に知ってただけじゃない？　知り合いじゃなかったけど、いろんなところでチラシを見たし、「こういうバンドなんだろうな～」っていうのは、知ってた。でも、そのことをHIDEちゃんにいうと、「こんなバンドには、絶対に入りたくないって、思ってたんでしょ」って、いわれるんだよ（笑）。でも、当時、俺はガキだったから、（サーベルが）すごく本格的なバンドに見えたわけよ。

HIDE　そんなことは、全然、なかったんだけどね（笑）。

KYO　みんな、髪が長かったし、派手だったからね。一瞬だけ、「このバンドに入ったら、面白そうだな」と思ったことはあるんだけど、とにかく、みんな、恐そうだったからさ。この人（その時のヴォーカル）が、ずーっとヴォーカルをやるんだろうな～って、思ってた。

—HIDEちゃんのほうは、どう？

HIDE　俺はね……。ヴォーカルがいなくなって、ヴォーカルを探してたときがあったんだ。最初は、「外人を入れよう！」っていってて、たまたま日本語がちょっとしゃべれるやつがいたんだけど、実際に音を出してみたら、すげーヘタクソだったんだよ。しかも、「オヤジが外交官だから、帰らなくちゃいけない」っていって抜けちゃって、そのあとはしばらく俺が歌ってたんだ。でも、あんまり疲れるから、また探しだしてさ。「とにかくケバくて、カッコいいやつがいい」っていってたら、友達が鹿鳴館のファイルでKYOちゃんのことを見つけてきてさ。それで、いきなり、KYOちゃんは千葉に住んでたのに、「横須賀に来て」って呼び出したんだ。

KYO　そうだよ、俺、そのとき、風邪をひいてたのに、行ったんだよ（笑）。

—じゃ、最初はルックスが気に入ったんだ？

HIDE　でも、ちゃんと前のバンドのテープも聞いたよ。

KYO　あ、そうだったんだ（笑）。それ、知らなかった。

HIDE　だから、横須賀に来てもらったときには、すでに第一段階をクリアしてたんだ。それで、第二関門が「横須賀まで、来れるかどうか」ってことで、それを試してみたのね。そしたら、見事に来てさ。そのときが何度もいってる有名な「KYOちゃん横須賀モーゼ事件」だったんだよ（笑）。俺たち、KYOちゃんが来るのを、改札口で待ってたんだけどさ。不細工なやつが来たら、黙って帰っちゃおうっていってたんだ（笑）。

KYO　ひどいよね。人を横須賀まで、呼び出しておいて。

HIDE　そしたら、向こうのほうから、赤いマッチ棒で頭が黄色いみたいなやつが、歩いてくるんだよ（笑）。それで、人がいっぱいいるのに、まるでモーゼが歩いてくるみたいにKYOちゃんの前にいた人たちがザザ～って、道をあけるんだ。一歩歩くごとにカチンカチン、ジャラジャラって、音をさせながら近づいてきてさ（笑）。それで、頭は、こぉんなにデッカイし。

KYO　とにかく、派手だったよね（笑）。

—KYOちゃん、そのとき、髪を立てて行ったの？

KYO　だって、その頃って、みんな、普段から立ててたもん。今の子は、おとなしすぎるよ。気合いが足りん（笑）。

HIDE　でも、KYOちゃんは、本当にケバかったよ。いつでも、マニキュアしてるし。

KYO　指輪は、全部の指にしてるし。

HIDE　それで、俺らがよく飲みに行くドブイタっていう場所に、KYOちゃんを連れてったんだけどさ。そこへ行くまでには一般ピープルがたくさんいるメインの商店街を通らなくちゃならなくて、そこをKYOちゃんと一緒に歩いているのが、面白くてね。原住民がいっぱいいるとこに、ラジオを持ってきたみたいだった（笑）。

—KYOちゃんのほうは、改札口で待ってた人たちに対する印象は、どうだったの？

KYO　とりあえず、HIDEはすぐにわかった。顔を見た途端、「この人が、HIDEって人だな」って、思ったよ。あとは、スラッシュメタルみたいな人と、色の黒い人がいてさ。でも、俺、HIDEちゃんってもっと豪快な人かと思ってたら、こういうしゃべり方だったから、ちょっとビックリした。それで、最初にかわした言葉を今でも、覚えてるんだよ。HIDEちゃんが俺の格好を見て、「ハノイとか、好きっしょ」っていったんだよね。

HIDE　そんなの、あの当時のあなたを見れば、誰だってわかるよ（笑）。だって、マイケル・モンローそのままなんだもん。

KYO　だから、接点は多かった。それで、俺、初めて会って飲んでんのに、調子こいて飲みすぎて、気持ち悪くなってんの（笑）。

HIDE　あのとき、うちに泊まったんだよね？

KYO　泊まった。

—じゃ、飲んだだけで、音とかは出さなかったんだ？

HIDE　それどころじゃないよ。飲み屋で、ベロンベロン状態だもん。

KYO　俺なんか、歩けなかったもん。

—それで、KYOちゃんはサーベルに加入して、横須賀までリハに通ってたんでしょ？

KYO　最初、俺、「横須賀までは、通えないな」って思ってたのに、よく行ったよね。それで、リハにも通ったし、飲みにも行ったし。それで、この人、横須賀に呼ぶのはいいんだけど、なんとか帰らせないようにするんだよ。

—それって、今とパターンが似てない？

HIDE　似てる、似てる。

KYO　「俺、明日、バイトだから、帰る」っていっても、「まだ、大丈夫。電車はあるよ」とかいって。

HIDE　本当は、ねーんだよ、もう（笑）。

KYO　でも、そのうちに俺も覚えてきて、「嘘だよ。最終は何分だもん」ってさ。それで飲み屋を出ると、「ちょっと、モス・バーガー、食べたくない？」とか、すぐそういうこというんだよ、昔から（笑）。でも、よくHIDEちゃんちには泊めてもらって、メシを食わしてもらったよね。それでさ～、HIDEちゃんの部屋、汚いんだよ。物が散乱してて。

HIDE　そんなこと、よく覚えてんな（笑）。

—最初に、音を出したときのことは覚えてる？

HIDE　俺、あんまり覚えてないな。

KYO　俺は、覚えてる。とにかく、すげー音がデカかったんだよ。それで、一瞬、HIDEちゃんは「俺、選択を間違ったかな」っていう顔をしてたんだ。

HIDE　俺？　そうだっけ？

KYO　ボロボロだったもん。その頃、俺、リハが終わると、声が出なかったからね。

HIDE　俺、声はデカいなと思ってたんだけどね。

KYO　だって、リハの前にテープなんて聞いてないから、曲を知らないわけよ。そしたら、その場で「じゃあ、ちょっと、俺が歌うから、覚えてね」っていわれて、それで歌ったんだ。

HIDE　ああ、そうだ、そうだ。

KYO　うろ覚えで歌ったら、「KYOって、物覚えがいいんだな」っていわれたのを、すごく覚えてる。そういう問題じゃな～い！って（笑）。

HIDE　その頃、うちのバンドって細かいことをするのが、好きだったのね。ころころリズムが変わって、覚えきれないくらいのフレーズを詰め込んで、アレンジに凝りまくって。だから、ヴォーカルはないがしろにされてた感じは、あったよね。

KYO　みんなが楽器で「おお、それ、カッコいい～っ」とかやってるとき、俺はスタジオの隅っこで、半分寝てるの（笑）。だって、「新曲ができたから、歌をつけて」って、テープを渡されるんだけど、どこに歌をつけていいんだかわからないんだもん（笑）。

—じゃ、最初からサーベルのオリジナルをやってたんだ？

HIDE　そう。

—ライヴは、どのくらいやってるの？

KYO　すごいやったよ。俺、半年くらいしかいなかったんだけど、もっといたような気がするもんね。

HIDE　いちばん、最初は埼玉だったんだよね。

KYO　なんていう名前だったっけ。今はなくなっちゃったライヴハウス。

HIDE　なんか、店長がいい人で、俺ら、前ノリしたんだけど、泊めてくれたんだよね。

「とっとと出ていけよ、このクソったれがよぉ!」って、もうネッチョネチョしてるんだよ(笑)。

KYO そのときも、面白いことがあったんだよ。ライヴの当日まで、みんな、どんな衣装を着るか、知らなくてさ。

HIDE お互いに知らなかったんだよ。

KYO 泊めてもらった部屋で、みんな衣装に着替えて、「俺は、こういうのだ」って、見せっこしてんの(笑)。

——サーベルって、衣装の雰囲気は揃ってたんじゃないの?

HIDE ううん、バランバラン。

KYO ウェディング・ドレスみたいなのを着てるやつもいたしさ。俺は夏なのに毛のはえてる衣装で、誰かに「夏なのに、暑苦しい」って、いわれたんだよ。

HIDE 今、考えると、KYOちゃん、スパッツをはくわ、ガードルをはくわ、オーガンジーのスカーフをまくわ……。

KYO すごかったよね~。

HIDE でも、MCは今と変わらない。今はちょっと丁寧になったけど、それを除けばほとんど同じ。(ここで、KYOのMCの真似をするHIDE。一同大爆笑)。

KYO うるさいな~、もう。でも、なんやかんやいっても、HIDEちゃんとはよくつるんでるよね。解散してからも、よく遊びに行ったもん。彼女ができると、見せに行ったりとか(笑)。

——KYOちゃんが入ったあとに、TETSU(元D'ERLANGER、ZI:KILL)も加入したんだよね。

HIDE あれも、おかしいんだよ。KYOちゃんが入る前に、俺とベースともうひとりのギターとで、「欲しいドラマーのリスト」を作ってたんだ。それが、YOSHIKIとTETSUだったの。でも、TETSUのうちに電話したら、お母さんに断わられちゃったんだよ。その頃から、彼はメチャクチャうまくて、引く手あまただったから、お母さんも事情を知ってて、バンドのお誘いだと本人と話す前に断わられちゃったんだ。それで、他のメンバーを入れて5人で活動しはじめたんだけど、ある日の打ち上げにTETSUがいてね。それで、いきなり、「俺、入るよ。俺を入れろ!」とか、いってさ。「なんだ、こいつは?」って、ビックリした。

KYO 俺は、前から知ってたんだけどね。サーベルに入る前に話が進んでたのが、秦司とTETSUのバンドだったから。それで、打ち上げでHIDEちゃんに紹介したら、ふたこと目に出てきた言葉が、「入る」っていうセリフなんだよ。

——じゃ、TETSUのほうからいってきたんだ?

HIDE 俺は、最初、冗談だと思ってたんだ。

KYO 酒のうえの勢いだと、思ってたんだよね。でも、当時のベースのやつがすごく気に入ってたから、連絡をとったみたいでさ。うちにTETSUから「バンドが、決まった」っていう電話がかかってきて、「ホント、良かったね。それで、どこのバンド?」って聞いたら、「サーベルタイガー」って(笑)。

HIDE 昔から、あいつは強引だもんね。冗談なんだか本気なんだか、さっぱりわかんない。それで、知らない間にメンバーになってた(笑)。

KYO だって、メンバーの俺が知らなくて、本人にいわれて「ウッソー」って驚いてた(笑)。

HIDE そういえば、あの頃は、ステージセットがあったんだよね。

KYO それが、大変なんだよ、組み立てるのが(笑)。

——網かなにか?

HIDE そう。工事現場の網のついたてみたいのを、トラックでかっぱらいに行ってさ。それで、器材車に入らないから工場に行って、真っぷたつにして、ライヴのときは、その網を組み立てて、アンプの前にズラーッと置いといたんだ。

KYO それで、だいたい、ドラムのサウンド・チェックをしてる頃に、俺とHIDEちゃんが二人でそれを組み立ててた。「せ~の」で、持ち上げたりしてね。

——その頃はお互いに、ヴォーカリストとしてとかギタリストとして、どう思ってたの?

HIDE 俺は、カッコいいと思ってたよ。

KYO おれも、やっぱり……。

HIDE うっせ~よ(笑)。

KYO いろんな部分で、興味がある人だった。作っていきたい世界の接点が、いちばんある人だったから。

HIDE 俺、その頃、ヘヴィメタルに固執してたから。「これが、ヘヴィメタル!」っていうものに、パンクとロックンロールを混ぜたかったんだ。アレンジは複雑怪奇で、ヴォーカリストはわかりやすい歌を歌っていて、ノリはロックンロールがいいっていう……。それで、ヴォーカルは、KYOちゃんがいいと思ってたんだ。だけど、当時のKYOちゃんは、恐かったんだよ。今でこそ、お客さんに対して友好的だけど、その頃は今の東京ヤンキースどころじゃなかった。ヤンキースは、「おめーら、帰れ!」って、ストレートじゃん。KYOちゃんのはもっと高飛車で、「おめーら、耳あんのか、耳ぃ!」って、すごいの。「俺が客だったら、こいつのこと、すげー嫌いだろうな」ってビデオを見て思うくらいのMCだった。

KYO たしかに、敵は多かったよ。「話をするまで、お前のこと、嫌いだった」っていうやつ、多かったもん。

HIDE 「うしろによぉ、戸があんだろ、戸が。そこ開けて、とっとと出ていけよ、このクソったれがよぉ!」って、もうネッチョネチョしてるんだよ(笑)。

KYO ちょっと脚色してるけどね(笑)。でも、「耳、あんのか」とは、いってたよね。D'ERLANGERの中期くらいまで、それ、いってたんじゃないかな。だけど、HIDEちゃん、いわないと怒るんだもん。

——なに、そんなこといってて、いわないと怒るわけ?

HIDE 好きだったんだもん。一応、サーベルタイガーは、こわもてのバンドだったからね。

KYO とくに、俺がそういうMCをすると、いちばん喜ぶのはHIDEちゃんとTETSUだった。「KYO、あれ、カッコ良かったよ」って、歌の感想はなにもいわないで、MCのことばっかり(笑)。

HIDE 医科歯科大の学祭でやったとき、TETSUが始まる前に教授と喧嘩しちゃってさ。「どうせ、こいつら、俺らのことをよく思ってないんだ」って、気合い入ってたよね。

KYO これからライヴなのに、暴れちゃったんだよね。

HIDE でも、あのときのギャラが、すごく良かったんだよ。生まれて初めて、素晴らしいギャラをいただいた。

KYO そう、そう。百万とか、そういう世界だったんじゃなかったっけ? あれ、十万だったっけ?

——百万と十万じゃ、全然、違うじゃない(笑)。

KYO いや、当時の俺たちにとっては、とにかくすごい額だったわけよ。

HIDE まとまったお金をいただけたっていうことでね。

KYO でも、全部、楽器車の借金の返済にあたっちゃったけどね。

——でも、鹿鳴館でやってるくらいだったら、結構、ギャラをもらってたんじゃないの?

HIDE でも、ワンマンじゃなかったもん。サーベルタイガー対サーベルタイガーとかいって、北海道のサーベルと対バンをやったこともあったよね。

KYO そのとき、ドラムがMINATOくんでさ。向こうのリハを見てるとき、みんな、「帰ろう」っていってたんだよね。

HIDE うまいんだもん、これが。

——でも、音楽性とか違うのに、どうして対バンをやることになったの?

KYO とりあえず、同じ名前だったからじゃない?

HIDE それで、負けたほうが名前を変えるとか(笑)。

KYO そう、そう。シャレで、そんなことをいってたよね。

HIDE 本気でいわなくて、良かったよ(笑)。

KYO そのあと、初めて取材っていうものを受けたんだ。RANDAMの。初めて、本に写真が載って、やたら嬉しかったっていうのを、覚えてる。

HIDE RANDAMは、よく載せてくれたよね。他からは、嫌われてたけど(笑)。

——そんなに嫌われてたの?

HIDE エックスと、サーベルと、ディメンシアは、嫌われまくってたんだよ。

KYO 「東京三大粗大ゴミバンド」って、いわれてたからね。話したら誤解は解けたと思うんだけど、とにかく、評判はむちゃくちゃ悪かったんだよ。

——なんで、そんなに評判が悪かったの?

KYO 打ち上げ会場を、次から次へとつぶすバンドだから(笑)。

HIDE あと、スタッフが異常に多いとか、ゲストが異常に多いとか。それで、「ど~せ、俺らなんか嫌われてるんだ、いいや、いいや」って、エックスとかディメンシアの打ち上げにいっては、みんなで暴れてた。

KYO だいたい、そんな人数が入れる店がなくてさ。

HIDE それで、どこのバンドのライヴでも、打ち上げにいるメンツは変らないんだよ(笑)。誰のライヴだったか、さっぱりわからなかった。

——でも、その程度で、どうして粗大ゴミとまでいわれてのかな?

KYO あることないこと、ふいてたやつとか、いるんじゃないの?

HIDE 誰とは、いわないけどね。僕は、今でも覚えてるけど。でも、結構、いじめられてたよね。

KYO でも、今、思えば、「こいつら、いくんじゃないか」って、ビビッたんだと思うよ……と、強気な発言(笑)。

HIDE でも、「俺たちは、俺たちだよね」っていって、みんなで固まって遊んでたからいいんだよ。

KYO 実際、そのときの悔しさがバネになってる部分は、あるもんね。

——でも、「東京三大粗大ゴミバンド」っていうそのネーミング、すごいなぁ。それ、どこかで書かれたの?

KYO 誰かがいったんじゃない?

HIDE いってたよ。

——でも、そう呼ばれてた人たちが、今、みんなちゃんとやってるっていうのがまたすご

サーベルに入ったときは、「こいつらとだったら、ビッグになる」っていう予感があった。

いよね？

HIDE　だから、その頃って、地道に努力しているっていう姿勢が見えないと、許せないような風潮があったのよ。俺たちだって普通にやってるんだけど、見かけが派手だったから許せなかったみたい。俺たちのやってることの外側だけを見ると、傍若無人のように見えるから、それですごくたたかれてたんだと思う。でもさ、地味に飲んでて女を持って帰るのと、みんなでワーッと騒いで店を壊すのと……どっちもどっちでしょ。どっちもいいことじゃないけど、そんなの、本人の勝手じゃん。

KYO　ホントだよ。だから、そういうやつらは、俺たちのこと、面白くなかったんだと思う。俺たちだって、こんなことということじゃないのかもしれないけど、地道っていったら、結構、地道にやってたよ。活動としてはね。格好は、派手だったけど。俺だって（サーベルに）入る前は、外見のイメージだけで、「リハーサルはモトリー・クルーみたいに、やってんのかな」と思ってたから、実際に入ってみて、「こんなに、真面目にやるんだ！」「こんなに、長い時間やるし」って、驚いたもんね。

HIDE　俺は、「学校じゃ、ないんだから」って、いつも思ってた。俺たち、真面目社会人になりたくて、ロックをやってるわけじゃないんだから。それなのに、「地道でなくてはいけない」なんて、どうしていわれるんだろうって、不思議だったよ。俺たちだって、自分らのなかではちゃんと規律だってあるし、夢だってちゃんとあったのにさ。

KYO　そういうとこで、「HIDEちゃん、カッコいいな」と、思ってた。俺は、わりと理屈っぽくて言い訳しいの人だから、誰かになんかいわれると、「ちゃんと、やってるよ」っていっちゃうタイプなんだ。でも、HIDEちゃんはなにもいわずに、「いいじゃん、いわしておけば。いつかは結果が出るよ」っていうスタンスの人だったのね。そういうとこはすごくカッコいいと思ってたし、ずいぶん影響を受けたと思う。

HIDE　だって、みんな、「自分のバンドは最高だ」と思って、やってるわけでしょ。ろくにバイトもできないような状態だったから、そう思ってなければやってられなかったよね。

KYO　でも、あれはあれで、面白かったよ。

HIDE　そう、そう。「いじめられた、いじめられた」っていってるけど、当時は「関係ないよ」って思ってたし、そういう似たようなドッカーン・バンドと楽しくやってたからね。たまに「なんで、こんな目にあわなきゃいけないの」っていうことはあったけど、単純に、世代のギャップかなって思ってたから。

――その頃って、二人とも若かったんだよね？

KYO　俺、18、19歳だった。

HIDE　俺も、二十歳くらいだったね。

――じゃ、その頃にまわりにいたバンドは、みんな年上だったわけだ？

HIDE　あの当時はそう思ってたけど、実際はそんなこともなかったんだよね。

KYO　その頃、第一次インディーズ・ヘヴィメタルブームみたいのがあってさ。そういうとこにいると、俺らは、カッコいいい方をすると、ある種、アウトローみたいな感じだったんだ。

HIDE　ちょうど、その頃、第一線で活躍していたのが、44マグナムとかアンセムとかTILTとかサブラ（ベルズ）とかでさ。

KYO　ちょうど、リアクションがデビューした頃だったんだよ。

HIDE　やっぱ、すごくカッコいいと思ってたから、「俺たちも、あれくらいのスタンスに、早く行きたいな」と思いながら、やってはいたけどね。

――サーベルで頂点を極めてやろうっていう気持ちは、二人のなかにあったんでしょ？

KYO　うん、それはあった。

HIDE　ていうか、「なっちゃうじゃないの」って、俺は思ってたけど（笑）。

KYO　俺は、それまでもずっとガムシャラに、プロになりたいって思いながらバンドをやってきたからさ。サーベルに入ったときは、エース・フレーリーがKISSに入ったときの言葉じゃないけれど、「こいつらとだったら、ビッグになる」っていう予感があった。だから、最後のメンバーが揃ったときは結束が固かったよ。「これが崩れたら、解散だ」って、誰もが思ってたし。

HIDE　それで、解散しちゃったんだよ（笑）。

KYO　でも、いさぎよかった。あれは、カッコ良かったと思う。全然、グチャグチャしなかったしね。

――でも、KYOちゃんは加入して半年で解散しちゃって、残念な気持ちがあったんじゃない？

KYO　でも、半年しかいなかったっていう感じは、しなかったからね。

HIDE　最後のほうなんか、客に立てノリをさせないっていうのが、コンセプトだったからね（笑）。

――それって、変拍子とかで？

HIDE　そう。客は、ノッちゃいけないんだ～って。

――KYOちゃんは、ヴォーカルとして、歌いにくかったんじゃない？

KYO　いや。その頃の俺は、〝勢いの固まりくん〟だったから。「なんでもいくぜ！」って、感じだったもん。だけど、あの頃、作ってて結局やらなかった曲が何曲かあるんだけど、今思うと、すごかったな～。ライヴハウスのPAなんて、あんまり音が良くないから、きっとライヴでやっても、客には何をやってんだか、全然、わからなかったと思う。今、思えばだけどね。そのとき、自分たちではわかってなかったけど（笑）。

――ステージは、過激だったの？

KYO　ある意味ではね。今の子たちが思う過激とは、ちょっと違うかもしれないけど。

HIDE　俺は、今もその頃も、あんまり変わってないからなぁ……。

――HIDEちゃんは、ヘア・スタイルも、ちょっと短かっただけで、今と同じような感じだったもんね？

HIDE　ステージは、あんまり変わってないよ。

KYO　俺が入る前のほうが、過激だったんじゃない？

HIDE　その前のほうが、俺は脚色してたな。

KYO　「サーベルのギターの人って、ステージでゲロ吐くらしいぜ」って、いわれてたもんね（笑）。

――それ、ホント？

HIDE　ゲロなんか、吐かないよ（笑）。

KYO　そういうイメージが、あったっていうことだよね。

――でも、生肉とか、いろんな物を投げてたんでしょ。

HIDE　無修正のエロ本とか、コンドームとか、生肉とか、血とか。

――KYOちゃんは、そういうことはしなかったの？

KYO　俺は、やらなかったね。

HIDE　KYOちゃんが入ってからは、そういうんじゃなくて、テーブルをぶっ壊すとか（笑）。

――ダイヴとかは？

KYO　ダイヴは、やった。

HIDE　俺、人のライヴでもやってたもん。エックスっていうバンドに行って、ダイヴをしましたね～。

――二人で、やったんだ？

KYO　エックスとディメンシアの対バンのライヴでさ。最後にセッションがあって出て、そのまま、ポ～ンと（笑）。

――それで、KYOちゃんが入ったサーベルは半年で終わってしまったわけだけど……。

HIDE　年月でいわれると半年っていうのは、いわれて初めてわかった。

KYO　もっと長く、HIDEちゃんとバンドをやってたような感じがする。接点が多かったし、なかなか帰してくれないし（笑）。

――一緒にいた時間が、長かったんじゃないの？

KYO　だって、俺、そのおかげで教習所をやめたんだから。

HIDE　悪かった（笑）。

KYO　それで、みんなで軽井沢へ旅に行ったんだよね。

HIDE　あったね～。バンドのメンバーが二人、免許をとるために清里の合宿に行ったんだよ。それで、俺とKYOちゃんとあと二人で、車で遊びに行ったんだ。その期間って、3日間だったのか、一週間だったのか、10日間だったのか、全然、わからないくらい、すごかったの。それで、さわやかな清里を、俺たちみたいな派手なやつが徘徊（はいかい）して、ナンパばっかりしてた（笑）。

KYO　着の身着のままで行ったから、泊まるとこなんかなくてさ。駐車場に車を停めて、楽器車のなかで寝てた。

――でも、そんな格好で行ったら、ナンパの成功率は低かったんじゃない？

HIDE　でも、注目度は百パーセントだったよ（笑）。

――なんで、そんなに気が合ったのかな？

HIDE　性格はもちろんそうだけど、趣味が一緒っていうのも、大きかったよね。まわりの人はみんなハードロックが大好きで、もちろん、俺も好きなんだけど、もうちょっとパンクっぽいものやハノイなんかも好きな人は、KYOちゃんくらいしかいなかった。俺は、ジョニー・サンダースとかダムドとかをハードロックの解釈でやるのが面白かったんだけど、なかなかすぐにわかってくれる人は少なかったんだ。

――でも、音楽の趣味があうだけで、ここまで仲良くはならないでしょう？

KYO　HIDEちゃん、バケーションが好きなのは、昔と、全然、変わらないからな。

HIDE　たしかに、俺は、全然、変わってない。

KYO　とにかく、無茶苦茶なんだよ。正月の2日くらいに「飲もう」とかいって呼び出されて、朝の6時頃に「富士山に、行こう」とか、いいだすしさ。人がいっぱいいすぎて車に乗れないのに、帰してくれないんだよ。その頃、D'ERLANGERは『BASILISK』のレコーディングをやってて、まだ詞が1曲、書けてなかったんだ。「今日、書かなくちゃ、歌が録れない」っていってるのに、なかなか帰してくれなくて、困ったよ（笑）。「俺のうちまで、送ってく」とかいって、ぐるぐる遠回りして、「あきらめた？」とか。

――地獄のHIDEちゃんね？
HIDE　僕は、悪魔ですから（笑）。
――それで、サーベルを解散したあと、HIDEはエックスに入って、KYOちゃんはD'ERLANGERに入るために、京都に行ったんだよね？
KYO　そう。でも、連絡はちゃんと取ってたよ。
HIDE　俺、この間、エックスが1回目にスポーツ・バレーでやったときのライヴを見てたら、KYOちゃんが出てるんだよ。
KYO　そう。CIPHERと一緒に、飛び入りしたんだ。
――え、エックスに飛び入りしたの？
HIDE　ハノイ・ロックスをやったんだよね。その前の晩、ホテルに遊びに来てくれて、「出ちゃえよ、出ちゃえよ」っていってたら、ざんざん雨のなか、出てくれた。
――エックスがハノイ・ロックスのコピー？
HIDE　ずっと、ハノイの曲はやってたんだよ。
――なんか、イメージがあわない……。
HIDE　全然、あわないでしょ。とくに、TOSHIはハノイのイメージじゃないから、ビデオを見てると、なんか違和感があるんだけど、KYOちゃんが歌うとハマってるんだよ（笑）。
KYO　その前、俺がD'ERLANGERに入ったばかりの頃、埼玉会館でヘヴィメタル・デイズがあって、エックスとD'ERLANGERの楽屋が一緒だったんだ。そのときにスポーツ・バレーで「なにか、やろうよ」って盛り上がって、最初は軽いノリだったのに、結局、出てしまったんだよね。
HIDE　でも、あのビデオのKYO、カッコいいよ。
KYO　本当？　俺、見たいな。
HIDE　「今日は、俺のダチが来てるんだ。KYO！」って、名前を呼ばれた瞬間に、KYOちゃん、煙草に火を付けてんの（笑）。
――でも、一緒に遊んでた悪友のKYOちゃんが京都に行っちゃって、寂しくはなかった？
KYO　この人は、サーベルのときそのままのノリで、エックスでも遊んでたから（笑）。それに、ちょうどその頃って、デビューするとかしないとかで忙しかったんだよね？
HIDE　忙しくて遊べなくなっちゃったから、俺は寂しかった。
KYO　エックスの中野公会堂を見てから、俺は京都に行ったから、インディーズ最後の渋谷公会堂は見てないんだよ。中野公会堂が終わって、1週間後ぐらいに京都に引っ越したから。
――KYOちゃんって、京都にどのくらいいたの？
KYO　丸1年。「LA VIE EN ROSE」を出してちょっとしてから、東京に帰ってきた。それで、「ビデオを作ったよ」っていったら、「持ってきて」っていって、電話を切っちゃうの。それじゃ、行かないわけにはいかない（笑）。
HIDE　あれ、KYOちゃんって、なんで××（都内某所。二人は、以前、近所に住んでいた）に引っ越して来たんだっけ？
KYO　それは、ほとんど誰かさんが「近くに、来い」って、いったからでしょう。
HIDE　そうだよね。俺、PATAを近所に呼んで、ZI:KILLも東京に出てくるとき近くに呼んで、次はKYOちゃんだっていったのを覚えてる。
KYO　それで、俺がせっかく××に行ったのに、自分はさっさと違うとこに引っ越しちゃってんの（笑）。
HIDE　「大変だ、××は、ロック地帯だ！」とかいって、引っ越しちゃたの（笑）。
KYO　そしたら、また、「自分ちの近くに来い」っていってんだよ、この男は。不動産屋まで、紹介してくれてる（笑）。
――二人は、いくつ違いなの？
HIDE　俺、そういうの、考えたことがないんだ。だから、KYOちゃんがいくつなのか、未だに知らない。
KYO　でも、やっぱり、俺にとっては兄貴って感じだよね。
HIDE　俺は、こんな弟を持った覚えはない（笑）。こんな弟なら、いらない。だってさ、俺、今の今まで、KYOちゃんのことを年下だと思ったこと、一度もないもん。
KYO　HIDEちゃんがそういってくれてすごく嬉しいんだけど、「サーベルに入った」「エックスを見てた」俺としては、やっぱり、兄貴って感じだな。だからといって、そういう付き合いをしてるわけじゃないけどさ。なんだかんだいって、HIDEちゃん、面倒見がいいじゃん。そういうとこで、兄貴って感覚があるのかもしれないな。
――喧嘩したことは、ないの？
HIDE　ない。
KYO　HIDEちゃんとは、ないな。
HIDE　基本的に、俺、喧嘩って好きじゃないもん。火のないところに、煙は立てない。
KYO　だから、世間の噂では、「エックスで暴れるのは、YOSHIKIとHIDEだ」みたいに、いわれてるじゃん。でも、俺と飲んでるときにHIDEちゃんが暴れたことは、一度もないね。
HIDE　俺とKYOちゃんが一緒になって、突っ込んだっていうことはあったけどね（笑）。
KYO　あとさ、渋谷で打ち上げをやった帰りに、代々木公園に行って、カン蹴りやかくれんぼをしたこと、あったよね。
HIDE　あった、あった。
KYO　だけど、かくれんぼをやってる途中に、帰っちゃった人がいっぱいいた（笑）。

当時のHIDEちゃんのステージ衣装のコンセプトは「絶対に、買物に行けない格好」っていうのだった。

HIDE あの頃は、みんなで集まると変なことばっかりしてたよね。横浜に行ったとき、「氷川丸を沈めちゃおう！」って、盛り上がったこともあった。
KYO （HIDEちゃんは）基本的に慕える人ではあるんだけど、つきあいは友達感覚なんだよ。だから、すごい眠い時間に電話がかかってきて、「飲んでるから、おいで」っていわれても、行けるんじゃないかな。
HIDE でも、最近、居留守を使うんだよ。
KYO 使ってないじゃん！ 3ヵ月くらい前はよく誘ってくれてたんだけど、忙しくて断ってたら、最近はうちのベースに電話をして、「KYOちゃん、誘っといて」っていって、切っちゃうらしい（笑）。でも、「眠いのに」って文句いいながら出てって、結局、最後までいる俺はなんなんだろう。早く帰れば、いいのにね。
——でも、お互いにバンドが忙しいから、会う時間を作るのって大変なんじゃない？
KYO そんなことはない。
HIDE この店に来れば、いいんだから（この座談会は、二人の行きつけの居酒屋で行われた）。
KYO 偶然に会ったことも、あるもんね。
HIDE そしたら、KYOちゃん、俺の顔を見て、すげーいやな顔してんの（笑）。
KYO そんなこと、ないだろう～。それに、俺は、最近は六本木に進出してるからね。
HIDE どうせ、俺は地元の居酒屋だよ（笑）。
KYO そういえば、昔は服の趣味が似てて、「それ、どこで買ったの？」なんて話も、よくしてたよね。
——音楽の趣味が似てると、服装も似てくるっていうのはあるよね。
KYO 「その服、今度貸して」とかね。あと、欲しいと思ってた靴をHIDEちゃんに先に買われると、「やられた～！」とかさ。でも、あの服装で横須賀を歩いてたっていうのは、犯罪に近いものがあるよね（笑）。
——もしかして、ステージと普段が同じだったとか？
HIDE それは、違ってた。
KYO 当時のHIDEちゃんのステージ衣装のコンセプトは、「絶対に、買物に行けない格好」っていうのだったんだもん。
HIDE まず、その格好で表は歩けないだろうっていうのじゃないと、いやだった。
KYO 衣装を探しに行ったときの基準は、それだった。
HIDE その頃、「ノーポーザー」っていう言葉が流行り始めてて、Tシャツにジーパンでステージに上がるっていうのがステイタスだっていう風潮が、なんとなくあったんだ。でも、俺なんかからすれば、それを規制すること自体がもう「自然にいこうよ」っていう姿勢から、はみ出してると思うのよ。だって、俺なんかはずっと自分たちの自然な格好で、ステージに上がってるわけだからさ。逆に、俺たちがTシャツにジーンズでステージに上がったら、そのほうがカッコつけてることになるんだよ。だって、派手にすることが、俺たちの自然体だったんだからさ。
KYO そう、そう。俺たちにとっては、ポーズじゃなかったんだから。
HIDE あの頃、よくそういう話をしてたよね。
KYO 楽屋で、他のバンドと喧嘩しそうになってたこととか、あったもんね。
HIDE 冗談で「そんな格好して」とかいわれても、「じゃ、お前らも、ステージに上がる前に、Tシャツを着替えんなよ」なんて、いってた。
KYO ムキになってたよね。俺たちは、そういうとこにこだわってたし、こだわってた意味もあったんだよ。
HIDE だから、さっきもいったように、真面目にサラリーマンやりたいわけじゃないんだから、なんだっていいわけじゃん。そいつらにとってTシャツが自然体であるのと同じように、俺たちにとってはあの派手な格好が自然体なんだから。そういう決めごとがいやで、僕たちはロックを始めたのに、「変なの～」って、思ってたよ。「××じゃなきゃ、いかん」「Tシャツじゃなきゃ、いかん」って、「音楽をやってればいいんだ」っていってる人たちが、いうわけだからね。だから、俺にとっては、それがすごい不思議だった。
KYO 当時は「ポーザー」「ノーポーザー」っていうのがすごく流行ってたけど、本当の意味で「ノーポーザー」の人たちは、別に俺たちのことも否定しなかったよね。俺たちも、そういう人たちのことを否定はしてなかったし。
HIDE ロックなんて、なんでもいいはずなのにね。
KYO だって、俺たちなんて、パンツまで派手だったんだから（笑）。
HIDE 「それって、あなたたちがいちばん嫌ってる商業ベースっていうやつなんじゃ、ないですか」って、俺はいつでも討論できるよ。
——「シンプル・イズ・ベスト」っていいながら、ヘインズのTシャツにリーバイスのジーンズでなきゃ、とかね。
HIDE そうだよね～。そんなの、なんか、変。本人が良ければ、なんだっていいじゃないっていうのが、基本だと思う。
KYO 「こうじゃなきゃ、いけない」って、決めつけるのはおかしいよ。こういう音楽だから、こういう服装じゃいけないっていうのもないと思うし、それは、いかに本人が納得してやるかだよね。
HIDE あと、この音楽は偉いみたいなのも、あるじゃん。こういう音楽をやってる人は偉いとか、こういう音楽を聴いてるやつは馬鹿だとか。
——わたしも、昔、DJをやってるときによくいじめられた。ハードロックが好きなやつは、馬鹿だチョンだって。それを同じ音楽が好きな、別のジャンルの人がいうから、頭にきた。ソウルは偉い、パンクは信念がある、ブルースには魂がある、でも、ハードロックは能無しだってね。
HIDE どこにでもいるんだよ、そういうやつは。
KYO 今でもいるよ、そういう人。
HIDE それに、いうだけじゃなくて、書く人もいるからね。
KYO そんなの、違うよね。
HIDE そういうことをいったり書いたりするのって、その音楽を作った人に対しても失礼だと思う。俺たちのことを非難しているように見えるけど、実は、自分が誉めてる音楽を作ってる人たちに対しても失礼なんだっていうこと、わかってないんだと思うよ。
KYO 俺たちは、今、面と向かってそういわれることは減ったけど、心のなかで思っている人は、決して少なくないと思うよ。
HIDE てめえの波長とあったものを誉めるのは当然だし、好きなものを誉めるのはいいことだと思うんだけど、そのときに他の物をけなしてっていう方法をとる人は、なんか違うなって思う。昔からそういう人はいたんだけど、最近、目につくことが多くて、俺はすごいむかついてる。自分の好きなものを誉めるのに、なんでその他のものを悪くいう必要があるんだよ。
KYO すっごい、わかるな～。
HIDE 俺の考え方は昔から変わってないけど、まわりもなにも変わってないんだよ。別に、俺は、それを変えようとは思わないけど。一人一人の人格だからさ。
KYO 自分のなかで変わらないっていうのは、ある種、自分のやってることに自信があるからだと思うよ。
HIDE そうはいっても、それをまのあたりに見てしまうと、やっぱりムカつくんだよな。いいたいことがあるんだったら、名指しで書け！ まわりくどいいい方、するなよな。
KYO 俺も、最近、ちょっとショックなことがあってさ。「解散、脱退」についての記事があって、バンドが解散してもレコード会社は愛があるから、次のバンドも面倒見るみたいなふうに書いてあってさ。某レコード会社、某プロモーター、某ヴォーカリストって書いてあるんだけど、俺にはそれが自分のことだってわかっちゃってね。
——わたしもその記事は読んだけど、すぐにKYOちゃんのことだってわかった。
KYO でしょ？ すごい腹が立ったけど、「今に、見てろよ」って思った。あんなとこだけ伏せ字にするんだったら、名指しで書かれたほうがずっと気分がいい。
HIDE だから、俺はずっと自由に音楽を作り続けていく。誰かになにをいわれても構わずに……ではなく、ちゃんとやり返すけど（笑）、俺は俺だからさ！
KYO それが、まず、自分に対して負けないことでもあると思う。俺たち、ずっと昔からいろいろいわれてきて、ずっと変わらない気持ちを持ち続けてきたわけじゃない。それが変わったときは、こういうつきあいもなくなっちゃうと思う。そうなりたくはないよね。
HIDE 俺たちと同じような気苦労を、俺たちのあとから育ってくるバンドにはさせたくないよね。純粋に音楽だけを考えていられるような、そういう環境にしていくために、俺たちは戦っていくよ！
KYO なんか、HIDEちゃん、鬱積してるんじゃない（笑）。
HIDE 最近、発言の機会がなかったから、ちょっと爆発してしまった。ま～、その間に頭にくることがあったんで、今日はエキサイトしすぎたかな（笑）。でも、本当は、毎日楽しいんだよ。今回の撮影も取材も、楽しかったし。
——なんか、無理してない（笑）。
HIDE 本当に、楽しかったってば。
KYO また機会があったら、一緒にやりたいよね。
——また、水に潜りたいわけね？
KYO 水に入るのは、他の人とはやらないでね。ひとりでやるならいいけど、誰か他の人とやるんなら、俺とやろうね。
HIDE いや。次は、土でいこう。マグマライザー。昔、「科学と理科」についてた「蟻の巣を作りましょう」っていうセットが、あったじゃない。
KYO あ、外から、見えるやつでしょ。
HIDE あれのデカいバージョンを作って、KYOと二人で土のなかに穴を掘ろう（笑）。
KYO 俺、小学校の頃、あれを作ってうまくいった試しがないんだよなぁ。
HIDE だから、今度は自分で掘るんだから、絶対うまくいくよ。
KYO 土のなかぁ？
HIDE じゃ、次は絶対に、それだからね。みんな、ちゃんと用意しといてよ（笑）！

92年8月24日午後6時、ここニューヨークはマンハッタンのド真ン中、あの有名なロックフェラーセンター内のレインボールームだ。いよいよエックスが、全世界からかけつけたプレス関係者100名以上を前に、会見を行う。待たされること10分…15分…、その間、前方のスクリーンには「ジェラシー」「ジョーカー」「紅」「X」のビデオが映し出されるのだが、同じ日本人として胸が高鳴ってくる。いきなり、「エンドレス・レイン」のハイライト・シーンで、会場が暗転。と同時に、会場内後方に設けられていたステージ上に、スポットライトが当たる。おお!そこにはYOSHIKI、TOSHI、HIDE、PATA、そして新加入のベーシストHEATHの5人が毅然とした姿で立っていたのだ。

X in NEW YORK

REPORT : SEIICHI HOSHIKO（Chief Editor of SHOXX）
PHOTOGRAPHY : YASU MIZOI（in NY）

「まず皆様になぜ今夜ワーナー・ミュージック・インターナショナルがここにいるのかについて簡単にお話しますと、当社は世界中の才能あるアーチストのマーケティングとその展開をする仕事をしています。この業界も非常に地球規模になってきたので、最早アメリカやイギリスで成功するだけでは世界に通用するとは言えなくなってきました。国際的なアーチストを海外市場の為に育てるというニーズに対する挑戦が必要になってきます。

今日われわれが申しあげたいのは、一つの大きな挑戦に向けての積極的な前向きのステップをとる決断をくだしたということです。その挑戦とは、既に母国の日本では大変な成功をおさめている才能あるグループの国際的な活躍の場を獲得することです。業界の伝統的観点から見ましても、日本は独立した形で主要な世界的レコード市場に成っています。

ワーナー・ミュージック・インターナショナルは今、複合的な伝統体制に殴り込みをかけ、アメリカのアトランティック・レコードや日本のMMGの素晴らしい才能と手を組もうとしています。彼等にとって最高のものが我々にとっても最高であると考えます。『X FROM JAPAN』は、世界の主要なマーケットで売り出す機会に恵まれるわけです。これは積極的な第一歩になるでしょう。」

MC 「それでは、会場からの質問を受けることにしましょう。」

——『X FROM JAPAN』というバンド名にした理由は何ですか。

「その質問にお答えしますと、10年前バンドの名前は最初は『X』だったのですが、世界に、特にアメリカ市場に進出するにあたってこっちにはロサンゼルスの『X』というバンドがあったので同じ名前は使えないということで、『X FROM JAPAN』にしました。こういう答えでいいですか?」

——結構です。ありがとう。

——MTVやラジオ等、アメリカのトップ・バンドと同じようなプロモーション戦略を使うおつもりですか?『X FROM JAPAN』のプロモーションに、今までと同じくらいのお金を使うおつもりですか?

「ツアー、MTV、ラジオ、雑誌など他のロックバンドと同じ用な戦略で行くつもりです。」

92年 8 月24日、ワールドワイド契約成立!!

ニューヨークが震憾した日

—以前ラウドネス等、日本のバンドは余り支援されなかったと思うのですが、この『X』に関しては特にどういった形で支援していくつもりですか？

「『X』は今までの日本のバンドに比べると、最も実力のあるバンドで、他のバンドとは一線を画している。このバンドを公にエクスポーズしていく上で、一番大事なのはツアーで、アメリカでもトップになれると思います。」

—でもスキッド・ロウ等の人気の高いバンドを抜いて、アメリカの聴衆に受け入れられる可能性が在ると思いますか？

「そう思います。」

—北アメリカでツアーをするのはいつか、そして英語の作品はいつ出るのですか？

「それはアルバムのリリースに関係があります。今週バンドと話し合いをして、彼等の作品を検討してアルバム製作の計画をたてる事になっているので、全てそのアルバムが出る時に関係があります。」

—バンドとは長期契約が交わされているそうですが、その契約期間はどの位でアメリカで出されるアルバムは何枚くらいですか？

「契約は3年ですが、オプションでその後も継続できます。アルバムに関しては何枚出さなければならないのかは忘れましたが、実際は最低2〜3枚というところでしょう。その他にも彼等のミュージック・ビデオは売れ行きがいいので、ミュージック・ビデオも出す必要があります。」

—次の質問はバンドにお聞きしたいのですが、影響を受けたのはどのバンドですか？

HIDE「僕の場合、初めて聞いたのがヴァン・ヘイレンでそれが小学校の時で、その後はモトリー・クルーやキッス等です。」

—他の才能のあるバンドでさえあまり成功をしているとは言えないのに、なぜ『X』が成功すると言えるんでしょうか？

YOSHIKI「名前を言ってくだされば、最初のコンサートのチケットを送りますから、自分で聞いてみてください。そうすればその答えはわかると思います。」

—もっと真面目な答えが聞きたいですね。

YOSHIKI「ええ、ですから真面目な答えだったんです。それはだれにも判らない事ですから。」

——でも、実際英語が母国語でないバンドが成功した前例は無いのに、なぜ『X』は成功するとお考えなのですか？

YOSHIKI「僕は、音楽には（肌の）色や国や血の国境は無いと信じています。そう思いませんか？」

——このバンドの魅力は音楽もさることながら、怪しげなセクシュアリティーが売りだと思うが、同じセクシュアリティーと言っても、アメリカのファンの人達が思うセクシュアリティーは違うと思うんですが、そのへんをどのように売っていこうとか、或いはそんな事はどうでもいいと考えているのか教えて下さい。

「それはプロモーションの方法ですから、若い人というのはどこの国でも同じような情熱や印象をもつと思うんですね。その部分で、『X』が東京ドームで3日間のコンサートをやり、日本では120万枚以上のCDを売り、ビデオでは20万本以上を売るといったことは、何かを与えていると思うんですね。それがさっきヨシキさんも言っていたように、彼等のコンサートを見ればわかる、彼等のレコードを聞いてくれればわかる、その人達が判断すればいいわけです。

私達にとって一番重要なのは、今回アメリカとか色んな国でチャンスを与えられた事で、ツアーをやったりレコードをリリースしたりして、何かハプニングが起きてくることを願ってるわけです。」

——バンドはプロモーションの間、あるいは永久的にアメリカに住むつもりですか？

YOSHIKI「飛行機で13時間ですから日本には帰れます。多分ロサンゼルスに住みます。」

「彼等はロサンゼルスに約1年くらいは住むことになっており、東京には行ったり来たりすることになります。」

——音の大きさが売りのバンドの場合、英語で歌うと多少意味を失うものだと思うし、私はそれほど失われているとは感じませんでしたが、あなた方またはレコード会社はいつ英語のものを書いてニューヨークなどで演奏するようになるんでしょうか？

「日本以外での国際的な活動を始めるまでには暫く時間がかかると思いますが、まず最初にやらなければならないのは、今年の後半にはロサンゼルスで開始することになっている新しいレコードの製作でしょう。そのレコードのリリースは93年の中頃になると思いますが、その頃が日本を始めとして世界コンサートができる時でしょう。」

TOSHI「僕は英語が話せます。それに音楽に国境は無いんですから。」

MC「その通りです。あなた方の詩の中には時々英語が出てきますよね。コーラスの中には英語のものもありますよね。私は2曲ほどテープで持っているんですが、あなた方の事は何も言わないで友達に聞かせたらとても気にいっていました。後であなた達が日本のバンドだと言ったけれど、全然気にしてなかった。私も楽しみました。あなたがいま言ったように、音楽には国境はあるべきではないですから。」

——ヨーロッパ、特にドイツでの計画はどうなっていますか？

「その答えはロサンゼルスで製作予定の英語のアルバムのレコーディングいかんです。全ての国際的なツアーはこのレコードのリリースに合わせて計画されることになるでしょう。」

——全て日本で作ったレコードをアトランティック・レーベルでアメリカで発売をするのですか？

「特にどうするのかは未だ決まっていません。どの曲とどの曲を組み合わせてどのアルバムにするかは、その時になってみないとわかりませんね。」

——バンドはどのように英語の障害を乗り越えて英語を母国語とするファンとコミュニケーションをとるつもりなのでしょうか？

YOSHIKI「英語の勉強は楽ではありません。繰返し練習しなければならないので。でも努力してますから、我々を信用して下さい。」

「その質問の答えとしては、バンドは国際的な場で活躍するためにMMGやアトランティックの協力でベストを尽くしている。おっしゃる通り、今は英語で歌うことは出来ませんが、レコーディングの為には集中レッスンをやりますし、レコーディングの終わる頃までには一般会話もうまくなって、来年には彼等の英語もずいぶん上達していることと思います。」

——バンドが最近聞いたり或いは買ったレコードは何なのかを知りたいのですが

YOSHIKI「僕はクラッシックのバッハ、メタリカ、セックス・ピストルズ ケイト・ブッシュが好きです。でも、特にだれの真似をするつもりもありません」

——アメリカに1年住むとなると、淋しい思いをするであろう日本のファンに対してはその間どういう対処をするつもりですか？

YOSHIKI「ファンの人皆さんの支援を感謝しています。勿論、日本には帰ります。」

——ピーターさんにおたずねしたいのですが、先程から言葉の問題がすごく言われているようですが、日本でアメリカやヨーロッパのものが物凄く大ヒットしているのは当たり前の事です。殆どのレコードを買っている人は言葉がわかりません。でも今までこれだけインターナショナルな歌が聞かれているその状況をライキンさんは御存知でらっしゃいますでしょうか。…つまり日本で英語の歌ということです。私達は歌詞の内容がストレートに判

僕は、音楽には（肌の）色や国や血の国境は無いと信じています。

らなくても何かを感じてたくさんレコードを買ってそれを楽しんでいる。そういう状況を皆さんにお伝えしたいと思います。

「英語が母国語でない国でも、歌詞が英語の詩のものが数多く売れている事はいえると思います。詩の意味が判らなくても音楽を楽しめます。それが答えでしょう。」

「バンドが作る綺麗なメロディーで多くのものを国境を超えて伝えることが出来るし、バンドも英語を頑張っているし、アトランティックの最高のマーケティングとプロモーションの専門家がいるので、障害を乗り越えてアメリカでも売れることを期待しています。」

——日本そして日本以外のアジアでの特別なマーケティング計画はありますか？

「東南アジアの近くであるということから、日本での最初のレコード・リリースには力が入ります。日本の外でレコードを出すとなれば、最初のターゲットとなればアジアということになります。」

——メンバーの方々にお聞きしたいんですが、これだけ言葉言葉と言われているんですけれど、多分中味の方が問題だと思うんですけれども、英語の歌で特に今質問をしてくれたアメリカの人達に一体何を伝える為に次のアルバムを作るんでしょうか？

YOSHIKI「心です。そして愛です。」

「言葉は存在するものですが、国際的に通用するためにバンドがその音楽の中に込めるメッセージは『心』と『愛』と言えるでしょう。それがバンドの焦点です。」

MC「今晩はこれからもたくさんの予定がありますので、質疑応答はここで打ち切らなければなりませんが、後で限られた数のフォローアップ・インタビューができます。質問をありがとうございました。終わる前に、日本でこのような特別な場で行われるシャンペンで乾杯をするのと同じような意味を持つセレモニーをしたいと思います。レセプションの始まりの鏡割りをしたいと思います。」

「アトランティック・レコードを代表して『X』をニューヨークに歓迎します。我々は心からあなた方のレコードの仕事にうちこんでおり、その音楽をアメリカに持ってくることができて喜んでいます。頑張って下さい。カンパイ!!」

YOSHIKIはもう随分長い間マスコミから遠ざかっていた。半年という時間は知らないうちに過ぎてしまう時間だが、Xファン、YOSHIKIファンにとってはじれったい時間の流れだったに違いない。
YOSHIKIがその沈黙をついに破り、7月23日に東芝EMIとアーティストとしての個人の契約を交わしたことを記者会見で発表した。大勢のマスコミ陣を集めて、華々しく再びシーンに姿を表したYOSHIKIは相変わらず派手な演出が好きなようで、当然会場に向かう側もそれを望んでいるふしがある。かつてステージでもCO2を撒き散らしドラムセットを投げ捨て、バイオレンスに関してはありとあらゆる限りを尽くして行ってきた感のある彼らが活動を再開する時、すっかり過激な演出に慣らされたオーディエンスはそれ以上を期待してしまう。
そんな中で行われたのが7月30日、武道館で行われたYOSHIKIのTALK LIVEだ。過去において1万人のキャパシティの会場でTALK LIVEなるものを試みたアーティストがいただろうか？ 否。果たして1万人ヴァーサスYOSHIKIは成立するのだろうか？ 初めてのことに期待と不安が交錯しながら会場を訪れた。武道館を取りまくXファンの中には、今回がTALK LIVEであるというのにコスプレしている気合の入った人達が多く、これは後のTALK LIVEの中でも触れられ、YOSHIKI自身は自分が昔KISSのライヴを見に武道館へ行った時、KISSと同じような格好をしている人達を見て憧れ、現在彼が逆の立場になったことを凄く嬉しく思うと語ってファンを大喜びさせた。
さて、今回のイベントは先に「フールズメイト」「ロッキンオン ジャパン」から発売された共にYOSHIKIの本の発売記念イベントという肩書を持っていた。実際、予定されていたプログラムの中では、各々の本を編集した羽積氏、市川氏両氏による本についてのTALK等もあった…が、集まった人々はYOSHIKIが見たいのだ。YOSHIKIの話が聞きたいのだ。その気持ちは良くわかる。だが、あえてファンに対して苦言を言うならば、最初からTALK LIVEの趣旨を理解していないんじゃないのか？ 羽積氏、市川氏は早々に予定を切り上げ、YOSHIKIを呼び込むと場内の歓声はひときわ大きなものになったが、やはり声援にかき消されて3者のTALK LIVEはほとんど成立しなかった。普段インタビュー取材にどんな風にYOSHIKIが対応しているのか是非見てみたいと思って会場にやって来たファンも大勢いたはずだが、1万人を統制す

YOSHIKI

TALK LIVE AT NIHON BUDŌKAN

REPORT : KIYORI MATSUMOTO
PHOTOGRAPHY : MOTOKO SASHI

'92.7.30

また会う日まで……

るのは大変困難なんだということも見せつけられた。同時にこの日たかれたフラッシュの多さにもビックリさせられた。
ステージ中央に置かれたテーブルと椅子でくつろぎながら「本能と気合で生きている」と答えるYOSHIKI（笑）。短いTALK LIVEの中では次のようなやりとりが印象的だった。
YOSHIKIのいう気合とはどういうのかなあ。
「絶対自分に負けない、という（場内拍手）。自分に勝てない人は他の人に勝てないと思うし（拍手と大歓声）」
自信は大きくなってきましたか？
「自信と同じくらい不安も大きくなってきますけど。ちょっとだけ自信の方が勝ってる」
今は？
「かなり苦しい半年間を過ごしてきましたから、まさかこんなふうな日が迎えられると思いませんでした（場内大歓声）。東京ドームの終わった直後は自分でもダメになりそうな気がしていた」
途中、会場に集まったファンから直接YOSHIKIに質問できるという画期的なコーナーがあり、前述したコスプレのこと等ファンの立場ならではの質問が飛び出た。傑作だった少年が「こんな質問していいのかわかりませんが、生島ヒロシってどう思いますか？いつもYOSHIKIさんのことをヨシキちゃんとか言って、僕、許せないんですよ」と言うと場内大爆笑。「僕は何と呼ばれても抵抗ないんですけど」と答えながらYOSHIKIも微笑んでいた。
TALK LIVEとしての形態はここまでだった。実はこの後スペシャルなことが用意されていたのだ。
「本のタイトルにある、まだ今だ発表されていない曲…僕個人を演奏したいと思います」
その言葉通り演奏された「ART OF LIFE」は演奏時間30分にも渡る超大作。バックに総勢60人位から成るオーケストラを従えて、中央に置かれたピアノで、白の衣装に身を纏ったYOSHIKIが彼自身を音に投影するかのように緊迫した空気の中で演奏する。「今までの人生を曲にしました」と彼自身があえて言うその曲は、YOSHIKIの激しくも壮大な人生を表現するかのように、せり上がってくるピアノに叩きつけられた。突然鍵盤を叩き、また優しく美しいメロディへと移っていく。その波が繰り返され、ラストに近づくとスクリーンには薔薇の花が映し出され、ミラーボールが上空に出現した。いつでも美しいものと狂気は背中合わせにある。YOSHIKIの人生の全てを図り知ることはできないが、それはまるで、美と狂気の両者の真ん中にある細い糸の上を歩いているようだ。突如、大爆音が鳴り、演奏は終わった。ため息と同時に現実に引き戻された場内は、キャーといういつもの歓声とは違うザワザワとした雰囲気が蔓延していた。
ここまででもう充分にファンを喜ばせたが、応援に駆けつけたTOSHI、PATA、HIDEの3人がステージに現れると場内は興奮のるつぼ状態。今後のXの活動にも触れ、世界デビューに先駆けてNYのロックフェラービルでの記者会見を発表。日本にも必ず帰ってくることを約束した上でYOSHIKIは「日本での今までの活動を無駄にしないように誇りを持って、堂々と日本のXとして頑張っていきたいと思います」と告げ、最後にメンバー全員＋オーケストラで「エンドレスレイン」を演奏した。場内には大合唱が起こり、ファンの顔は涙でクチャクチャになっていた。満ち足りた表情でステージを去るYOSHIKIが最後に、「また会う日まで」。

次号Vol.13予告

（副題＝オヤジの主張）

11月21日一斉発売!!

♡お詫び♡（見出しダ）

えー、誠に残念ながらSHOXXは、今月をもって廃刊です……。
な～んちゃって、**ウソだよ～～～ん。**
余生の楽しみ(トホホ…)のつもりで創刊したのに、
第一次**エックス**渡米期にHIDE
(おーい、LAでも**早朝ラジオ体操**やってるかぁ？
暴動に巻き込まれるなよー。あいつら、本物の鉄砲持ってるゾー)
が「**自費**で買ってた」あたりから急に部数がのびちゃって、
おまけにVol.5～8なんて、この春に**増刷**したのに、
もう右下のように**売り切れ号続出**だもん。
んー…ロック界バブル崩壊の前兆か?!(笑)

♡3人ぽっきりの編集会議♡（中見出しダ）

(星)「えー、ただ今より編集会議を始め…」(遠)「どーせまた、エックスやるんでしょ？」(星)「ん…分かったぁ?!」(遠)「分かったぁ？じゃないでしょ。世間で何て言われてるか知ってます？〝エックスなくなりゃショックスこける。ショックスなくてもエックス平気〟って」(星)「ホホウ」(遠)「ホホウじゃないでしょ！」(岩)「情けないです…」(遠)「ったく…あーっ?!どこに行くんですか!!まだ話が…」(星)「ちょっとトイレに」(岩)「あ？後に隠してる旅行カバンは…」(遠)「ナニッ?!」(星)「いやあ、ちょっとNYで記者会見が…」(遠)「どーせまた飲みたいだけでしょ」(星)「ハハハ、そりゃキミィ妄想ってもんだよ」(遠)「事実でしょ」(星)「(ギクッ)じゃ行ってきまーす。あっ次号予告、ちゃんと書いといて」(岩)「遠藤さん…」(遠)「…帰ってきたらヤキ入れてやる」

♡定番の「次号の傾向と対策」♡（再び中見出しダ）

とゆーわけで、お待たせしました。
YOSHIKI(Vol.8)、HIDE(Vol.9)、PATA(Vol.11)と続いたら…
いよいよ**TOSHI**の大特集です。
ソロ・アルバムのレコーディングの為、
一時帰国したところを**独占キャッチ**!!
30ページのボリュームに**アッ!!!!!**と驚いてもらいます。
そして大復活を果たした**ZI:KILL**特集と
破竹の勢いの**LUNA SEA**で
キレイにキメさせていただきます。

バック・ナンバー

特典付

Vol.3 91年3月発売 ¥700
■ZI:KILL 29ページ大特集／①大型カラーポスター②TUSK、KEN、SEIICHI 個別ロング・インタビュー③ロケーション・カラーフォト集 ■かまいたち and LADIES ROOM 14ページ特集／①ハチャメチャ爆笑座談会②スペシャル競演レポート ■STRAWBERRY FIELDS 13ページ特集／LEZYNA with SEISHIRO、福井 with SHU-KEN対談 ■LUNA SEA 幻惑カラーフォト＆インタビュー7ページ

Vol.9 92年3月発売 ¥750
■X 44ページ巻頭カラー大特集／①HIDE with RYO（By-Sexual）異色フォト・ストーリー～堕天使の抱擁②スペシャル対談③HIDE写真集「無言激」メイキング・インタビュー③YOSHIKIのAtoZ モノローグ（Part 2） ■15ページ巻末カラー特集／レディースルーム～あの余韻 ■師弟対談／STRAW BERRY FIELDS&LUIS-MARY ■LUNA SEA／押し寄せる忘却のベールとの闘い

Vol.4 91年5月発売 ¥700
■かまいたち35ページ大特集／①SCEANA ロング・インタビュー②KAZZY & MOGWAI 対談 ③けんCHAN & SCEANA10項目インタビュー④スタジオ＆ロケ特写集⑤クラブ・チッタ速報 ■BY-SEXUAL 9ページ特集／SHO and RYO、DEN and NAO スペシャル対談 ■LUNA SEA カラー7ページ ■LADIES ROOM カラー8ページ特集／百太郎 & GEORGE、NAO & JUN リラックス対談

Vol.10 92年5月発売 ¥750
■LUNA SEA 巻頭カラー34ページ特集／①フォトジェニック・パフォーマンス〝時代が生んだ幻の華〟②全メンバー個別ロング・インタビュー③10項目全員インタビュー④応募者全員特製テレカ・プレゼント ■YOSHIKI／AtoZ モノローグ・インタビュー ■HIDE／特製カラー・ポスター ■ZIGGY カラー15ページ特集／現実という名の幻想 ■LOUDNESS／TAIJI 正式加入／全メンバー・インタビュー

Vol.6 91年9月発売 ¥750
■X 42ページ巻頭特集／新潟産業センター／東京ドーム・カラー速報②HIDE、PATA、TAIJI、YOSHIKI ヴィジュアル・フォト集③TOSHI の東京ドーム公演第一声インタビュー④全メンバー11項目独白インタビュー ■GRAND SLAM カラー15ページ特集／個別ロング・インタビュー ■かまいたち/SCEANA with けんCHAN ■DEEP／本誌独占／デビュー・インタビュー ■LUNA SEA／暴動寸前！

Vol.11 92年7月発売 ¥750
■PATA カラー巻頭35ページ大特集／①フォトエッセイ〝めまぐるしく流れ去った時間〟②最新ロングインタビュー③AtoZ インタビュー ■ZI:KILL& LUNA SEA／①TUSK②SEIICHI&J③SUGIZO ■SHO パーソナル・ロング・インタビュー ■森重樹一パーソナル・ロング・インタビュー ■百太郎ロング・インタビュー ■LUIS-MARY／バックステージ密着12時間取材 ■JUNYA

Vol.1 売り切れ　Vol.5 売り切れ　Vol.8 売り切れ
Vol.2 売り切れ　Vol.7 売り切れ

次の売り切れは何号だ?!

つーわけで Vol.1～11はとっくに書店から姿を消しているので、どーしても欲しい人は、定価金額(¥700、9～11は¥750)に送料(1冊＝¥260、2冊＝¥310、3冊＝¥360、4冊＝¥410)を加えて、切手代用または小為替で、〒104東京都中央区銀座5-1-7数寄屋橋ビル5F 音楽専科社経理部「SHOXX バックナンバー Vol.○」(○の中に号数を入れてくれ)係まで申し込んでくれ。また、近くの書店で Vol.13(11月21日発売)を買いそびれないようにするには、下の注文書を今のうちに、その書店へ出して予約しておくと便利かな。

雑誌注文書

●書店(番線)印	●受注　月　日	●部数	●担当者
	●書名 ショックス Vol.13（1月号） 定価750円(税込) 11月21日発売		
	●あなたの住所 〒		●TEL
	●あなたの名前		
	●出版社名 ㈱音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F ☎03(3574)0201 FAX03(3574)8548		

※この注文書はコピーしたものでもかまいません。

Loudness

戦士の休息　たとえ戦闘が終わって、ひとときの休みに入ったとしても、生まれついての戦士の全神経は、戦闘に向けて鋭く研ぎ澄まされている。少しでも緊張を緩めることは、戦場では死に結びつくからだ。戦士には、ほんとうの休息なんてあり得ない。

ツアーが終わったラウドネスの雅樹と泰司も、そんな戦士にも似た、つかの間の休暇を楽しんでいた。しかし、すぐに9月からのツアーが始まる。戦士に休息はない……。

新生ラウドネスの野望

MASAKI & TAIJI

INTERVIEW : YOSHIYUKI OHNO
PHOTOGRAPHY : NORIO KAJIKI

Children of the Night——太陽の光がまぶしい時間には、明るさから逃れるかのようにひっそりと身をひそめている生物たち。

しかし、ひとたび太陽がビルの彼方に隠れて、闇の中でネオンの光が輝きを取り戻す時間帯になったならば、彼らは隠れ家から這いだし、彼らだけの世界の中でうごめき始める。それが、〝夜の子供たち〟だ……。

このインタビューが始まったのは、午前1時を大幅にまわった時間であり、〝夜の子供たち〟がもっとも活発になる時間帯だった。

夕方6時から、六本木にあるフォト・スタジオに入って、写真撮影を続けていた雅樹と泰司。撮影が終わる頃を見計らって、午後10時にスタジオに到着したインタビュアーの前に、疲れ切った表情をしたふたりがいた。

最初は、六本木にある静かな店を捜して、酒でも飲みながらインタビューをするつもりだったが、疲れ切ったふたりには、たとえ静かな店だとしても、金曜日の夜の六本木は避けたい場所だったようだ。

「オレが泊まっているホテルに行こうよ。部屋でじっくりやればいいじゃない。大野さんとオレと、泰司だけでさ」

正直な話、雅樹からこの案が出たとき、オレ自身もホッとした。彼らがリラックスできる場所で、じっくりとインタビューをやれるなら、そのほうがおたがいにいいはずだ。

インタビューはセッションにも似ている。おたがいに、相手がくり出すフレーズ（言葉）によって、自分のフレーズも出てくる。ノリが合わないときには、つまらないセッションになるし、ノリとフレーズがうまくかみ合えば、最高のものができる。

楽器を持たないロッカーであるインタビュアーが、楽器で自分自身を表現するミュージシャンと渡り合うためには、リラックスできる場所と時間が必要だ。

そういうわけで、普通ならばインタビューの場に立ち会う編集者や、レコード会社のプロモーション・マン、それに所属事務所のスタッフといった人々には、夜11時というゴキゲンな時間に帰ってもらうことになり、〝夜の子供たち〟の血を、色濃く受け継いだ3人は、雅樹が泊まっているホテルの部屋で、朝日が顔を出す時間をめがけて、長い長いインタビューに突入していったのだった……。

——やっとツアーが、一段落したけれど、このツアーを通して、新しいラウドネスの中での自分を発見したところはあった？

雅樹 ウン、たくさんあったよ。オレが「CRAZY DOCTOR」を歌っているっていうのとかね。そのことで、すごくラウドネスの中の自分っていう感じがする。コンサートでも、昔からのラウドネスのファンがいて、あの曲を聴いて感動しているでしょ。客席で泣きそうな顔をしているのが、ステージからでも見えるからさ。渋谷公会堂でも、あの曲をやった瞬間に、客席が喜んでいたのが、印象的だったね。それで、〝オレ、ラウドネスに入っちゃった〟っていう感じがした。

——しかも、「CRAZY DOCTOR」は、英語ヴァージョンがあるのに、日本語のヴァージョンで歌っているしね。

雅樹 そうだよ。「CRAZY NIGHT」も、歌っていてそういう感じがする。

> どうやってルーズでいてカッコ良く、ナチュラルにやるかっていうのを、泰司は持っている。

——ラウドネスがその辺の曲を発表した頃って、ラウドネスを聴いていた？

雅樹 聴いてたよ、もちろん。『DISILLUSION』はそんなに聴いてなかったけど、『THUNDER IN THE EAST』は、すっげえ好きで何回も聴いていた。〝これはいいアルバムだ〟って思った。

——まさか、そのアルバムに入っている曲を、自分で歌うとは……。

雅樹 思ってもいなかった(笑)。「CRAZY NIGHT」って、アメリカでは今だにラジオでもかかっているし、ヘヴィ・メタルが好きなガキなんかも、みんなあの曲を知っているよ。ロックのクラシックになっている曲なんだ。

——雅樹はアメリカに住んでいて、そういう状況を良く知っているから、そういう曲を歌っていると、自分がラウドネスのメンバーになったんだっていう意識が強いんだろうね。

雅樹 まあ、そういうことだろうね。

泰司 やっぱ、雅樹さんが歌うから、雅樹さんの「CRAZY DOCTOR」になるわけでしょ。それと同じように、オレが弾くから「CRAZY DOCTOR」が、オレの「CRAZY DOCTOR」になってきたっていうのはあるよ。フレーズ的に、山下さん（山下昌良、ラウドネスの前ベーシスト）と同じようなところがあったとしても、オレが弾いていればまったく違うしさ。今回の『LOUDNESS』にしても、グルーヴとか今までのラウドネスとは違うものを出しているしね。

ラウドネスでやっていて、みんなで目で合図をしてタイミングを合わせるときでも、一緒に同じグルーヴを感じるんだ。

今までラウドネスを見てきて、もちろんグレートだったけど、それとはまた違った意味で、ダーティだったりワイルドだったりするところのかっこよさも、出せていると思うし。それで、オレ自身も楽しんでいるっていう。そういう自分を再発見しているっていうところがある。

——特に7月20・21日に中野サンプラザでやったコンサートを観て感じたんだけど、すごくバンドになってきているよね。そういう段階に入ると、目を見合ったりしなくても、バンドのグルーヴは簡単に出せるんじゃない？

泰司 そりゃあ、みんながそっぽを向いてやっていても、ある程度のレベルの演奏はできるだろうけれど、みんなでそうやってやると、もっと転がるような感じで、いいグルーヴが出てくるじゃん。

雅樹 みんながソロとかやっているのを観ていて、すごく気合が入っているのがわかるよ。〝コイツ、本気だな〟って思うもの。

泰司 オレも、樋口さんのタイコとか、晃さんのギター・ソロなんかを、ずっと見ているけどさ、毎回やることが違うんだよね。樋口さんなんか、クマが叩いているみたいで、すっごい迫力があるしさ。そういうのって、自分自身がやっていることを楽しんでなかったら、出てこないでしょ。

雅樹 それに、ちゃんと行くところまで行くっていうか、そういうところまで持って行ってるしね。

——あのふたりがそうやって、全開でできるのも、新しく参加したふたりががんばっているからじゃないかな？

雅樹 そう言ってもらえるとうれしいけどね。

——つまり、バンドの中でも、ある種のライバルである部分があると思うんだ。〝アイツがこう来たんなら、オレはこういうものを出してやろう。負けるもんか！〟っていう。

雅樹 あるある。そういうのは、すっげえ感じる。だってさ、ヤダもん。ひとりだけ取り残されるのは(笑)。

泰司 よく言うよ(笑)。

雅樹 ステージの上だけじゃなくて、コンサートが始まる前に聞こえてくる歓声なんかでも、〝オッ、今日は泰司のファンが多いぞ〟とか、〝今日はタッカンと樋口っつぁんが多いぞ〟とか思うと、〝チクショー、このヤロー〟とかね(笑)。

泰司 とか言いながら、「オレ、泰司さん目当てでラウドネスに来ました」なんてヤツは、だいたい雅樹さんのファンになっちゃうんだよ。冷たいもんだよね(笑)。

——でも、クラブ・ハウス・ツアーのときと較べても、ここにきて雅樹の名前を呼んでいる観客が多くなったよ。赤丸急上昇だね。

泰司 雅樹さんを後ろから見ていてもさ、飾り気のないクレイジーだからさぁ。ほんとにテンション高くて、すごいんだもの。人気が盛り上がるのも、当たり前だと思うよ。

ラウドネスのメンバーって、みんなアメリカでやってきた人たちだからさ。そこでオレが〝オレは日本でしかやったことがない〟なんていう意識だったり、ナーヴァスだったりしたら、喰われちゃうからね。そのへんの葛藤って、オレ自身にはあるんだけど、メンバーみんなで盛り上げてくれるしさ。

——泰司に、そういう葛藤があるとはね。

泰司 葛藤っていうかさ。アメリカで、言葉が通じないヤツらを相手にして、音楽でそいつらを引っ張るっていう意識を、オレはまだ感じたことがないからさ。そういう意味で、まだ理解できてない部分があると思うんだ。

ただ、〝この人たちには、絶対に負けない〟っていう気持ちは、いつも持っている。それを失ったら、オレがやる必然がないからね。ラウドネスでやるんだったら、それだけは絶対に、失うつもりはないしさ。そういうのを、今の言葉で言うなら、葛藤っていうのが、いちばんあてはまるかなっていう感じ。でも、ぜんぜんマイナスの方向の葛藤じゃないからね。

——泰司のそういう部分で、ライヴなんかを一緒にやっていると、〝コイツ、来てるな〟って感じるときがあるんじゃない？

雅樹 あるよ。どっから見ても泰司はカッコイイ。じつは、泰司の動きなんかを、オレもコピーするの。影響受けるよ、すごく。正直な話ね。ノリとか動きとか……。オレなんか、テンションが上がっちゃうと、コチコチになるっていう弱点があって、すっごく固くなる。どうやってルーズでいてカッコ良く、ナチュラルにやるかっていうのを、泰司は持っているんだよね。泰司はいっつも身体にムダな力が入ってないし、体操の選手みたいに柔らかいからね(笑)。

泰司 ちょっとオリンピック目指そうかっていう(笑)。

雅樹 そうそう(笑)。そういうのを持っているから、泰司を見て盗んだ部分っていうのはあるよね。

泰司 それはおたがい様でさ、雅樹さんっていうのは、自分の立ち方っていうか、スタイルがあるでしょう。日本人とアメリカ人じゃ、その立ち方が、根本的に違うじゃない。アメリカ人は立ち方にしても、堂々と自分をアピールしているでしょ。雅樹さんって、それをすごく持っているんだ。だから、ステージでめちゃくちゃデカク見えるしさ。そういう部分がオレにはないから。

——そういう立ち姿の美しさっていうのは、

MASAKI

雅樹がアメリカで葛藤の末に獲得したものじゃないかな？

雅樹　そうだと思う。だって、ムコウに行く前とじゃ、まず立ち方が絶対に違ってきたし。

——音のフラットバッカーのときには、前に屈み込むような姿勢でさ。

雅樹　そうそう。内側に身体を締め込んで、そこから声を絞り出すような感じだったのが、今はオープンになってるからね。

泰司　身体でグルーヴを出して、ハラで声を出すしさ。スゴイよね。

——泰司が樋口つぁんと二人でやるインストなんて、どんどん良くなっているしね。渋谷公会堂のときには、ふたりで緊張しながらやっているのがわかったけれど、中野サンプラザではそういうのがなくなっていたしね。

雅樹　ほんと、前進しているよね。

泰司　樋口つぁんて、叩きながらでも、ずっとオレのことを見ていてくれるのね。それで、オレの出す感覚に自分も合わせて、その中でやってくれている。そういうのを、すごく感じるんだ。そういうのって、今までに体験したことはあまりなかったからね。

内側に身体を締め込んで、そこから声を絞り出すような感じだったのが、今はオープンになってる。

樋口つぁんとはよく飲んで、深い話をするけどさ、思いやりっていうか、そういうのがあるよ。タイコって、自分勝手に叩いても、リズムが狂わなければ、そういうことをやらなくてもいいじゃない。でも、樋口つぁんはそういうことをやってくれるから、助かっているよ、ほんとに。

——ヘンな話だけど、あるレベルまでいっちゃうと、本当に実力のある人は、自分の力を見せつけるだけじゃなくて、まわりの人をも引き立てることができると思うんだ。だから、樋口つぁんやタッカンくらいのミュージシャンともなれば、そういう余裕を見せながら、自分も100パーセント出せるんだろうね。

泰司　たしかに、そういう人たちだよね。

——ところで、ツアーをやってみて、ライヴそのものは楽しかった？

泰司　ウン(笑)。すっげえ楽しいよ。ほとんどが、オレも気に入ったライヴができていると思うよ。メンバーの中でのテンションが高いし、みんなでひとつのことをやったっていう満足度が高い。アキラさんと話していても、雅樹さんと話しても、グレートにつきるしね。

雅樹　今まで、バッドになったライヴはないからね。みんな、テクニックなんかは完璧に持っているバンドで、あとは精神的な部分っていうか、テンションの部分だけじゃん、問題になるのは。だから、体調が悪いとか、二日酔いとかさ(笑)、気候が悪いとか、そういうちょっとしたことで左右されることはあるけど、でも最低限のプロフェッショナルなレベルは、オレは絶対に崩さない。そういう意思を、みんな持っているからね。

——最近、タッカンはその辺が、少し変わってきたように見受けられるけど？　以前は、そういう感じで、ある一定の線を崩さないようにしていたけれど、最近は、その日そのときの自分の状態を、自然なままストレートに出していると思うんだけどね。

雅樹　そういうところはあるよね。

——マイク・ヴェゼーラが在籍していた第二期ラウドネスから、だんだん彼はそうなっていって。最初のうちはどうしてそういう変化が起こったのかが、オレにもわからなかったんだ。でも、ここに来て、その変化がタッカンの人間的成長から出てきたものだっていうことが、よくわかるんだよね。

雅樹　そうなんだ。ひとまわり、器がデカくなったよね。タッカンは遊び心をすごく持っていてさ、自分が楽しむっていうか、そういうエネルギーはすごいよ。

——ツアーをやってみて、それまでに思っていたタッカンや樋口つぁんとは、違った面を発見することはできた？

雅樹　どうですか、泰司さん(笑)？

泰司　オレのイメージだと、ラウドネスっていうのは、キッチリと区切られた中でやっていって、それがカッコイイものだっていうのがあったんだよ。だって、その時代のラウドネスはそうだったんだもの。樋口つぁんにしても、レコーディングではクリックを聞いて叩いていたわけでしょう。でも、『LOUDNESS』では、クリックを使わずに、みんなで一緒にやっているっていう。"ワイルドだっていいじゃん、ダーティーだっていいじゃん"っていう。それよりも、その人間性とかパワーが出ているんだからさ。メチャクチャな演奏をするわけじゃないしね。そういう部分で、はじけたっていう感じがすごくする。アキラさんに関してはね。樋口つぁんに関してもそうだけど。

——そういうところで、かなりイメージが違ってきたと？

泰司　そうだね。昔からロックだったけど、なんか吹っ切れたロックみたいな感じが、すごくする。

——本人を前にして言いにくいかもしれないけれど、雅樹のイメージはどう？

泰司　雅樹さんはもう、ぜんぜん日本人離れだからさぁ。オレって、それまでフロントに立っているのが4人だったじゃない。いちばんデカイのが、そこだよね。

オレって、ずっとフロントが4人のバンドに慣れていたんだけど、今、ステージにいても、3人でいる気が全然しないんだよね。アキラさんとか、雅樹さんっていうネームバリューのある人の中でオレがやっているっていうような、低い次元の話じゃなくてね。

一緒にやっていて、人間的にデカイんだよね。なんか、ひとりでふたりぶんくらいの存在感があるんだよ。

でも、それって、オレにとってはすごくデカイよ。正直な話、フロントが3人っていうのを、やったことがなかったから、心配もあったんだ。

雅樹　オレは、逆に4人も前にいるっていうのをやったことがないからなぁ。なんか、4

人もいると多いように思えるよ(笑)。だんだん、みんな入り込んできたよね。特に、みんながソロをやっているときに、オレはひとりでステージのそでに行って、みんなのやることを見ているんだ。そういうときに、みんながどういう状態でやっているのかが見えるから。

最近、タッカンがソロのコーナーで弾くメロディとか聴くと、泣きたくなっちゃうよ。あれはタッカンのオリジナルかなぁ?

泰司 あれは韓国の国家。

雅樹 そうだったのか(笑)。なんか、あれを聴くと、グッとくるよ。そういう感じで、みんなのやっていることを見ていても、オレ自身が燃えてくるからね。

それで、泰司はオレを守ってくれるような存在みたい。ステージやっていて、いきなり後ろにいたり、オレの横にピタリとくっついたりとか……。そういうのが、自然にできるようになってきて、気持ちいいなぁ。

泰司がオレのことを、押してくれるときもあるし、引っ張ってくれるときもあるし、守ってくれるときもある。チームだよね。

泰司 一緒に感じるんだよね。一緒にいて感じあえる、すごく。

——最初の頃は、ステージでもどこかに遠慮があったけれど、最近はぜんぜんなくなってきたね。

雅樹 そうだよね。オレも、タッカンとあそこまでいけるとは思わなかったもの。だって、タッカンもオレの股にギターを突っ込んできてグリグリするしさ(笑)。なんだろうって思うよ(笑)。オレはオレで、マイクをギターにこすりつけて、弦が切れちゃうしさ。まさか、そんな感じでライヴができるようになるとはね……。

——そういうシーンを見ていると、今までのラウドネスにはなかった楽しさがあるんだよね。

雅樹 タッカンなんて、最近すごくテンションが高くて、〝どうしちゃったんだろう?〟って思うときあるものね。最初のころは、タッカンと泰司がそんなに動いてなかったから、〝ヤッベエなー。オレが動かなきゃなんねえな〜〟とか思って、渋谷公会堂の1日目とかは終わった後、クタクタになってさ。〝毎晩、

TAIJI

こんなにやらなきゃならねえのかな?〃って思ってたんだ。
　それで、みんなでビデオを見てさ、思ったことをいろいろ言い合ってさ。そしたら、ぜんぜん違ってきて。どんどん良くなってくるよ。

――たぶん、最初の渋谷公会堂のときには、雅樹がどう動くかっていうのを、タッカンや泰司も見ていたんじゃないかな。それによって自分の出方を考えて、ヴォーカリストの間合いっていうのを、作ろうとしていたんじゃないかな?

雅樹　そういうところはあったんじゃないかな。オレのやりたいことを見ていて、それに合わしてくれているよね。それで、うまくやれるようになったよ。

泰司　オレは、そんなたいそうなことは考えてなかったよ(笑)。オレは、ある種ビビッてたから。それはウソついてもしょうがないし、ホントのことだから。

雅樹　ビビッてた?

泰司　ウン。やっぱり、すっげえビビッた。

――泰司がビビルっていうのも、わからないことはないよね。ラウドネスって、昔から自分が聴いていて好きだったバンドでしょ。そういう中に入っちゃったんだからね。

泰司　E・Z・Oにしても、昔から聴いていたしね。そこで、〃オレはこうだ〃っていうのを出すべきなんだろうけれど……。
　かならずしも1本1本のライヴで、そのバンドがすべて決まるわけじゃないじゃない。ずっと、長くやってこそバンドだし、そこからみんなの味も出てくるものだからさ。その最初のビビリがあったから、今があるしね。それで悩んだりしたけどさ。

――昔から聴いていた人たちとやっているっていう意識は、雅樹にもある?

雅樹　オレにはそういうのはない。新しい仲間っていう感じはしているけれど、前はあまり知らなかったし、そんなに入り込んで聴いてはいなかったんだよね、ジツは(笑)。

――ところでさ、今回のツアーで、おもしろかったコンサートはどこだった?

雅樹　う~ん、このあいだの中野サンプラザ。

泰司　それは言えてる。

雅樹　あの日のことは覚えてないもん、オレ(笑)。記憶は半分くらいあるけれど、思いっきり飲みまくってたから。

泰司　珍しいよね。

雅樹　でも、すっごく気持ち良かったからね、それが。ビックリしたよ。なんかマジックみたいでさ。パワーがあって、自分で自分のことを、すっごくカッコイイなって思っちゃったもの。

――ハッキリ言って、オレも11年間ラウドネスを見てきたけれど、あんなにおもしろいラウドネスは初めてだったもの(笑)。聴いていて背筋がゾクゾクくるし、観ていておもしろいしさ。自然にニコニコしちゃったんだよね。

雅樹　あの日は、ふてぶてしさもあったもの、メンバーみんなに。クールだったよ。

――あの日のライヴ・ビデオが、世に出るかどうかは、まだわからないけれど、あの最後のシーンだけはなんかの形で日本中のファンに見せたいよ。

泰司　肩車事件のこと(笑)?

かならずしも1本1本のライブで、そのバンドがすべて決まるわけじゃないじゃない。

――そうそう、雅樹がタッカンを肩車して、ステージを歩きまわる姿は、今までのラウドネスでは見られなかったからね。

雅樹　でも、タッカンがすっげえ重かったの知ってる(笑)? ギターを持っているし、80キロくらいあったよ。

泰司　しかも、この人は自分で水をまいて、ステージをベチョベチョにしときながらだもん。〃なんて足腰の強い人なんだろう〃って、再認識しちゃった。

――横で見ていて、すべって転んだりしないかって、心配じゃなかった?

泰司　そりゃあ、心配だよ。

雅樹　自分でやっていて、すっげえ心配だったもの(笑)。

泰司　ある種の気負いみたいなものもあったしね、あのサンプラザのときは。あと、オレはツアーでは、青森が印象的。オーディエンスのみんな、最前列のヤツが上着を脱いじゃって、オンナの子もオッパイ出しているしさ。そういう解放感を与えられたっていうことがうれしいよね。

――オッパイを見たのがうれしかったんじゃなくて(笑)?

雅樹　オレ、見逃した(笑)。それに、青森の人たちは「DOWN、N、DIRTY」で、ディスコみたいなヘンな踊りを始めちゃってさ。それがいちばんナウなんだって。オレも合わせて踊りそうになったもの(笑)。ヤロウがみんな横一列に並んで、同じ振り付けで踊っているんだよ。あれにはビビッた。青森だけだよ、あの踊りを見たのは。

泰司　でも、「DOWN、N、DIRTY」って、ノルのが難しい曲でしょ。どこでも、あの曲になると、反応がおとなしくなっちゃうから。うれしかったよね。

――ツアーでヘヴィだったことは?

泰司　つらかったことはないよ。

雅樹　寝れなかったときがあったよ。エネルギーのヴォルテージが下がらなくて、目が冴えちゃって、朝の4時とか5時になっても眠れなくて。それで、すっげえハラが減ってきちゃって、コンビニに行って、朝からコンビニ弁当を喰ってるとかね(笑)。そういうのって、情けないな~って思ったけど(笑)。

――眠っているローディを起こして、食べたいものをムリヤリ買って来させるんじゃなくて、自分で買いに行くところが雅樹らしいよね(笑)。そういうときって、コンサートで不完全燃焼のとき?

雅樹　そうじゃなくて、完全に燃えて、コンサートが終わっても、まだ燃えているっていう状態。頭が冴えちゃって、〃今日のステージはどうだったかな〃とか考えだしたりとか、〃明日はどうしよう〃とか考えたりね。

泰司　オレもそういうときがあったよ。京都のライヴが終わった後なんか、テンションが高くて、ひとつひとつのシーンが思い返せるっていう感じで。思い返せるステージっていうのは、それだけ印象が強くて、いいライヴだったときが多い。

――他にツアーで印象的だったことは?

泰司　広島の原爆ドームに行ったこと。

雅樹　オレ、初めて行ったよ。

泰司　しかも、ライヴ前にね。

雅樹　泰司はアーミーのパンツをはいて、なんか目立っちゃって。

――原爆ドームとか記念館に行くと、すごくヘヴィだよね?

雅樹　ウン。オレ、クチがきけなくなっちゃったもの。オレの友達のアメリカ人なんかも連れて行きたいよ。ムコウのヤツが見ても、絶対に感じるものあると思うよ。本当に原爆ってコワイよ。あのロウ人形が目に焼きついているもの、今だに。

泰司　すべての人が見たほうがいいよ、あれはね。

――ところで、コンサートが1本終わるたびに、ミーティングはやるの?

雅樹　ミーティングっていうほどシリアスなものじゃないけど、まあメンバーどうしでひとことふたことくらい。具体的に細かいところまでつきつめて話さないけど、ちょっと言えば感じるものがあるから。目と目でとか、表情でとか、まるで動物のように感じ合っているから。それで、自分で悪い部分を毎日、削除していくっていうやり方なんだ。

――それで、ほとんどやるたびに、曲の形が変わっていくでしょう。中野サンプラザのとき、「FIRE STORM」の中盤で、いきなりブルースが入ってくるし。あれにはビックリしたよ?

泰司　こっちだっていきなりだから、ビックリするよ。

――エッ、あれはそういうアレンジでやるっていうことじゃなかったの?

雅樹　違う。打合せもなくて、いきなりああなっちゃう(笑)。

――誰がいきなり始めちゃうわけ?

泰司　アキラさん。合図もなにもなしで。

雅樹　抜き打ちだよな。

泰司　いちおう、目だけ見て……。

――目を見ただけじゃ、その後にどういう展開にもっていくとかは、ハッキリとわからないんじゃないの?

泰司　わからないよ。でも、とりあえずブルースのフレーズを弾き始めるから、樋口つぁんと目を合わせて。〃これは、キーはなんだろう?〃っていう感じでさぁ(笑)。

――そういうふうに、いきなりメンバー自身も予測していない方向に、曲が変化しちゃうと、観ている観客にとってはスリリングだし、何回観ても〃今度はどう変わっているんだろう?〃っていう期待が生まれてくるよね。

泰司　決まりきったことをやるよりも、アドリヴ性を出したほうが、おもしろいと思うよ。

――ホール・ツアーに入る前に、タッカンが「ライヴ・ハウス・ツアーよりも、もっと自由度が高くなる」って言っていたのは、そういう意味だったのかな?

泰司　そういうところもあると思うよ。最初、北海道のライヴのときに、いきなり樋口つぁんがリズムを叩き出して、〃アレッ?〃っと思って見たら、こっち見ながら〃なにか合わせろ!〃っていう顔をしているんだよね。そういうのがたくさんあって、すごく刺激になるよ。

――そういう中に突入していって歌うっていうのは、ヴォーカリストとしてどう?

雅樹　サンプラザのときに、適当にブルースっぽい歌詞をとっさに付けて歌ったけど、最後のフレーズがはまって、気持ち良かったよ。意識不明のままやったんだけど(笑)。

――そういうことをやっていると、すごいバンドになるだろうね。だって、誰かがなにかを弾き始めたら、どんなことでも一緒についていくわけでしょ。あらゆることができないとついていけないし、勉強していないと置いていかれるだろうし。

雅樹　そうだと思う。みんな聴いているものも違うけどね。でも、似ている部分ではすごく似ているから、「オッ、これカッコイイじゃない」っていうのが、同じだったりもするんだよ。

――ところで、最初のうちはXのファンが泰司を目当てにして、ワッと来るだろうと思っ

ていたんだ。そういう人たちがラウドネスのやっていることを理解してくれるかなって、心配していたんだけど、中野サンプラザではそういう心配もまったく消えたね。うれしいことに……。

雅樹　みんな、バンドとしてのラウドネスを、好きになってくれているんじゃないかな。ファン・レターを見ていても、そう思うし、それがすごくいいなって思うんだ。

泰司　昔は、メイクがどうこうなんていうファン・レターが、段ボール箱いっぱいにきていたのが、今じゃぜんぜんなくなって。ファン・レターは少なくなったけれど、その内容がすごいいいものね。ラウドネスの出す音がすごい好きだとか、そういう内容が多いよね。

雅樹　それは泰司のことだけじゃなくて、ラウドネスのみんなのことを、見ているんだよね。たまに、くだらないのもあるけど、「樋口さんのプレイが良かった」とか、「タッカンのギターにしびれた」とか、そういう感じのものが多いからね。だから、へンなものに偏ってなくて、4人のキャラクターが集まってバンドになっているっていうバンドを見ているんだよ。

泰司　極論を言っちゃったらさ、うわべだけで来るようなファンだったら、そんなものはオレたちに必要ないからさ。オレたちは芸能界じゃないし、べつにそういう姿勢でいいと思うんだ。

――コンサートを見ていて、タッカンがソロでテクニカルなことをやっているわけではないときに、拍手が起こったりするから、本当に難しいテクニックがとれて、いつそれが出てきたのかっていうことまでは、まだわかっていないように感じるんだけどね。

泰司　そこまで判断ができないっていう。

――でも、実際にミュージシャンじゃない限り、わからない部分もあると思うよ。

雅樹　そうだね。ミュージシャンじゃなきゃ、わからないスゴサがあると思うしね。

泰司　でも、わかる人はだんだん増えてくると思うから、見通しは暗くないよ。

――今だから言うけれどさ、LOUDNESS が完成したときに、音楽業界の中に、あのアルバムはマニアックすぎるから、受けないんじゃないかっていう見方があったんだ。転調があったり、構成が複雑で、単純な音楽に慣れている今の音楽ファンには、理解されないんじゃないかっていうような意見を言う雑誌の編集者もいたしね。

雅樹　考え方がコマーシャリズムに毒されてるよね。オレは違うと思うよ。そういう人たちの考え方とは逆に、オレたちはこの攻撃的な音で、ちゃんとつかんできたと思うよ。

泰司　攻撃的っていう言葉をはき違えることってあるじゃない。攻撃的っていっても、速ければ攻撃的、暴力的な攻撃的っていうわけじゃないでしょ。メロウな中で攻撃的っていうものもあるしさ。そういうものが刺激になるし、浸透するんだよね。そういうことがわかってないんじゃないかな。

――で、今の結果から言うと、そういうふうにとらえていた人たちの意見が、見事にひっくり返っているんだよね。

雅樹　たしかにひっくり返ったよ。オレたちもがんばってるもの。そんなこと言ったのは、どこの誰だよ。実名を出しちゃおう（笑）。

――それで、〝危険なインタビュアー〟って言われて、オレの仕事が減ると（笑）。

でも、そういう部分も含めて、ラウドネスは何にしばられることなく、自由にやっていってくれればいいと思うんだ。そういうところに、ラウドネスは踏み込んでいるし、もともと音楽なんて自由なものだからね。

泰司　もう、衣装ひとつ取っても、そうでしょ。かっこうなんかじゃなく、ラウドネスのやっていることに自信があるからね。

――みんなが、ラウドネスだけのものを作りたいと思っているだろうけれど、これからそういうものを作っていくにあたって、自分自身はどういう役割を果たしていきたいと考えている？

雅樹　シリアスに言うならば、グレートなフロント・マンになることでしょう。

泰司　オレなんかは、これからどんどん曲も書いていこうと思っているし、どんどん自分のアイデアを言っていこうと思っているし。とにかく、自分にとってもそれがいちばんいいと思うしね。

あと、オレ絶対、雅樹さんにバラードを歌わせたいんだよね。

雅樹　……（笑）。

――それは、オレも楽しみでしょうがないよ。

雅樹　やっぱり、バンドやっていると、すごくいろんなことを感じるね。ひとりでやろうとしたときもあったけど、そのときとは全然違うね。エネルギーがいろんなところに出てくるし。バンドっていうのは、ひとつの家族みたいなもので、エネルギーの行ったり来たりが、ラウドネスっていっぱいあるから、おもしろい。生きている感じがすごくする。それまで、デッドだったもん、オレなんか。マジでね……。

――ひとりひとりの人生を考えると、みんないい時期にラウドネスでひとつになったと思うんだ。もっと前に雅樹や泰司がラウドネスに入っていたとしたら、今みたいな感じでやれたかどうかはわからないし……。

雅樹　そうだよね。運命的な出会いって言ったら、なんか雑誌のコピーになりそうだけどさ、そういうものを感じるよ。最近。ここまでみんなが、うまく上がってきていると。

ツアーのときなんか、ホテルで生活するじゃない。東京にいるときは、そんなにみんなに会わないけれど、そういうときに一緒に生活していても気持ちいいから、このメンツは当たっているのかもしれない。バランスが取れているって思うよ。

――はたで見ていて、最近はみんなでいても、すごくリラックスしているのがわかるよ。最初のうちは、インタビューをしても、おたがいに何を言うのかっていうことを、気にしていたような感じがあったからね。

泰司　そういうところはあったよ。〝アッ、ああいうふうに言っているんだ〟とかね（笑）。

雅樹　そりゃあ、わからないじゃない。みんな違うところから来て、いきなり集まって音楽をやり始めてさ。これくらい時間がたって、やっとみんなのことがわかってきたからさ。

――でも、ふつうだとこういう雰囲気になるのに2〜3年かかるのに、ラウドネスは早いよね。だから、誰かが煮詰まったときに、まわりがその人間をフォローしなかったら、その人が取り残されてしまう危険性もあるんじゃないかって、心配もしているんだ。

泰司　その通りだと思う。ただ、いちばん大事なものって、尊敬心でしょう。それをラウドネスのみんなに持っているし、みんなも持っていると思うんだ。雅樹さんもアキラさんも、性格的な部分も含めて、グレートなミュージシャンだと思うし、樋口つぁんの優しさやキッチリやる性格とかも、本当に尊敬できるし。そういうのがないと、バンドなんて続かないしさ。それに、そこから始まらないと、友達関係って、絶対にできないよね。

だから、長い時間がかかってもいいんだよ。長いこと付き合って、友達になるものでしょ。最近そういうことを感じるんだよね。

いちばん大事なものって、尊敬心でしょう。それをラウドネスのみんなに持っている。

――ラウドネスって、尊敬に値すると思うんだ。デビュー当時から、オレもラウドネスのメンバーは尊敬しているしね。ミュージシャンとして尊敬できる人間なんて、そういるもんじゃないし。

泰司　大野さんはアキラさんと付き合いが長いものね。

――長いっていうだけじゃなくて、その時代とか局面で、ラウドネスが作ってきたものや彼らが選んだ道を見ていると、やっぱり尊敬に値するよ。

今のこの時代でも、ちゃんといちばんいいものを選んで、最先端のものをクリエイトしているし。アメリカ進出だって、商売人だったら日本でそこそこ売れれば、大きなリスクを背負って海外に行くことはないって考えるんだろうけれど、バンドを結成したときから、「海外のバンドと肩を並べたい。だから、海外でやりたい」って言ってきたわけでしょう。それがクチだけじゃなくて、ちゃんと行動したわけだからね。最初にラウドネスがアメリカに行かなかったら、他のバンドだって海外を目標にするなんて、考えもしなかったんじゃないかな？

雅樹　そうだと思う。今も、ファン・レターなんかで、「アメリカに行くのなら、帰って来ないくらいの気持ちで行ってほしい」っていうのがあったりするし、そういうまわりからの期待があるっていうのも、とってもうれしい。

やらなきゃいかんっていうか、オレたちだけにしかできないっていうか、そういうのを感じるよ。

――雅樹はフラットバッカー時代にアメリカに渡って、E・Z・Oとして活動していたけれど、昔アメリカを目指したときと、今ラウドネスでアメリカを目指すのとでは、感覚が違うんじゃない？

雅樹　オレにはセカンド・チャンスみたいな感じ。1回目のトライで自分が得たものって、すごくデカイと思うんだ。そのステップを生かして、次は絶対にいけると思うし。

タッカンや樋口つぁんにしても、海外に何回も行っているから、その経験を生かしていけるしね。泰司も絶対に海外で通用すると思うし。

コイツ（泰司を指さして）がいちばん楽しくやっていくと思うよ（笑）。

泰司　オレ、絶対に負けないよ！　ダメだったら、全部、自分に責任があると思うんだ。こんなにグレートなメンバーと組んでいてね。音楽で通じる部分がまずあってさ、そこからわかりあっていくでしょう。そこでオレがダメだったら、オレをクビにしてくれりゃあいいの。

雅樹　そこまで言う……。

泰司　でも、それだけの覚悟っていうかさ、ホントにオレはそう思っている。マジで。ダメだったら言ってくれればいい。

その代わり、2〜3年たったときに、また入るから（笑）。

――絶対に負けねえぞ、って（笑）？

泰司　プレッシャーはあるけれど、負けないよ、絶対。

Loudness

LIVE AT NAKANO SUN PLAZA HALL

'92.7.21

REPORT : YOSHIYUKI OHNO
PHOTOGRAPHY : MOTOI OHNISHI

ロックはスゴイものでなければいけない。日常性ではなく、非日常性でなければいけない。ごく当たり前のものならば、なにもロックと呼ばなくてもいい。

ごく当たり前のものを指すために、「歌謡曲」だの「ポップス」だの「ニュー・ミュージック」だのといった言葉があるのだから。

しかも、見た目や行動、あるいはヴィジュアルが、非日常的なだけではダメだ。見ているほうも、そんなコケおどしにはすぐ飽きてしまうし、なによりもやっている本人自身の意識が、そういったレベルから脱却していったときに、ツラクなってしまうから。

人間にとって、いちばんの快楽であるSEXでさえ、毎日やり続けて日常的なものになると、慣れが出てきて、もっと刺激的なものを求めてエスカレートしていくことが多いのだ。人間とは、非日常を日常の中に埋没させることによって、自分自身の安定を作りだすことがうまい生き物でもある。

そうなると、ロックの本質的なスゴサを、いったいどこに発見できれば、いちばん効果的なのか、いちばん快感を覚えることができるのか、ということが問題になってくる。つまり、やっているミュージシャン・サイドだけではなく、聞き手の側にも、日常性の中から非日常性を見つけられる感性が求められるのだ。

さて、ここでラウドネスのライヴの話をしよう。あれは、まさしくスゴイのひと言につきる。音楽で、その場を非日常の空間に塗り替え、観ている人間に刺激を与え、彼ら自身と観客をエクスタシーの高みにまで引き上げるコンサートなのだ。

特に、7月20・21日に中野サンプラザで行われた2DAYSの2日目を観た人ならば、ボクが言おうとしていることがわかるはずだ。

ラウドネスとしては初めてコンサートでレーザー・ビームを使い、ヴィジュアル的には、かなりハデなものだったが、なによりも新しいラインナップになって、ツアーをまわってきた経験が、彼らをまたひとまわり大きく成長させていたのが、衝撃的だった。

どうも、ラウドネスが生まれたばかりのバンドであることを、みんなが忘れているように感じられる。たしかに、ラウドネスというバンドは81年の夏に結成されている。しかし、4人のメンバーのうちふたりまでも変わってしまったら、まったく違うものになったと考えてもいいのではないだろうか。

ラウドネスは今年の1月に泰司が参加した時点で、まったく新しいバンドとして誕生したと考えたほうがいい。

その誕生したばかりの赤ん坊が、プロとしてアルバムをレコーディングし、ライヴ・ハウス・ツアーを行い、ホール・ツアーを行って、だんだん成長してきたのだ。

これがアマチュア・クラスの話だったならば、誕生してまだ半年かそこいらのバンドが、これほど早い成長を見せることは、まずあり得ない。話がインディーズ・クラスであっても同じことだ。この一点だけを取り上げてみても、ラウドネスというバンドのスゴサがわかるはずだ。

そして、なによりも彼らのスゴサは、そのサウンドにある。5月後半からライヴをスタートさせたというのに、バンドとしてのグルーヴが完成しているだけではなく、アルバム『LOUDNESS』に入っている曲でも、ライヴを重ねていくうちに、どんどん形が変化していっているのが、この日のライヴで確認することができたのだ。

観客の立場に立って、純粋に音楽だけでライヴを楽しもうとすると、そこにはいろいろな楽しみ方を見つけることができる。

CDを聞き込んで、CDとまったく同じ演奏をしてくれることが快感である場合もあれば、聞き慣れた曲の中に意外性を持ち込んでもらって、その変化を楽しむ場合もある。

ボク個人の意見を言わせてもらうならば、完成形として世の中に出ているCDと同じ演奏を、ライヴで聴くことほどつまらないことはない。できてしまっているものの形をなぞるだけの演奏には、訓練すればできる的な“サルの芸”に通じるものを感じてしまうのだ。かといって、あきらかにCDよりもクォリティが低い演奏で、「ホラ、CDとは違うでしょ。ライヴならではのラフな演奏だぜ！（ホントはただヘタなだけなのに）」とふんぞりかえられるのも、まっぴらだ。

やっぱり、耳に馴染んだ曲を聴いていて、いきなり“ウッ、これはなんだ？”とイキがつまる思いをさせてほしいのだ。ライヴならではの新たな曲の解釈を、観客に披露してもらいたいのだ。聴いていて、ひっくり返るほどの衝撃を与えてほしいのだ。

その点でも、この日のラウドネスはすごかった。たとえば、「FIRE STORM」の中盤で、あの思いっきり速いリズムから一転して、スローなブルースが始まったときには、それこそ腰が抜けるほどビックリしたし、どの曲でもメンバーそれぞれの演奏が、あきらかにCDのコピーではなく、その場限りの即興性を重視していたことにも、驚かされたものだ。

たんに、ライヴの迫力とかヴィジュアルでライヴを見せるのではなく、聴いていて、耳から入ってきた刺激が、直接的に脳ミソをグチャグチャにかきまわしているかのような、そんなサウンドで楽しませてくれるライヴだった。

決まりきった形をカッチリと見せるライヴならば、歌謡曲のリサイタルやニュー・ミュージックのコンサートに足を運べば、イヤというほど観ることができる。そのツアーが1週間続いたとして、そういうコンサートはどの日に観に行ったとしても、同じものが楽しめるに違いない。

しかし、ラウドネスがくり広げているライヴは、あくまでも1回限りその場限りなのだ。同じものを期待して、次の機会に足を運んだとしても、今度はまた別の刺激に出会うことができる。それがラウドネスだということを、この中野サンプラザのコンサートで、ハッキリと確認することができたのだ。

もう、何回観ても同じコンサートなんて、足を運ぶつもりはない。ロックとは、いつも変わり続ける、現在進行形の刺激そのものであるべきなのだから。

ライヴスケジュール／9月21日＝札幌厚生年金会館、27、28日＝渋谷公会堂、11月17日＝浜松市民会館、24日＝愛知勤労会館、26日＝福岡サンパレス、27日＝鹿児島市民文化第一ホール、30日＝広島厚生年金会館
12月1日＝高松市民会館、4日＝京都会館第二ホール、5日＝神戸国際会館、9日＝大宮ソニックシティー、14日＝市川市文化会館、15日＝八王子市民会館、17日＝青森市文化会館、19日＝宮城県民会館、21日＝グリーンホール相模大野

READY TO KISS

ライヴがやれなくて、もう身体がウズウズしてる。
SEXしても全然燃えないしね(笑)。

LADIES ROOM

GEORGE

GEORGE

10月1日シングル「READY TO KISS～Baby in my eyes～」をリリースするLADIES ROOM。しかもやつらはシングルのレコーディングを終えるとそのままニューアルバムのプリプロに突入してしまったという。とゆーことはこの夏（もう秋だけど）のツアーはどうなっちゃったわけ？ やい、GEORGE、10月14日愛知勤労、18日日比谷野音、27日大阪サンケイだけで許されると思ってんのか、オラッ！

LADIES ROOMが表紙を飾ったSHOXX Vol9のGEORGEのソロ・インタビューを覚えているだろうか？ 彼はその中で「最近本当のライヴの楽しみ方を知った」といった。また「俺にとってCDはライヴを盛り上げるためのアイテムでしかない」「俺にとって音楽は野球やスキーや鉄道模型や恐竜と同じで趣味のひとつでしかない」ともいった。「この夏はツアーをガンガン回る」とも。

しかし、大好きなツアーをキャンセルしてまで次のアルバムのプリプロに入っているLADIES ROOM。友達のバンドのライヴにもほとんど顔を見せずあれほど嫌っていたスタジオに毎日通い詰めるGEORGE。なんなんだ、このいきなりの真面目過ぎる展開は？ 私には信じられましぇ～ん。

――この前のインタビュー覚えてる？「この夏はツアーをガンガン回る！」って宣言してたじゃない？ それなのに今はレコーディング前のプリプロ真っ最中で、ライヴも秋の東・名・阪の3本だけじゃない？ 怒り爆発のファンを代表して聞くんだけど、いったいどういうことなのよ、これは？

「この前のインタビュー？ そんなのもう忘れちゃったよ（笑）」

確かに今このインタビュー読み返してみて「あ、そういえばそうだったな」っていうのはあるね。だけど、その延長として、ちょうどそのインタビューの後にやったツアーが良かったのよ、本当に。もうこんなことは頭から抜けてたけど、でもすごい良かったからね」

――そこですべてをつかみきっちゃったからライヴはもういいってこと？

「違う、違う、全然違う。全然つかんでないよ、まだ。だけどそのインタビューで考えてた精神的な部分ていうのはライヴやってすごいあったわけね。だから根本的にライヴは回りたいよ、もう今だってイライライラしてるもん。他のバンドのライヴも観に行かないのも理由はそれだし。まぁジキルとルナシーは観に行ったけど、あいつらとは音楽性もステージングも違うから観てても『ああ、ライヴやりたい！』って思わなかったのね、初めて。それは自分の中で俺がやりたいライヴのパフォーマンスが確立されたからだと思うのね。ノリが根本的に違うでしょ、ウチとは。だからそう思ったわけで。だけどライヴはもう本当にやりたいもん。だから鹿鳴館にも行かないようにしてるし。

で、今年の夏は本当にツアー回るはずだったの。もうブッキングもしてあったの、本当に。後はもう発表するだけだったの。俺たちも回るはずだったのね。回るはずだったんだけど、その前にツアーが終わってから曲作り始めて、いつもの曲作りのパターンから行けば途中で闘ってトーンがダウンしちゃう恐れがあるから、そのダウンしたときにツアー回って盛り上げてそのまま曲作りに入ってガーンてやろうと思ったの。

ところが今回全然それがなくてね、もう最初からトントントントンと曲がガンガン出来上がって来たのね。で、それがもういい曲ばっかりだったのね。だからそのテンションを落としたくなかったの。もういい曲がドンドコドンドコ出来上がって来て、はっきりいって前回の曲作りとかは誰かが曲作って来たら『これヤだな、ここヤだな』っていうところがかなりあったのね。

でも今回は『あ、これおもしろいじゃん！』っていうのをボンボン出して来たのね、NAOとか百太郎が。それにリズムとかも今回はいろんなパターンがあるから練りたかったの。そういう曲はそういう曲でとことん練らないと。今までみたいな、例えば「ゲット・ダウン」とかあっち系の曲だったら練る必要ないのね、もうJUNと一緒にガーッ！て出てくるフレーズでやればいいでしょ？ そういうのじゃなくてけっこう作り込んだ方がおもしろいなっていう曲もかなりあったし、本当にテンション高かったのね、今回。

だからそれを失いたくなかったからツアーは止めようって。ファンには本当に申し訳ないけどツアーは止めて曲作りに専念して、その代わり次のアルバムは本当に自信があるから、そういう風にしようって思ったの。それがあって今回泣く泣くツアー中止にしたの。

でもね、ホント信じらんないよ、自分で。だってこの俺が毎日毎日スタジオ通ってるんだもん。信じられないでしょ？」

――僕も信じられない（笑）。

「でしょ（笑）？ だからね、ライヴやれないのは本当に辛いけど『作り上げたい！』っていう意識がすごい強いんだ。それを失いたくなかったから。ホントそれだけなの。だからお客さんにはホント『ゴメン！』て」

――なるほどね。まぁこの夏ツアー回らなくてファンはがっかりしてると思うけど、その分すごいアルバムを出せば納得してくれると思うんだ。

「それは絶対わかってもらえると思うよ」

――で、そこでまたひとつ聞きたいんだけど、今までGEORGEは「CDはライヴのアイテムでしかない！」っていい切ってたわけじゃない？

「アイテムだよ」

――そう？ ちょっと変わって来たんじゃない？

「いや、アイテムだよ。ただ、自分の中の定義づけはちょっと変わって来たけどね。ちょっとじゃないか、全然変わっちゃったか？ でもCDは絶対にアイテムだよ。だって俺どんなにさっきいったちょっと変わったリズムの曲が増えてもそればっかりのCDには絶対しないもん、何があっても。やっぱりライヴのノリを考えた曲とかさ。俺はどんなジャンルでもその曲自体のノリっていうものを考えるから、ウチの今までのライヴから180度転換しちゃってそういう変わったリズムの曲ばっかりにしちゃったら変わっちゃうでしょ、ノリ自体が。俺はそういうのは絶対イヤだし。当然これからそういういろんなパターンの、例えばちょっとブルースぽいのとかプログレぽいのとかそういうのが入って来たとするでしょ？ それはそれで絶対ライヴでやるよ、CDに入れた曲は絶対に。だけど根本的な今まであったノリっていうのをガラリと変えちゃうつもりは毛頭ないし、俺の考えからすれば――まぁバラードとかまたちょっと別物なんだけど――リズムが違っても、「ゲット・ダウン」みたいなああいうヘビー・ロックの曲にしても俺はライヴでプレイしてるときの気持ちは同じだから。当然作り込むからそれは違うよ、絶対。バンドにすれば。でも俺からすればライヴでプレイするのもレコーディングでプレイするのも同じだし、どっちかっていえばライヴのがテンション高いから、そういう意味で同じっていってるわけだし、そのためのアイテムっていうことなんだよね。でも今回は今までみたいなライヴを盛り上げるためのアイテムっていう、そういうただの道具じゃなくて……」。

――そうだよね。そうじゃなかったらツアー飛ばしてまでレコーディングしないもんね。

「それはそうだね。確かにCDはライヴ盛り上げるためのアイテムっていう気持ちには変わりないけど、作り込む楽しさも知ったっていうのかな？ ていうか、そういうのも必要だなって感じたのかな？

ホント、自分がライヴ飛ばしてまでレコーディングするとは思わなかったもん、俺。びっくりしちゃったよ、自分で。結局今年なんかライヴ全然ないもんね。東・名・阪3回ぐらいやって終わりだもんね。もう最悪（笑）。ホントもうイライラしてるよ。身体がもうウズウズしてるもん。「101回目のプロポーズ」の武田鉄矢じゃないけど、『泣いてるんです、ヒーヒー泣くんです、かおるさんに会えないと』って、あれと同じ、ライヴがやれなくてもう身体がウズウズしてる（笑）。SEXしても全然燃えないしね（笑）。

夏だっていうのに海1回しか行かなかったし。野球も月に2試合ぐらいしかやってないし。体力発散するのっていったら飲んで暴れてそれだけ（笑）。不思議なんだよね、みんなそういう気分になってるの」

――百太郎もNAOもJUNも？

「うん。それが不思議なんだ、すごく。だから今回のアルバムは今まで以上に楽しいのね、『おお、こいつらここまでやると思わなかった！』っていう。俺たち一番最初の『SEX SEX』の頃はレベルがすごい低かったでしょ、演奏からアレンジから。あんときの曲はすごい好きなんだけど、俺。あの曲

READY TO KISS

《バックナンバー》■VOL。6→近況報告インタビュー6ページ■VOL。8→全メンバー・インタビュー■VOL。9→表紙4カラー15ページ特集、全メンバー個別ロング・インタビュー■VOL。10→百太郎パーソナル・インタビュー

GEORGE

調がLADIES　ROOMだと思ってるから、今でも。あれが根本にあるもんだと思ってるから、メジャー系の明るい感じのハードロックっていうよりちょっとポップかもしれないけど、俺はあれが大好きだし。あの頃からいえば本当にレベルが低かったから1枚ごとに曲作りから演奏からどんどん成長して来てるのね。それが今回ものすごい感じるのね、今まで以上に感じるんだ。だからこの先本当に楽しみでさ。びっくりしちゃうよね、ホントに。

いつもはレコーディング終わってから『みんな上手くなったなぁ』思うのね、『JUN上手くなったなぁ』とか、NAOがギター入れてる作業なんか本当に細かいから俺あんまり聴かなくて出来上がったのを聴いて『すごいなぁ』と思うのね。百太郎の歌にしても、百太郎のときは聴いたり聴かなかったり、聴いてる振りしてエロ本読んでチンポが立ってたりとかいろいろあるけど（笑）、でも今回は曲作りの段階で感じるのね、すごく。だから、今の時点でここまで感じられるからホンットに次のアルバムすごいと思うよ。そこまで思ったからツアー中止にしたんだもん」

——でもそこでね、今までだったらその成長してる姿を一番に出したいと思ったのはCDじゃなくてライヴだったわけでしょ？　お客さんが目の前にいるんだから反応もすぐ返って来るわけだし。

「うん、そうだね。でも今回のアルバムは出せば反応はすぐ返って来ると思うよ。だって自分たちでこれだけ信じられないぐらい真剣なんだからファンがわかんないわけないもん。

だって、たばこがないんだよ、今（笑）！　自分で買ってるんだよ、ビールも（笑）！　だって今まではずっとツアー回ってたりどっかに顔出したりしてたからたばこはたくさんもらえるしビール券はたくさんもらえて自分で買うことなんかなかったの。3年振りぐらいに自分でたばこ買ってるんだもん、金ないのに（笑）。もうピーピー泣いてるよ、財布が（笑）。やんなっちゃうよ（笑）。それぐらい外に顔出してないからね。『LADIES　ROOM死んだんじゃないか？』っていううわさが立っちゃうぐらい（笑）」

——日本一のおひねりバンドだからね、LADIES　ROOMは（笑）。

「たばこ送ってください、お願いします（笑）。レコーディング中はたくさんたばこ吸うんです、一日4〜5箱吸うんです、頼みます（笑）。

まぁそれは置いといて、実は今回ね、最初は『ミニアルバム作ろう』っていう話だっての。それでいろんなリズムの曲とか作ったんだけど、結局ミニアルバムの話はポシャッたのね。なんでミニアルバムがポシャッたかっていうと、『この曲ミニアルバムっていう扱いで出したらもったいないよ』っていう話になったのね。なんでミニアルバムを出そうかって思ったかっていうと『ここらでちょっとお遊び心を出そうか』って話だったのね。今まで遊びっていうと『SEX　SEX　SEX』のアナログ盤に劇が入ってたりとかそういう遊びだったんだけど、今回は曲自体で遊んでみようっていう話になって、16系の曲とかムッチャクチャ速い曲とかピアノとボーカルだけの曲とかアコースティックの曲とか入れて全部で6曲ぐらいのしようっていう話になってたのね。

でも良かったの、すごく、リズムの違う曲からアコースティックぽいのから。もうホントにすごいんだ。弾いて

て気持ちいいんだもん、ベース。今まではスタジオ入っても飯頼んで1時間ぐらいテレビ観て、飯来たら飯食って、野球が始まる時間で野球観て、野球が終わって、5時ぐらいにスタジオ入ったのに9時過ぎぐらいにやっとリハが始まって、1曲2曲やったらベラベラしゃべってて、10時ぐらいになったら『もう10時か』つってまた1曲やって、またベラベラしゃべって気がつくと11時になってて『もう帰ろうか』ってそんなパターンだったのね。

今はスタジオ入ってベース持つと不思議と弾いてるからね。びっくりしちゃうよ、もう。なんでかっていうと弾いてて気持ちいいしもっと気持ち良くなりたいから。レコーディングには最高のテンションで臨みたいでしょ？

今回はそれが特にあるんだよね。だから誰とも会いたくないし。誰かに会っちゃうとなんかヤなのね。自分でも知らなかったよ、俺がこんなに芸術家タイプの人間だったなんて（笑）」

——自分でいうな（笑）

「ハハハ。だから、SEXなんかしたくないもん（笑）。会いたくないんだもん、誰とも。会っちゃうと他のこと考えちゃうでしょ？

そりゃ音楽のことばっかり考えてるわけじゃないよ。ただ独りでいたいの、自分の中だけで消化したいから。今4人で作っててアレンジとかもスパスパスパッて決まって『ああ、いいなぁ』っていうのがあるからこの気分のままでレコーディングに行きたいからね」

——なるほどね。じゃあ前は「俺にとって音楽は野球やスキーや鉄道模型や恐竜と一緒でただの趣味に過ぎない」っていい張ってたけど、そうなるともう全然趣味じゃないね。

「趣味だよ。趣味だよぉ！　だって仕事だったらここまでやるんじゃないもん。趣味だからここまでやるんじゃん。仕事だったらもっと打算的になっちゃうじゃん、『あ、ここは売れるためにこうしよう』とかさ。そういうの一切ないもん。スタジオでもセッションみたいでさ、その場の雰囲気で曲作ったりアレンジしたりとかさ。まぁ今になってそういう雰囲気がやっと出来て来たって感じなんだけどね」

——なるほどね。つまり音楽が本当の意味での趣味になったってことなのかな？

「どうだろうねぇ。俺飽きっぽいからこのレコーディング終わっちゃったら冷めてるかもしれないし（笑）」

READY TO KISS

INTERVIEW:YUSUKE KATOH
PHOTOGRAPHY:MICHIHIRO IKEDA

DEAD P★P STARS

強烈な一撃！ 心から汗をかけ!!

7月20日の記者会見で遂に姿を現したCDNけんchanの新バンド“THE DEAD POP STARS”。運命の9月6日に渋谷ラママでシークレット・ライブを敢行したAKI(Vo) HIROMI (G) SEIGO (B) は、けんchanをして「このバンドに命を懸ける！」といわしめるほどの超強力メンバーだ。11月21日発売予定の1stアルバム『THE DEAD POP 4 DRUGS』は、間違いなく停滞を続けるロックシーンへの強烈なクロスカウンターとなるだろう。

INTERVIEW : YUSUKE KATOH

まず、けんchanに聞きたいんだけど、けんchanは現時点でシスターズ・ノー・フューチャーとアンチ・フェミニズムっていう2つのバンドをやってるわけだよね。そこで、なぜ今回新しくこのバンドを結成しようと思ったのかっていう。

けんchan「僕がしたい一番の本命は僕がドラムを叩くバンドなんですよ。そういう意味で、年前にかまち解散したときにファンに『絶対すごいバンドで帰って来るからな！』って約束したんやけど、やっぱりそんなんすぐにはメンバー集まらへんし、その間何もせぇへんていうのは性格的に無理やからそういうこと（シスターズ、アンチ）やってたけど、本命はこのバンド。やっといいメンバーにめぐり合えてこれからやって行こういう感じ。もうこれに懸けてますから」

じゃあシスターズは本命ではないと？

けんchan「ていうか、シスターズはパフォーマンス・ユニットやからTOMMYちゃんも僕もバンドって思ってないし、ファンにもバンドって思ってもらいたくないんですよ。TOMMYちゃんも本命はカラーやしね」

じゃあアンチ・フェミニズムは？

けんchan「アンチは、僕ストレス溜まる人間なんですよ。だからそれを発散出来る場所が欲しいなということで。だから簡単にいえばカラオケでもよかったんですよ。飲みに行ってウワーッて歌ってられれば。それが僕はバンドやってる人間やからバンドやったっていうだけで。別にメンバーも決まってないしね、それぞれバンドやってる人間だし」

じゃあこのバンドに関しては構想はかまち解散のときからあったと？

けんchan「はい。でも納得の行くメンバーが揃うまでは絶対しんとこ思ってたから。なかなかこれだけロック人口いても気の合うヤツなんかいないでしょう」

それは人間性の部分で？

けんchan「人間性です。僕はいつも人間性なんですよ。僕、上手いヤツとかなんとも思わないんですよ。僕にとってバンドは楽しかったらいいんですよ。遊び感覚のところがあるんですよね。もちろん練習も一生懸命やらなあかんけど、ただしゃべってるだけでおもろいっていうのが好きやから」

じゃあサウンドの方向性はなかったの？

けんchan「それはありましたけどね、やっぱり速いのっていう。今ってなんか汗かきませんよ。怪しげですよ、みたいなの多いでしょ？ でも僕のバンドゆうたら汗かいてやんちゃで速いっていうイメージなんですよ。だからそこを基本には考えてます。速くてサビになったらみんなで歌えるっていう」

それはかまちに通じる部分があるよね？

けんchan「あ、それはありますね。だって僕かまちの音楽的な部分には何ひとつ問題なかったから」

で、そういう構想の下で集まったのがこのメンバーだと？

けんchan「だからジャンル的にはみんなバラバラなんですよ。好きな音楽っていうのは。でも僕はそういうのんよりもおもしろいとかルックスとかが大事なんですよ」

じゃあ一人ずつ紹介してくれる？

けんchan「まず、ボーカルのAKI。彼は久し振りに上手いなぁって思ったボーカル。たいてい速い曲とか得意なボーカルは

バラードは苦手いうの多いでしょ？ でもAKIはバラードもちゃんと歌いこなせるし、秘密の新兵器いう感じですね」

——AKIがけんchanと組んだ動機は？

AKI「やりたいことが近かったし、おもしろそうだったし、ド派手なことをするっていう部分が。それで自分の中に溜まってた欲求が出せそうだったから参加したんですよ」

——ド派手って？

AKI「音楽からルックスから行動から全部ひっくるめて派手にっていう意味です」

けんchan「AKIがいるとバンドが引き締まるんですよ、やる気にさせるボーカルっていうか。僕、リハってやる気にならないんですよ。でもAKIのボーカルだとガーッて気合が入るんですよ」

——で、ギターのHIROMIは？

HIROMI「僕、ずっと大阪でバンドやってたんですよ。で、なんかいろいろゴタゴタしててバンドなんかどうでもええわ状態になってたときにけんchanにサクッと捕まってしまったんですよ（笑）」

けんchan「ていうかね、HIROMIって人気あってあっちこっちのバンドから誘われてたんですよ。すごくやんちゃでカッコいいギターやから。もう理想のギターですね。僕、バンドって4人とも目立ってるっていうか一人一人個性があるっていうのが好きなんですよ。でもギターなんてアホほどおるけどそういうヤツって少ないでしょ？ HIROMIはそういうギターやから最高ですね」

——で、ベースのSEIGOは？

けんchan「SEIGOはよく悩むヤツなんですよ。細かいんですよ。僕はむっちゃ大雑把なんですよ。だからそういう人間がバンドに一人いた方がおもしろいでしょ？ それにルックスもいいしね」

——じゃあ唯一バンドのまとめ役という？

HIROMI「そやなぁ、それはあるなぁ」

——この3人まとめるの大変でしょ（笑）？

SEIGO「いや、全然、別に。ていうかもう、人細かいヤツがいると俺イライラして来るから（笑）」

——でもけんchanのドラムにはそういうしっかりしたベースが必要かもね。

けんchan「はい。しっかりしたベースが欲しかったから。僕、ライヴでは遊ぶんですよ、ハット刻まんとスティック放ったりとかしてね（笑）。だからベースはしっかりしといてもらわんと。だからええまとめ役っていう感じですね、SEIGOは」

——ところでバンド名のTHE DEAD POP STARSっていうのはどこから？

けんchan「僕、このバンド名は最先端いってると思いますよ。ホップ・スターってよくいうでしょ？ でもそれにデッドは絶対つかへんもん。これは自信ありますよ」

——ここでいうデッド・ポップ・スターていうのは自分たちのこと？ それとも本当に死んじゃったスターのこと？

HIROMI「それはあえていいません」

けんchan「いや、皮肉っていうかおちょくってるって感じなんですけどね。こういう金髪のバンドってホップなんて歌詞に使うのもイヤでしょ？ 誰でも拒否反応がある言葉でしょ、僕らにしてみれば、ホップやなぁこの曲、ダサない？ って悪い意味で使ってるでしょ？ それをバンド名にするのはすごいと思うから」

——じゃあ目指すサウンドはいわゆるポップスではないポップだと？

けんchan「それはその通りですね」

HIROMI「ホップだけど俗にいうホップスじゃないんですよ。だから音には絶対自信ありますよ。そんじょそこらのビート・パンクのバンドとは全然違いますよ。あんなもんアホでも出来ますからね、簡単な覚えやすいメロディーつけてタテノリのリズムつければね。でも俺たちはそうじゃないぞと。ホップだけどひとくせもふたくせもあるぞと」

けんchan「基本はパンクですけど、でもそれだけじゃ絶対ないですからね。でもまぁどういうサウンドのバンドかはこれからわかって来るでしょう。11月21日に発売される1stアルバム『THE DEAD POP 4 DRUG』で」

SEIGO「あと、さっきけんchanが『汗をかけるバンド』っていったでしょ？ それが身体だけじゃなくて心から汗をかける音楽っていう感じですね」

一同「うまい（笑）！」

けんchan「さすがまとめ役やね（笑）」

ライヴ・スケジュール　10月11日＝目黒　館

THE

Grand Slam

Live At
Shibuya-Koukaidou
92.8.30

同じところにとどまることはない。

REPORT : MARI ITOH
PHOTOGRAPHY : MIWA OHYA

SHINKI……この彗星のごとく現われたドラマーがグランド・スラムの新戦力である。ご存じのように、TOYOKAWA脱退後、一時期、元EZOのHIROがヘルパーとして参加していたところへ無名の新人の起用。しかも、短期間でのお披露目ライヴ。正直に言うと、ちょっと驚いた。表現はよくないが、素性の知れない者を迎え入れるより、キャリアも名もあり、JUNYAもBANもRUDYも、また、ファンも認識しているドラマーが入るほうがイージーなような気がしていたからだ。

もちろん、それはこっちの勝手な思い込みである。頭の中をニュートラルにして考えてみれば、そのバンドにとってふさわしい人材であるなら有名も無名も関係ない。思うに、そこにはある種、運命的なものがあるのだろう。たぶん、SHINKIという人間はグランド・スラムのドラマーになるべくしてなったのだ。今回の東・名・阪、3回のライヴが、既にそれを証明しつつある。

そこで、前置きが長くなったが、渋公でのグランド・スラムである。まず、頭に残っているオープニングについて、少し触れておきたい。ステージに白い幕がかけられたままアコースティック・ナンバー「For You」が流れてくる。幕にフロント3人のシルエットが浮かぶ。アルバム『FREE』では3人だったグランド・スラム。その事実には大きな意義があるということの確認の意味もあったかもしれない……そんなふうに感じたのだ。その上で、4人が一気にハードな演奏をぶつける前半の展開に持っていく、という構成。そういう意図が彼らにあったかどうかはわからないが、私には印象的だった。

また、これと併せて中盤におけるアコースティック・タイムでの「Looes Control」と「I Love You」も、本来の姿としての4人編成には戻ったんだけれど『FREE』で見せてくれた魅力も意識して出している、と。私は、そうとらえている。

さて、最初の1曲で少し意外性を見せたその後は、いつものSE「Rhythmic Noise」。続いて勢いよく「Here We Go」で幕が落とされ……と、あとは、当然と言えば当然だが、〝ああ、グランド・スラムだ〟というライヴが繰り広げられた。何も違っていない。いや、実際はドラマーが変わっているし、それによってバンド・サウンドも以前とまったく同じではないのだが、それでも、グランド・スラムはグランド・スラムなんだと実感できるライヴだったのである。

観客も、のっけから立ち上がり、腕を振り上げ、JUNYAの呼びかけにもすぐさま反応してバンドを盛り上げていた。手拍子、合唱、声援。いつも随所で聴かれる観客のコーラスに、ステージ上のJUNYAはなかなか首を縦に振らない場面もあったが、客席では、バンドのパワフルなサウンドに負けじと、たくさんのエネルギーが燃やされているのが感じられた。

SHINKIのドラムはヘヴィだ。〝ヘヴィ〟と言ったときに〝ヘヴィ・メタル的だ〟というニュアンスを感じさせるようであれば、〝重量感がある〟という表現にでも変えようか（ヘヴィ・メタルの要素を持っていることは確かだが、グランド・スラムをその枠でくくりたくはないから）。ズシッと、腹にくる音。これをフィーチャーして、バンド全体のサウンドにも重さが増している。たとえば、「Here We Go」や「Cookies」などは、今まで聴いた中で最もハードでヘヴィだったと思う。また、「Lookin'For Love」のような16ノリやシャッフル系の重さは、SHINKIのドラムがフィットして心地よい。

が、一方、わりと〝ポップ〟という印象が強かった曲の表情が変わってきているという部分もあって、たとえば、「Faraway」がハード・バラードに仕上がるのはOK。でも、私としては個人的に大好きな曲でもある「I Wanna Touch You」のノリに関して言わせてもらえば……細かい批評はしたくないのだが、気持ちのいいテンポで流れていくようだったTOYOKAWAのドラムが懐かしいと思ってしまった。

それぞれに個性を持っているドラマーを比べるべきではないし、自分の趣味をSHINKIや現在のグランド・スラムに押しつける気も全くない。ただ、彼らなら「I Wanna～」でも新たな感動を与えてくれるはずなので、そういった期待を込めて言うのだが……。

もっとも、現段階で完成されているほうがおかしい……と言うより、たぶん、どこまで行っても完全ということはないわけで、仮にメンバー・チェンジがなかったとしても、常に反省点や次への課題はあるはずだ。それは、彼らが今だけを見ているバンドではないからであり、自分たちのやっていることに真剣に取り組んでいるからである。何よりも言いたいのは、彼らが、先にも述べたように、グランド・スラムはグランド・スラムなんだというライヴを見せてくれたということだ。ミラーボールが感動的な最終アンコールのバラード「Angel」に聴き入りながら思った。今回の3本のライヴは動員的にも盛り上がり的にも大成功だったが、SHINKIにもグランド・スラムの一員であるために必要な何か……JUNYA、BAN、RUDYと同じものが何か備わっていると感じさせてくれただけでも意義があったのではないか、と。

JUNYAのMCにもあったように、グランド・スラムは今度はアルバムで、現在の自分たちの姿をたっぷりと披露してくれることになる。新しいメンバーが加われば、変化があるのは当然。でも、それでなくても彼らは前進しつづけるバンドであり、同じところにとどまることはないはずだ。彼らは、結成以来ずっと、そうだった。SHINKIの加入も、グランド・スラムというバンドの一生の中の一つのステップだったのである。

「タカラのリカちゃん」あこがれのミュージシャン。

「スターライトYOSHIKI」

10月25日(日)発売

予約受付中！

本体：約30cm
種類：ローズタイプ　限定4,000体
税込価格 ¥10,000 （税抜¥9,709）

ファンの間で最も人気の高いYOSHIKIのステージ衣装。YOSHIKIのもとへ贈られてくるファン手作り人形でも一番多いパターン。バラの花がポイント。ヘアースタイルはドラム演奏時のもの。

本体：約30cm
種類：シルバータイプ　限定3,000体
税込価格 ¥8,000 （税抜¥7,767）

YOSHIKIのステージ衣装としては最近のタイプで、シルバーとブラックでまとめた極めてシャープなデザインのもの。ヘアースタイルは最近の雑誌で最も多く見られるものです。

本体：約30cm
種類：パープルタイプ　限定3,000体
税込価格 ¥8,000 （税抜¥7,767）

ビデオクリップ「Celebration」に登場する華麗なステージ衣装を再現。ティアラと栗色の瞳がポイントです。

この商品には山野楽器オリジナル特典が付いています

オリジナル特典付は、山野楽器でご購入の方だけ！

オリジナル特典内容は、後日ご案内申し上げます。

詳しくは山野楽器販売促進部
TEL.03-3562-5051(代)

SPECIAL THANKS TO YOSHIKI　企画協力 JMA（ジャパン ミュージック エージェンシー）
製造：（株）タカラ　©YOSHIKI・GALSON

配送ご希望の方へ（代金引替配送扱い）

商品名をご記入の上で、おハガキでお申し込み下さい。商品到着（発売日より10日前後）時、お品代に送料（¥800）を添えてお支払い頂くシステムです。
〒104 東京都中央区銀座3-10-5 山野楽器　特販課まで

ご予約はお早めに、下記山野楽器各店でどうぞ！

【中央区】●銀座本店……☎(3562)5051（代）
●東急日本橋店……☎(3274)5608
【新宿区】●新宿マイシティー店……☎(3352)6764
●小田急新宿店……☎(3342)1111（代）
●新宿伊勢丹本店……☎(3352)1111（代）
【渋谷区】●東急本店……☎(3477)3457
●東急東横店……☎(3477)4574
【豊島区】●池袋パルコ店……☎(3987)0505
【品川区】●阪急大井店……☎(3775)1111（代）
【台東区】●松坂屋上野店……☎(3832)1111（代）
【23区外】●町田小田急店……☎0427(27)0382
●まちだ東急店……☎0427(28)2061
●吉祥寺サンロード店……☎0422(21)3610
●東急吉祥寺店……☎0422(21)5111（代）
●調布パルコ店……☎0424(89)5334
●多摩そごう店……☎0423(39)2412
●八王子そごう店……☎0426(26)1399
【埼玉県】●大宮（そごう内）店……☎048(646)2529
●川口そごう店……☎0482(58)2368
●丸広川越店……☎0492(24)1111（代）
●アトレマルヒロ店……☎0492(26)7346
●丸広飯能店……☎04297(2)7189
●丸広東松山店……☎0493(23)1561
●丸広南浦和店……☎048(865)5749
●丸広入間店……☎0429(66)1230
【神奈川県】●横浜そごう店……☎045(465)2747
【千葉県】●千葉パルコ店……☎043(225)6331
●千葉三越店……☎043(224)8376
●津田沼パルコ店……☎0474(77)5775
●新浦安店……☎0473(81)2645
【北海道】●札幌パルコ店……☎011(214)2273
●さっぽろ東急店……☎011(212)2505
●札幌そごう店……☎011(213)2342
●新札幌店……☎011(890)2588
●函館店……☎0138(26)3470
【福　岡】●天神IMS店……☎092(733)2130

おかげさまで100周年
銀座 山野楽器
SINCE 1892
〒104 東京都中央区銀座 4-5-6　03(3562)5051(代表)

LADIES ROOM

お前の口唇(くちびる)から知りつくしたい……

10月1日シングル発売!!

READY TO KISS
～baby in my eyes～

c/w BIG BOOBS AND BUNS, READY TO KISS(オリジナル・カラオケ) KSD2 1012 ¥1,000(込)

特典:初回プレスのみ、メンバーデザインによるオリジナルメタルステッカー付

LADIES ROOM TOUR '92 "LIGHT OF YOUR EYES"

10月14日(水)愛知勤労会館
OPEN SOLD OUT 18:30
(問)サン 052-320-9100

10月18日(日)東京日比谷野外大音楽堂
OPEN SOLD OUT 18:00
(問)ディ 03-5704-3200

10月27日(火)大阪サンケイホール
OPEN SOLD OUT 18:30
(問)キョ 大阪 06-345-2500

料金(税込)各会場共¥3,500 発売場所:チケットぴあ、チケットセゾン、丸井チケットぴあ全国一斉9月15日発売

Ki/oon Sony Records
Sony Music Entertainment (Japan) Inc. 問い合わせ:キューン・ソニーレコード販促1課03-3796-3535

LIFE SIZE

Can You Take a Message?

Are you going to leave or have ?

ファンのファンによるファンの為のファンの情報!!

☆プッシュ/ダイヤル回線どちらでもok.!!

Useful Noise ユースフルノイズ

この番組はアーティストファンのための情報ネットワークです。貴方もファンとしてのメッセージ残したり、聞いたり、情報交換の場としてルールを守り正しく、このユースフルノイズをご利用下さい。

アーティストファン同士の会話に参加してみませんか!!

5001	あぶらだこ	5152	河村かおり	5203	シーナ&ザ・ロケッツ	5254	チェッカーズ	5305	パール兄弟	5356	マルコシアス.バンプ
5002	荒木真樹彦	5153	嘉門達夫	5204	SHOW－YA	5255	CHARA	5306	HARLEM JOCKERS	5357	松任谷由美
5003	安藤秀樹	5154	かまいたち	5205	詩人の血	5256	CHAGE＆ASKA	5307	HARRY JANE	5358	THE 真心ブラザーズ
5004	ALCARD	5155	KAN	5206	SHADY DOLLS	5257	CHIKA－BOOM	5308	THE BARRETT	5359	MALUTI－MAX
5005	AION	5156	KAMIKAZE	5207	SECRET GOLDFISH	5258	TWIGGY	5309	ピチカート・ファイブ	5360	MR.CHILDREN
5006	ANTHEM	5157	KIX－S	5208	16 TONS	5259	辻仁成	5310	PANTA	5361	THE MINKS
5007	AURA	5158	THE KIDS	5209	SISTER'S NO FUTURE	5260	DECAMERON	5311	PEARL	5362	ムスタングA.K.A.
5008	ARB	5159	COLOR	5210	GENDA×BENDA	5261	TMN	5312	BEGIN	5363	本木雅弘
5009	UP－BEAT	5160	GALAPAGOS	5211	G.D.FLICKERS	5262	T－BOLAN	5313	B#	5364	森川美穂
5010	EARTHSHAKER	5161	鬼頭径五	5212	GYMNOPEDIA	5263	電気グルーヴ	5314	B'z	5365	MESCALINE DRIVE
5011	THE ALFEE	5162	吉川晃司	5213	The shamrock	5264	DEEP	5315	VisioN	5366	THE MODS
5012	THE YELLOW MONKEY	5163	GWINKO	5214	ZINGI	5265	D'ERLANGER	5316	THE ピーズ	5367	森田浩司
5013	THE RC SUCCESSION	5164	筋肉少女帯	5215	Z－BACK	5266	Der Zibet	5317	P.J.	5368	MOJO－CLUB
5014	THE WILLARD	5165	楠瀬誠志郎	5216	ZIGGY	5267	De－LAX	5318	PAN PAN HOUSE	5369	MORRIE
5015	THE WELLS	5166	久保田利伸	5217	JACKS' N' JOKER	5268	東京スカパラダイスオーケストラ	5319	P－MODEL	5370	山下達郎
5016	井上陽水	5167	窪田晴男	5218	JUSTY－NASTY	5269	東京ヤンキース	5320	VENUS PETER	5371	山下久美子
5017	忌野清志郎	5168	KUSU KUSU	5219	JUN SKY WALKER(S)	5270	徳永英明	5321	Bonnie Duck!?	5372	矢野顕子
5018	泉谷しげる	5169	グラウンド・ナッツ	5220	陣内大蔵	5271	DOVE	5322	B－FLOWER	5373	YAPOOS
5019	稲垣潤一	5170	GRASS VALLEY	5221	ル・ド・レイ	5272	TOY BOYS	5323	VIBRASTONE	5374	憂歌団
5020	石川よしひろ	5171	CRACK THE MARIAN	5222	THE SILVER DOGGS	5273	TOPAZ	5324	氷室京介	5375	遊佐未森
5021	今井美樹	5172	GRAND PRIX	5223	SILVER ROSE	5274	To Be Continued	5325	平松愛理	5376	UNICORN
5022	えび	5173	グルーヴァーズ	5224	ZOO	5275	TRACY	5326	Billy & The Sluts	5377	UNI－SEX
5023	江口洋介	5174	THE GREAT RICHIES	5225	SKAFUNK	5276	Dreams Come True	5327	THE PILLOWS	5378	妖花
5024	エレファント・カシマシ	5175	黒沢光義	5226	すかんち	5277	NIGHT HAWKS	5328	PINK SAPPHIRE	5379	吉田栄作
5025	X	5176	GEN	5227	杉山清貴	5278	永井真理子	5329	フイッシュマンズ	5380	米川英之
5026	E－ZEE BAND	5177	幻覚アレルギー	5228	THE STAR CLUB	5279	中島みゆき	5330	FAIR CHILD	5381	ランキンタクシー
5027	INGRY'S	5178	KENZI	5229	スチャダラパー	5280	中西圭三	5331	FENCE OF DEFFNSE	5382	LOUDNESS
5028	INFIX	5179	小泉今日子	5230	STALIN	5281	Nav Katze	5332	福山雅治	5383	LAUGHIN' NOSE
5029	M－AGE	5180	児島未散	5231	STILL ALIVE	5282	長渕　剛	5333	THE BOOM	5384	Little Creatures
5030	EDITION DE LUXE	5181	子供ばんど	5232	THE STREET SLIDERS	5283	中村あゆみ	5334	THE PRIVATES	5385	RIO
5031	L.L.BROTHERS	5182	GO－BANG'S	5233	THE STREET BEATS	5284	NEWST MODEL	5335	FLYING KIDS	5386	RABBIT
5032	尾崎　豊	5183	小比類巻かほる	5234	Strawbelly field	5285	ニューロティカ	5336	THE BLANKEY JET CITY	5387	THE RYDERS
5033	小田和正	5184	COBRA	5235	THE STRUMMERS	5286	人間椅子	5337	Flipper's guitar	5388	remote
5034	大江千里	5185	米米CLUB	5236	SPARKS GO GO	5287	NOKKO	5338	THE BLUE HEARTS	5389	りんけんバンド
5035	大沢誉志幸	5186	THE COLLECTORS	5237	SUPER BAD	5288	NORMA JEAM	5339	PRINCESS PRINCESS	5390	LINDBERG
5036	岡村孝子	5187	GONTITI	5238	関口誠人	5289	野村義男	5340	HEAVEN	5391	Luis～Mary
5037	岡村靖幸	5188	Zard	5239	聖飢魔II	5290	BY－SEXUAL	5341	BABYS' BREATH	5392	LENA SEA
5038	奥野敦士	5189	PSY・S	5240	SEX	5291	BA－RA－VA－LA	5342	THE BELL'S	5393	麗蘭
5039	織田裕二	5190	サザンオールスターズ	5241	Sepia'n Roses	5292	BAKU	5343	ベルゼルブ	5394	RUKES
5040	織田哲朗	5191	坂本龍一	5242	SOFT BALLET	5293	BAKUFU－SLUMP	5344	BOØWY	5395	REG
5041	オルケスタ・デ・ラ・ルス	5192	SAKANA	5243	Z.O.A.	5294	BUCK－TICK	5345	BO GUMBOS	5396	Re－selve
5042	OUTRAGE	5193	佐久間　学	5244	谷村有美	5295	PERSONS	5346	THE POGO	5397	Resistance
5043	THE ORIGINAL LOVE	5194	さくら　さくら	5245	DIAMOND YUKAI	5296	THE HEART	5347	布袋寅泰	5398	Replica
5044	横道坊主	5195	佐野元春	5246	Die in Cries	5297	BAD MESSIAH	5348	ホッピー神山	5399	ROSY ROXY ROLLER
5045	カブキロックス	5196	サディスティック・ミカ・バンド	5247	たま	5298	バビロン大王	5349	THE POTATO CHIPS	5400	Les VIEW
5046	カステラ	5197	さねよしいさ子	5248	高野　寛	5299	BARBEE BOYS	5350	本田恭章	5401	LADIES R♂♀M
5047	KAI FIVE	5198	しいもんきい	5249	高橋幸宏	5300	バブルガム・ブラザーズ	5351	町田町蔵	5402	LONG VACATION
5048	KATZE	5199	Zi:KILL	5250	竹内まりや	5301	浜田省吾	5352	松岡英明	5403	渡辺美里
5049	KATSUMI	5200	SION	5251	高木　完	5302	浜田麻里	5353	槇原敬之	5404	WILD FLAG
5050	GARGOYLE	5201	SIGHTS OF LOVE POTION	5252	大事MANブラザーズバンド	5303	HOUND DOG	5354	THE MAD CAPSULU MARKET'S	5405	WILD THING
5051	自分のバンド紹介	5202	私のお薦めニューアーティスト	5253	私のお薦め新曲紹介	5304	バンド仲間募集	5355	私この楽器買います。	5406	私の楽器売ります。

☎0990－349－919 → 発信音の後に アーティストコード ○○○○を押す。

→ 伝言を聞く人 **3** を押す。

→ 伝言を残す人 **7** を押す。

この番組は6秒10円の情報料＋通話料がかかります。地域によっては遠距離通話料が加算されますので必ずＮＴＴの料金ガイダンスで確認して下さい。

ユースフル　ノイズ
渋谷区桜ヶ丘30－7　TEL 3589－6918

※他のアーティストの悪意に充ちた抽象を入れたり、プライバシーにかかわる事を入れてはいけません。アーティストの肖像権・著作権に関する売買は法律で禁じられていますので絶対にしないで下さい。尚、このユースフルノイズはアーテイスト公認のファンクラブとは無関係です。

SHOXX 年間購読者募集
独立創刊記念キャンペーン

期間

9月1日～12月末日まで

好評につき第2回年間購読者募集キャンペーンを実施いたします。この機会にお早目にお申し込み下さい。

三大プレゼント!!

こんなに得する

①年間購読をこの期間にお申し込みになると、もれなく新作、当社オリジナル・テレホン・カード(50度数)をプレゼント。
②人気絶頂の8ビート・ギャグ・ポスター・カレンダープレゼント。
③送料は、すべて当社負担で、直接あなたの自宅に直送されます。
④特別定価の時も、そのままの定価でOK。
⑤当社オリジナル・ステッカー・プレゼント。

■お申し込み方法
SHOXX(定価750円)6号分＝4500円を現金書留又は郵便小為替で、下記申し込み用紙に必要事項を明記の上、下記宛先までお申し込み下さい。
■〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F
(株)音楽専科社・経理部「SHOXX年間購読」係まで。

売り切れ

売り切れ

―きりとり線―

SHOXX　年間購読申し込み書			
期　間	SHOXX　92年　号～93年　号まで		
住　所	〒		
名　前	㊞	電　話	
保護者氏名	㊞	同封金額	
好きなアーティスト	①	②	③

TOSHI初のARTIST BOOKついに刊行!!

MAKING of TOSHI

first solo album recording document

今、TOSHIのもう一つのドアが開かれた。
何が現われるかは、まだ誰も知らない
動き出したTOSHIのすべてを完全ドキュメント!!

内容
1 全4部ロングインタビュー(レコーディング初期から完成まで、全4回にわたってロング・インタビュー。完成までの心の変遷を探る)
2 都内レコーディング・スタジオ取材(打ち合わせ、海外有名ミュージシャンを迎えてのオケ取り、オーケストラ入れ、ヴォーカル入れなどを密着取材)
3 ロサンゼルス取材(LAでのレコーディング密着取材、LAロケ・フォトセッション、アルバム・ジャケット撮影&ビデオ撮影密着取材など)
4 ニューヨーク取材(NYロケ・フォトセッション、スタジオ・フォトセッション)
5 ニッポン放送、総合放送取材(TOSHIの音楽以外の活動も取材)
6 スタッフ取材(レコーディングに携わったスタッフをはじめ、ソロ・アーティスト、TOSHIを支える多くのスタッフにも取材した)

ARENA37℃創刊10周年記念特別出版/ARENA37℃11月号臨時増刊
絶賛予約受付中!! 1992年10月19日発売予定 予価2000円
※限定発売につき、お早めに書店でお申し込み下さい。

〈きりとり線〉

雑誌注文書

●書店(番線)印	●受注　月　日	●部数	●担当者
	●書名 メイキング・オブ TOSHI 予価2000円(税込) 10月19日発売予定		
	●あなたの名前	●TEL	
	●あなたの住所 〒		
雑誌扱い	●出版社名 ㈱音楽専科社 〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F ☎03(3574)0201 FAX.03(3574)8548		

※この注文書は切り取らないでコピーしたものでもかまいません。

東京YANKEES

DECAMERON

一撃必殺舞踏会

名古屋発〝史上最強にして最悪〟(笑)なイベント

バックステージ&ライヴレポート
一撃必殺座談会

GARGOYLE

幻覚アレルギー

SILVER ROSE

デカメロン衣装協力／摩天楼

一撃必殺舞踏会バックステージ&ライヴレポート

1992.8.8. Club Diamond Hall in Nagoya

烈火炸裂、真夏の夜の大舞踏会!!

寝苦しいうだる様な熱帯夜が続いたかと思うと、妙に涼しい日がまとめてあったり、こんな日々が交互してくれると、いっそ秋を飛び越して早く冬になってほしいと願いたくなる変な夏。'92、8月8日、所は名古屋に『史上最強にして最悪なイベント、一撃必殺舞踏会 VOL. 2』なる警告発令。顔ぶれはというと、幻覚アレルギー、DECAMERON、SILVER ROSE、東京 YANKEES、GARGOYLE の5バンドだ。

会場時間を少々おして、ダイアモンドホールのあるフレックスビルの周辺は、建物の中と言わず外と言わず人で溢れ返っていた。それぞれぱっと見で出演バンドの誰のファンか、すぐにわかるモドキファンから、実にノーマルなスタイル有と、客層もいろいろだ。

会場してから楽屋の方では、ヘア・メイクをほぼ終わらせたDECAMERONのメンバーが、ビデオ・スタッフに囲まれている。バンド数に加えて、スタッフの多さも当然のことなのだが、所狭しと通路に置かれた器材の間をすり抜ける様に右往左往している。

トップは幻覚アレルギーなのだが、準備の方はいかがなモノかと見てみると、「あと10分」の声がしている時間に、まだ〝髪立て〟が終わっていない／しかも着替えもまだだったりで、あわただしく衣裳を出したりと、かなりのバタバタ状態（笑）。ダ、ダイジョーブなのかナー、とちょっと心配にもなる。しかしそこはサスガに手慣れたもので、15分オシ程度で、客電がおちる。

薄明かりに照らされたステージに黄色い声がどっと押し寄せる。さっきまでの冷房効果はどこへ行ってしまったのか、最前付近は早くもかなりの熱気に包まれる。メンバーがステージに姿を表すと、一層声が高まる。1曲目の『SPEED アレルギー』でフロント3人がステージ前、ギリギリまで出て来ると、最前部は身を乗り出し、のばし出された手で塞がれてしまう。2曲目の『SEX AND ROID』で、KAZZYのGの調子が一瞬乱れるが、すぐに持ち直す。もうメンバーの顔には、汗が流れ落ちている。MCを途中に短くはさみながら、ボルテージはどんどん上っていく。その上昇加減にファンもぴったりとついていく。

確かに以前のVoスタイルより(正確に言うと、かなり初期の頃に回帰したと言うべきか)攻撃性が増して、過激になったSCEANAは、アタマッからとばして、客を即攻で自分達のペースにのせてしまう。BのTETSUも、かなり積極的にステージ最前まで出て来てKAZZYとその動きを競っているかの様だ。さっきまで楽屋で、YANKEESのメンバーと冗談を交していた顔とは段違いなのは当り前だが、目つきの鋭さは迫力を増している。KAZZYとSCEANAのフロント・アクションが決まると〝声〟と〝手〟がス

REPORT&PHOTOGRAPHY : SAORI TSUJI

《東京 YANKEES バックナンバー》■VOL. 6→ハチャメチャ10項目インタビュー■VOL. 11→インタビュー

ゴイ（←凄すぎる／笑）。KIMURAがドラム・セットに阻まれて、見づらかったのは残念だが〝音〟で存在は充分アピール。

ラスト2『CHAMELEON BLUES POP』と『NOISE現象』を一気にブッ飛ばし、ステージを後にした。

そして次はDECAMERON。前出の幻覚と、兄弟競演となる訳だが、各自違った方向性で、興味深い。

1曲目『RESTLESS NIGHT』から3曲目『SHADOW DANCE』まで続き、MCをはさむ。やっぱりNAOKIのMCは、DECAMERONのライヴの大きな〝オ楽シミ〟のひとつであるだけに、時間的制約がある時は、短くなってしまうのがちょっと残念（笑）。それでも〝久々モノ〟のネタを登場させて、シッカリ笑いをとるあたりは流石でアル（笑）。（TAKEchanとのカケアイがあまり無かったのはオシイが・笑）。

考えてみると、メンバー・チェンジ後、撮影の機会があって、新メンバーのKYOICHI（G）とMASAYUKI（B）は知ってはいるものの、ライヴは初めて見るのである。CHITTAでのワンマンやレコーディングもこなし、新加入から既に何ヵ月もたっているので、ライヴのステージングはピッタリ息が合っていて、とても自然体だ。バンドで何がツライかといえば、このメンバーチェンジであり、メンバー自身にしても、ファンにしてもそれ相応にくるものがあるが、それによって良い方向に進めさえすれば、また新鮮力＝新戦力として期待できるのである。そういった意味では、誠に望ましき展開になりつつあるのでは（笑）。片手を上げつつ、踊っているファンが多く、イベント・タイトルに一番ふさわしかったかもしれない。『BLUE STRANGER』、『少年の瞳のままで』、そしてライヴにおいてはやっぱりコレ、『すべてをこの愛に』の全6曲で、次なるSILVER ROSEへバトン・タッチ。

少し前から雑誌等で、写真やバンド名を目にすることが度々あり、バンド・ネームの響きからも気になっていた彼らだが、ライヴはおろかメンバーにもちゃんと顔合わせをしておらず、興味津々。ウラ覚えの広告を頭の中で思い出しながら、楽屋へ。いわゆるオフ・ステージの写真を撮らせてもらうため、メン

《GARGOYLE バックナンバー》■VOL. 6→渋公ライヴフォト&インタビュー 7ページ■VOL. 9→KIBA パーソナルインタビュー

バーにはメイクを終えたところで集まってもらう。初対面ということもあるが、何かオトナシソーな感じはテレもあったのか、とにかく静かな感じだなぁ、と思ったのだが……。が、いざ、ライヴとなって照明を浴びた彼らは、ルックスから、ダーク系なイメージが強く、音の方もそのイメージを持っていたのだが、実際とはすごいギャップがあった（笑）。それは良い意味でのギャップで、音が出た途端、フロント4人は相当動き、ハードな曲を弾き出し、会場内の温度を上げていく。ほとんど髪で頭が見えない程動く。V0の熱唱ぶりをはじめ、あまりに突進しすぎている気勢はあるが、逆に若い彼らの特権と言えるかもしれない。MCで「名古屋に帰って来た」と言ってた様に、地元らしく、とても伸び伸びとしたステージング。固定ファンに囲まれ堂々たるライヴを見せてくれた。フル・ステージでの構成も見てみたいものだ。

楽屋の方ではすっかり準備完了の東京YANKEESのメンバーが、気合いの入った声を飛び交している。そういえば、YANKEESのライヴもしばらく見ていなかった。ウ～ン、楽しみだ。

会場に戻るとすぐに客電がおちた。しかしほんの少しのライトも無く、真暗にされる。ステージも、客席も、完全な暗闇に。何かそれだけで異様だ。次の瞬間、こちら側へ強烈な目潰しライトが発された。「早く出て来い！」「いつまでも待たせんなよ！」少女達の口からは雄々しい声が、メンバーの名前を呼ぶ声と混ざって膨れ上る。〃待たせたな！〃とばかりにYANKEESの4人が、その強い逆光の中、姿を表した。オープニングSEを、かき消す様に『DIVE INTO FIELD』。最前付近一帯のヘッドバンキングは凄い。彼女達の髪は早くも鞭の様にしなり、上下している。

「演奏時間が短いから8曲できるんだよ。」と言っていた彼らだが、その間にも細くMCをはさんでいく。MCと言っても、彼らの場合はもうアオリまくる（笑）。かなりの反応をみせるファンに〃まだまだ足りないぜ〃とばかりにアオリまくる。UME（お得意の）〃見たくねぇ奴は、外で待ってろ！〃が出る。AMIも曲間、マイクをとってガンガンアオる。ファンは激しいヘッドバンギングの間に、YANKEESならではの両手で

《幻覚アレルギーバックナンバー》■VOL.10→SCEANA&KAZZY インタビュー

拳を振り上げ、再び頭を振りまくる。NORIは振り向きざまに髪をなびかせ、音を刻んでいく。UDAは歯をくいしばって猛烈に首を振って叩きまくる。ステージのモニターに足をかけていたUMEが、その前に立ちはだかり、次の瞬間、舞台と客席の間の警備、プレス・エリアに飛び降りた。わぁっという歓声と共に、無数の手が一斉にのびてくる。ステージのソデからローディが飛び出してくる。ラスト2曲、『HOLLYWOOD HEARTBREAKER』と『LET ME GO』では、もうグシャグシャ状態に近い。強力である。やっぱりYANKEESは強力である！

客電がついてふと見ると、汗だくの客は、ぐったりとして精根つきはてた様に放心している。熱い空気がよどんでいて、ほとんどサウナ化（笑）している。楽屋でも、やはり汗だくのメンバーが天井から出ている冷風をダイレクトに受けている。あの熱さの中、皮ジャンだから、その暑さもひとしおだろう。

そのYANKEESの左奥では衣裳も身につけ、出を待つGARGOYLEの4人がスタンバイ。出の直前写真を撮らせてもらうが、オフな感じでと言っても何かしっかりポーズになっている屍忌蛇。ちょっと笑いがあって、リラックスした雰囲気も。

一撃必殺舞踏会、ラストはGARGOYLE。『凱歌』の始まりと同時にフロアの〝気〟はステージに集中する。宗教的な色合いさえ感じる彼ら、KIBAの呪術的に迫るVoは、のばした手の爪の先からも伝わってくる様な感じだ。時に激しく、床に倒れ込み、大きなパフォーマンス。それと対照的に、宙を見つめ、静かに瞳を閉じて暫時動かないその姿。メリハリのきいた演出は、一層彼らの世界を広げていく。心地良い現実逃避の一時だ。屍忌蛇はGをいとおしむ様にひく。自らの音に溶け込んでいく様に、陶酔した表情が照らし出される。今日はトップとサイドを後ろに結んだKATSUJIの顔が良く見える。コーラスのところでは、会場からかなりのリアクションがある。ラスト『ハレルヤ』の余韻がまだ残る中、アンコールではTOSHIもマイクをとり、大喜びするファン。もう後が無い大ラスならではの盛り上がりを見せた。

本当にちっとも夕涼みにならない（笑）、烈火炸裂の真夏の夜の舞踏会だった。

《GARGOYLE ライヴスケジュール》9月23日＝新潟ジャンクBOX、26・27日＝北海道ベッシーホール●問＝バハマ／アフターゼロ（☎06・211・3504）

《幻覚アレルギー ライヴスケジュール》9月24日＝渋谷ON AIR、30日＝京都ミューズ、10月1日＝神戸チキンジョージ、3・4日＝広島ウッディストリート、6日＝博多Be-1、8・9日＝名古屋ハートランド、10月11日＝高松クラブハウス、12日＝岡山ペパーランド、14日＝大阪am hall、16日＝金沢バンバンV4、17日＝長野J、19日＝新潟ジャンクボックス、20日＝仙台ヤマハホール、22日＝青森クォーター、24・25日＝札幌ベッシーホール●問＝バックステージプロジェクト（☎048・883・2711）

《東京YANKEES ライヴ・スケジュール》10月8日＝仙台ヤマハ6Fホール、9日＝山形レコ発サイン会、11日＝札幌メッセホール、13日＝北見夕焼けまつり、16日＝青森クウォーター、18日＝新潟JUNK BOX、24日＝山形セッション、25日＝会津若松ジャンダルムイベント、27日＝新宿パワーステーション、11月1日＝金沢バンバンV4、3日＝高岡もみの木ハウス、4日＝長野J、6・7日＝名古屋ハートランド、12日＝岡山ペパーランド、14日＝博多Be-1、15日＝大分TOPS、18日＝広島ウッディストリート、20日＝高松クラブハウス、21日＝徳島スエヒロプラザ、23・24日＝難波ロケッツ●問＝エクスタシー（☎03・5458・6381）

《SILVER ROSE ライヴスケジュール》10月10日＝名古屋ボトムライン、26日＝日仏会館、11月5日＝大阪ロケッツ●問＝ミュージックファーム（☎052・772・2314）

一撃必殺座談会

INTERVIEW : TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY : SAORI TSUJI（バックステージライヴ）*MIWA OHYA*（座談会）

やっぱり、メインは打上げ!?

8月8日に名古屋のクラブダイアモンドホールで行われたSHOXX後援のイベント『一撃必殺舞踏会』。この日、出演したのは東京ヤンキース、GARGOYLE、SILVER ROSE、DECAMERON、幻覚アレルギーの5バンド。

さて、今回は、この日スケジュールの都合で決席の幻覚アレルギーを除く4バンドの中から一人ずつ代表として、東京ヤンキースのAMI、GARGOYLEのTOSHI、DECAMERONのMASAYUKI、SILVER ROSEのKAIKIの4人に集まってもらい、座談会を行った。果たしてどんな熱い話になったかは、読んでのお楽しみということで……。

早くライブが終わって、酒を飲みたいという気持の方が強かった。

(AMI)

──まずは各自に、先日のライヴの感想からお願いしようかな。

AMI：友達がいっぱいいたイベントだったから楽しかったです。いわゆるバンド本来の役割である、お金を取って演奏を見せるという事も大切なんだけど。俺はどちらかと言うと同窓会ノリと言うか。早くライヴが終わって、酒を飲みたいなという気持の方が強かったです。でも楽屋もライヴも楽しかったです。

TOSHI：僕らは名古屋のライヴで、あんなに大きい所に、あれだけのお客さん（1200人以上）が入るというのに、まずはビックリしましたね。ライヴに関しては、俺らは何処で演っても気持ちは一緒ですから。それとAMIちゃんも言ってたけど、楽屋はガヤガヤと楽しい雰囲気だったんで、アッという間に1日終わったという感じです。

KAIKI：俺はもう1日中緊張しっぱなしというか。やっぱもう凄い先輩ばっかりだし、こういうイベントに出る事自体が今まで非常に少なかったんで、凄く緊張しました。

MASAYUKI：緊張してなかったわけじゃないんですけど、動きにしろ演奏にしろ、自分達はまだまだ甘いなという気にさせられましたし、やっぱ勉強になったというのが一番です。

──各自、既にワンマン展開に入ってるバンドばかりなわけだけど。イベントというのはみなさん久し振りなんですか?

AMI：GARGOYLEさんとは続いてるんですよね。

TOSHI：そう。埼玉のイベントから続いてるんだよね。しかもツアーにしても、俺らがヤンキースさんの後を追っかける形になってて。よく楽屋に行くと曲順表とかが残ってるんですよ。それを見て、これがヤンキースのメニューだなとか（笑）。

──でもAMIちゃんの話じゃないけど、楽屋の中は、もうワイワイガヤガヤって感じだったわけ?

AMI：ただイベンターの方がやたら気ぃ使ってくれて。しかも俺らの本番前に、「飛ばないよね、飛ばないよね」って何度も聞いて来るんですよ。だから俺らも「わかんないですよ、俺らは」とか応えてたり。

──やはり、たまにイベントに出ると、いつもとは違った感じになります?

TOSHI：やっぱり、自分達のバンドを見に来た人ばかりじゃないから、その中でどれだけ自分達の世界にしてしまうかというのが、イベントの一番重要なポイントですよね。ライヴはいつも通り自分らの演りたい事を演るだけなんだけど、ただ、その辺の駆け引きがイベントとワンマンのライヴでは違うという。

──とはいえイベントならではの楽しさというのも当然出てくるし?

TOSHI：そうですね。やっぱりバンド毎に音楽に対するアプローチも全然違うし。そういう意味での刺激というのが凄くありますからね。

──久し振りに合う人もいっぱい出てくるし。

TOSHI：そう。ライヴ中は誰と演ろうが一緒なんですけど。ただ終わった後が楽しいと言うんですか。

──やはり一番のメインはそこですか。

全員：苦笑

──当然、打ち上げは派手に?

AMI：いや、そうでもなかったんですよ。店の閉まるのが早かったもんで。

──でも人数はかなりのものでしょ。

AMI：いや、出演したバンドとスタッフの人達がチラチラっといて。まぁ人によるんでしょうけど、俺の感覚だと、大規模だとは思わなかったですけど（笑）。

TOSHI：ただ店を出る時が凄かったんです。なんかお客さんにバレてたみたいで、出ていったらグワーッと記者会見みたいに囲まれて。

AMI：もうオリンピック状態ですよ（笑）。

──でもライヴの方はホント楽しめたって感じだったんじゃない?

AMI：ただね、イベントに出ていつも思う事があるんですけど、例えばもっと違う畑の人達とイベントを演る場合も当然あるじゃないですか。例えば俺らとSILVER ROSEを比べても、けっこうジャンル的に離れてますよね。でも演ってる本人達はすげぇ仲良く話してるんですよ。その演ってる本人らは仲いいのに、なんでお客さん同士でモメなきゃいけないのかって。しかもうちの客というのが、そういう意識が強くって。いつもイベントに出ると、そういう思いを感じちゃうんですよね。そりゃあ演ってる本人らも仲が悪けりゃ別ですけど、少なくともこの間のイベントに関しては、みんな和気あいあいと演ってるんだし。実際、この間のイベントの時にも、お客さん同士のトラブルがあったというんで、後でそういう話を聞くと、演ってる本人らが覚めちゃいますから。ホントみんな上手くやってくれよ。

──そうだったんだ。ところで単純に自分達にとってのイベントの醍醐味って何かな?

AMI：こんな事言っていいのか、よくわからないんですけど。バンド演ってるからには、これから先演ってくに当たって、自分達の畑をいい状態にしたいじゃないですか。ここで動員だけを考える言い方をするのは、チョットいやらしいんですけど。例えば俺らが100人しか入れられない所で、300人のイベントに出られれば、俺らの事を知らない200人の人達に見せられるわけでしょ。その200人の人達の中で、俺らの事を好きになってくれた人が10人でも増えたら、それは俺らの畑が少しよくなったということに繋がりますから。だから醍醐味という質問に合ってるかどうかはわかんないですけど、うちらはどんなイベントに出る時にも、いっつも何らかの形でプラスに持ってかなきゃいけないという考えで演ってます。でも、逆に客を取られちゃうって場合もあるんだけど（笑）。

──SILVER ROSEは、イベントの経験が少ないということだけど、こういうイベントに参加してみて、客観的に思う事とかってある?

KAIKI：いや、この日は、とにかく自分達の演れる事を演るしかないだろうという気持ちがあって。もう自分達の持ってるモノの全てを出すしかないみたいな感じでした。当然、このライヴを見て、俺らの事がいいなと思った人は、また見に来てくれるだろうし。だから、演るだけ演ろうみたいな感じで出たんで、ただそれだけみたいな。

──やはり色々と学ぶべき事は多かった。

KAIKI：ステージとか打ち上げとか（笑）。

TOSHI：なんかそればっかりだな（笑）。

──でもこういうイベントって、確かにライヴの方も楽しいけど、演ってる側としては、その後の打ち上げって、かなり楽しい後イベントって感じだよね。

凄い先輩ばかりで1日中緊張しっぱなしでした。

(KAIKI)

《SILVER ROSE バックナンバー》■VOL.10→メンバー全員インタビュー

AMI：まして俺らなんかだと、GARGOYLEやSILVER ROSEのような、地方のバンドと会う機会って滅多にないですから。やっぱ久々に合うと飲んじゃいますよ。

—所で、みなさん他のバンドのステージは、しっかりと見る方なんですか？

AMI：俺は必ず全バンド見ますよ。今回もおべんちゃら言うわけじゃないですけど、GARGOYLEのステージって、見てて凄いなぁって思ったし。とにかく（GARGOYLEの）みんながね、物凄く勉強熱心なんですよ。そこがウチと違うなと。だって俺らは「すげぇな」と思っても、じゃあ練習しなきゃじゃなくて、「すげぇな」で終わっちゃうんですよ。ホントGARGOYLEは、いつ見ても自分らが出来うる一番上の所で演ってるから、すげぇなと思っちゃった。
　後はもうDECAMERONにはDECAMERONの世界があるしというように、各バンド毎の世界があって、結局はいろんなバンドを見る事によって勉強になってるんじゃないですか。たとえ、その場その場は「すげぇなぁ」で終わっても、後々自分でベースを背負ってる時に、色々と学んだ面が出て来ますから。

ベーシストって、普段ベースの話ってしないよね。

(TOSHI)

TOSHI：いやぁ嬉しいなぁ。今日は酒でも飲みにいきましょうか（笑）。

—確かに各自個性を持ってるからこそ、ワンマン展開してるわけだしね。また逆に考えれば、だからこそイベントとなると、いろんな面で刺激も受け合うんだろうね。

TOSHI：やはり学ぶ所はいっぱいありますからね。でも個人的には、バンドとして影響を受けるということはないですけど。ただ、やっぱ単純にベース弾いてるから、ベーシストの動きに目が行きますね。しかも今回は全員ベーシストばかり集まってるし。
　でも考えてみれば、ベーシストって、ベースの話って普段はしないよね。

AMI：しないしない。

—後のパートってそういう話をよくしてるよね。じゃあベーシストは、たまに会うと遊びの話の方が多くなったりするんですか？

AMI：パッと久し振りに会って、例えば器材が変わってたら、これはというくらいですかね。後は別に……。

TOSHI：ギタリストとかって、あそこのフレーズはどうこうとかいう話をしてるでしょ。ドラムにしても、箸でタカタとかやってるし。ホント、お前ら飲みに行ってまでそんな話をするなよと、ついつい思ってしまうんですよ（笑）。僕も、地元のバンドの連中とはよく飲みに行ったりするんですけど、どのバンドのベーシストの人も、ベースの話とかあんまりしないですね。但し僕らの周りはそうであって、他の所は知りませんけど。

MASAYUKI：やっぱみんなベースに興味がないんですかね（笑）。

—この日は打ち上げの方もかなり盛り上がったんですか？

TOSHI：もう飲んでましたねぇ。某東京さんは（笑）。

AMI：大好きなんですよ。お酒が。

—あの日はどれくらい飲んだんですか？

AMI：いや、あの日は時間が少なかったから、オーダーストップがかかった時点でバーッと頼んで。でも本当は他の友達のバンドの所に行って話そうと思ってたら、自分らのバンドのアイドリングを回してるうちに、残念ながら打ち上げが終わっちゃったんですよ。

—でも打ち上げって、いろんなバンドと知り合える機会が出来るからいいよね。

AMI：でもお酒が入ると、くっさいくっさい話をするんですよ。俺ら根性ロックって言ってるんですけど。決してシラフではとてもじゃないけど話せないような。

—えっ、それはどんな話？

AMI：いや、バンドがしんどいわと言う話が出たら、「お前、頑張れよ」とか。ホントくっさいんですよ。

TOSHI：青春モノみたいな。

AMI：一緒に頑張ろうぜみたいなのが、酒が入ると必ず出ちゃうんですよね。

—やはり打ち上げって、バンドの話がメインになる？

TOSHI：どうでしょうね。最初はとっかかりがないからバンドの話になるでしょうけど、知り合い同士だったら、別の話をしてる気がする。

AMI：実はこの間の埼玉でのイベントで一緒になった時に、初めてTOSHIさんやKIBAさんと飲んだんだけど、その時、ただのワンフになってましたもん（笑）。

TOSHI：けっこういっちゃいましたもんね、埼玉の夜は熱かった。

AMI：だからイベントが終わった時点で、そんなに打ち解けあえなくても、酒で深まる場合もあるだろうし。

—お互いのコミュニケーションを取るのに飲むっていうのは、最高の手段だよね。

AMI：やっぱお互いに裸になりますからね。

—けっこう意外な面も出てきたりさ。デカメロンなんかかなり飲むんじゃないの？

MASAYUKI：うちらはそうでもないですけど、タケチャンがかなり飲みますよ。

TOSHI：どこへ行っても大将だから。

AMI：タケチャンって、いっつも腹壊してるんだもん（笑）。

MASAYUKI：この間は、次の日が早かったので、みんな早めに帰ったんですけど、でも普段はタケチャンかなり飛ばしますから。

—デカメロンで飛ばしてるのって、タケチャンくらい？

MASAYUKI：いや、俺とかも飲むんですけど。みんなに言わせると、俺が酒を飲むと怖くなるそうなので、あんまし飲まないようにはしてるんです。

—思わず説教しちゃったり？

MASAYUKI：あぁ、自分より若い子には言ったりしますね。

—SILVER ROSEなんか、逆に打ち上げとか貴重な経験になるんじゃない？

KAIKI：この間も、うちのボーカルがマージャンをネタに他の席に行って、酒でつぶされてベロンベロンになって返って来ましたし。

—所で、各自ワンマンで演ってるバンドだけど、例えば自分達がこのシーンを引っ張っていかなきゃみたいな面ってあります？

AMI：東京ヤンキースとしては、我関せずだと思います。と言うか、もっと正直に言っちゃうと、自分らの事だけで手いっぱいなんですよ。勿論、友達はいっぱい増えた方が嬉しいけど。でも若い連中はいっぱい増えてきて、じゃあ、うちらが彼らを引っ張っていこうなんて気は甚だないし。俺らは友達がいっぱい増えて、一緒に楽しんで、一緒に酒が飲めれば、それでいいって真面目に思いますからね。それに知り合った人達とは、いつまでも美味しい酒を飲みたいじゃないですか。だから引っ張っていこうなんて気は更々ないです。

TOSHI：僕らもそうですね。周りは気にしてないし、バンドのシーンって言うんですか、そういうのって後からついてくるもんだと思ってるし。自分らは自分らの事を精一杯やるというのが、基本中の基本だから、自分を信じて、自分で満足いくものを演っていけば、それが認められようが認められまいが関係のないことだし。だからシーンを引っ張っていくという感覚はないです。

MASAYUKI：確かにシーンを引っ張っていくという感覚は全くないですね。みんな頑張ってやってるわけだし。それにバンドそれぞれが、それぞれの思いで演ってるわけですから、誰が引っ張っていくというのはないと思うんですよ。ホント僕らだって精一杯演ってるだけだし。

KAIKI：うちらって名古屋に住んでるでしょ。その名古屋自体がシーン云々以前に、離れ島みたいなもんで、周りに俺らみたいな音楽を演ってる人なんて全くいないんです。だから何がシーンだとか、引っ張っていくとか言われてもさっぱり感覚がないし。そういう事は一切考えられないって感じですね。

—なるほどね。じゃあ最後にこれからの各自の予定を聞いておこうかな。

AMI：10月に2枚目のアルバム『OVERDUING』を出して、11月いっぱいまで全国ツアーをする予定です。だからライヴに継ぐライヴですね。

TOSHI：これまで出した3枚のCDで、GARGOYLEの3部作は自分らの中で完結したんですよ。だから9月以降は、自分らの中では新しいGARGOYLEという形になってるんです。後はその新しいスタイルが、見た人に伝わるかどうかという僕らの問題だけなんですけど。

—でも決してガラッと変わるわけじゃないんでしょ。

TOSHI：まだ全然見えてないです。その時点でやりたい事をやるだけだと思います。

KAIKI：うちは東名阪をワンマンツアーで回って。しかも3か所で別の曲の入ったCDシングルを配るという企画があって。その後にはまた全国ツアーで26ヵ所程度回る予定でいます。

MASAYUKI：デカメロンの方は10月末にビデオをリリースして、11月1日に名古屋クアトロ、15日に大阪でワンマンライヴを演って。都内でもワンマンを予定してますし。他にも地方を何ヵ所か回る予定です。

自分達はまだまだ甘いなという気にさせられました。

(MASAYUKI)

《DECAMERON バックナンバー》■VOL. 9 →メンバー全員インタビュー

SHOW-YA

ヘンに肩に力が入らないで、ライブができている。

ここに来て、日本だけではなく、海外に活動の場を求めるバンドが増えてきている。しかし、現実的には言葉の壁があったり、偏見とまではいかないものの、人種的なものから来るかたよった見方があることは事実だ。

SHOW・YAは、早い時期から、全世界に向けて活動をしていたバンドだし、女性のバンドとしては客観的にみても、世界でいちばん実力を持ったバンドであることも事実だ。そんな彼女たちの新しい道がここにある!

—SHOW-YAがバンドとして「SHOXX」に載るのは、ひさしぶりだね。

五十嵐▼筋少の大槻さんと私が対談したのが、1年半くらい前だったんじゃないかな。それ以来ですね。

—ところで、8月4日に岡崎市で予定されていた野外イベント(SHOW-YA、ラウドネス、アースシェイカー、聖飢魔IIなどが、出演を予定していた)が、中止になったのは残念だったよね?

中村▼そうですよね。せっかくひさしぶりに、日本のハード・ロック・バンドが集まれるイベントだったんですけどね。

五十嵐▼私たちは前の日が金沢でライヴがあって、そのままイベントに乗り込もうと思って楽しみにしていたから、ほんとうに残念なんですよ。

—この夏のハード・ロック・イベントとしては最大のものになるはずだったし、ラウドネスの高崎晃の話では、いちばん最後に全員でブラック・サバスの曲をセッションするっていう話もあったみたいで、オレも楽しみにしていたんだよね。

中村▼主催者側のつごうで、中止っていう形になっちゃったんだけど、いちばんかわいそうなのは、ファンの人たちだと思いますよ。だから、SHOW-YAは10月3日に岡崎市にある東海産業大学の短期大学の学園祭に出演することにしたから、あのイベントに行こうと思っていた人たちは、ぜひ観にきてほしいですね。

—ところで、SHOW-YAにステファニーが参加して、約1年がたったけれど、ライヴがすごくなってきたって、評判になっているよ。この前、川崎クラブ・チッタでワイルド・フラッグやアクションと一緒に出たイベントでも、いきなりアコースティックからステージを始めて、観ている人をビックリさせたしね?

中村▼いつも、ライヴの中ではアコースティックの曲をやっているんだけど、この間は持ち時間が30分だけだったから、ライヴの流れの中にアコースティックを入れるのはたいへんだしっていうこともあって、ああいうオープニングにしたんですよ。

本当は、岡崎市でのイベントのときも、SHOW-YAのオープニングはアコースティックでやろうと考えていたんですよ。

五十嵐▼いろんなバンドが出るし、お客さんの耳のためにも、そのほうがいいかなって思って(笑)。

—そういうライヴをする以外に、ここしばらくは、どういうことをやっていたの?

中村▼今年の4月に、ステファニーが住んでいるロス・アンジェルスに行って、リハーサルをやっていたんですよ。それで、LAのライヴ・ハウスにも出る予定が、何本かあったんですけど、それがロス暴動で全部とんじゃって。

ステファニー▼ライオット(暴動)のおかげで、ライヴがキャンセル、ショッピングがキャンセル、パーティもキャンセル(笑)。あの期間は、外出禁止令が出ていたから、みんな家にいるしかなかったから。

—でも、そうめったに体験できることじゃないからねぇ。

五十嵐▼最初の1日目は、そう思っていたし、あまり怖くなかったんだけど、2日目にTVを見たら、まったくコマーシャルがなくて。

ステファニー▼4時間、すべてのチャンネルは生のニュースばっかり。たくさん火事が起こっていて、どのチャンネルをまわしても、違う場所の火事が映し出されていたから……。

五十嵐ステファニーの家でも、焼けたクサイ匂いが流れてくるし、上空を警察のヘリコプターが飛びまわっているし。あれはちょっと怖かった。

中村▼私たちが泊まっていたアパートでも、住民が中庭のプールのところに集まって、情報交換をしているんだけど、そういうところに私たちがクビを突っ込んでも、みんな興奮していて早口だから、何がどうなっているかわからない。

ステファニー▼だから、私がアパートの管理人に電話して、「あなたのアパートに、日本人の友達がいるんだけど、みんな英語がよくわからないんです。もし、非常のときには、彼女たちに伝えますから、私に電話してください」って言ったんですよ(笑)。

—カジノ・ドライヴのシャケは、家に火事のススが飛んできたって言っていたよ。

五十嵐▼シャケの住んでいるところは、普段でもちょっと怖そうなところだし。

ステファニー▼シャケの住んでいるあたりは、毎晩のように銃声が聞こえるって言われている地域だから、暴動が起きたら、すごく怖いと思う。

—そういうことがあって、予定が狂ったり

INTERVIEW : YOSHIYUKI OHNO
PHOTOGRAPHY : MIWA OHYA

して、たいへんだったと思うんだけど、なかなかレコーディングに入らないでしょう?
中村▼ファンの人たちも心配してくれていると思うんですけれど、私たちも同じ気持ちで、早くレコーディングして出したいんです。でも、やっぱりまだそういう状況になっていないっていう。
——バンドのサウンドはまとまっているし、新曲もライヴでやっているのを聴くと、すごくクォリティの高いものができていると思うんだけど?
中村▼そういうことだけじゃなくて、ステファニーが入ったことによって、私たちはより日本と海外の活動をキチンと考えてやっていかなければならないと思うんですよ。
　ステファニーが入った時点で、私たちは完全にワールド・ワイドでの活動を考えているわけですよね。そういうことを理解してくれるっていうシチュエーションが、今の時点ではまだ１００パーセントじゃないんですよ。
——ひとくちに、海外で活動するっていっても、それにはかなりのエネルギーと、日本のレコード会社とか事務所の理解が必要だから。
中村▼そうなんですよ。そういう部分で１００パーセントじゃないっていうのが、レコーディングに入らない理由なんです。
　私たちは、明日からでもレコーディングができる準備はできているんですけれど、そういう部分がちゃんとできないと、しても意味がないと思うんです。
——新曲も、ちゃんとできているしね?
五十嵐▼ライヴをやると、ファンの人たちが、新曲を覚えていて、一緒に歌ってくれたりするくらいだから（笑）。
ステファニー▼そうそう、あれにはビックリしたもの。全部、歌詞が英語でしょう。それなのに、みんなが歌っているから、もしかして海賊盤のテープが、出まわっているんじゃないかって思ったくらい（笑）。
五十嵐▼今のＳＨＯＷ－ＹＡは、あまり表だった目立つ活動はしていないけれど、そういうところで、今のＳＨＯＷ－ＹＡっていうのが、ちゃんとファンの人の中に入ってきているなって感じますよ。
中村▼最近は、夏のイベントで、普段のツアーでは行けないようなところにも行って、新しいＳＨＯＷ－ＹＡをアピールすることができていると思うし。自分たちでもライヴをやっていて、よりいいコミュニケーションが取れてきているし、ヘンに肩にチカラが入らないで、ライヴができているっていう気がするのもいいし、やっていて楽しいんですよ。
　ステファニーが、ステージで「ハーイーワタシタチハ、ＳＨＯＷ－ＹＡデス」って、ステファニーなりの日本語で言っただけで、いい雰囲気で曲に入ることができるんですよ。
五十嵐▼だから、決めごとをしなくても、いい感じでやれるんですね。
中村▼ＭＣとか、動きの部分とかでも、自然のままで、なにも決めずにやっているんだけど、それが気持ち良くできるっていう。
五十嵐▼やっていて、ホントに気持ちいいし、私が客観的に見ても、みんなカッコイイと思うし。すごく自然にＳＨＯＷ－ＹＡの音楽が、観客の中に入っているのがわかるんです。
——そうなると、あとは海外での活動ができて、レコーディングできる状況になれば、怖いものはないと?
中村▼東洋人がロックをやっているっていうこと自体が、常識的なことではないっていうふうに見る人も、アメリカには多いから、まだまだ心配な部分はあるんですけれどね。
五十嵐▼今年の終わりまでには、なんとかアルバムが出せるようになればいいですね。ただ、怖いものがないっていうけれど、やっぱり暴動は怖いですよ（笑）。

SHOXX独立創刊記念キャンペーン!!

('93年1月〜6月)

シマあつこ『8ビートギャグポスターカレンダー』応募者全員プレゼント!!

《2号連続購読者特典》

9月号(Vol.11)11月号(Vol.12)

▶応募方法

下段についている応募券、2号分を一口にして、郵送料(切手260円分)を添えて封書で『8ビートギャグポスターカレンダー』係までご応募下さい。

※応募〆切＝10月20日(当日消印有効)

※申し込み先＝〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F 株式会社音楽専科社『8ビートギャグポスターカレンダー』係

応募券
ポスターカレンダー
S-11

※8ビートギャグポスターカレンダーは11月中旬より発送致します。

※年間購読者にはもれなくプレゼント致します。

担当:岩井・高杉

VIVA ROCK、SHOXX誌上でおなじみのシマあつこ『8ビートギャグ』がA2ポスターカレンダーとなって登場!!(9月号＝Vol.11)と本号(11月号＝Vol.12)の2号連続ご購読者より応募者全員にプレゼント致します。数多くの人気アーチストがシマあつこ独特なタッチで描かれるファンタジック・ワールドです。二度と手に入らない貴重なカレンダーです。

株式会社 音楽専科社 Tel.03(3574)0201 Fax.03(3574)8548

BACK NUMBER

バックナンバーのお知らせ

■バック・ナンバー申し込み方法■

▼定価金額＋送料（2冊120円、3冊196円、4冊は240円）分を切手か、現金書留、または小為替で〈〒104東京都中央区銀座5の1の7　数寄屋橋ビル音楽専科社経理部アリーナ○年○号〉（○の中には希望の号数を入れる）係まで送って下さい。ご自分の住所、氏名、電話番号を忘れないでネ。

ARENA37℃
ミュージシャンのための音楽マガジン　アリーナ サーティセブン

▼91年10月号
▼91年11月号
売り切れ

表紙＋巻頭大特集＝BY−SEXUAL（インスピレーション・トーク、『CRACKER』インタビュー、クロスレビュー、クロスワード・パズル）／BAKU（8／31EAST詳報、スタボー・レポート）／麗蘭（アルバム・インタビュー）／J（S）W（パーソナル・ストーリー最終回）X（8／23東京ドームライヴ）／UNI−CORN（『ヒゲとボイン』レビュー、EBIインタビュー）／スチャダラパー、かまいたち、ブランキー・ジェット・シティ、THE MODS、すかんち連載スタート、G・D・フリッカーズ他
（620円＋送料76円）

▼91年12月号
表紙＋大特集＝BAKU・全16頁（サンフランシスコ道中記、アルバム・インタビュー、パーソナル・インタビュー、悩み相談）／J（S）W（TOO BAD徹底インタビュー、アンケート）／KATSUMI（アルバム・インタビュー）／UNI−CORN（ヒゲとボインは何位でしょう）／すかんち、THE MODS、かまいたち、B・J・C、X、BY−SEXUAL、LUNA SEA、らんまるのわがまま、スピッツ、LADIES ROOM、COBRA、De−LAX、AION、他
（620円＋送料76円）

▼92年1月号
巻頭＋大特集＝JUN SKY WALKER（S）（正月号はJ（S）Wで決まり！ 1日、年中J（S）W、パーソナル・朝・昼・夜・深夜インタビュー、久々4人全員インタビュー、92年大予想企画）／UNI−CORN（さよならのすべて（笑）、ライヴレポート）／X（最新衝撃フォト）／BY-SEXUAL（シングル・リリース）／THE MODS（モッズとスカーフェイスのすべて）／シスターズ・ノー・フューチュアー、M-AGE、ブランキー・ジェット・シティ、布袋寅泰、ルナシー、プライベーツ、すかんち、スパゴー、らんまるのわがまま他
（620円＋送料16円）

▼92年2月号
売り切れ

▼92年3月号
売り切れ

▼92年4月号
表紙＋巻頭大特集＝BUCK-TICK（『殺シノ調べ』ロング、インタビュー、完全ディスコグラフィ、美麗フォト）／ZOO&DEER／NOKKO／江口洋介／大事MANブラザーズバンド／P-MODEL／UNI−CRN／BAKU／LUNA SEA／吉川晃司VS原田喧太他
（620円＋送料76円）

▼92年5月号

▼92年6月号
表紙＋巻頭大特集＝THE BLANKY JET CITY（パーソナル、インタビュー、三人の相関関係、ライヴの現在・過去・未来）／THE ALFEE／UNI−CORN／カラー＝TOSHI、HIDE、ZOO、BUCK-TICK、LUNA SEA他（620円＋送料76円）

▼92年7月号
表紙＋巻頭＝BAKU解散!!本誌独占！パーソナル徹底ロングインタビュー『解散の真相と今後』／ラウドネス全9頁（本誌独占！TAIJI対談）／ルナシー全8頁（アルバム徹底インタビュー＋十美麗ピンナップ）／UNCORN／DIE IN GRIES／レディースルーム／他
（620円＋送料76円）

▼92年8月号
表紙＋巻頭大特集＝THE ALFEE（パーソナルインタビュー、コンサートレポート、夏のイベント速報）尾崎豊追悼特集〈前編〉全30頁、10代のインタビュー全9本完全掲載／KYO／山下久美子／X・TOSHI／LUNA SEA 他
（690円＋送料86円）

▼92年9月号
表紙＋巻頭大特集＝ユニコーン、すかんち、スパークス・ゴーゴー／尾崎豊・追悼特集〈後編全35頁〉／BUCK-TICK（5月26、27日本武道館）／LUNA SEA／X・TOSHI、DIE IN CRIES他
（690円＋送料86円）

▼92年10月号
表紙＋巻頭大特集＝LUNA SEA（全25頁／個人を徹底解剖、アトランダム・クエスチョン他）／TOSHI／SOFT BALLET／吉川晃司他
（620円＋送料76円）

表紙＋巻頭大特集＝TOSHI（ソロ活動／TOSHIのすべて／①ロング・インタビュー、誰も知らなかったTOSHIの7つのクエスチョン）／YOSHIKI（7月30日、日本武道館、驚異の大イベント他）／DIE IN CRIES／ユニコーン他
（690円＋送料86円）

増刊、書籍

バックナンバーおよび増刊、書籍を申し込みの方は、定価＋送料分を現金書留又は小為替（切手代用も可）で〒104東京都中央区銀座5−1−7数寄屋橋ビル音楽専科社経理部 BOOK フェアー係　まで送って下さい。申し込みの際、必ず希望商品名を書いて下さい。増刊、書籍を2冊の場合は送料310円、3冊以上540円です。

KOOL&KRAZY
延原達治

アリーナ本誌で大好評連載したプライベーツ、延原達治の「KOOL&KRAZY」の単行本化。
（1500円＋送料260円）

人に歴史あり
ユニコーン

87年にアリーナに登場して以来、90年7月号まで、ユニコーンの全ての記事を一冊にパック。まさにバンドに歴史ありです。その上、追加取材あり（テッシーエッセイ書き下ろし、奥田民生対談、巻頭特写、人に歴史あり）でガンガンせまる。
（1500円＋送料260円）

JUSTY-NASTY
すべてをこの夜に

ジャスティ・ナスティ初の写真集。アルバム『すべてをこの夜に』のコンセプトそのままに再現。オール・ヨーロッパ・ロケ。パーソナル・インタビュー、バンド・ヒストリー、インディーズ時代も含めた完全ディスコグラフィーなど、ジャスティの全てがわかる一冊
（1600円＋送料260円）

ARB 大研究
DAYS OF ARB

おしくも解散してしまったARBの大研究復刻本。音楽専科の復刻を初め、アリーナの復刻も含めた大豪華本。
内容＝フォト・ドキュメント、メンバーからのメッセージ、アリーナ＋専科復刻（石橋凌・俺の生き方、各アルバムインタビュー、新メンバー加入インタビュー他）対談（石橋凌VS大友康平、キースVSサンプラザ中野、石橋凌VS氷室京介他）白浜久エッセイ、ライヴ・ヒストリー他。
（1350円＋送料260円）

SHOXX SPECIAL
筋肉少女帯

ついにでた!! 筋少本の決定版。
▼パーソナル・インタビュー／ヒストリー／ロッキン・コミック／エッセイ／対談、などなど、やれることは全てやりつくした決定本。
（1500円＋送料260円）

SHOXX SPECIAL
Zi÷Kill

ジキル初のアーティスト・ブックがついに登場
▼個別ロング・インタビュー／13アイテム・インタビュー／趣味の世界／ライヴ徹底取材／ジキル・ストーリー／8ビート・ギャグ・Zi÷KiLL版他
（1500円＋送料260円）

THE LIVE'91

91年の夏のイベントをこの一冊にギューづめ。夏の決定版。J（S）W（名古屋、金沢、仙台）UNCORN（名古屋、金沢）／UNI−CORN VS J（S）W（名古屋）／X（新潟、仙台）／BAKU（よみうりEAST）／その他のイベント多数！
（1350円＋送料260円）

ZOO&DEER
NATIVE

ZOO&DEER初の写真集。彼らの魅力を十分に味わってくれない。
▼ロケ、スタジオ・PHOTO、ビデオMAKING、ディスコGOLD、竹芝でのPHOTO、など、ボリューム満載。

（1850円＋送料260円）

かまいたち

解散してしまったかまいたちの全てを網羅した初のアーティストBOOK
▼LIVE HISTORY、MEMORIAL STUDIO PHOTO、かまいたちHISTORY、はちゃめちゃ日記、かまち年表、ディスコグラフィー、LAST TOUR完全レポート他
（1980円＋送料260円）

GREATST ROCK

巻頭50ページ大特集＝X（91年Xの大復活の全軌跡がこの一冊で）／かまいたち解散!!／BY-SEXUAL／BUCK-TICK／LADIES ROOM／Zi：KiLL／LUNA SEA他
（1500円＋送料260円）

吉川晃司

吉川晃司初のライヴ写真集。1991年5月〜7月の"Lunatic LUNACY TOUR 1991"を完全再現！ さらにオフ・ステージでの素顔、スタジオ撮り下ろしフォト、ライヴ・レポートなどなど、ソロ再始動後の吉川晃司を全てを収めた豪華本。
（2500円＋送料310円）

PINK SAPPHIRE 写真集
GIRL by 4

エネルギッシュなステージをいつも見せてくれるピンク・サファイアの初の写真集。本誌アリーナ37℃で2年間にわたり取材した写真、インタビューの他、新鮮撮りおろしフォトなど、きっと満足するはず。
（2000円＋送料260円）

大島暁美のロックンロール日記

SHOXXで好評連載中の大島暁美のロックンロール日記。ファンの絶大なるアンコールに答え遂に一冊にまとまった。本誌では紹介できなかった裏話など満載。
（980円＋送料260円）

ARTISTDIAL COMMUNICATION

利用方法

まずTel 0990・308・260をダイヤル

↓

発信音のあとに、認識番号0をダイヤル

↓

発信音のあとに、好きなアーティストの□□□をダイヤル

↓

伝言を残す人は3をダイヤル

伝言を聞く人は7をダイヤル

TEL 0990-308-261

発信地／東京都杉並区

この番組はアーティストのファンのための新しいネットワーク。ファン同志の交流の場としてドンドン利用してね。ただし、他のアーティストの悪口を入れたり、アーティストのプライバシーに関わる情報を入れるのはやめましょう。また、アーティストの肖像権、著作権に関する売買は法律で禁じられています。それでは、ルールを守って楽しく利用してくださいネ!! なお、このアーティストダイヤルコミュニケーションはアーティスト公認のファンクラブ・所属プロダクションとはまったく無関係です。

総合ガイダンス ⑨⑨⑨

101	EARTHSHAKER	151	かまいたち	201	ZIGGY	251	Char	301	林田健司	351	THE MAD CAPSULE MARKET'S
102	AION	152	KAMIKAZE	202	SHADY DOLLS	252	チェッカーズ	302	B.B.クイーンズ	352	松任谷由実
103	OUTRAGE	153	嘉門達夫	203	JITTERIN' JINN	253	CHAGE&ASKA	303	PEARL	353	マルコシアス・バンプ
104	UP-BEAT	154	COLOR	204	SECRET GOLDFISH	254	CHARA	304	パール兄弟	354	MALUTI-MAX
105	あぶらだこ	155	GALAPAGOS	205	詩人の血	255	チューブ	305	ViBRASTONE	355	MR. CHILDREN
106	荒木真樹彦	156	川村かおり	206	16 TONS	256	辻仁成	306	PANTA	356	THE MINKS
107	ALCARD	157	KAN	207	SISTER'S NO FUTURE	257	DECAMERON	307	PAN PAN HOUSE	357	ムスタングA.K.A.
108	THE RC SUCCESSION	158	KIX・S	208	陣内孝則	258	TMN	308	BEGIN	358	MESCALINE DRIVE
109	THE ALFEE	159	Cutemen	209	シーナ&ザ・ロケッツ	259	T-BOLAN	309	B'z	359	MOJO-CLUB
110	アンルイス	160	吉川晃司	210	J-WALK	260	DEEP	310	VisioN	360	THE MODS
111	安藤秀樹	161	KRIS KROSS	211	GYMNOPEDIA	261	De-LAX	311	B♯	361	本木雅弘
112	THE YELLOW MONKEY	162	GWINKO	212	JACKS' N' JOKER	262	D'ERLANGER	312	The ピーズ	362	MORRIE
113	E-ZEE BAND	163	筋肉少女帯	213	JUSTY-NASTY	263	Der zibet	313	ピンク・クラウド	363	観月ありさ
114	安全地帯	164	KUSU KUSU	214	The Shamröck	264	電気グルーヴ	314	ピチカート・ファイブ	364	宮沢りえ
115	泉谷しげる	165	楠瀬誠志郎	215	ZELDA	265	チエコ・ビューティー	315	VENUS PETER	365	矢野顕子
116	稲垣潤一	166	久保田利伸	216	少年ナイフ	266	To Be Continued	316	Bonnie Duck!?	366	YAPOOS
117	井上陽水	167	窪田晴男	217	JUN SKY WALKER(S)	267	DOVE	317	福田眞純	367	山下久美子
118	今井美樹	168	グラウンド・ナッツ	218	陣内大蔵	268	東京スカパラダイスオーケストラ	318	B-FLOWER	368	山下達郎
119	忌野清志郎	169	GRASS VALLEY	219	ジル・ド・レイ	269	東京ヤンキース	319	氷室京介	369	憂歌団
120	INGRY'S	170	CRACK THE MARIAN	220	スターダスト・レビュー	270	徳永英明	320	P-MODEL	370	遊佐未森
121	INFIX	171	GRAND PRIX	221	SILVER ROSE	271	戸川　純	321	平松愛理	371	UNICORN
122	THE WILLARD	172	グルーヴァーズ	222	ZOO	272	TRACY	322	Billy&The Sluts	372	UNI-SEX
123	THE WELLS	173	THE GREAT RICHIES	223	SKA₣UNK	273	Dreams Come True	323	THE PILLOWS	373	妖花
124	X	174	GRAND SLAM	224	すかんち	274	DOG FIGHT	324	WHITE COME COME	374	吉田栄作
125	ARB	175	ケラ	225	杉山清貴	275	永井真理子	325	フィッシュマンズ	375	米川英之
126	江口洋介	176	幻覚アレルギー	226	THE STAR CLUB	276	中島みゆき	326	FAIRCHILD	376	THE RYDERS
127	EPO	177	KENZI	227	スチャダラパー	277	中西圭三	327	FENCE OF DEFENSE	377	LOUDNESS
128	えび	178	小泉今日子	228	STALIN	278	Nav Katze	328	福山雅治	378	RABBIT
129	M-AGE	179	木暮武彦	229	鈴木雅之	279	長渕 剛	329	THE BOOM	379	LAUGHIN' NOSE
130	エレファント・カシマシ	180	子供ばんど	230	THE STREET SLIDERS	280	中村あゆみ	330	THE PRIVATES	380	ランキンタクシー
131	L.L. BROTHERS	181	GO-BANG'S	231	THE STREET BEATS	281	NEWEST MODEL	331	HOT LEGS	381	MORE DEEP
132	AURA	182	近藤房之助	232	Strawbelly fields	282	ニューロティカ	332	THE BLANKEY JET CITY	382	Little Creatures
133	横道坊主	183	COBRA	233	THE STRUMMERS	283	人間椅子	333	Flipper's guitar	383	LOVE MISSILE
134	大江千里	184	米米CLUB	234	SPARKS GO GO	284	NOKKO	334	THE BLUE HEARTS	384	米倉利紀
135	大沢誉志幸	185	THE COLLECTORS	235	SUPER BAD	285	NORMA JEAN	335	PRINCESS PRINCESS	385	LINDBERG
136	岡村孝子	186	GONTITI	236	関口誠人	286	野村義男	336	HEAVEN	386	Luis〜Mary
137	岡村靖幸	187	COMPLEX	237	聖飢魔II	287	BY-SEXUAL	337	BABY'S BREATH	387	LUNA SEA
138	奥野敦士	188	PSY・S	238	SEX	288	HOUND DOG	338	THE BELL'S	388	LUCY'S DRIVE
139	尾崎 豊	189	SIGHTS OF LOVE POTION	239	Sepia'n Roses	289	BAKU	339	MASARINA	389	麗蘭
140	小田和正	190	坂本龍一	240	Z.O.A.	290	BAKUFU-SLUMP	340	BO Ø WY	390	ネロリーズ
141	織田哲郎	191	SAKANA	241	SOFT BALLET	291	BUCK-TICK	341	BO GUMBOS	391	LADIES R♂♀M
142	織田裕二	192	佐久間 学	242	大事MANブラザーズバンド	292	PERSONZ	342	THE POGO	392	Resistance
143	オルケスタ・デ・ラ・ルス	193	SUBSONIC FACTOR	243	DIAMOND YUKAI	293	とんねるず	343	布袋寅泰	393	RED WARRIORS
144	THE ORIGINAL LOVE	194	サザンオールスターズ	244	Die in Cries	294	BAD MESSIAH	344	牧瀬里穂	394	Replica
145	KAI FIVE	195	佐野元春	245	高木完	295	バビロン大王	345	Mi-ke	395	山本英美
146	カステラ	196	沢田研二	246	高野寛	296	BARBEE BOYS	346	本田恭章	396	YMO
147	GARGOYLE	197	さねよしいさ子	247	高橋幸宏	297	バブルガム・ブラザーズ	347	槇原敬之	397	LONG VACATION
148	KATZE	198	しいもんきい	248	竹内まりや	298	浜田省吾	348	The 真心ブラザーズ	398	渡辺満里奈
149	KATSUMI	199	SION	249	谷村有美	299	浜田麻里	349	町田町蔵	399	WILD FLAG
150	GAO	200	Zi:KILL	250	たま	300	BA-RA-VA-LA	350	松岡英明	400	渡辺美里

●伝言の中に住所、氏名、電話番号などを残し、それが悪用されても、当方は一切の責任を負いかねます。

●ここにアーティスト名が記載されていない場合、また「○○○のアーティストBOXを作って!」という要望などは⓪⑨⑨のオムニバスBOXに伝言を残してね!

電話のかけすぎには、くれぐれも注意しましょう。

プッシュ、ダイヤル回線のどちらでもOK!

この番組は8.5秒10円の情報料＋通話料がかかります 地域によっては遠距離通話料が加算されますので必ずNTTの料金ガイダンスで確認して下さい。

E-NET パーティーライン

0990・308・262

0990・308・272

（発信地／東京都杉並区）

情報料 3分60円

このパーティーラインは音楽ファンのみんなが楽しくおしゃべりできるシステムです。伝言板に待ち合わせ時間を入れて、パーティーラインで、TALKしちゃうってのもいいよね。

（24時間OPEN。プッシュ、ダイヤル回線のどちらでもOK）

PERA… PERA…

KERA… KERA…

E-NET

東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂521

● ● ●

TEL 03-5458-9441

LUiS-MARY

NEW SINGLE 10.21 ON SALE

DRIVE ME MAD

SCD：CRDR-21　税込￥800（税抜￥777）● C/W・OPEN YOUR HEART

NON CATEGORIZE＝無防備な抵抗

絶賛発売中!!

1st Album
「DAMAGE」
CRCR-6021/税込定価￥2500

2nd Album
「砂漠の雨」
CRCR-6034/税込定価￥3000

Ariso

NIPPON CROWN Co.,Ltd.

CROWN MUSIC PUBLISHER, INC.

Gimmick

10.1 On Sale!

Mに捧げる10 1/2

秋の夜長にROCKの宝石箱を…

Velvet Endoroit
Rosen Kreuz
L'Arc en ciel
Excentrique Noiz
Papaya Paranoia
有機生命体≠SP&K
Video Rodeo
Tyrannosaurus
Genet
Antifeminism

「GIMMICK」発売記念GIG! 10/10(土) クラブチッタ川崎 問い合わせ先 たむともスコープ 045(251)6648
日本コロムビア /トライアード /COCA-10184 ¥2,800(税抜¥2,718)/問い合せ先 Tel.03-3584-8806

SHOXX 後援 鹿鳴館スペシャル・ギグ

何が起きるかわからない!!

新進気鋭4グループが勢揃い!! 93年に向かって、早くも胸が高鳴る…何故だ?!

'92.10.11(日)

ROCK-MAY-KAN

目黒鹿鳴館

BURN!NG!

THREE EYES JACK

黒夢

L'Arc-en-Ciel

料金▶前売=3000 (当日券なし) 開演▶17:00

チケットの予約方法▶9月27日(日)15:00 より電話予約受付開始!

☎03-3494-1801

(目黒鹿鳴館/SHOXXスペシャル・ギグ係)

《ゲスト》くせ者D.P.S(どこかで見たような…)

Zi:Kill

RUSH ON

俺の心を叩くのはやめてくれ。

Live at NHK Hall, 92.7.30

REPORT : TATSUMI USHIKU
PHOTOGRAPHY : NORIO KAJIKI

知らず知らずのうちに崩壊していたトラスト。踠(もが)いても踠(もが)いても絡みついて離れない亡者の群れ。そんな醜悪な時間の中に身を委ねるしか術のなかったZi:Kill。差し出される救いの手にも、素直には頷けなかった。自分たちの意志とは全く関係のないところで、値踏みをされ、影口をたたかれる日々。〝オレたちは商品じゃねえ。人間なんだ！〟そう叫びたくても叫べない…いや叫んでも、無駄な時期でもあったのだ。

TETSUが去り、EBIが加入しても、そのくだらない状況はあまり変わらなかった。先の見えないまま、スタジオに篭る日々が続き、たまに来る雑誌のインタビューも自信をもって発言することができない。なぜ、ただ唄を歌って、ギターを弾いて、ベースを鳴らし、ドラムを叩くことができないんだろう。そんな素朴な疑問さえ生まれていた。〝NHKホール〟…それは、その素朴な疑問に対する、彼らの解答である。

●

PM5・50 TUSKの楽屋に入る。メイクも終えて、『マジカル・ミステリー・ツアー』を聴きながら、じっと鏡を見つめている。

TUSK：先日までリハーサルやってたんだけど、ここにお客さんが入るって想像が全然つかなくってさ、まだ何か実感ないんだけど昨日とか一昨日ぐらいからここ一週間…こう…夢がさ、すごく懐しいものばかり見るんだよね。いろんな夢を…見るんだよね。懐しい人が出てきたり…。何か…涙が出てきそうでさ、今日は、バンドの仲間もすごくいっぱい来てくれたし。…あといっぱい電話もらったり、花もらったり、お祝いの言葉もらったり、そういう何か…みんなのエネルギーを集結してさ、で、こうお客さんのエネルギーをいっぱいもらって…ステージの上でね。で、いい唄歌いたいなっていう。ホント…ここまで来たからね。

――よく頑張ったもんね。

T：頑張ったね（微笑）。まだ、ホント実感ないんだけどね。

（と、そのとき激しくドアを叩く音が!?）

TETSU：駐車場大丈夫だったよ。おかげ様で。

――TETSUちゃんからもZi:Killに何かコメントを！

TE：一応、でっかい花を贈ろうと思ったんだけど、まあ、それじゃ芸がないな…ってことでやめた。そうね、かなり期待して来たと。ちょっと心配もあるが、だが、まあ、彼らならやってくれるだろうと。…そんなとこかな。

――10月に出る新譜は聴いた？

TE：2〜3日前に届いて。…いい感じだったね。何せ歌が口(くち)偏に貝の唄だった…という。

――TUSKがTETSUちゃんのSPYに勇気づけられたといってたけど…

TE：今日はちょっとお返しに…ほら、SPY終わって結構たるんじゃってるところがあるから、まあ…その辺、オレに気合いを入れてほしいなと…そう思っておりますね（笑）。

PM6・00 椅子に足を投げだし、心待ちくつろいでる様子のSEIICHI

――調子よく出来そう？

SEIICHI：えーと、緊張しています。そんだけ（笑）。うん、頑張るからね。観てよ。うまくいきそうな気はしてるから。

PM6・05 元ローディーのツネが陣中見舞いに来て、冗談をいいあってるKEN。衣装の腕にある〝M2〟に話題が集中してる。

――なんか、いい感じだね。

KEN：もう、嬉しくてしょうがないね。あれだよ…プレッシャー以上にスタッフがさ、すげえ気ィ使ってくれててさ、すげえいいのよ。何も心配しなくて、ライヴのことだけ考えればいいんだから。緊張しそうだね…でも。何たって一年振りだからさ。多分…でも、TUSKが「行くぞ！」といったら、そんなもんどっかに行っちゃうだろうけどさ。リハやってて、やっぱオレはここにいなくちゃいけないんだな…みたいな。ここ以外は…何かレコーディングは別としてさ、家で横になってモノを考えるオレよりも、ここにいるオレの方がオレなんだな…みたいな。それをスゲエ感じたよ。…すげえいいよ。まあ、18歳から始めて、今日…22歳最後のステージなんだけど、4年間の中で、一番めに想い出に残るライヴになるんじゃないかな。感動…すると思う。まあ演奏とかね…甘いところはいろいろあるけど、そこら辺はさ、違うものでカバーしてやるよ。

――いろいろあったけど…

K：頑張ったよ。オレたちはもちろん頑張ったけれども、コンサートのライヴ・スタッフも頑張ってくれてさ。どうにかNHKホールでいい感じで出来るようにね。唯一、何が心配かっていうと、…ステージ中に鼻水が垂(た)れねえか（笑）ぐらいなもんでさ。プレッシャーとか、あがるとか、そういうものは仕方ないもんだからね。とにかく…嬉しいんだからさ。そういう感情ってあってあたりまえじゃん。

――みんなウキウキしてるように見えるよ。

K：すげえいいよ。ただ、楽屋でウチの親族は暴れだしてほしくないな（笑）。何でも4年か5年振りに、ウチ全員が揃うんだよ。久し振りに会える。いま、兄貴以外は全員来てんだけどさ（笑）。いい感じだよ、スゲエ。終わってからも、タミーちゃん来てくれるでしょ。…そのとき、〝やっぱりやってて良かったよ〟といえるライヴをしたいね。別にいままで休んでたことなんか抜かして、一本のライヴとしてさ。〝いや〜良かったよ〟といいたいね。胸を張ってさ。

PM6・15 衣装を着換えながら、やたら落ち着かない様子のEBI。

EBI：緊張してます。

――またまた（笑）。ワクワクしてんじゃない。

E：してないさあ（笑）。メチャクチャ緊張してます。で、今日はデビュー・ライヴってことなんで、…〝見とけ！〟って感じよ。意気込みとして…よろしゅー頼む！　そんなとこ。

PM6・20 TUSKの楽屋に滝川一郎が訪ねてくる。

――一郎くんからも何か一言コメントを。

TUSK：一郎さんには、やっぱ一番辛かった時期に…ドライブに…新宿東口方面流した

りとか…二人で、すごく素敵な夢を見させていただいて、いろいろ楽しかったです。どうもありがとうございました。…SPYのときは（笑）……

一郎：ちょっと待って、待った。オレが贈るんでしょ、言葉を。…〝今日も一叫び願いてえ〟って感じですね。ホント観させていただきますよ、じっくり。●

たとえお前が嫌な奴だって

あの時のことを責めたりはしない
群がる奴の目をかいくぐり
　ヘラヘラ笑う姿が浮かぶけど
心を刺してくトゲの一つ一つが
　消えてしまえばきっと…
たとえお前が嫌な奴だって
　俺はお前を忘れるさ
あやふやな事ばかりを言って
　何を聞いても知らん顔してるけど

お前の心に棲む悪魔が
　ヘラヘラ笑う姿が浮かぶけど
心を刺してくトゲの一つ一つが
　消えてしまえばきっと…
　　Mr. Market
俺の心を　叩くのはやめてくれ
　　Mr. Market
俺の身体を　粉々にしてくれ
『Mr. Market』BY：TUSK

7月30日、Zi：Kill は蘇がえった。こんなたった5ページの中では埋めつくせない素敵な空間とともに…。だから敢えて今回は、〝TUSK が MC でこういった〟とか〝KEN と SEIICHI はこう動いて〟とか〝EBI のドラムは…〟なんて陳腐なことは書かないし、書く気もない。そういうことを知りたいなら、他の雑誌を読んでくれ。Zi：Kill を知ってるヤツならわかるだろう。そんな文章の中に踊る彼らではないことを！

（〝疲れたぁー〟といって楽屋に戻ってくるTUSK）

──気楽にやるっていってたのに（笑）

TUSK：勝ったぁ…（笑）。勝ったよ！　みんなに感謝したいね（といってKENと熱く握手を交す）。ホントに…何か…やってきて良かったって思うな。

──やっぱ…みんな待ってたよね。

T：すげえ、今日はさ、みんなからいいプレゼントたくさんもらったから…これから…ゆっくり返していかなくてはいけないね。…今日はホントに、みんな…どうもありがとう。

──さてとKENは…

KEN：やっべーよ。ライヴで泣くなんて…泣くなんて…イヤと思ってるからさ。でも一回めの『華麗』はヤバかったよ。何かオレのところばっかライトが当たってたみたいなのよ。何かSEI−CHIちゃんのところも当たってたらしいけど。TUSKのとこにも、モロ当たってたらしいんだよ。結構みんなのとこライト当たってたらしいんだけど。ちとそのライトで、みんな言葉が詰まっちったみたいだけどさ。…まあ、演奏も一年振りにしては良くできた方だし。やっぱ…オレの、オレたちのいる場所はあそこだよね。

──TUSKが『For my Life』歌ってたとき、〝ここはパラダイス〟っていってたじゃん。やっぱね…

K：うん。パラダイスだよ。…すごい辛い場所でもあるんだけどね。…最高だね。生きてる感じがしたよ。ようやく、ようやく…生きてるって感じがね。ホント、別に〝お客さんありがとう〟という人間じゃないけれどさ。…オレってもともと。やっぱこいつらは〝ありがとう〟っていうか、〝お前らいいヤツだな〟ってさ、〝オレたちのことわかってくれて…いいヤツだよ〟って。…良かったね。何か…SEIちゃんが向こうにいて、TUSKが歌って、EBIちゃんははじめてだけどさ…何かしばらく見てなかった絵が…絵があるんだよ。何か…すごく…良かったね。〝これがオレたちなんだよ〟って。

──スタジオで練習してて横にいるのとは全然違うからね。

K：違うよねえ。オレのギターが鳴って、TUSKの声が響きわたって、SEIちゃんのベースがガツンときて、新しいEBIちゃんのドラムがドーンときてさ。…オレたちの憧れるROCKバンドにまたひとつ近づこうとしてるよね。…いろんな苦難はあったけど。…最高。すげえ最高だったよ。

（楽屋でジッとモニターを見ているSEI−CHI。衣装も脱がずに見入っている）

──これで、また突っ走れるね。

SEI−CHI：うん。でも、ファンのコたちさっきので充分かな。

──何が？

S：アンコール。さっきの『華麗』で充分かな。

──期待はしてるよね。特別の日だもん。

S：まだ帰らないからさ…（とモニターを見つつ）。不満を募らせると可哀想じゃん。…内容的には充分？

──一曲めの『華麗』には、とまどいが見えたけどね。チョイ、チョイ。

S：あったね。確かに。隠さずにいっちゃうけど。

──でも涙が出ちゃったよ。何か、ホント涙が出てきた。

S：『華麗』で、何せ一曲めで涙が出そうになったからね。あと…『HERO』の前ね。何ていうの、普段だったら、こうミスとかさ。自分でベースが〝ああ、あそこトチっちゃったな〟って気になるんだけど、今日とか、わかんないんだよね。どこでミスったか。何かもう…あそこにいるだけで…何か充分ていうか…そんな感じで。

──昨年のNHKホールより、何か…すごくROCKだったよ。

S：嬉しいよ。まあ、オレらのそういう気持ち…客に伝わっていればいいんだけどね。…いつものライヴとは違う一日…みたいに。また、いつもと同じライヴは次のチッタなり、何なりで…気分一新で始められるけど、今日はホント何か…何か…違う力で離されてた恋人がさ、客だった…みたいなさ。だからさ、会ってさ、何するじゃないよね。〝それでいい〟って。ちゃんと3階の方まで見れたし。ライヴで会えるからこそ、知らない土地にツアーに行っても頑張れるしね。今日やって…次のツアー頑張ろう？…って心に決めたしね。…いつも頑張ってないワケじゃないんだけどさ、また新たに思い直して…こいつらがいなくちゃ話になんないしね（と、モニターの客を指す）。自分たちだけでやってたらさ、…やってられないっていうか、持続しなかったと思うのね。オレたちが姿消してた間、待っててくれてたヤツらがいたから、今日、このステージに立つことができたんだから。それは…絶対…何があっても…忘れちゃダメだよね。

──次はもっと、イケイケのSEI−CHIが見たいよね。何か今日ってさ、喜びでもうそれが、体から発散してたけど、お約束通り暴れてはくれなかったもん（笑）。

S：言い訳じゃないんだけどさ（笑）。もう嬉しくて、嬉しくて、動きがとれなかったんだよ（笑）。もう、今日は特別な日だもんね。EBIちゃんなんか、オレたちよりプレッシャーがあったはずなのに、頑張ってくれたし。…まあ、次は熱くカマしてあげられると思うよ。絶対。

（楽屋に友人を呼び談笑してるEBI）

──どうだった。

EBI：やあ、終えて…良かったでしょ。やる前とはうって変わって、終わった後に、笑顔の出てくるライヴになれたんじゃないか…と。まあ、一番最初の『華麗』は最後のアンコールで取り返したしね。まあ、あれはあれで、すごく意味のある『華麗』だと思ったから。あれは、あれでいいんだ。たぶん今日、バンドでみたら、すごくいいポイントになったんじゃないかと…そんな感じです。とりあえず今日は、最後じゃなくて、始まりだから、みんなもそう思ってくれたらいいんじゃないかな。まだまだ、これからだと。

1992年、7月30日、NHKホール。
Zi：Killの復活の鐘が鳴り響いた。

君が今泣いている
涙がほらこぼれてる

君が今微笑んでる
全てを僕に残して
幸せがこぼれてくなら
すくいあげて
君の頬を撫でるように

しみこませ
君が今泣いている
あなたに今くちづけを
君がほら微笑んでる
全ては二人の為に
『Miss You』 BY：TUSK

〈ライヴ・スケジュール〉9月20日・21日＝川崎クラブタッチ、24日＝名古屋クラブダイヤモンドホール、29・30日＝大阪ウォホル
●問合せ先＝ZOOM（☎03・5411・8055）

こみあげるこの想い　誰かにとどけたくて…
93年2月下旬発売予定!!

TUSK

初のヴィジュアル&ハードショック
ソロ写真集

詳しくは、次号のSHOXX Vol.13(11月21日発売)を見よ。
発行：音楽専科社

《バックナンバー》■VOL.4➡ライブフォト&レポート■VOL.6➡TUSKパーソナル・インタビュー■VOL.8➡新生ZI：KILLの正体(カラー15ページ特集)■SHOXXスペシャルVOL.2ZI：KILL■VOL.10➡全メンバー個別インタビュー■VOL.11➡TUSKソロ・インタビュー／SEIICHI with J(Luna Sea)

Zi:Kill

キングレコード新レーベルよりリリース。

NEW SINGLE **SLOW DOWN** 10・21 RELEASE
C/W **IN THE HOLE** ●KIDS-114・税込¥900

NEW ALBUM **IN THE HOLE** 10・28 RELEASE
●KICS-244・税込¥3,000

●CLUB CIRCUIT 1992
9・24(木):名古屋・CLUBダイヤモンドホール ㊐ジェイルハウス(052)936-6041
9・29(火)・**30**(水):大阪・W[illegible]OL SOLD OUT ㊐キョードー大阪(06)345-2500

●OFFICIAL FAN CLUB "ZI:KILL STARDUST"
入会希望者は住所・氏名・電話番号を明記の上、62円切手を同封して下記の住所までお送り下さい。
〒150 東京都渋谷区恵比寿西2-2-6 EBIS-FIVE BLDG.407 "ZI:KILL STARDUST" (03)3780-7079

INFORMATION:KING RECORDS KMW事業部(03)3945-2112

KMW

1日1日を一生懸命、大切に消化したいですね。

Personal Long Interview

真矢

LUNA SEA

真矢 Personal Long Interview

ドラムのことになると、より生き生きと話す真矢。ドラムは彼にとって、かけがえのないパートナーだ、と言う。そのドラムに対する気持ちが、このところ少し変化してきたらしい。数々のステージとファン、ビデオのリリースやラジオ番組のスタートも作用しているようだが、根本はやはり"LUNA SEA"の存在。彼らがバンドとしてのパワーを急速に拡大していることは、真矢の言葉からも確かに感じ取ってもらえると思う。

——まず初めに、日比谷野外音楽堂でのライヴ（7月26日）の感想から聞こうかな？

真矢　初めのことは全然覚えてなくて、ホント意識なかった。あれだけ広いところでやったの初めてだし、そのうえ日中だったから、お客さんの顔が全部見えて……。圧倒されて緊張しちゃったんだよね。「Dejavu」で特効が出る予定だったんだけど、トラブルがあって出なかったの。それも覚えてなかった。だんだん意識が戻ってきて、"これは自分に負けちゃいけない"って思いで持ち返したけど、とにかく緊張した覚えがある。

——そういう時って、頭の中は真っ白？

真矢　ホント、真っ白だったんだよ。いつもは2曲目まで終わると汗ビッショリで、水をガバッと飲むんだけど、水も飲めないくらい。

——リハーサルでは、どうだった？

真矢　野音のまわりのビルに音が響くでしょ。自分が叩いた音が何秒後かにはね返ってきて、その反響音がすごく気持ちよかったね。

——本番で意識が戻ったのは何曲目くらい？

真矢　5〜6曲目かな。SUGIZOのギター・ソロの時には戻ってたからね。

——感覚が戻ってからのテンションは？

真矢　上がりっぱなしですよ。ひたすら上昇で"オリャオリャッ！"って感じ（笑）。前日も"明日は野音だ！"って気負い過ぎちゃったのかな。それに負けちゃったんだよね、最初の方は。こんなこと、悔しいから言いたくないんだけど、でも正直な気持ちだからね。それ以降は、テンションが上がりっぱなし。

——野音のスペースを堪能できた？

真矢　堪能できたのは、アンコールの時だけ。それもドラムにつく前の……ほら、みんなでワイワイやってるじゃん。あの時だけだね、"あ、野音なんだ"みたいなのは。演奏が始まっちゃったら、そういう意識はない。

——演奏中は、やっぱりドラムを叩くことに集中してるの？

真矢　叩くことと、自分を出しきることに集中してるね。

——野音においては出しきれた？

真矢　どうだろう。あれから時間がたってるから、反省点とかいろいろ出てきて……自分の中でも成長してるというか、欲が出てくるからね。今やれば、もっといいステージができるかもしれないけど、あの時は全部出しきった記憶がありますね。記憶があるだけ（笑）。

Personal Long Interview
真矢
LUNA SEA

——なるほどね。ライヴを見てていつも思うんだけど、真矢さんてドラム・ソロの合間にすごくいい笑顔を客席に向けるよね？

真矢　そう？　自分じゃ分かんないよ（笑）

——（笑）こっちまで幸せになるような、いい顔してる。可愛いくらいに純粋な……。

真矢　可愛いんですよ、俺（笑）。

——（笑）ああいう時って、どんな気分なの？

真矢　すごい満足感だよ、やっぱり。

——客席から"真矢！"って歓声が飛んでね。

真矢　何で"真矢"なんだろうね？

——……どうして？

真矢　普通、ドラム・ソロっていうと"ウォ〜！"っていう雰囲気があるじゃない？　だけどうちの場合は、昔から必ず"真矢"なんだよね。体感があって自分としては大好きなんだけど、"どうしてかな？"っていう疑問は、いつもつきまとってる。最初に誰が言い出したのか、知りたいよね（笑）。

——（笑）あの激しいドラム・ソロの後にも休憩はないよね？　すぐに次のナンバーで……。

真矢　そうですよ〜。

——大丈夫なの？

真矢　ダメだよ〜（笑）。体が休めるのはRYUICHIのMCの時と、ドラム・ソロのSEのイントロだけだからね。そこでも体は休んでるけど、テンションっていうのは絶対に落とさないからさ。

——楽屋に戻るとバタン・キュー？

真矢　そういう状態。とにかく汗がすごく出て、それが体に付いちゃって皮膚呼吸ができないんですよ。皮膚呼吸をしてるって意識は、普段もないんだけど（笑）。でも、ベタ〜ッとすると体が苦しいじゃない？　だから、アンコール前は汗を引かせるのに努力してますね。ステージが全部終わると体はだるいし、頭は何も考えられないし……。

——パワー・ステーション（8月2日）は？

真矢　パワ・ステは……狭かったね。

——うん。そんな感じだったね。

真矢　去年の4月にもパワ・ステでやったでしょ？　あの時はステージも客席もデッカく感じたのね。2階なんてすごく遠く感じて、緊張したし。でも、今回やってみてすごく狭く感じたし、リラックスしてアット・ホームな感じでできたし、成長してるのかなぁ、と思ったよ。

——イベントの感触は？

真矢　暑かった、暑かった（笑）。新潟のPOP ROCKETS（7月29日）の時なん

ライウスケジュール〉9月27日＝盛岡AUNホール、28日＝青森クォーター、29日＝仙台市青少年文化センター、10月1日＝渋谷公会堂、3日＝新潟フェイス、6日＝水戸市市民会館、8、9日＝札幌PENNY LANE24、12日＝愛知県勤労会館、14日＝福岡ももちパレス、15日＝熊本フィーリングホール、16日＝広島市南区民文化センター、18、19日＝大阪国際交流センター、24日＝日比谷野外大音楽堂●問いあわせ☎03-5411-1595（SLAVE）

真矢 Personal Long Interview

最近、泣く機会が多くて、何かっていうと泣いてるんだけど(苦笑)。

て、前のHにDIE IN CRIESのKYOさんやBY-SEXUALのRYOくんたちと飲んじゃって、徹夜したわけだ(笑)。それであの猛暑でしょう? ほとんど意識なくなるわ、リハでは吐きそうになるわ……(笑)。

——(笑)何アーティストくらい出たの?

真矢　7くらいかな。いろいろと勉強したいから、他のバンドを見るのも大好きなんだけど、今回は段取りの都合上、何も見れなかったんだよね。リハでも本番でも。それが悔しかった。俺は基本的に、音楽やってる人はみんな同等に考えてるんだ。プロもアマも関係なく。だから、好きなドラマーっていうのはドラムやってる人全員だし、好きなバンドマンもバンドやってる人全員だし、人間的に嫌いなヤツも、そりゃいっぱいいるよ(笑)。でも、基本的にはみんな好きだから、いろいろ見たいんだけど……。そういう欲求が満たせなくて、最近ちょっと不満なんだ。自分たちのステージには、いつも満足してるけどね。

——SUGIZOさんが去年のエクスタシー・サミットについて話してた"伝えきれない"っていうような感覚は、もうないでしょう?

真矢　そんなことないよ。時間の経過に伴って、欲求もどんどん上に行くから、いつまでたっても満足しきることはないよ。

——それじゃ日常生活で興味のあることは?

真矢　テレビくらいかな。普段は音楽も聴かないし。

——昔から好きだった音楽も?

真矢　うん。チョロッと聴くことはあっても、聴き込むことはないな。メジャーになってから、余計に音楽を聴かなくなったね。

——それは、時間がないから? それとも、あえて避けてる部分があるのかな?

真矢　それは難しいな。たぶん両方だと思うけど……難しいですね。

——音楽関係以外の友だちと接する機会は?

真矢　この前、同窓会があってさぁ。行って来たんだよ～

——じゃ、SUGIZOさんも一緒に?

真矢　そうそう。すっごい面白かったよ～。15人ぐらい集まって、その中の5人で旅館に泊まったんですよ。そこで繰り広げられたバトルが面白かったですね～

——その人たちも、二人がLUNA SEAとして活動してるのを知ってるんでしょう?

真矢　たぶんね。

——そこで、妙な距離感はなかった?

真矢　ぜんぜんない。会ったのは4年ぶりくらいなんだけど、会話や行動に4年のブランクっていうのは全くなくて、"やっぱり友だちっていいな～"と思ったよ。たまには帰らなきゃダメだね。

——気分転換にもなるでしょう?

真矢　なるなる。疲れたけど(笑)。みんなで酒飲んで、一緒に温泉に入ったりしたからね。

——場所は?

真矢　某箱根(笑)ってとこなんですけど

——お湯は、どうだった?

真矢　あんばい良かったよ～。イオウのお湯で、体じゅうイオウ臭くなっちゃったけど、髪の色は、酸化してオレンジになっちゃうし(笑)。でも、ああいう場へは行くべきですね。環境が変わるし、息抜きになるし。

——映画や芝居には、興味ないの?

真矢　映画には興味ある。映画って、すべてが含まれてるというか、台本も演技も映像も音楽も究極じゃなきゃいけないでしょう? あえて人工的に作るものなのに、それを出せるっていうのはすごいと思う。今は宮崎駿に凝ってて「紅の豚」が見たいんだけどね。宮崎駿って、すごいよ。アニメであれだけ泣ける映画はないと思うね。この前(亀山)哲哉さんのところでエクステンションをしながら、久々に「風の谷のナウシカ」を見たんだけど、他の作業をしながらでも映画に入り込めちゃうからね。実写じゃないのに人間より人間らしいし、動物はより動物っぽいもんね

——アニメって、妙にリアルだよね。

真矢　そう。「風の谷の～」には"オーム"とか出てきて、見たこともない世界なのに、実在しそうな錯覚に陥っちゃうんだよね。

——他に印象に残ってる映画は?

真矢　泣けるやつが好きだから「ゴースト」とかも好きだね。自分にない経験をさせてくれるじゃない? そういうのが好きなんだ。

——泣くと、自分の中の"よどみ"が洗い流されるような、スッキリした気分になる?

真矢　うん。泣いた後は、すごくスッキリするね。最近、泣く機会が多くて、何かっていうと泣いてるんだけど(苦笑)。普段から感情が昂ぶってて、お酒を飲むと出ちゃうんだよね。なりふりかまわず、泣いたり怒ったり笑ったりする人だからさ。恥ずかしいとは思うんだけどね。

——他にも気分転換の方法はある?

真矢　自然を見に行くこと。最近、北海道でラジオやってるじゃない? RYUICHIがパーソナリティーで、俺たちが週替わりのゲストで出てて。それでこの間も北海道へ行って、すごくキレイな海を見て来たんですよ。ものすごく感動した。その感動っていうのを今はドラムに全部収めたいと思ってるのね。自分が世の中で勉強したことや感じたことをすべてドラムに収めて、ドラムを通して人に伝えたい。ドラムを始めた当初はすべてに反抗していて、今の世の中から逃れたいためにドラムを叩いてて……すべてを省きたくてドラムを始めたのに、今はドラムですべてを吸収したい。ドラムという楽器を通して、テクニックではなく"山田真矢"という人間を伝えたいわけ。それが最近、自分の中で変わってきたことですかね。

——ドラムへの愛着も強くなったでしょう?

真矢　そうですね。基本的に、ドラムを物としては考えてないから。木からできているから、少なくとも呼吸はしてるよね。

《バックナンバー》■VOL.6➡全メンバー・インタビュー■VOL.9➡RYUICHI/INORAN単独インタビュー■VOL.10➡表紙34ページ巻頭カラー大特集"時代が生んだ幻の華"■VOL.11➡J & SEIICHI(Zi:Kill)対談、SUGIZOパーソナルインタビュー

真矢 Personal Long Interview

—すると、どんな存在なんだろう？

真矢　パートナー。奥さんですよね、俺の。声帯だとか脳だとか、自分の体の一部だと考えた時期もあったけど、やっぱり他人。だから、余計にいたわってやんなきゃいけないし。だけど、自分に一番近い人だな。

—そういえば、昔は哲学的な考え方をする人だったとか？

真矢　そうだったんですよ（笑）。だから、相談ごとを持ちかけられることが多かったし。

—1件1件、真剣に答えてたの？

真矢　やっぱり相談されれば何とかしてあげたいしさ、人のことだから余計真剣に考えるよね。いろんなことで、人よりちょっと経験が多かったんですよ。だから、"俺は、こうしたよ"って言えただけで……ほら、生意気な時期ってあるじゃない？　高校生くらいの、ちょうど大人ぶりたい年頃で、すべてを悟ったかのように話してましたからね（笑）。そういう部分も、一からやり直そうと思ったのは、このバンドを始めてからですね。今まで俺にどれだけの経験があろうが関係ない、って。

—具体的なキッカケは何だったのかな？

真矢　何だろうね？　この5人が集まって、ピタッときたからかな。それまでは"俺がいるんだ"っていう自意識が強かったけど、他の4人の存在を感じられるようになって、より人のことを考えられるようになったし。

—それまでは、自分中心にまわりの関係を感じてたんだ？

真矢　そう。だから、リーダー・シップをとることも結構多かったね。だけど、哲学的なことを言っても、自分にとっては所詮くだらないことで、それより体で示そうと思ったからね。何事も口で言うのは簡単だから。

—そして、自分を"みんなの中の一人"として感じるようになったんだね？

真矢　そう。だからといって、妥協はしないよ。それはイヤだから。代わりに闘うの。自分の意見と違うことを言われたら、闘って両方の接点を見つける。昔は"しょうがねぇか"と思って合わせていたけど。だから、スムーズに事が運ぶまでは、その頃より時間がかかるよね。だけど、その方が気持ちいいし。逆に、他人の意見がすごく良かったら"おう"って認めるしね。

—ある意味、昔より真剣になっているってことじゃない？

真矢　そうだね。ものごとに対して真剣になってるね。それに、バンドをやってすごく素直になれたよ。もしも、ずっと一人でドラムを研究してたら、ドラムを物としてしか扱わない人間になっていたと思うし、テクニックばかりを磨いていたと思う。それはそれで、楽曲的には素晴らしいものになるのかもしれないけど、それだけじゃ気持ち悪いからね。LUNA SEAという素晴らしいバンドがあって……って自分で言うのもオカシイけど。そして、いろんなところにメンバー（ファン）がいっぱいいて、触れ合って初めて柔軟な方向に考えられたしさ。それって、いろんな方向に結びつくでしょ？

—コウモリが、超音波を発して自分の居場所を確かめるのに似てるのかな？　まわりからはね返ってくるもので、自分を見つめ直すっていうか……。

真矢　そうそう。超音波は出さないけど（笑）、気合いを入れて、一生懸命にやってるでしょ。それによってはね返ってくるものに対して、また自分を見つめ直せるんですよ。

—今後もよりピュアになっていけそう？

真矢　うん、いけそう。ピュアになりたいですよね。でなきゃ、生きてて面白くないもん。

—ビデオの「IMAGE or REAL」が、チャート初登場1位を獲得した気分は？

真矢　それは結果じゃん。1位になろうと思って作ったわけじゃないからさ。もちろん嬉しいけど……俺、大人だからさ（笑）。

—（笑）照れがある？

真矢　っていうか……"みんな、ありがとう"って感じ。例えばラジオに送られて来る手紙に対しても"ありがとう"って気持ちがすごく強いよね。どっちがメンバーだか分からなくなるくらい"みんなに支えられてるんだな"と思う。でも"ありがとう"だけじゃ悔しいから（笑）、もっと上に行って"みんなを支えてやるぜ！"って思ってるけど。

—東京では聴けないんだよね。

真矢　そうだね。

—どんなコーナーがあるの？

真矢　"恋愛相談室"（笑）とか"ミステリー・ゾーン"とか。電話で質問を受けるコーナーもあって、直接声を聞いたりすると、"何でオマエら、俺たちにそこまでしてくれるの？"って気持ちになるよ。

—それは、LUNA SEAを通していろんなものを受け取ってるからだよ。感動とか、生きがいみたいなものとか。

真矢　逆に俺たちは、そういう反応を見るのが"生きがい"っていうか"喜び"になってるよ。だから俺はファンの子が大好きで、そういう子を俺たちは"メンバー"って呼んでるんだけどさ。おっかけの子とか度を過ぎる場合もあるけど、俺は許せちゃう気分なんだよね。手紙やプレゼントをくれる、くれないの問題じゃなくて、こんな俺たちに一緒になって付き合ってくれるって、いいよね。"この職業を選んで良かったな"って、ホントに最近思ったんですよ。

—そういう気持ちでいるかぎり、とりまく人々は増えていくだろうね。

真矢　もっともっと増やしたいよね。"みんなで俺たちを喜ばせてくれ！"って感じ（笑）。

—そして、9月の終わりからは、いよいよ新しいツアーが始まるよね？

真矢　そうですね〜。

—構想は、かなり煮詰まってるの？

真矢　ぜんぜん（笑）。これからだね。ただ、今回初めての場所が多いから、みんなの驚く顔が見たいというかね。

—会場も大きくなってるでしょ？

真矢　なってるね。

—今度のツアーにおける、自分への課題や目標はある？

真矢　ちゃんと演奏しようと思ってる（笑）。同じテンションでね。今までは、テンションが上がるほど記憶がなくなって、演奏がどうでもよくなってる部分が気持ちの中にあったんだよね。今度は記憶がなくなっても、ちゃんと演奏したい。それにはライヴ前の準備が大事だよね。ツアーが始まるまでに自分がもっと上達してれば、そういう問題は少なくなると思うし。ツアーに向けて（取材日現在は）まだ時間があるから、今からドンドン……。1日で変わるもんじゃないですからね。でも、スケジュールの関係で、なかなかドラムの練習ができないんですよ。（マネージャー氏に）何とかしろ！　って感じですね（笑）。

—セット・チェンジの予定はないの？

真矢　それは秘密ですね（笑）。もっとデカくなることは確かだけど……だいぶ変わるよ。

—それは、ライヴを見てのお楽しみ？

真矢　うん。派手だと言われてるけど、自分では地味だと思ってるんで（笑）、もっと派手にしたいっていうのはありますね。それが、どう派手になるのかね〜（笑）。

—（笑）でも、これだけライヴが続くと、そろそろスタジオにこもりたくならない？

真矢　いや、別に（笑）。ライヴの方が大好きだからね。

—すると、今胸の中で大きな位置を占めてるのは、やっぱり次のツアーのこと？

真矢　そうだね。俺って、スケジュールもあさってのことは分からないし、生き方にしても先のことは考えたくないんですよね。だから、いつまでにどうこうというのは全然なくて、それよりも1日1日を一生懸命、大切に消化したいですね。

—それじゃ、学校の"夏休みの計画表"なんていうのは苦手だった？

真矢　あんなの"考えない"もいいとこ。宿題だって、やって行かなかったもん（笑）。

—それで、出さずじまいなの？

真矢　うん。だって"休み"だよ。何で勉強しなきゃいけないの？　そこがイケナイんですよ、今の日本の教育は（笑）。

—それにしても、年内には次のアルバムの制作に取りかかるって聞いてるよ？

真矢　……すっげ〜ものを作りたいと思ってる。音楽的にも、テクニック的にも、よりこだわりたいと思ってる。ジャケット写真や自分のヴィジュアルにしてもね。オフ・レコだけど、××を××にするんだ。

—え〜っ？　想像がつかない……。

真矢　でも、誰もやってる人いないでしょ？

—そうだね。そういう部分でも、他にはないものを求め続けてるのかな？

真矢　そうだね。純粋な気持ちは残ってるから。俺は、目立ちたいとか個性を出したいっていうのは純粋な気持ちで、ホントはみんなそうだと思うんだ。誰もが言わないだけでさ。

—自分の存在の証明でもあるよね？

真矢　そうそう。LUNA SEAとしての自分をもっとアピールしたいからさ。

INTERVIEW : FUZUKI WATANABE
PHOTOGRAPHY : YOUSUKE KOMATSU
ART DIRECTION & COSTUME STYLING : EMI TAKAHASHI
HAIR & MAKE : YOSHIE TAMURA

派手だと言われてるけど、
自分では地味だと思ってるんで(笑)。

RYUICHI

Luna Sea

HIRO, JOE and

Eins:Vier　　Gilles De Rais

詩を書く瞬間

HIRO, JOE and RYUICHI

通常の対談とはちょっと趣向を変え、LUNA SEAのRYUICHIが司会進行役となり、Gilles de Rais のJOEと、Eins:ViersのHIROFUMIとの、ヴォーカリスト対談が行なわれた。今ノリにのってる3バンドの"お互いに魅かれ合うものがある"というこの3人。同じヴォーカリストとしての悩みや本音、恋愛観、そして、その中に見える彼らの素顔をお届けしよう。

——まず、今回この企画をどうしてもやりたいなって思ったのは、両バンド共凄く好きなバンドで、同じヴォーカリストとして自分のないものを持ってると思ったんですよ。正直好きなタイプのヴォーカルだし、自分の思う極端な価値観?これはいい意味で使ってるんだけど、この価値観が極端にかたよってる人達だなって思ってぜひお話しをしてみたいな、と思ったんです。と、いうことで僕は知らないんですが、2人はいつ位から友達なんですか?

JOE：5年前?

——俺がJOEくんと知り合ったのが、3年前だから…。

JOE：一緒にバンドやってた。

——えっ、一緒に?どっちがヴォーカル?

HIROFUMI：僕がヴォーカルで。

JOE：俺、ギターやってた。

——その頃って歌いたいと思ってたの?

JOE：元々その前に歌やってたから、その1年間はそれなりに面白かったんだけど、どうしても歌やりたいなって。

——じゃあコーラスを思いっきりとったりとか?ハモったりとか。

JOE：たまにあったよ、その時のデモ・テープは笑えるな（笑）。

——自分のバンドでギターやってた人がヴォーカリストやるって聞いた時には、どう思いましたか?正直ヴォーカリストって自分の領域ってあるじゃないですか。ウチでもコーラスに参加してもらってるけど、やっぱり自分の領域を汚されないっていう自信がお互いにあるじゃないですか?その時に、バンドは離れてからでも、ヴォーカルをとるって聞いた時に感じたものってありました?単純に自分よりカッコ良くなったら、とかステージを観るのがコワイような感覚って。

HIROFUMI：う〜ん、そういったコワイっていうようなものはなかった。別に前からヴォーカルやってるバンドとか観たことあるから。確かにJOEとやってた1年間っていうのはメンバー全員プラスになったし、ある意味バンドやっていく上で、凄い為になった1年だったと思うんですよ。その1年が限度だった。自分のヴォーカルも、JOEのギターとしても限度だったと思うから…。僕がその時とスタイル変えて歌うのも、JOEがギターをやめて、新たにヴォーカルやるのも自然なスタイルだなぁって素直に受入れてたから。当然違うバンドでヴォーカルやる訳だから、気にはなるけど。

JOE：一緒に住んでたんだ。DECAMERONのTAKE-chanと、COLORのMARRYとその4人でやってたの、そのバンドって。皆、今一線で頑張ってるし、それも嬉しいし、皆で共同生活をしながら訳のわからない1年を過ごしたなぁ（笑）。でもその時は、バンドとして売れよう!っていう意識はなかったなぁ。

HIROFUMI：その1年やったことによって、テクニック的にとか表現したことの凄さっていうのは全くなかったけど。

JOE：ゼロやろ?（笑）

HIROFUMI：でも、根本的なところで初心に帰って、なんでバンドやりたかったのか?なんでロック好きなのか?っていうのを改めて感じることが出来たし、そういう意味での成長っていうのは大きいかもしれない。そのバンドで頑張って続けていくのもひとつの道かもしれなかったけど、最終的にバラけて自分の道を選んだのも、当然の形だったと思う。でも今、皆が一線でやってるっていうのも、そのバンドがあったから…っていうのは大袈裟かもしれないけど、そのバンドで得たものっていうのは大きかったと思う。だからこそ、先への意欲っていうのが持続してるのかもしれない。

JOE：俺はね、今までずっとバンドをやってて、そのバンド"ファースト・ブラッド"っていうんだけど、1番かなって思うね。

——今のバンドも含めて?

JOE：今のバンドとはまた別で。今までやってきた中で。なんかごっつ笑えたし、ごっつ泣けたし、怒れたし…感情のぶつかりあいばっかりやったもんな、その1年間って。

——そうだったんだ。では次に歌詞について聞きたいんですが、よく"君"って言葉、"あなた"も含めて出てきますよね。その言葉って対個人なのか、自分にとってリアリティのある存在?知り合い、恋人、友人っていうような対個人なのか、それともファンだとか、世間一般の人達なのか?どっちが基本的に多いですか?詩を書く上で。

JOE：俺は1枚目の段階ではやっぱり、社会性やな、でも2枚目は個人やな。

HIROFUMI：僕の場合、結構半々で。個人に向けたものもあるし、社会性のあるようなのもあるし。基本的に性別の区別をつけない為にも、君とかあなたは使いやすい。

——それは、もしかしたら歌う時、その場その場で変わっていくってことかな?絵が。訴える目標が。

HIROFUMI：まぁ、その時の自分の生活状況で変化することもあります。

——僕もけっこうそうなんですよ。君とかあなたとか漠然とした言葉を対何々って使う時は、凄く好きだった人とか書く瞬間はあるんだけど、ライヴで歌ってる時は、その日その日で変わるぐらいに、ある時はファンに歌ってみたり、極端な話、自分に歌ってみたり、変わっていく。

JOE：自分に歌うことって多いな。

——うん、多い、多い。そういうのがかえってないと、つまらないっていうか、頭の中で彼って決めて歌っちゃうと1コの絵しか浮かばないから…。突然だけど2人共、けっこう恋愛するほうでしょ?

《Gilles de Rais バックナンバー》■VOL. 10→メンバー全員インタビュー

恋愛っていうのは多分、与えるもので、
相手に期待するものは既に執着であるっていうか……
別に相手が振り向かなくても……。

JOE：そうやな（笑）。

——一般的に考えたら、人より多く恋愛をする方かもしれないでしょ?まぁ数は別として。表現者とか、詩を書く人って絶対に、相手が何者なのか?どれだけ凄いものを持ってるのか?ばけの皮剝がしてやりたい、みたいなってあるから。俺、けっこう恋愛で言えば短命だと思うんだけど…。そのやりとりを知ってるが為に。その辺はどう?けっこう継続する方?

JOE：俺はいろいろあるけどな。

——やっぱり、自分が計り知れないものを持ってるコもいる?

JOE：おるな。

HIROFUMI：僕は両極端だから、相手は関係ない、自分自身の問題っていうか。

——僕の中にひとつ幼稚な哲学があって、恋愛っていうのは多分与えるもので、相手に期待するものは既に執着であるっていうか。例えば、俺が好きだ！って思うから相手も好きだと思ってくれなきゃ、自分の好きだが消えてしまうっていうのはもう執着だっていう、国境みたいなのがあって、それに近いものがある。恋愛っていうのは別に相手が振り向かなくても…。

JOE：俺は絶対に安らぎを求める方。それにビクビクしてる部分も俺は欲しいねん。ずっとぬるま湯でいくのは嫌なんや。

——俺は短命なんですよね、恋愛は。例えば普通につき合ってる人が、1日3時間のデートを楽しむとするでしょ?1日に1コぐらい、自分の中のわだかまりだとか、聞きたいことを1つだけ聞くとしたら、俺は10コも20コも聞いちゃう方。もう日常会話なんて全くなし、アタマからサイゴまで相手が一体何を考えてるのか?相手は自分のことをどう思ってるのか?って聞いちゃう。

「スタンダール恋愛論」の中に出てくる結晶っていうのがあるんだけど、何十個も結晶を持ってて、それは多方面に広がってると思うんだけど、その結晶を壊さなきゃ気が済まない。愛情の結晶が出来るスピードと、壊すスピードが反比例してきちゃって、結局壊しすぎて、ばけの皮を剝いだら何もなかった。その頃には自分の気持ちも、壊すことによって疲れ果てて。あとに残るものは、始めに相手を愛したと思ったこと、愛したと思ったことで、終わりに相手を傷つけることの罪の意識しか残らない。

JOE：RYUICHIはカタログが多いんや。

——カタログ?

JOE：つき合うとか愛とか。こういう事を質問したら、多分相手はこういう風に答えてくるやろなっていう。

——俺って日頃から、どんな人間と話しててても観察力がいじきたなくなってる部分がすごくあると思う。

JOE：それは哀しいぞ、ヴォーカルで。

——いや、でもね、それが最近見た映画の『氷の微笑』っていうのがあって、自分があの作家の女の人と似てるなと。あれは共感出来て哀しくなった。でもこれはどうしようもない、好きでしてることだし、哀しいと思っても、そう思う道理があるから。ただ友情にはないでしょ?それ程結晶を求めなくても…。

あんまり重いことはやめましょう。では今ってバンドの友達が1番多いじゃないですか?自分の音楽に携わる人達っていう意味で。じゃあ音楽に携わってない人達に対する興味とか、接してることって何かありますか?

JOE：俺、お好み焼き屋に興味があるな。

——お好み焼き屋?

JOE：そう（笑）。スゴイ答えが返ってきてカタログにないぞ！って顔してるよ。

——（笑）今ね、自分の辞書にない言葉がかえってきたよ。

JOE：すごいやりたい、お好み焼き屋。

——それは大阪人のこだわり?

JOE：かなぁ?それは昔っから。

——味?形?

JOE：味、形、色。店の雰囲気、オヤジのキャラクター。

——じゃりんこチエに出てきたようなお好み焼き屋?昔、暴力団の組長やってた奴の。

JOE：詳しいなぁ（笑）、俺、今カタログになかったわ。

——（笑）ああいう雰囲気?

JOE：そうそう。

HIROFUMI：シブイなぁ。

JOE：だからけっこう美味しい店とか知ってるよ。

——じゃあ、今度連れてって下さいよ。

JOE：ウィ〜スッ！

HIROFUMI：僕はないなぁ。あまり交流っていうのをしたがらないっていうと嘘になるけど、あえてしないタイプかな。なんか、結構うちにこもりきりな方なんで（笑）。それを皆、暗いと勘違いしがちなんだけども…暗いとは思わない。

——でも、よく分かりますよ。

JOE：（笑）分かってしまうの?俺、分からへんもん、なまけものやで、メッチャ！（笑）

HIROFUMI：けっこうな…（笑）。結局はそうなのかもしれない。

JOE：凄いいじけ虫やし、寂しがり屋だしな。自分で料理とか作ってまうねんな、カツ丼とか。

HIROFUMI：（笑）ほりさげるね。

JOE：昔、HIROがカツ丼作ったんだって。で、カツ丼の上に三つ葉ってのってるやんか?

HIROFUMI：よう、覚えてんなぁ。

JOE：三つ葉なくて、セロリがあって、セロリの葉っぱ刻んでそれを食ってゲロ吐いたって（笑）。

HIROFUMI：食うなっていうの！そんなの（笑）。食べてからちょっとムカムカと。そういうことがあったと（笑）。

JOE：そんな男やねんから。

HIROFUMI：結局は、ここぞ！という時にしくじるタイプなのかなー?

JOE：くいしんぼや、ロいやしいな（笑）。

HIROFUMI：（笑）ついに酒が来たか、という感じですね。

JOE：（笑）やっと回ってきた?終わったら飲みにいこう！で、RYUICHIはどう?

——そうですねぇ、俺は冷たい目で見られるのが最近好き。

JOE：あ、ホンマに?

——バンドが大きくなると、たとえ悪い奴でも、その価値観を鵜呑みにして〝この人は凄い人だからいいんだ〟みたいな、ぬるま湯的なものはすごく嫌い。例えば俺達みたいな人間が行かない所ってあるでしょ?ディスコ、クラブとか。まず、いないだろうなって所に、1人でフラッと行って、その中で冷たい目で見られながら、今いる場所が本当に自分のいる場所なのか?もしそうならば、ここでも誰よりも輝けるはずだ、と。最初は白い目で見られても、帰る時には皆が見入ってしまう男になろう！ってハングリーになった。行ったら行ったで友達が出来たりするし、いろいろ衝突することもあるけど、関係ない友達が出来たりする。そうすると、すごく嬉しい。こういう世界でも俺は俺だって。

JOE：根が遊び人やねん（笑）。

——（笑）そう言われてしまうと、そこで終わってしまうんだけど。

JOE：ホンマめっちゃ遊びたいんちゃう?

——（笑）クリエイティヴになる為に全然バンドと離れたところに行って…。俺らって今自分のしてるエクステンションにしても、メ

《Gilles de Rais ライヴスケジュール》10月21日＝新宿パワーステーション●問＝エクスタシー（☎03・5458・6381）

《Eins：Vier バックナンバー》■VOL. 4→.インタビュー

HIRO
JOE and
RYUICHI

**僕はホント、2人の目つきが好き。
やっぱり、自分にないものを持ってるから。
自分にないものを持ってる人には、負けたくないと思う自分がいる。**

イクにしても、カッコイイと思ってやってる訳でしょ?価値観に裏表があるように、モロ違うっていうか。〝なんでそういうアタマすんの?〟とか、ある奴には〝髪の毛切って、違うファッションすればカッコイイのに〟とか言われたり。いくらするの?っていうから教えたら、〝そんなにかけて何考えてんの?〟とか。

JOE：それは俺やな。(注・撮影時にそういう話で盛り上がった)

——(笑)違うって。その話じゃなくて!だから逆にそう言われたら言い返すようにしてるの。自分の価値観に自信を持ってるから。お前達より、俺の方が輝いてるだろ?っていう、そういうぶつかり合いでしょ?そういうのがきさくに行なえるっていうのが面白い。今度行きましょう!3人共明日ライヴで条件一緒だから、さっそく行きましょうか?(笑)

ところで、今の話とは全然関係ない話なんだけど、ヴォーカリストを見る時に他人でも自分でも1番最初に見るのはどこ?

JOE：やっぱ、ヴォーカルやろ?

——見るとしたらどの辺?

JOE：そのヴォーカル自体ちゃう?自分がヴォーカルだから言うんじゃないけど、観に行ってるお客さんにしても、まず始めに観るのはヴォーカルやろ。その歌のうまさもそうやし、雰囲気、ルックス、キャラクター。その人間のキャラクターでしょ?それがダイレクトに伝わってくるかどうかちゃうかな?

HIROFUMI：パッと観た時に直感的なもので、気になる存在っていうのが必要でしょ?その存在があったならば僕だったら、声とか動き、ステージの上での表現の方法の問題とか、あとは自分の好みでしかない。自分の好みに合えばすごい奴だなぁって思うし、悔しいなぁっていうのもあるし、また観たいなぁっていう気持ちが起きたりする。

——僕の場合、凄くかたよってて、会場に入ってって音が聞こえるでしょ?やっぱり雰囲気と音ってあるでしょ?つまり声、その両方でひょっとしたら?って思わなきゃ観ないし、観てみようかなって思った後に、1番最初に観るところは目の奥にあるもの。コイツどんな目付きしてるのかな?ってずっと見てる。目の奥に何があるんだろう?って。

JOE：この3人、それは一緒やろ。なんか遠くの方を見てる目をしてる、俺はRYUICHI見てもそう思うし、俺もよくファンに言われるよ、どっか遠くを見てるみたいって。

——今日、最初にかたよった価値観って言ったじゃない?かたよった価値観の中でも三人三様だと思うんだけど、でも1番好きなところは何?って言われたら声と目なの、2人共。JOEの声、HIROくんの声、2人の目、その奥にあるものがどれだけ化けものか?っていう。自分と違えば余計刺激を受けるし。で、目を見てると歌詞が飛び込んでくる時があるでしょ?その瞬間に鳥肌が立つ。その鳥肌がたった瞬間、悔しいと思うな。

JOE：そうやな、それにHIRO言うねん、ごっつい…。

HIROFUMI：極端や。

JOE：極端やけど、本気で言い合えるねん。RYUICHIもそうだけど、今日イマイチやなぁとか、今日良かったなぁって言える。

——そういう時って、自分でもどうだったって聞く時に分かってるしね。どんな答えが返ってきても許せてしまうし。

JOE：でもそれってなかなか言えないよ、うわべだけの付き合いだったら、嘘の笑顔作って答えてしまう時あるもん。だから言い合える友達が出来て嬉しいなって思う。

——いろんなことあるけど、同じところに立ってるじゃない?フロント・マンとして。プライドを持って立ってるっていうので、話すとホッとするところがある。同じ痛みを持ってるから、だからライヴの当日〝今日はどう?〟って聞きたくもないこと聞いて、気になって話しかけてしまう。で、〝いやぁ~、昨日寝てなくて〟って全然解答になってないことを言ってる(笑)。

JOE：友達だけど、ライヴ当日とかになったら、一線は引いてるよね。

——引いてるね。

JOE：仮に俺がギターで、RYUICHIに今日どう?って聞いたら、ちゃんと答えてると思う。ノド痛くて、とか。でも一緒のヴォーカルやからこそ言われへん!っていうのあるし。

——ライヴの日はライバルなんだけど、ヴォーカリストにしか分からないメンタルな部分ってあるじゃない?そういうのを共有してるっていうか、同じ悩みを共有し合ってる。リハの時に他のパートのデカイ音と闘ってるんだなっていうのも分かる。どんなに音が小さくたって地声よりデカイ訳だから。

また色がある程度どっちかって分けたら、3バンド共同じ種類の方向性だと思う。ヴォーカリストとしてなりたいものは分からないけど、今まで見てきた虚像はけっこう近いと思う。

で、その中で、それに対するジレンマとかもある訳でしょ?虚像と自分は違うっていう。それも共存してる悩みだと思う。でも引きだしの中身は違う訳でしょ?凄い気になるし、アイツのあの引きだしだけは鍵しめたいなっていうのある。

JOE：その鍵、どっかにほおりたいなって。

——引きだしごと、自分の方に持ってきたいな、とか。

JOE：海に沈めたろか!って(笑)。

——(笑)そこまでいくとね。

JOE：もう仲悪いんちゃう?(笑)その引きだしを見せられた時に鳥肌なんやろな。今日、こういう機会を設けてもらって思ったのは、目が違うよな。俺の目もそうだと思うけど、なんか悟ってる目なんや、RYUICHIの目は。で、俺のはこういう場が持てて嬉しいなっていう目だと思うねん。久しぶりに会えたし…で、HIROの目が1番コワイんよ、俺は。

HIROFUMI：ちょっとやつれてるけど。

JOE：(笑)うん、そんなやつれてるとかじゃなしに!なにクソ、お前ら!っていうのが1番強いと思うねん。俺だって負けるか!ってあるし、RYUICHIだって、かかってこんかい!ってあると思う。

——(笑)

JOE：すごい噛み付いたる!っていうのが見えてるな。

HIROFUMI：あっ、そう?それじゃ、ただの嫌な奴。

——(笑)それは凄くいいことだと思うな。

JOE：だから3バンド共、個性があるんだろうなって思う。でも皆ぬるくないねん、熱いねん。

——そう、熱いと思う。

HIROFUMI：JOEは昔から知ってたから、考えとかやってることは把握してた。で、ルナシーはだいぶ前に1回観たきりだったけど、雑誌とか、この間話して把握はある程度出来てたつもりだったけど、こういう場で話すことが出来て、はかり知れない何かを感じました。

今回3人で話したり、撮影したりして、JOEもRYUICHIくんも、常に攻撃的っていうの?過激であるっていうか…そういう一面が見えるし、そういった一面っていうのが凄い刺激になった。この3人の中に入ってる俺も逆に魅力的に思えた対談でした。

JOE：この3人ってメッチャ喜怒哀楽激しいと思うよ。

——寂しがり屋じゃなかったら、欲求なんてないと思うから、表現しようとか自分の存在をアピールしようって思わない。

何よりも歌が好きでしょ?歌うことが好きでステージに立つことが好きで、1回その存在をアピールすることを覚えてしまったら、もう表現者として後にはひけないっていうのあるよね。

JOE：RYUICHIはどう?今日の対談は?

——僕はホント2人の目つきが好き。やっぱり自分にないものを持ってるから。自分にないものを持ってる人には、負けたくないと思う自分がいる。

その中で一緒に写真を撮ったり、話していくうちに相手の価値観と自分の価値観をパズルみたいに組み立てていって、例えばそれが中華と和食と洋食が混じっちゃったものでもいいと思う。

それをお腹いっぱい食べられて良かったなと思う。なおかつお互いの価値観の中で、常に最前で闘ってる戦友だと思う。

JOE：俺のやってることが1番やって思ってるのやろな。他にもあるんちゃうか?っていうんじゃなしに、これがベストやっていうのが皆出てるんちゃうかな、話してると。それぞれのバンドのキャラクターは違っても。

——皆自信家だと思う。そこが凄いカッコイイし、それが1人でもなかったら…。

JOE：つまんないな、喋ってて。

——そうそう。

〈Eins:Vier ライヴスケジュール〉9月26・27日=大阪バハマ●問=バハマ/アフターゼロ(☎06・211・3504)

*INTERVIEW・RYUICHI KAWAMURA/LUNA SEA
PHOTOGRAPHY:YOUSUKE KOMATSU
COORDINATE:REIKO ARAKAWA
COSTUME & OBJECT STYLING(RYUICHI):EMI TAKAHASHI
HAIR & MAKE:YOSHIE TAMURA*

ACK STAGE
LUNA SEA

これからは俺達の時代だ!!

ファースト・ビデオ「IMAGE or REAL」をビデオ・チャート初登場1位に輝かせたLUNA SEA。彼らは恐るべきスピードで、着実に勢いを増してゆく。7月26日に日比谷野外音楽堂で行なわれたライヴでは、その実力を売り上げの数字よりも生々しく見せつけてくれた。親愛なるスレイヴたちとの熱い一日を密着取材。東京の空を染め上げた彼らのサウンドと、スレイヴたちの熱狂的な歓声が、君の耳にも聴こえるか!

INTO THE B
AT HIBIYA ✝ YAON '92.7.26

1992年7月26日、午後1時。東京・日比谷の空は薄雲りだが、気温は夏らしく暑い。日比谷公園の周辺には、黒い服を着た女の子たちが集まり始め、日曜の公園を異色に染めている。小さな子供を連れ、休日を楽しんでいる若い家族が立ち止まった。

「今日は何があるんですか?」

不思議そうに声をかけてくる。

「LUNA SEAというバンドのコンサートがあるんです」

にこやかに答える声。若い父親はLUNA SEAの存在を知らないらしい。改めて、まわりを見回す。彼が笑顔になる。

「楽しんで下さいね」

暖かく響いた言葉。5時間半後の開演を待ち望むスレイヴたちの気持ちが、彼にも感じとれたのだろう。公園を異色に変えたのは洋服の色ではなく、期待に高揚する〝気持ち〟なのかもしれない。また一人、スレイヴが公園にやってくる。その中を足早に通り抜けて、私はバック・ステージへと向かった。

午後2時。楽屋のドアを開けると、一際大きくセットされたSUGIZOの赤い髪が目に入る。隣の席では、真矢が鮮やかなピンクに変えた髪をセットしている最中だった。あまり広くない部屋の中は、外とは別世界のように涼しい。

「おはようございます」

軽く挨拶をして席につく。間もなくJとINORAN、フォトグラファーの辻さんと共に、学生時代のクラブ活動の話が始まった。Jは中学生時代、サッカー部で活躍していたという。

「試合は場数だよね。練習だけじゃ試合の空気はつかめない。ステージと同じだよ」

そう言うJは、緊張のあまり前夜は何もノドを通らなかったらしい。その緊張が、かえって今日のライヴを楽しみにさせてくれる。彼らは数時間後、どんなステージを見せてくれるのだろう。涼し過ぎるのが苦手なRYUICHIは、楽屋の外に場所を決め、一人で何か考えているようだった。

午後2時30分。サウンド・チェックが始まる。一番手の真矢がステージへ出ていくのと入れ替わりに、RYUICHIが鏡の前に座った。彼の新しい衣裳は、エナメルのビニール・コート。

「河村消防団の方ですか?」

INORANがジョークをとばす。言われてみれば、消防士に見えないこともない。

「そうであります」

RYUICHIが敬礼で答える。

「今日は火事がなくてねぇ(笑)」

そんなことを話していると、ドアの外から真矢のスネアが聴こえ始めた。

「この頃、東京のライヴって今ひとつだったんだよね。考えちゃうと負けなんだ」

Jが悔しそうにポツリと言った。

「今日はいくよ! (ステージでは)目つき変わるから見ててよ」

Jの言葉にINORANは黙って微笑んだ。

午後3時30分。リハーサルが開始した。

「よろしくお願いします」

RYUICHIの声が響く。まずは「MECHANICAL DANCE」。SUGIZOの白いギター、INORANの紫のギター、Jの赤いベースが自然光の下でも美しいコントラストを見せている。「IN MIND」のイントロでステップを踏むRYUICHI。陽射しはまだ暑く、セミは懸命に鳴いている。「BLUE TRANSPARENCY」を終えたところでJが言った。

「この足元で回ってるライト、ぶつかるとないですか? ちょうど弁慶(の泣きどころ)なんですよ(笑)」

そしてライトの位置やPAが調整され、約1時間のリハーサルは終わった。

「本番、よろしくお願いします!」

メンバーは口々に言い、ドラム・ソロのリハを続ける真矢だけを残して楽屋へと戻った。

「やりにくい」

SUGIZOが神妙な顔でつぶやいた。短時間のリハでは、思うように感覚がつかめなかったらしい。が、それ自体が今日のライヴにかける意気込みの象徴のようで、こちらはますます本番が楽しみになってくる。

午後5時。真矢も楽屋に戻り、蛍光色のエクステンションを髪にほどこし始めた。SUGIZOは、いつもの白いエクステンションを編み込んでいる。RYUICHI、INORAN、Jも髪を念入りにセッティング。ステージ・スタッフが楽屋のドアを開けた。

「チェックお願いします」

SUGIZOが席を立つ。

「最終チェックを自分でしないと気が済まないんだ」

そう言って、ステージへ向かっていった。バック・ステージの通路は、方々から届いた花束で狭くなっている。これもLUNA SEAの人気と、交遊関係の広さを物語っている。Xからも、真紅のバラでデコレーションされた花束が届いていた。

午後5時31分。

「開場しました」という声がバック・ステージに響いた。LUNA SEAをとりまく時間が、次第に緊張を高めてゆく。Jは、すでにメイクを終えている。髪のセットをようやく一段落させた真矢の頭は、エクステンションと同じ蛍光色のリボンまでちりばめられ、まるでクラッカーを浴びたようなにぎやかさだ。ヘア・メイクは亀山氏のチームが担当している。真矢は11時に楽屋入りし、それからずっと鏡の前にいたらしい。ライヴ本編の倍の時間をかけてセットされるという、気合いの入ったヘア・スタイルなのだ。SUGIZOもメイクを始めた。INORANは夕食の弁当を食べ始める。

「ソバが入ってる……。初めてだなぁ」

「オレ、食べられなかったよ」

RYUICHIが言う。弁当を持って楽屋の外に出ていたものの、MCを考えているうちに時間がたちすぎ、〝腐ってるんじゃないかと思って捨てちゃった〟とか。確かに、本番前に食中毒で倒れたりされては悲しい。そこへFOOL'S MATE誌の羽積氏が、最新号の表紙の色校を持って登場。INORANとBY-SEXUALのRYOが並んでいる表紙だ。出来ばえに喜ぶINORAN。指を鳴らして、羽積氏とうなずきあっている。

「押してる?」

羽積氏が聞く。

「リハが押しちゃって……」

INORANが答える。

「今、2時20分ぐらいの感覚だよ」

Jが言う。

「え!? もう6時2分なの?」

SUGIZOが驚いた。

「6時30分開演でしょ。そりゃ、無理だわ」

INORANは、まだノー・メイク。真矢はマネージャー氏と衣裳替えの打ち合わせをしている。やがて入れ替わりに訪れたゲストたちも客席へ去り、慌ただしかった楽屋が一瞬、静かになった。そこへ開場の様子を撮影していた辻さんが戻って来る。

「ダフ屋の数がすごかったよ」

「そういえば、RYUがいないな(笑)」

真矢が言う。もちろん、チケットを売りさばいているわけではない。また別な場所で、開演前の精神統一をしているようだった。ところで最近のダフ屋は、例えば「SUGIZO側、あるよ~」などと声をかけてくるらしい。それなりにリサーチしているのだろうか、などという話で楽屋は盛り上がった。

午後6時17分。ステージ・スタッフが毅然とした様子で入ってくる。

「押しますか?」

「あと30分」

鏡の前の真矢が言う。

「ダメ」

キッパリと断わられた。

「最後(の曲)まで出来なくなりますよ」

「大丈夫。曲、ぜんぶ早くやるから(笑)」

真矢も食い下がる。Jがマネージャー氏に伸ばしていた手にムースが差し出される。

「ムースじゃなくてブーツだよ!」

笑う声も張りつめてくる。開演は近い。SUGIZOと真矢はユンケルを飲み干した。Jは楽屋を出ると、自分に向かって叫び声をあげた。客席はギッシリと埋めつくされている。ステージではSEが響いている……。

●ON STAGE

LUNA SEA

ファーストビデオ「IMAGE or REAL」オリコンVIDEOチャート1位

AFTER the IMAGE

LUNA SEA CONCERT TOUR 1992

満員御礼!!

午後6時48分、SEが変わった。それがLUNA SEAの登場を知らせた。歓声が高まる。興奮が喉元まで込み上げてくる。順にステージに現われるメンバー。最後にRYUICHIが現われ、ナチュラル・ライトが視界を明るく照らした。

「Dejavu」だ。何かが体の中で爆発する。まだ明るい空に、高く弾けてゆく感情。INORANがSUGIZOの側まで走る。頭と足が、勝手にリズムを刻み始める。あっという間に、全身がLUNA SEAの音に捕われてゆく。黒ずくめの客席が揺れる。

「オマエら元気だったか!」

RYUICHIが叫ぶ。怒号にも似た歓声が飛ぶ。アルバム・ジャケットと同じデザインをほどこした、真矢のバス・ドラムが響く。

「かかって来い!」

RYUICHIの声と共に「MECHANICAL DANCE」が始まった。SUGIZOの髪の赤と、Jの金髪が映えて揺れる。サウンドが気持ちよく宙に拡散してゆく。緑の木々もオフィス・ビルも震えている。雨の気配はない。野音の空は従順だった。

「全員の声で、この空を染めあげてみよう。自分の存在をアピールしてみろ」

RYUICHIに誘われて「IN MIND」がスタート。全身汗だくのRYUICHIは、コートを脱ぎ捨てた。Jが華麗なターンを見せる「SLAVE」。SUGIZOの投げるピックが描いた放物線のように、闇がゆっくりと降りてくる。

「オマエたちの声が、この空にも届いたようです。こんなに早く夜がきたのは、オマエたちの声が美しかったからでしょう。オマエら一人一人が、LUNA SEAのメンバーであることを自覚してくれて嬉しいです。次の曲は全員に歌ってもらうぞ!」

続く曲は「Image」。RYUICHIが〝CATCH THE REAL〟と歌う。ピンクのスポット・ライトがINORANを照らし、ギター・ソロから「WALL」が始まる。ブルーのライトがRYUICHIのボーカルを彩る。オレンジのライトの中で、SUGIZOのヴァイオリンが囁き始める。胸を貫く旋律の「VAMPIRE,S TALK」。あるファンは、この曲を初めてライヴで聴いた時、言いしれぬ感動に涙が溢れたと話していた。そんなスレイヴたちを愛するように抱擁してゆくメロディー。パープルから赤へ、そしてグリーンへ混ざり合い、色を変えてゆくライトが、ステージの壁の凹凸をレリーフのように浮き上がらせている。RYUICHIのファルセットが切なく伸びる。

またたく間にライヴは中盤。「SYMPTOM」の激しさに、カラフルなライトもめまぐるしく踊る。鮮烈な光景をLUNA SEAのサウンドが鼓動させている。SUGIZOがターンする。衣裳の割れた裾が、花びらのように広がる。残響音が歓声に変わる。RYUICHIがマイク・スタンドにもたれた。つぶやくようにMCが語られる。

「約3年前、誰も信じられなかった頃、この4人と出会い、この音楽と出会った。今は心地よい空の下、一人のシンガーとして歌っている。ここが都会でただ一つのオアシスだったとしても……オマエたちが機嫌をよくしてくれたこの空の下、3年前に書いた詞を歌いたいと思う……」

「SANDY TIME」。真矢の背中から発するスポット・ライトが、あちらこちらを徘徊している。ステージ中央ではSUGIZOが全身で客席の反応を求めている。左へ、右へ、中央へ、耳に手をあてて返ってくる声を確かめている。彼は頭上で両腕を輪にする。合格サインだ。そこからギター・ソロが始まる。SUGIZOを中心に虹色のライトが放射してゆく。下手へ移動し、客席にキスを贈る。ステージの中央で高く手を上げ、遠くへ伸ばす。宙から何かをつかみ取る。口へ入れる。それは〝愛〟のような気がする。上手へキスを贈る。そして元の位置へ戻ると、一瞬、ニコリと微笑んだ。

真矢のドラム・ソロが空気を一変させる。星のようなライトが無数にまたたく。叩き出される振動にシンクロする、サンプリングの衝撃音。骨の芯まで砕く響き。ひと叩きするたびに、客席から飛ぶ〝真矢〟コール。嬉しそうな笑顔で答える真矢。とびきりのその表情が、たまらなくハッピーな気分にさせてくれる。やがてマグネシウムが炸裂。メンバー5人が再びステージに揃った。

RYUICHIがドラム・セットに駆け上がって歌う「BLUE TRANSPARENCY」。怒涛の勢いで鳴り続ける「IMITATION」。オープニングでマグネシウム弾を上げた「TIME IS DEAD」では、SUGIZOのギター・ノイズが轟音となってサラウンドする。Jのベースで始まる「CHESS」。RYUICHIの叫び声。ライヴのテンションは絶頂に達し、レッド・ゾーンを振り切っていた。

「オマエたちの声が、もっと聞きたい。答えてくれるか!」

RYUICHIのMCにJのベースが拍車をかけ、まだLUNA SEAに答える者がいなかった頃の曲「NIGHTMARE」が奏でられた。スポット・ライトがステージの壁に大きな円を描き、その中でもRYUICHIのシルエットが歌っている。幾千人ものマインドが一つに集結し、LUNA SEAという空間を造り上げている。その中に存在できることの喜び、感動。

「今日はとっても気持ちがいいぞ。東京は久しぶりだけど、ここでやれてよかったよ」

RYUICHIがアンコールのMCで言った。それが、その場にいた全員の気持ちだ。木々をライトで染め上げ、銀のテープのオーロラを降らせ、空気を震わせ、時間を燃やした音楽は瞬間に輝く宝石。それは人々の胸の中で、永遠に大切な場所を占め続けるだろう。燃焼しきった勢いでベースを壊し、手を切ってしまったJ。バレリーナのように何度もお辞儀をするSUGIZO。肩を組んで微笑むRYUICHIとINORAN。「オマエら、いいあんばいか?」などと笑わせてくれた真矢。至上のライヴの終宴に、SUGIZOは力強く宣言した。

「これからはオレたちの時代だ!」

大歓声が答えた。LUNA SEAを愛する誰もが、待ち望んでいた言葉だった。

REPORT : FUZUKI WATANABE
PHOTOGRAPHY : SAORI TSUJI

TATSU
ROCK LOVE

INTERVIEW : NAOKO ENDO（Editor of SHOXX）
PHOTOGRAPHY : NORIO KAJIKI

TATSU ROCK LOVE

それは、いかがわしくってエッチな…。

JACKS'N'JOKERのギタリスト、TATSUが初のソロアルバム『ROCK LOVE』をリリースした。「趣味に走り過ぎた」と言うTATSUだが、ゲストミュージシャンとして参加しているジョニー吉長(PINK CLOUD)、TOSHI(X)、森重樹一(ZIGGY)、MORRIE、岡本健一(男闘呼組)らが、アルバムに絶妙なエッセンスを加えている。今回は、そんなエッチでカッコイイアルバム『ROCK LOVE』を中心に、最近の彼の心情なども織り混ぜて話を聞いてみた。

――ソロ・アルバムを作るという事で、みんながきっとJ、N、Jと違うものを求めると思うんですけど、そういう所でのプレッシャーはありました?

TATSU ソロ・アルバムって言うと「本当にやりたい事なんだ、これが」ってみんな思うじゃない。『ROCK LOVE』に関してはそんな事ないよ。J、N、Jのファーストもセカンドも、オレはやりたいだけやっているからね。ギター・アルバムにしなかったのもそのへんからで、オレJ、N、Jで弾きまくっているから。だから逆に抑えたし。J、N、Jのオレなしでは『ROCK LOVE』は出来なかったしね。ある意味でこのアルバムは、家で裸になって寝っ転がってい る様な感じで、服着て外に出掛けた時の感じがJ、N、Jかな。簡単に言っちゃうと、音楽的な所ではそうだと思う。

J、N、Jは、J、N、Jというバンドを作ろうとした所から、イメージがあるじゃない。曲とかもバンドをイメージして作るとか。でも今回のアルバムは、そうじゃなくて個人的な所だからね。もっと自分だけの世界を作りたいなっていう、そこからだもん。ほとんど結果的に趣味に走り過ぎちゃった様な気がするもん。

オレはいつも曲を作ったりアレンジをしたりって、外人を意識してやっている訳じゃなくて、世界的に見て恥ずかしくないものを作ろうと思っているだけなんだよ。やっぱり、その時代時代で音ってあるじゃない。J、N、Jになってから、そのへんはクリアしていると思うんだけど、日本の音楽ってしてないものが多いじゃない。日本には、日本のロックンロールっていうのが独自に動いているんだよね。世界の動きとはべつに。でも、洋楽は洋楽で、世界の動きで聴いているんだけど。だからオレとか、いつもその狭間にいるんだよね。簡単に形容してしまえば、日本人の洋楽タイプの音楽でしょ。

いつも世界の時代感でアルバムを作っているんだけど、それがいい方向に行ってないって言うか…。だから、バンドでアルバムを作るなら、昨年のあの時点では『INSIDE OUTLOW』で、今の時点でJ、N、Jが日本の音楽シーンの中で何をやろうって言ったら、やる事がないよ。で、そう思ったからソロ・アルバムを作ったの。それに、定期的にそういう作業がないと、BADになっちゃうって言うか、何にもしていない様な気になっちゃうから。だって、オレからそれとっちゃうと、ただのイカれた兄ちゃんみたくなっちゃうからね(笑)。自分でもそれが生きる術であったり、生き甲斐であったりするから。

――すごく簡単な言い方しちゃうとポップって言うか、聴きやすいって言うのかな? J、N、Jとか聴いてて、もっとR&Bっぽくなるのかなぁって思って聴いた人は、すごくビックリしちゃうんじゃないかな?

TATSU うん、わかる。例えば、ギターインストの事とかね。それは、『ROCK LOVE』を作ったから、ギターインストとかも作りたいと思うのね、今。でもオレ、何がやりたいって言ったら、ギターを弾きたいだけじゃないからね。自分が生きてて感じる事をそのまま曲にして、まず第一に自分がやってて気持ちいいって言うのが大事だけど、聴いている人も気持ち良くなればいいなって、そこだから、言葉はやっぱり必要だよ。言いたい事があるから。根本的に歌詞がないとオレの音楽は成り立たないと思う。インストじゃない、絶対。だけど、インストですごいアルバムを作る自信はあるよ。まぁ、歌詞のノセ方とか、オレも結果的にはポップだなぁって思ったけど。

J、N、Jを始めた頃、需要強壮剤みたいなアルバムを作りたいっていうのがあって。

――聴けば元気になる、みたいな?

TATSU そう、そう。人にエネルギーを与える様な音楽を作りたいっていうのが、まず根底にある訳。ガスタンクがバラバラになって一人になった時、まず最初にそれがあって、今でもその思いを引きずっているんだ。オレ、死ぬまで多分それをやっているんだと思う。まっ、気は変わるかもしれないけど。

――ほとんどの曲のボーカルをとっているけど、ボーカルとりで苦労した事はあります?

TATSU カラオケみたいな感じで歌っちゃった。今までやってなかった事だから、ほとんどマジになれないじゃない。歌に対してエゴもないし。ただ自分の言いたい言葉がのっかっていればいいっていう所で、ある意味じゃピュアだよ。ギターだと、どうでもいい様な所で細くなっててこだわりもあるんだけど、歌は不思議とないな。だから自分のスタイルもないし。でも、曲によってその時の気分で力の入り方とか声の入り方も違うし。そういう所で多少バリエーションがでたと思うよ。

――じゃあ、それ程神経質にならなかったんだ。

TATSU 神経質になっていたら終わらないと思って、やめたの。歌に関してはオレ、ヘタクソだからさぁ。でも、ヘタな歌でもいいものはいい、と。それって、ギターとか全部に言える事なんだけど、オレ、本当はテク気にしない方なんだ。気持ち良ければ総て良し、みたいな所で。使ってる機材とか、ギターを弾いているのを見ると、なんかウルサそうに見えるけど、それはそういうものしか指示しない人達に対する見栄でね。オレ本当はギター、ヘタクソでもいいと思っている。アンプとか器材も、それなりにちゃんとした使い方して、ちゃんとした音をだしていればそ

れだけで認める人もいる訳だし。あと、そういうのは認められやすいしね。でも、ロックじゃそういうの関係ないと思うよ、本当は。

——いくらテクがあって、すごく上手くても心に響かなかったら仕様がないし…。

TATSU そう、そう。ヘタでもくるものはくるでしょう。やっぱり、それってどっちかじゃない？人が指示するのは。極端な話。

——でもそれって、TATSUサンみたいな人が言うから説得力があるんじゃない？

TATSU いや、オレみんなが思っている程、テクニカルなプレイヤーじゃないよ絶対。要領がいいだけだよ。でもオレ、そこを聴いて欲しいんじゃないしね。なんだかんだ言って、最近開き直ったから。

——何かあったんですか？

TATSU このアルバム作って開き直ったと言うよりも、レコーディングに入る前の3ヵ月位、ほとんど人と会わなかったの。仙人の様な生活をしていたんだ。家で自分自身を追求していた。

——煮詰まってきません？

TATSU 煮詰まってくるけど…。その間よほどの事じゃないと仕事も入れないでもらったし。

——私、2月位に会っているんですよ、六本木のマクドナルドで（笑）。

TATSU 会ってますよね。あの頃ですよ。変だったでしょ、様子が。

——あの頃って、映画（「いつかギラギラする日」（公開中）／メンバーが出演、熱いライヴシーンが観られる）の公開が延びたり、エンディングで流れるはずの曲がとんじゃったり、精神的に大変だったんじゃない？

TATSU そうですねぇー。そういうロックビジネスっていう所では、ウンザリする事も多いんだけど…。でも、そういった事にウンザリしてても仕様がないし。例えば、オレ達の知らない所での失敗っていうのがあったとするじゃない。でもそれがまた、バンドの評価にも世間ではつながったりする訳でしょ。雑誌の露出一つとってもね。そういう所で判断されるから、色々な事に対して神経質になったりするんだよね。でも、そういうのを気にしているとキリがないしさ。自分で「プレイしてて気持ち良ければいい」って言っても、そうじゃない所に気がいってしまうじゃない。オレ、すごく気にしちゃうんだよね。

だけど変な話、今頭まるめたってステージ立てるよ、イヤだけど（笑）。極端な言い方すればね。なんか、カッコ悪いって言われたって自分が良ければいいや、みたいな。例えがあんまり良くないけど。何か、そこらへん自分自身が良くわかった。いつも自分の中にわだかまりがあったんだよね。音楽的には好きな事を本当にやっているんだけど。で、家で気ままに暮らしていると、何にも影響受けないでしょ。そういう中にポツンといて自分の事が良くわかったの。オレ結構、自分の知らない所で気を使うっていうんじゃないけど、自分の置かれている状況や時間とかに、ものすごく影響を受けちゃうんだよね。J、N、Jを結成してから無我夢中でずっときたじゃない。たぶんそのまま活動を続けていったら気がつかなかった事もあっただろうし。今までの自分を振り返ったり、今後の自分を考えたり、ある意味ではすごくいい時間だった。

——で、このアルバムのコンセプトなんですけど。

TATSU 黒っぽいビートのアルバムを作りたかったの。べつに黒人音楽をやりたかった訳ではないんだけどね。今までの自分の感じなんだけど、それが黒人のリズムにのっかった様な、ブルージーでね。そういうのを考えていたんだ。70年代のサウンドっていうのかな。今のオレなんかからすると、70年代の音楽っていかがわしくてエッチな感じがするの。それを90年代風にしたっていうのが、このアルバムかな。古くて、でも新しいっていう。それと本当は42分のアルバムを作りたかったんだ。70年代ってその位のが多いでしょ。でも、ちょっと計算違いっていう訳じゃないけど40分ちょっとになっちゃった。

——アルバムタイトルの『ROCK LOVE』っていう意味は？

TATSU 愛を揺らせ、というかね。セックスですよ、セックス。いわゆるロックの基本的な、セックス、ドラッグ、ロックンロールですよ。ジャケ写もいかがわしいよ。趣味に走ってるもん。オレの部屋なんかそんな感じだしね。

——レコーディングでSuzue倉庫を使っているけど、どのへんを録ったの？

TATSU リズム隊は全部あそこで録ってるし、ギターも一応録音した。基本的に3人で、せーのってやる感じなんですよ。ま、それで一発でOKになったのは一つもないけど。後で差し変えたり、ライヴの時みたいに、ギターが常に一本しか入っていない様な感じにしようっていうのも最初のコンセプトにあったし。でも、後でアコギをかぶせたり2本になってたりする所もありますけどね。

——今までとは違う人達とやって、影響を受けたりとかもありました？

TATSU 自分自身わりと今回、色々な人達とやるのを狙っていたんだ。例えばドラムのGINOさんとは共同プロデュースだし。でもオレ以外のプレイヤーは、ほとんどスタジオに来てファースト・インプレッションそのままでプレイして、それがアルバムに入ってますよ。ほとんどバックの人達はGINOさんを通して集めたんだけど、来て、モロに譜面を見てそのつど演奏して帰っちゃうとか言うんじゃなく、その場で好きな様にお互いが感じるままプレイしてた。セッションぽい感じだね。オレはついていけないんだけど、気持ちだけそのへんでやってた。スタジオ・ミュージシャンもこんなにロックしてたんだ実は、みたいなね。人間的にスピリッツを感じました。

——環境的にはバツグンだったわけですね。

TATSU バツグンですよ。いい思いして

レコーディングに入る前の3ヵ月位、家で自分自身を追求していた

●映画、「いつかギラギラする日」は9月12日より松竹系ロードショー中。

《ライヴスケジュール》11月5日＝インクスティック鈴江（TATSU・ソロ）、11月7日＝新宿パワーステーション●問い合わせ先　バックステージ TOKYO☎03-3226-7312

るなぁーって、毎日思ってた。スケジュールがちょっとハードで寝不足だったけど（笑）。

——ゲスト・ミュージシャンっていうのは、どうやって決めたの？

TATSU ジョニー（吉長）さんは、GINOさんを通して。あとはオレが電話してね、まぁー、知り合いも少ないし（笑）。

——ミュージシャンで友達っていうのは？

TATSU ここに参加している人位でしょう、自分から電話するのって。オレあんまり社交的じゃないから。

——ジョニーさんの作った「HOUSE WORKER」って、おもしろい詞ですよね。まさにっていう感じで。

TATSU そう。最初に、オレがどんなやつかっていうのを飲みに行って説明したの。色んな事話して、あれはバッチリだと思う。

——すごい身近な感じだよね。でも逆になかなかそういう事って、書ける様で書けないんですよね。

TATSU そう。オレなんか全部そういう感じで書いているんだけど、遠回しにしか書けないもん。やっぱりテクニックがないから。でも、あの曲を実際に歌って録音した事で消化出来たから。ああいう砕けた詞も書けるし歌えるかもしれない。

——岡本（健一）くんなんて、ハリキっていたでしょ。

TATSU みんなよく「なんで？」とか言うんだよね。でも例えば、J，N，Jと似た系統のバンドのやつらがゲストだったら、それがふさわしいのかって言ったら、そんな事ないし。オレはそう思わないしね。岡本なんかいいパートナーだよ。オレが自分でロックだなぁーって思うもん、あいつの事。よく、あいつの家に行ってしゃべったりするけど、一人の人間としてノリがすごく合うからね。あの詞も好きだよ。

——ソロで、ライヴをやりたいっていう気持ちは？

TATSU ありますけどね。やります、そのうち。オレがソロをやってる間に、J，N，Jの解散のウワサとかもでちゃったし。バンドはバンドで楽しいしね。とりあえず今度はJ，N，Jでやって、すっきりした所でソロのライヴをやればいいかなって。

《バックナンバー》■VOL.4➡TATSU & RUDY(GRAND SLAM)対談■VOL.6➡TATSUインタビュー

VISUAL & HARD SHOXX INVASION

ショックス連続企画
第12回

ヴィジュアル&ハード・ショックス・インヴェイション

混沌とした状況渦巻くインディーズ・シーン。中堅バンドが次々と解散し、新しいバンドが次々と誕生し、巧みに世代交代を続けていく今の状況の中、果たしてどんなバンドが今、ライヴハウスで人気がありどんなバンドが今後のシーンを牽引していくのだろうか。やはり読者にとってもその辺は興味の尽きない所だろう。というわけで、久々にこのコーナーで、ライヴハウス・シーンの現状を（個人的な視点から）、紹介してみたいと思う。

TEXT : TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY : SAORI TSUJI

新旧入り乱れた、まるで戦国絵巻のようなインディーズ・シーン!!

久々に登場の、このコーナー。もう色々と書きたい事が溜まってるので、ビシバシ書いていきたいと思う。

まず、今のインディーズ・シーンの中で一番顕著に現れて来ている状況というのが、ある程度のスタンスまで活動してきたバンドが次々と解散していくことだ。今年に入ってからも、VIRUS、ガールティック、BELLZLLEB、しいもんきい、ジャンヌダルク、と、ある程度のキャリアや動員を誇れるまでに成長したバンドがバタバタと崩壊していったり、SIGHS OF LOVE POTIONが活動を停止したりと、アッと驚く状況が雪崩のように起こり始めている。本来ならば、彼らこそが今の状況的に厳しいインディーズ・シーンを牽引していかねばならないのにと思うと、非常に残念に思えて仕方がない。ついでに書いておくと、これは読者にはどうでもいいことかも知れないが、いわゆる大半の大手メジャーレコード会社というのは、この手のバンドがいくら動員があろうと、いくら自主盤が売れようと、鼻っから一部の熱狂的なミーハーが支持するくだらないシーンと決めつけている節がある。確かに下手糞なバンドが大半のこのシーンだが、まだまだ磨けば光る素材がゴロゴロしてるのも確かだけにそういう一部の下らない偏見でこのシーンが見られてるのかと思うと、僕自身、非常に残念でいた仕方ない。

そんな一般的には非常に厳しい存在として見られているSHOXX系のシーンだが、他のジャンルのライヴハウス・バンドが未だ50人を越せない動員状況でしかないという面を考えれば、このシーンは一般的に無名なバンドでも、平気で100〜200という動員を誇っていたりするだけに、まだまだ探ると面白いものがあるなと僕自身は感じている。

さて、話は再び戻るが、7月に御大COLORが、約2年ぶりにフルアルバムを発売してくれた。また今年に入って、元かまいたちの連中がそれぞれ幻覚アレルギー、ALUCARDと、自身のバンドを結成してCDをリリースしたり、C・D・N・KENchanが遂に自身のバンドDEAD P★P STARSを率いてメジャーデビューを飾る予定だったりと、かつて一時代を築いてきたミュージシャン達が、再び精力的な活動を開始したというのは、非常に喜ぶべきことであろう。

また解散組でも、元VIRUSのギターの本間が再び自身のバンドMEDIA YOUTHを率いて復活したり、元アザーサイドのKNOBとRYOが新バンドを結成して動き出し始めたり。元しいもんきいの連中も、メイン所が基盤となって、また新しいバンドを結成したという噂も伝わってきている。他にも解散バンド群の中では、元EX-ANSのギターのユキノが自身のバンド、ディパッシュを率いて活動を始めたり、元DOLLSのヴォーカルが自身のバンド、DEAD BY MANIACを結成したり、一時、活動を停止していたVELVET ENDROITが復活を果たしたり。そして、横浜のVOISSと神戸のVILEも活動を再開。またVILEのメンバーとマダムロシャスのメンバーらによって結成されたリキッド・スカイも勢力的な活動を開始している。更に細かい所を突っ込めば、いわゆるレイジーウェイズ系で活動しているバンド連中内での、結成・解散——新バンド結成等々の非常に細かい動きも多々あるし、半年前に「まだ結成して1年経ってないバンドなんです」と言ってたかと思いきや、その半年後には「解散して、今誰々と別のバンドを作ってるんです」という話が、ゴロゴロしてたりと、細かい所までフォローの手を入れると、ホント収拾つかなくなっているのが現状だ。

そんな、新旧入り乱れた、まるで戦国絵巻のようなインディーズ・シーンの中で、今注目しておくべきバンド（あくまでも個人的な意見です）を、続いて色々と紹介していきたいと思う。

まず、やはり今、一番注目すべきバンドと言えば、いよいよ1stCDの制作にとりかかったDEEP。先頃2ndCDを発売したばかりのROSENKREUZ、年内に1stCDを出す予定の、L'Arc en Ciel、そして、SILVER ROSE辺りであろうか。これら4バンドは、いずれも実力的にも個性面でも独自性を身につけてきており、更に動員面でも飛躍的な伸びを見せているだけに、今の勢いを持続したまま仕掛けを施していけば、今後シーンの中でも中核的な存在として君臨してくるのは間違いないだろう。

また、最近グングン実力と動員を伸ばしていると言えば、ジョリーピックルスや、バナナフィッシュ辺りが著しい動きを見せている様だ。また若手注目株と言えば、アメリカンハードロックとメロディアスな面を加味したサウンドを奏でるハードロック界の期待の新星、THREE EYES JACK。結成1年強にも関わらず、既に100人以上の動員を誇る上に、今後の将来性に未知数の可能性を秘めたREDIEAN：MODE。明るく元気でメッチャノリのいいアメリカンハードロックを奏でるデカダンス。元L'Arc en CielのギターだったHIROが新たに結成したAnge Graie（要注目）。ホストデランジェとも言えるRUBY'S BLUE。ダークホジ系の流れを組んだ独特の歌詞世界を持つ黒夢（編集長↓YOSHIKIが渡米前の超多忙な時に、わざわざ目黒鹿鳴館まで見に来ていたそうだ〉）。ホストBOOWYのBLUE JEAN。グラマラス&デンジャラスなGRACE MODE辺りが、今年後半から来年にかけて著しい成長を示してくれそうな気がする。またSHOXXではお馴染みの、個人的には非常に期待している妖花（おめぇらもっと気合い入れよゃ）やBer・Sati辺りも、一時の異常人気は落ち着いたものの、彼らの実力に呼応した形で安定的な人気及び動員の変動が続いているようだ。そうそう、元妖花の玉木も、年内中には新バンドで動き出したいと言っていたので、今後の彼の動きにも注目しといてもらいたい。

また中堅所では、ワンマンを出来うるだけの実力と動員をつけてきているDIE-KUSSEやハーレムQ辺りが今まで以上に勢力的な活動を示しているのも気になる所だし、最近待望のCDをリリースしたZI-NXが、独特の世界観を作りだし超恰好よくなっている（でも好き嫌いがはっきりしそうだ）ので、しばらく見てないという人は、是非とも彼らのライヴに足を運んで欲しい。

また、最近は打ち込み系でもなかなか面白いバンドが続々と登場してきている。特に楽曲的なクオリティの高さと、徹底してショーマン化されたステージングを誇るSHEENには、何故これだけのバンドがメジャーへ行けないんだと思ってしまうほど、非常に優れたアーティスト性が詰まっている。他にもハードコア歌謡テクノのZIPPER ZIPPER、ボディコアのBACTERIAは超必見。そうそうクロイツ関係と言えば、ヴォーカルのKIYOTOも、元VIRUSのIKUZO君と、ムーミンズ・ムーンなるユニットを結成して遊んでいるようだ。

他にも東京ヤンキースのローディ君等らが結成したGRIMM THE CAPSULE、ヴォーカルがヨシキもどきしているBOLD RAID、ビジュアルショッカーのSAKURAN、ダーク系のGENE JENIEやNEED、ノスタルジックな暗黒世界を作るSCARE CROW、サイケロックのBLOW FANATICS、ビジュアルハードロックのSILENT ROSE。ビジュアルロッカー潰しを得意とするハードコアバンドのAIDS、etc etc。とにかく名前を上げていくとキリがないのでこの辺でやめとくが、まだまだこのシーンには、一般的には無名ながら、先に上げたREDIEAN：MODEのように、平気で50〜100人の動員を誇るバンドがゴロゴロしている。言うなれば読者のみなさんも、そうやって無名のうちから新しいバンドを発掘して、上へ上へと押し上げていく楽しみを、ライヴに参加しながら得られるというのも、嬉しい面ではなかろうか。

但し、最後にシビアに意見を述べさせて戴くと、先にもメジャーのレコード会社の大半はこのシーンへ目を向けないと書いたが、それも根本的な原因は全て、バンド、ファン、そして我々マスコミが作っている。以前も書いたが、おっかけ的なミーハーなファンが多く、個性も実力も全くないバンドまでをも押し上げてしまい、下手に動員だけついてしまうものだから、バンド自体が活動のシビアさを知ることなくタカビーな性格になってしまったり、実力もないくせに、やたらローディという名の子分を従えてのさばってたり。上のバンドの悪い面（無個性さ、態度、実力不足）ばかりを真似して、それを模倣してしまう若手連中がやたらと増えてしまったり。ファンの子に打ち上げ代をおごらせて、自分達は殆どお金も払わずに飲みまくったり。

また客も客で、バンドに金品を貢いだり、メンバーの言われるがままに打ち上げ代を払ったり。しかも現存している大半のバンドが、何々風という物真似的趣向が強いうえに、演奏力的にもかんべんしてくれというバンドばかりである。まぁそんな甘[illegible]的状況を許してしまう我々（特に自分自身）にも非常に問題はある。しかし、そんな悪循環を今後も繰り返していく限り、このシーンには明るい希望はなかなか見えてはこないだろう。言うなれば、彼らがある程度の実力や動員があってもメジャーへ行けないのは、バンドも客も自分達の狭いフィールドの中でしか物事を捉えきれてない、井の中の蛙的状況だからなのである。

今後、我々がこのシーンの活性化を促す為には、変に気を使った愛情ばかりでなく、時には（客もバンドも）徹底して突っぱねて、シビアな現状を身を持って知らしめていく努力をせねばいけないではなかろうか。とにかく今の僕が現存のバンドに言えることは、気取ったり恰好つける事よりも、もっとステージ外で汗を流す努力と、最低限の演奏レベルだけはつけて欲しいという事。

そして僕ら（読者諸氏）が彼らをよりよい状況に持っていく為には、甘い砂糖ばかりではなく、時には辛辣な鞭を持って接していく事が必要となるだろう。本当にこのシーンが好きなら、ただおっかけるだけじゃなく、イベントを組んだりミニコミやフリーペーパーを作ったりするのもいいだろう。とにかく何かしらリアクションを起こしてより良い状況へと持っていこうではないか。そして最後に自分を含むみなさんに一言。てめぇらもっと自覚せぇ！

イベント『WILL』では、出場バンドを募集しています。希望バンドは、音資料、文字資料、写真及び連絡先を同封の上、〒160新宿区北新宿1の11の5の203 ㈱PROFIT宛まで送って下さい。

尚、『WILL』オープニング・イベントは10月3日（土）オールナイト川崎クラブチッタにて★ROSEN KREUZ、L'Arc〜en〜ciel、MEDIA YOUTH、SILVER ROSE、REDIEAN：MODE、妖花。11月18日——インクスティック鈴江★Ange Graie、他で行います。（ぴあ・及びチッタで発売中）

臣(Shin)G.

清春(Kiyoharu)Vo.

人時(Hitoki)B.

INTERVIEW : TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY : MOTOI OHNISHI

黒夢

深い精神への探求

VISUAL & HARD SHOXX INVASION

91年6月に名古屋で結成された黒夢。メンバーは清春(Vo)臣(G)人時(B)の3人（ドラマーは現在募集中）。今回のインタヴュー中に彼らは、幾度となく『精神的な』という言葉を語っていた。実は黒夢というバンドの魅力を探る際に、この『精神性』は必要不可欠な言葉なのである。7月にHAUNTED HOUSE RECORDSから3曲入りCD『中絶』を発売した彼ら。そんな黒夢の魅力を探ってみたいと思う。

――黒夢って詞の世界が独特だよね。そこがバンドの一番のポイントかなって気がしたんだけど。やはりある程度、詞の世界観を作って、表現していこうって感じなのかな?

清春：世界観と言うか、精神的に深い所でやっていきたいんです。

――確かに凝った詞の作りをしてるもんね。

清春：凝るって言うか、昔はよく難しい言葉を使ってたんだけど。最近はそれよりも、言葉の接続詞や反対語を上手く使ったり。例えば〝何々の何々〟を、〝何々と何々〟と変えるだけで言葉のニュアンスがだいぶ違ってくるでしょ。そういう語尾に気を使って書いたりとか。

よく他のバンドの人達って、聞く人がそれぞれの捉え方をしてもらえばいいって言いますよね。でも、僕は押しつけがましいんですけど、自分と全く同じ心境をわかって欲しいと思ってるんです。

――じゃあ今回のCD『中絶』の中の3曲の紹介をしてもらおうかな。まずは『中絶』から。

臣：『中絶』は激しい曲が欲しいなと。激しい中の悲しさというか。

清春：その激しさの中の悲しさとか、焦りとかを表現していこうと。

――けっこう感情のままに演奏してるって感じも受けたんだけど。

清春：感情のままって言うよりも、感情じゃなくて精神というか。詞の部分では、一見子供を堕ろしたという歌なんだけど。でも、結局は子供を堕ろしたことが原因で、2人はダメになってしまうんですよ。でも振り返ってみると、中絶するまでの2人は上手くいってたのにという内容なんです。歌詞の中には、きつい言葉がいっぱい入ってるんだけど。でも歌ってて、そんなにきつくはないと思うし。

――そうかなぁ。歌詞の中には、けっこうおどろおどろしいって言うか、陰湿な世界もあるような気がしたんだけど。

清春：でもこの曲は、その過程の歌というか。本当はお互いに出来ないことを望んでたのに、受精して子供が出来てしまった時って、2人とも困ってしまいますよね。でも、よくよく考えると中絶って殺人ですから。

――やはり一つのモチーフを、いろんな言葉の表現を使って、幅を広げていこうって言う感じなのかな?

清春：そうですね。それと、同じ言葉を何度も使いたくないんですよ。だから1曲の中に同じ言葉が2個あると嫌なんで、その辺は考えて書いてます。時と場合によりますけど。

――例えば、あえて難しい言葉を使ってしまうというのも傾向としてあるのかな?

清春：昔はあったんだけど。最近では、そういう言葉を使ってもしょうがないかなと。

――理解してもらいにくいし?

清春：例えば呪縛と言う言葉がありますよね。それを歌う時って、自分の頭の中で一度その呪縛という言葉を理解して、その中に気持ちを入れ込まなきゃいけないから、時間がかかってしまうんですよ。そうなると気持ちが入んないし。確かに昔は恰好つけて、言葉の羅列をしたこともあったけど。今はそれよりも言い回し等を考えてやってます。

――続いては2曲目の『浮遊悲』ですが。

人時：作った頃というのは、激しい曲が多かったので、ちょっとテンポを落として、もうチョット落ち着いた感じの曲にしようと。曲調としてはデカダンスっぽいというか。

清春：僕は3拍子でグルグル回ってるというイメージがあるんですけど。

臣：でも、けっこう歌に入って4拍子になる所がミソかなと。

清春：それと曲の途中でテンポが遅くなる所があるんですけど。歌詞で言うと、♪目が開かない振り向けない♪という箇所なんですが。そこは元々なかったフレーズだったんだけど、スタジオで演ってる時に付け加えたんです。でも結果的に、他の部分の曲調が無機質だからこそ、逆にあの部分を加えたおかげで、際立ってるのかなって言う気もしてるんです。ちなみに詞に関しては、ゴーストというか。自分が死んだのがわからなくて、本当に死んだのかどうか確かめ続けてると言う内容です。

臣：ちなみにギターソロがマイケル・シェンカーしてます。

清春：コケティッシュと言うか、僕達の中では置物みたいな感じの曲ですね。

――では最後に『IN SKY』を。

清春：元々は僕が前の前のバンドでやってた曲を黒夢に持ってきて。その曲をぶち壊して色々と作り直してるうちに、歌が出来てバックが出来ていったんです。楽曲としても3曲の中では一番フワッとしてると言うか、昔のポジパンっぽいんですけど。でもサビにいくとメロディがあって、けっこうバランスのいい曲です。

――唯一、英語の歌詞が入ってる歌だよね。

清春：ええ。と言うか、僕は英語が嫌いなんですよ。英語じゃはっきりと意味が伝わんないし。

この曲の中身に関しては、僕達は夢としてバンドやってるけど、でもバンドをズーッとやってるが為に、つき合ってる人と、話があわなくなって別れちゃう場合ってありますよね。だから実際ついてこれない人（女性）って、いっぱいいるわけだし。

歌詞の中の♪あなたには愛せないわたしが♪という部分がポイントなんですけど。その追い求めてる夢って、なかなか手の届かない高い所にありますよね。つまりズッと空（届かない夢）を見てるから、その夢を現実にしたいから、空の中、つまりIN SKYと言ってるんです。

――ちなみにこの3曲って、黒夢の世界観を表しきれてる作品って捉えてもいいのかな?

清春：ですね。いい意味でのキャッチーと言うか、3曲ともけっこうバランスはいいと思います。なんせそれ以前の曲というのが、激しいだけというか、コアっぽかったもので。

――そこから徐々に進化していったと。

清春：よく言えば進化なんだけど。

臣：前は絶叫ばっかりだったのが、今はその中でシクシク泣いたり、思いっきり泣いたり。だから前よりも表現の範囲は広がってると思います。でも基本的な所は変わってないと思う。つまり、恰好やサウンドにしても、例えば火曜日と金曜日じゃ思ってることが違いますよね。そういう感じで、その時に思った事をその時にやっていきたいと思ってますから。

――それは根本には絶叫があるという事なの?

清春：いや、絶叫と言うか、昔は激しくって悲しいだったんだけど、今は冷たくて悲しいという所を意識してるんです。でも、最近はもっと違うタイプの曲が出来てきて。このCDに入ってる曲と、今演ってる曲を比べると、更にフワッとした感じになってきてると思います。

とにかく精神的にもっと高くなりたいし、もっと技術面でも上手いバンドになりたいですから。

――ところでバンド名の黒夢にも、色々と深い意味があるんだろうね。

清春：話せば長くなってしまうんですけど。これは曲名からとってるんです。意味はその歌詞の通りというか。簡単に言えば、夢を見てないっていうことになるんです。つまり、夢をみると、ちゃんと覚えてるんだけど、夢を見ない時って真っ暗ですよね。だから黒夢って、黒っぽい夢じゃなくて、夢がないってことなんですよ。

逆に言えば、必ず夢が叶うと思ってやってるんだけど、叶わない夢が多いのが実際だし、そうは言っても叶う夢だって実際にあるわけだし。つまり黒夢というのは現実ってことなんです。

――ちなみに黒夢としての理想というのはどうなんですか?

臣：今後はどうなるかわかんないですけど、理想はメンバーがみんな、精神や感情を込めたら世界一くらいになりたいです。

清春：だから、最近気合がないバンドは……ってよく言われますけど、僕達にはあまり気合という言葉はないんです。その変わり、精神的にしっかりとしてたいし。もっと凄く深い所を求めていきたいと言うか。

臣：静かな気合と言うか。とにかく精神的なものを求めていきたいんです。

清春：やはり黒夢というのは、自分にとっては精神的にすごく解放出来る場所だし。凄く他のメンバーを尊敬してるし。ホント一番無くしたくないものですよね。

《ライヴ・スケジュール》9月26日＝ミュージックファーム、10月11日＝目黒鹿鳴館、28日＝大阪難波ロケッツ、30日＝ミュージックファーム、31日＝新宿ロフト（ワンマン）●問＝ミュージックファーム（☎052・772・2314）または、ホーンテッドハウスレコード（☎0484・47・1957）

■現在、黒夢では音楽性の広いドラマーを募集しています。やる気のある方は、テープ、プロフィール写真を送って下さい。あて先は〒465愛知県名古屋市名東区小池町462-5ミュージック・ファーム「黒夢Dr募集」係まで。

人間のもう一つの目、それは心の中に存在する。

ビジュアルの妖艶さと、卓越した演奏力。見た目とテクニック的な面の両方を兼ね備えた本格的なハードロックバンド、THREE EYES JACK。メンバーはGO（Vo）MAY（G）ちゃちゃ丸（B）YUKARI（Dr）の4人。9月5日にT―SECRET（トップ・シークレット）レーベルの第1弾として、3曲入りのCD『THREE EYES JACK』を発売したばかりの彼ら。そんな久々の本格派ハードロック・バンドの彼らの魅力にCatch Up。

INTERVIEW：TOMONORI NAGASAWA
PHOTOGRAPHY：NORIO KAJIKI

――まずはバンド名の由来からお願いします。

GO：普通人間には2つしか目がないですよね。でも本当はもう一つの目が存在していてそれは心の中にある。そしてスリーアイズは視野を広げ、違った観点で物事を見る。そのスケールのデカイ目が全てをJACKするという意味を持っているんです。

――やはりスリーアイズ～のサウンド的な基盤は、ハードロックなんですか？

MAY：僕とYUKARIはハードロックが好きなんですけど。でもバンドとしてはハードロックにはこだわってませんし。逆にヴォーカルが全面に押し出るような方が好きです。それと僕らは、時代の流れ等も無視することなく、上手く吸収していきたいと思ってますから。

――そういう面では時代性も意識してるし？

GO：意識はしてますけど。どっちかと言うと、先に出てきてる音楽は絶対に演らないです。但し、それがいい音楽であれば、もっと違ったやり方で吸収していこうと。

――例えば自分達にとってのオリジナリティってどの辺にあると思います？

GO：凄く華あるのみだとか、毒っ気だけのバンドだとか、一色という感じでなく、その華と毒の両方を同時に出せるバンドというのにこだわりを持っています。

――確かにスリーアイズ～って、サウンド的にもしっかりしてるし、ビジュアル的にもド派手だし、上手く両立出来てるバンドだよね。

MAY：やはりビジュアルにしてもサウンドにしても独自性を意識してますし。しかも両方とも常に進化していきたいですから。

――やはり常に変化は求めていきたいし。

MAY：そうですね。サウンド面もビジュアル面も常に進化していきたいですし。とにかくいつも何かをやらかしそうという点を意識してます。

――所で今回3曲入りのCD『THREE EYES JACK』を発売するわけだけど。せっかくだから1曲毎の解説をお願いしたいんだ。まずは1曲目の『FAKE』からいきますか。

MAY：この曲は凄くリズムが強調されて、しかもギターはトンガった音を出してるんだけど。でも、サビのコーラスのかけ合い

THREE EYES JACK

GO(Vo)

やヴォーカルの歌メロは聞きやすかったりとか。とにかくライヴでの勢いの部分と、いろんな事を演れるという姿勢が出てる曲です。

とにかく、単なるストレートなハードロックじゃないし、また単なるポップソングでもないしという所で、この曲から僕たち独特のカラーを感じとってくれれば…

GO：詞はですね、贋物という意味なんですけど。自分を過去に裏切った人達と、これから俺らを騙そうとしている人達への俺らからの気持ちです。

やはり生きてくと、バランスの中で生活していかなきゃいけないですよね。それが凄く嫌で。例えば本音でつきあいたいと思っても、駆け引きが必要になったりするのが、この歳になってわかってきちゃいまして。そういうのはホントは嫌だけど、でもこの世界で生きてくしかないので、俺はこういうスタンスで生きる、みたいな歌詞なんです。

――続いては『DEAD SILENCE』ですね。

MAY：まず、歌を意識して曲を作ったし、コーラスの絡みやサウンドとしても激しさを出せたし。3曲並べると、割とスパッと抜けてる曲ですね。ただ、比較的他の曲よりもウエットな感触はありますけど。

GO：歌詞に関しては、一番好きな人は一番憎い人じゃないかと。つまり可愛さ余って憎さ百倍みたいな。つまり、こっちが女の人に惚れちゃうと、逆にその女の人がこっち側から離れていっちゃって。その女の人を追いかけたりした事もあったんですけど。そういう時の情けない自分を歌ってるんです。また、女のいい思い出を永遠に胸に残しておきたいと思って、その女に永遠を求めたら、結局は彼女を殺してしまうしかないんじゃないかという、狂気な愛の歌でもあるんです。

――では3曲目の『L・S・D』は？

ちゃちゃ丸：こだわりもなくストレートに表現した曲というか。要するにライヴの勢いをそのまま楽曲に表した曲です。

GO：歌詞は危険なのでノーコメントです。

――なるほどね。所でこのCDって自分達にとってはどういった作品に仕上がったのかな？

GO：今回のCDはジャブだと思うんですよ。実際、まだストレートは出してないし。しかも今回は、打つ場所を的確に見定めて出したジャブだと思うんです。だからシーンに一石を投じたというか、始まるっていうか。

――当然バンドとしての今後の構想も、色々と考えてるんでしょ？

GO：とにかく今は僕達を観に来てくれるお客さんがいるというのがすごく嬉しくて。その人達を満足させたいという気持ちが一番強いんです。だからメジャーがどうこうというスタンスよりも、今は自分達の事を理解してくれる人達を更に納得させて、その輪を広げていきたいんです。その後の事はそのファンの子達と一緒に考えていきたいですから。

――実際、今ってかなりの勢いで動員を増やしてるわけだけど、動員が増えることによって、演る側の気持ちが変わっていったりってしないの？

GO：今はお客さん一人一人からパワーをもらってるって気がしてるんです。なんかお互いに成長しあってるって言うか。

ちゃちゃ丸：でも基本は何も変わってないよね。確かに動員が増えたり、客の歓声が増えたりっていうのはあるけど。根本的な所では何も変わってないです。

MAY：やはり動員が3人だろうと100人だろうと、同じライヴですからね。演る側の気持ちは何も変わんないです。

GO：とにかく勝ち進んでいくバンドは、名前負けしないバンドだと思うんですよ。

お客さんが増えてきたとしますよね。その時にパワーがなくてお客さんに喰われちゃうか、お客さんのパワーを吸収して、更に納得させてやるかという所が鍵だと思うんです。

――なるほどね。では続いては初めての登場ということで、キャラクター紹介をお願いしたいんだけど。まずはYUKARI君からお願いします。

MAY：繊細な人ですね。それでも演るべき事はこなしてくれるので、凄く信頼してます。

GO：一番年下なんですけど、人間的には一番まともだと思いますし。ライヴではバンドサウンドの鍵を彼は握ってますから。

ちゃちゃ丸：身体は細いけど、音は太い。でも車の運転はしっかりして欲しい。

――続いてちゃちゃ丸は？

MAY：コアな人ですね。ライヴでも凄く勢いを持ってるし、他のメンバーを煽ってくれるし。私生活は信頼出来ないですけど、演るべき事はしっかり演ってくれるし。他のベーシストよりも音も太いし。それとアバウトな性格も好きです。

GO：ちゃちゃ丸はライヴで精神的にひっぱってくれる人ですし。勢いの部分での特攻隊長みたいな役割の人だと思います。

YUKARI：勢いとノリの特攻隊長です。

――続いてはMAYだね。

GO：すごくいいソングライターだと思いますし、今後のサウンドの鍵は彼が握ってます。

YUKARI：彼はよくしゃべってくれるので、すっごく助かります。それにサウンドメーカーとしても信頼してますし。

ちゃちゃ丸：人の話を最後まで聞け。

――じゃあ最後はGO君ですか。

MAY：やはりヴォーカリストとしては罠ってますし。彼はタブーを犯しても許されるキャラクターというか。とにかく何に対しても真正面からぶつかっていきますし、今シーンに出てるタイプの中では凄く異色なキャラクターだし。この人も私生活は別にして信頼のおける人です。

YUKARI：ライヴではこいつが歌ってるから俺も叩けるんだみたいな信頼感がありますね。

ちゃちゃ丸：言ったことはちゃんとやってくれ。あとはすねるな（笑）。

とにかくメンバー全員に言えることは、みんな私生活がメチャクチャだと言うことです。

GO：ロックバンドを演ってる以上、隣の兄ちゃん的なバンドで演るつもりはない。やはりステージに立つために選ばれなければという心構えをいつも持つつもりです。いずれスリーアイズ〜から感じてもらえる日が来れば嬉しいですね。

ちゃちゃ丸：とにかく俺たちは型にハマルことなく、常に牙を剝き出して演ってくので、俺達に噛みつけって感じですか。

全員：とにかく俺達に噛みついてこい！

《ライヴ・スケジュール》9月26日＝目黒ライヴステーション、10月11日＝目黒鹿鳴館、11月3日＝原宿ルイード（with ビリー＆ザ・スラッツ）●問＝JACKオフィス（☎0492・55・5789）

VISUAL & HARD SHOXX INVASION

YUKARI(Dr)

ちゃちゃ丸(B)

TEXT:RAN HAYASHI

インディーズ ハードロック 最新情報

読書の秋、食欲の秋、そしてインディーズの秋だ！ それからX世界デビュー決定おめでとう。日本のロックシーンもようやく新勢力が生まれそうな気がするし、不景気なんかクソ食らえ！ という勢いで盛り上げていこうぜ〜、星子〝オヤジ〟編集長。

●歌も上手過ぎ、曲も短すぎのジョリー〝ドラエモンのイレズミ〟ピックルスが9月21日の横浜セブンス・アヴェニューを皮切りに西日本ツアーを行う。スケジュールは25日横浜ゴースト・ウォール、10月9日大阪ヤンタ鹿鳴館、12日広島ウッディー・ストリート、14日博多ドラムBe-1、15日大分TOPS、19日名古屋ミュージック・ファームだ。

●9月21日は目黒ライヴ・ステーションでポジパン系のイベント「グロッケン・スパイルVOL1」が行われる。出演は約半年振りに復活の大阪のジェルソミーナ、UNI-SEX、ヴィジョン99、ジル・ラブス。

●22日はステーションで定版のハードロックの日「男達の欲望」がある。出演はシェイプ・オブ・シングス、エズラ、ワイアード、シリアス、そして注目株と言われるエルドリッチ、CD制作中とウワサの夜叉。

●一方、目黒鹿鳴館では9月22日にピストンロッズ、23日には名古屋のシルバー・ローズのワンマン。尚、期間限定で受け付けていたシルバー・ローズのビデオは締め切りが9月30日になり、発送は10月前半になるようだ。

●ザズルより久々にCDをリリースしたローゼンクロイツが9月23日に新宿ロフトでワンマン、10月3日に川崎クラブ・チッタ、31日は片山エージェンシーの日で、ユースクエイクと目黒鹿鳴館でライヴを行う。

●ロフトといえば9月26日COLORのライヴも要チェックだ。また、フリー・ウィルの新人La mise a mourleのライヴが9月21日横浜セブンス・アヴェニュー、25日市川クラブGIO、24日下北沢シェルター、25日横浜ゴースト・ウォール、11月3日京都女子大学学園祭でライヴが行われる。

●東京に拠点を移し、精力的に活動をしていくというビリー&ザ・スラッツが9月25日に市川クラブGIO、10月3日目黒鹿鳴館、8日大阪クアトロ、11月8日目黒鹿鳴館でライヴを行う。CDのレコーディングするって?

●9月26日、市川クラブGIOにて、オールナイト・イベント「AREA」が行われる。出演は、ハーレムQ、BOLD RAID、ALL NUDE、BLOWZY他。

●9月26日は目黒ライヴ・ステーションで、CD発売記念の大阪のレイト・グリークと同じく通販の予約が殺到して大変で、しかも約半数がなぜか男のファン? という謎だらけのTシークレット・レーベル第1弾のスリーアイズ・ジャックがライヴを行う。ちなみにジャックは10月11日の目黒鹿鳴館で行われるSHOXXイベント、11月3日のイベント・ゲストで原宿ルイード、そして11月8日を皮切りにビリー&ザ・スラッツと東名阪ツアーを行う予定だ。それと、ちょっとしたプロモーション・ビデオの撮影も準備していて、目が離せない存在になっていくかもよ?

●また注目と言えば、同じく10月11日のイベントにも出演するホーンテッド・ハウス出身の名古屋の黒夢が9月26日に本拠地のミュージック・ファームでライヴ、10月28日は大阪ロケッツ、30日名古屋ミュージック・ファーム、31日には新宿ロフトでワンマンを予定。

●9月27日に目黒ライヴ・ステーションで、久振りに復活のCATCHのライヴがある。対バンはグレース・モードと博多のインペリアル・ガーズ。

●9月27、29日の目黒鹿鳴館ではキンヤ企画なので、いい意味でもその反対でも要チェック。29日に出演するザイアティーはコンフュージョン・トリップの改名とのウワサ?

●10月1日の目黒鹿鳴館は、あのハラ率いるライト&シェイド企画。2日は岡部マリ様のナノコ企画で出演は新生ローゼン・フェルドとパーティー・ルージュ。

●10月3日はステーションで、子れっず&ドジーのベースとドラムとしての参加で知られるフィールド・オブ・キッズの日。

▲THREE EYES JACK

●また3日そして翌11月3日には目黒鹿鳴館でディーキュセが頑張っているぞ。

●4日はマンドレからCDをリリースしたお笑い練馬マッチョマン、グレース・モード、元バベティーのギターOKトミーのニュー・ブランドがステーションで。

●5日はボジ&ダークサイケの日。着々と動員を伸ばしているリディアン・モード、スペア・クロウ、カモフラージュそして大分のセラビがステーションでライヴ。

●10月10日、体育の日といえば目黒鹿鳴館では恒例のパッション・ローズのライヴ。対バンは近々CDをリリース予定で、注目のHMバンドJOE-ERK。ハードロック・ファンは要チェックの日。

●10日のステーションはCDが好調のZ-NX、ヴィジョン99、インサニティー、シンジニー、元デカメロンのギターANDYが率いるラッキー・ボンボン。

●シルバー・ローズが10月10日名古屋ボトムライン、26日東京日仏会館、11月5日大阪ロケッツで東名阪ツアーを行うが、限定でソノシートを無料配布する。各会場で配る収録曲はそれぞれ違うとか、追っかけしろってか?

●10月11日はやってくれるぜ〜オヤジのSHOXXイベント。出演は今後インディーズ・シーンをガンガン騒がしてくれそうなバンドをピックアップ! SHOXXではこれからイベントをドンドンやってシーンを盛り上げていくらしい。予約は82ページを見てね。くれぐれも目黒鹿鳴館の電話番号を間違えないように!

●10月13日はステーションでスパイキー・ソシアル・スラム・スラッシング・ソサエティVOL1という長すぎて、ライターにとって嬉しい行数稼ぎのイベントがある。出演は、ガスティーから、元の名に戻した横浜の実力派ガスティー・ボムス、ブルティッシュ・ブルドック、精力的に活動しているアドミッションクルーらがバトルする。

●15日の目黒鹿鳴館はヴァイラスと音楽性がよく比較される博多のカリオストロ、スレイジー・ウィザードらのライヴ。

●サイケ・ハードの裏窓の企画「幻燈舎、霧の扉」が10月16日ライヴ・ステーションで。出演は裏窓、ニューロティック・ドール、ライヴのやたら多いZ-NX、そしてステーションでは珍しいジェラシック・ジェイド。

●17と18日の目黒鹿鳴館はベテランT-LTの2DAYSライヴだ。

●18日はR&Rブギーの日と題して、フラワー・チャイルドと元キラー・メイのVOレイノのラブがステーションに出演する。

●10月10日、ギターのJACKがシグナスのVOタイゾーらをゲストにザズル・レコードよりソロ・アルバム「DIVERT」を発表するジル・ド・レイだが、10月21日に新宿パワーステーションでワンマンを行う。

●23日は目黒鹿鳴館でディジー・ラック、デリンクエント、大阪のギルティー・ヴァイスらのライヴがある。

●25日は目黒鹿鳴館でこれからちょっと注目しといた方がイイと思われるメディアユースのライヴがある。何ヵ月も前から書きたい事があるんだけどなぁ〜。やめとこーっと!

●30日ステーションでは6月にフィールド・オブ・キッズとカップリングのハーレムQがドラムス急病の為、1曲しか演奏出来なかったが、この日に同じ企画を掘り起こした。

●東京一家なる集団がデモテープを作った! 中心となっているメンバーはYの連中とGにベースで手伝っている人物だそうだ。内容はカムフラージュ、グリムザカプセルの2バンドのオムニバステープで共に2曲ずつ入っている。ライヴで無料配布するとか。本誌のプレゼントコーナーにも注目!

●活動停止中のヴェルヴェット・アンドロア、関西で人気爆発のラルク・アン・シエル、華麗なる復活を飾ったローゼン・クロイツ、最初で最後の音源といわれるC・D・N・KENちゃん率いるアンチフェミニズム…etc92年最強のオムニバス・アルバムといわれる「GIMMICK」が10月1日、コロムビアレコードからリリースされる。で、10月10日クラブ・チッタ・川崎で発売記念のイベントが行われるぞ。残念ながら、アンチフェミニズム、ティラーザウルスはスケジュールの都合がつかなくて不参加だが、盛り上がることは間違いないだろう。9月20日よりチケットぴあで前売開始。開演はPM3:30の予定。

■11/18、インク鈴江でイベント「WILL」が行われる。出演はREDIEAN:MODE、Ange:Graie、ex OTHERSIDEのKNOBバンド。問い合わせ=田中プロモーション(03・3498・7822)

VØICE EXPRESS

☎0990-32-6548

この伝言板は、ファン同志の交流や、情報交換、また、友達募集などを目的に使ってもらうネットワークステーションです／　マナーを守って有効的にご利用ください。　尚、ご利用の際は次のルールをお守り下さい//　著作権・肖像権に関する物の売買は法律で禁じられています。また他人のプライバシーを侵害するようなメッセージや悪口を残すことは固くお断りいたします。　また、地域によってダイヤルQ2サービスの受けられない場合がありますのであらかじめご了承ください。（発信地／東京都）

—御利用のしかた—

1. ☎0990-32-6548 にアクセス
2. アナウンスを聞いて発信音の後に0をダイヤル！
3. **ダイヤル回線**　もう一度0をダイヤルして、説明を聞いてね ／ **プッシュ回線**　アーティスト番号と#をプッシュ
4. （ダイヤル回線）アーティスト番号をダイヤル　注）#はいりません！ ／ （プッシュ回線）伝言を聞く➡7#　伝言を残す➡3#

フリーBOX・001#〜099#

このフリーBOXは、プライベートルームとしてご自由にお使い下さい／　例えば、アーティストBOXにメッセージを残すときに、返事はフリーBOXの007#のほうに入れておいてください//　というように使います。

総合案内……………………999#

ご要望・開局BOX………100#

貴方の好きなアーティストのファンと友達になりたいときや、情報交換したいときなど、この「ご要望・開局ボックス」に投稿してください／　ご要望のあったアーティストのファンの方のために専用ボックスを開局いたします。　例えば、私は×××のファンですが、ア行の紹介を聞いてもありませんでした／是非×××の伝言BOXをつくってください//　とか僕は×××のファンですが、また××の伝言BOXがないようなので、フリーBOXの＊＊＊#のほうにファンの方はメッセージを下さい／　というように使います。
また、ここに名前のない場合は各行の総合案内でチェックして下さい//

ア行 990#　101#〜144#　501#〜516#

101 # アースシ○イカー
102 # AI・N
501 # 哀○ 翔
104 # UP-BEΔT
502 # 東 幹×
107 # ALCΔRD
503 # ア×ジー
109 # THE ALFEO
110 # ANTOEM
504 # アン○イス
112 # THE YELL・・MONKEY
505 # 安全×帯
114 # 石川よしΔろ
115 # 泉○しげる
116 # 稲垣×一
117 # ×上陽水
118 # 今井Δ樹
119 # ○野清志郎
506 # WINΔ
507 # ウッチャ××ンチャン
508 # WATEΔ CLUB BAND
509 # ウル○ルズ
124 # エ・クス
125 # ΔRB
126 # 江○洋介
128 # え ×
510 # EPΔ
129 # M-ΔGE
130 # エレフ○○ト・カシマシ
131 # L.L.BROTHE××
132 # AURΔ
133 # 横×坊主
134 # 大江○里
135 # ○沢誉志幸
511 # 小川×潮
136 # ×村孝子
137 # 岡村Δ幸
512 # 荻野× 洋子
513 # ○崎亜美
139 # 尾○ 豊
140 # Δ田和正
142 # 織×裕二
514 # 男闘呼Δ
515 # 小○卓治
516 # ΔLWAYS

カ行 991#　145#〜186#　517#〜532#

148 # KΔTZE
149 # KΔTSUMI
517 # 風間ト○ル
518 # CΔSIOPEΔ
520 # 加○いづみ
521 # 角松○生
151 # かま×たち
153 # ○門達夫
154 # COLΔR
156 # 川○かおり
157 # KΔN
522 # GΔO
160 # ○川晃司
162 # GWINKΔ
163 # ○肉少女帯
523 # Δutemen
524 # 工○静香
166 # 久保×利伸
169 # GRA・・VALLEY
525 # KRYZLER & KOMPA・・
526 # グランド○ラム
527 # け ×
176 # 幻覚○レルギー
177 # KENΔI
178 # ○泉今日子
528 # COC・
529 # 木×武彦
180 # 子供ば×ど
181 # GO-ΔANG'S
183 # CΔBRA
530 # 小室哲哉
184 # ○米CL+B
185 # THEΔOLLECTORS
531 # CONO'LEX
532 # ○藤真彦

サ行 992#　187#〜241#　533#〜550#

533 # 斉×由貴
190 # ○本龍一
191 # SAKANΔ
192 # 佐×間 学
534 # ○谷健次郎
194 # サザン○ールスターズ
535 # ×だまさし
195 # 佐野元○
197 # さねよし Δさ子
536 # Subsonic Fac・・・
537 # 沢田○二
198 # しい○んきい
199 # SIOΔ
200 # ZiΔKILΔ
538 # 柴○恭兵
201 # ZIGΔY
202 # SHΔDY DOLLΔ
207 # ΔISTER'S NO FUTURE
539 # SING×IKE TALKING
540 # ジッタ○ンジン
209 # シーナ&ザ・ロケッ×
213 # JUSTY-NA・・・
217 # JUN×××WALKER(S)
541 # J-○ALK
542 # G-ク○フ
543 # ΔADOES
544 # 陣○孝則
218 # Δ内大蔵
219 # ジル・○・レイ
222 # ZOΔ
223 # SKAF・・K
224 # ○かんち
545 # 鈴木○之
546 # スターダストレ・・・
226 # ΔTAR CLUB
227 # ×チャダラバー
228 # STΔLIN
230 # THE STREET SLID・・・
231 # THE STREET BEA・・
232 # Strawbelly・elds
234 # SPARKS ΔΔ GO
547 # SΔY
548 # SMΔP
549 # TΔRILL
237 # ×飢魔II
239 # Sepia'・Rose・
241 # SOFT BALL・・
550 # SOLI・・OND

タ行 993#　242#〜273#　551#〜565#

242 # 大事MANブラザーズ×××
243 # DIAMO・・YUKAI
244 # Die in ○ries
245 # 高○ 完
246 # ○野 寛
248 # 竹内ま○や
250 # た ○
551 # ○中正義
552 # 田原○彦
553 # ダウン×ウン
252 # チェ○カーズ
253 # CHAΔE & ΔSKA
254 # CHAR・
554 # ChaΔ
555 # TUΔE
256 # 辻 ×成
257 # DECAMER××
556 # Δ-SQUARE
258 # TΔN
259 # Δ-BOLAN
260 # DE・P
261 # De-LΔX
264 # 電気グルー○
557 # Date ofΔirth
558 # Δe+LAX
559 # TERRY ΔIERCE
560 # 寺○恵子
268 # ××スカパラダイスオーケストラ
269 # 東京ヤンキ○○
270 # ○.永英明
561 # 所○ョージ
562 # 東京パノラママンボ○○○
563 # ○○パフォーマンスドール
273 # Dreams Come××××
564 # Dog F・・・
565 # ×んねるず

ナ行 994#　274#〜286#　566#〜570#

275 # 永井○理子
276 # 中島み○き
279 # ×渕 剛
280 # Δ村あゆみ
566 # 仲○トオル
567 # 中森明○
568 # 中×美穂
569 # ΔINJA
281 # NEWES・・ODEL
282 # ×ユーロティカ
284 # NO・KO
570 # ○村宏伸
286 # 野○義男

ハ行 995#　287#〜346#　571#〜579#

287 # BY-SEXU○○
288 # HOUNΔ DOG
289 # BAKΔ
290 # BAKUFU-SLU・・・
291 # BUΔK-TICΔ
292 # ΔERSONZ
571 # ハバナ××ソチカ
572 # 林田健○
573 # Valentin・.C
574 # バナナフリッ○○○
297 # バブルガム・××ザーズ
298 # 浜○省吾
299 # ○田麻里
308 # BEGIΔ
309 # B'Δ
575 # 光GEN○○
576 # ピン××ラウド
319 # ×室京介
321 # 平松愛○
322 # Biily & The S・・・・
324 # PIN・・APPHIRE
326 # FAIRΔHILD
327 # ΔENCE OF DEFEN・・
328 # ○山雅治
577 # 福○眞純
578 # FLO'ΔERS
329 # THE BOOΔ
330 # THE PRIVA・・・
332 # THE BLANKEY○ETO ITY
333 # Flipper's gui・・・
334 # THE BLUE HE××TS
335 # PRINCESS PRINC○○○
336 # HEΔVEN ○
579 # HO・・EGS
340 # BΔ ØWY
341 # BO GUMBOS
343 # 布袋×泰

マ行 996#　347#〜364#　580#〜586#

347 # 槇原敬○
348 # The 真心ブラ×××
350 # ○.岡英明
580 # 牧×里穂
581 # 松田聖×
351 # THE・・CAPSULE MARKET'S
352 # 松任谷Δ実
353 # マルコシアス・××ブ
354 # MALUTI-ΔAX
582 # 三×博史
583 # 観月あΔさ
584 # 宮沢り○
355 # MR.CHILDR××
359 # MOJO-C・・・
360 # THE MODΔ
361 # ×木雅弘
362 # MΔRRIE
585 # MORE D・・P
586 # 森高○里

ヤ行 997#　365#〜375#　587#〜593#

588 # 安田成○
589 # 柳葉敏Δ
590 # ×本英美
365 # 矢×顕子
366 # YΔPOOS
367 # 山下久×子
368 # 山Δ達郎
369 # 憂歌×
371 # UNICO××
591 # ○山輝一
592 # YOSHI××
593 # 米倉○紀
374 # 吉○栄作

ラ・ワ行 998#　376#〜400#　594#〜600#

377 # LOUDΔESS
378 # ΔABBIT
594 # LUCY'S DRI・・
595 # LOV××SSILE
385 # LIN×BERG
386 # Luis〜Δary
387 # LUNA SEΔ
389 # ○ 蘭
391 # LADIES R♂♀×
596 # レΔッシュ
597 # レッドウォーリア××
598 # YΔO
599 # 和久×映美
600 # 渡辺満Δ奈
400 # ○辺美里

Prime-NET

中野区中野5－60－2　☎03－3228－2051

＊この番組は7.5秒10円の情報料＋通話料がかかります。電話のかけすぎにはくれぐれも注意してください。
尚、このVOICE EXPRESSはアーティスト所属事務所・ファンクラブとは関係ありません！
このサービスを御利用になった結果トラブルが生じても当社はその責任を追いかねますのであらかじめご了承ください。

ミュージシャンが作るページ ARTIST'S BOX

またボーッとしてる間に夏が終わってしまった。とにかく今年の夏は暑かったよねェ…。はやく、あっつ〜い鍋のオイシイ季節にならないかなぁ。でも、あんまり寒いのもイヤだけど…って、どーでもいいか、にゃははは。さて今回から、GRÁNDSLAMのJUNYAの新連載も始まるし、このコーナーからますます目が離せないのだ——っ!!

〈新連載第1回〉

ラジコン日記

JUN-YA(GRAND SLAM)

ラジコン日記

加藤 純也

『SHOXX』を読んでるみんな、明るい性生活を送ってるかぁ〜

今回からは、私加藤純也が、性生活日記を書く事になりました。

昨日の夜は……。ではなく、ラジコン日記を書こうと思ってます。よろしく。

オレは、家庭環境のせいで赤ン坊の頃からタイヤが4つついてる物に興味があって、写真を見ても必ずミニカーを持っているという『天性』のオタクなのです。こんなコトみんな知ってるっつーの!!

まー前置きはもう止めて、そろそろ本題にへりましょう。

実は、小学生の頃にラジコンをやってて、レースに出場した事があるのです。その頃は、今、もっともスタンダードな、RS540モーターが出たばかりで、オレはその1ランク下のRS380モーターを使用していたのです。

簡単に言うと、F1のホンダV12に、F3の無限エンジンで戦う様なモノです。

そうであるにもかかわらず、50人中、6位に入ったのです。もちろんRS380モーターでは1位です。

『オレはきっと天才だ!!』

とひそかに思うのもムリないでしょう?!

きっとカート時代のセナもそう思ったんだろうなぁ……。

そうやって、ラジコンを楽しんでたけど、やっぱり、16才17才になると当然、モノホンの車に興味が出てきて、今の状態になったのは、読んでるみんなもよーく知ってるだろ?

じゃなぜ今更ラジコンなのか?

それは、最近のラジコンのメカニズムと動き（挙動）が実車とほとんど同じ！という事実を発見したからです。

まぁこれから、かなりオタッキーに進めていこうと思ってるのでよろしくね。

TETSUの 占いの部屋

占い師：TETSU（幻覚アレルギー）

今月は前置きなしでいきますんで皆さん心して読む様に!! それでは——

（その一） 私は将来どうしても日本航空のスチュワーデスになりたいのです。専門学校のスチュワーデス科に進学を希望しています。どのくらいの確率でなれるでしょうか(N・M)

（答） 悪くない人生の選択だと思われます。スチュワーデス等の女性だけの専門職に対して才能を発揮できる様です。ただし一度や二度の困難な状況でなげださない事です。深い教養を得るためならば多少の遠回りは必要であると思われます。例えば語学に問題が生じたならば別の学校で補い再度チャレンジする等、あきらめずに続ければ必ず目標は高確率で達成されると思われますので根気よく最後までがんばって下さい。

（その二） 私は中2の女の子です。私は学校を卒業したら家を出て友達と二人暮らしをしようと話しています。良い事だとは思っていませんが——。 （愛ちゃん）

（答） 手紙では親に見つかってしまうかと心配してありましたが、残念ながら見つかってしまうでしょう。まずあなた達の相性は悪くありませんが二人の目標とすべき人生が今の所見えていない様です。まず家を出てすべき事を見つける事からはじめて下さい。そのあとに両親への話し合いの場をもつべきだと思われます。今のままでは常識的にいっても反対されるでしょうが、先にも書いた様に二人の人生の目標を見つけそれに、対応できる人間性を身につければ若くても納得させられるはずです。まずは自らの人格を高める努力から始めて下さい。

（その三） 私は昔、大好きな人がいました。純愛に近いものだったのですがある日その人に犯されそうになってからSEX恐怖症になってしまった様です。今、好きな彼にならと思ったのですが体がおかしくなってしまって

…。

（AO子）

（答） うまく書けませんが現在のあなたの状態は人生に試されている時期とでもいいますか…。過去にふりかかってきた災難をこのまま ひきずって人生を終えてしまうのか、それともこの試練に耐えて新しい人生に向かって進みだせるのかを試されている時期のようです。無理に恐怖感を取りのぞく事はないと思いますしまた無理に肉体関係を結ぶ事もありません。残念ながら今の彼氏のデーターがありませんでしたので良くわかりませんがSEXは恐いと思ったままでもかまいませんのでまずは今の彼氏と精神的快楽、解放を得る様に努力して下さい。そこから新しい道が開けてくるはずだと思われます。

さて今回は特別企画としまして最近また、とくに多くなってきているXのメンバーとの相性占いを個人別に占ってみたいと思います。皆さん、なかなか直接会える機会が少ないと思います。そこでやはり思いを伝える手段は手紙になりますよね。そこで10月、11月中に送る手紙のラッキーカラーを特にその時期相性が良さそうな星座の方をしぼり占ってみます。自分の星座が無かった人はごめんなさい。

10月、11月に相性が良いという事で次の機会までまってみて下さいね。

〈TOSHI〉山羊座→ダークブルー

〈YOSHIKI〉双子座→シルバー

〈HIDE〉蟹座→ホワイト　牡羊座→赤

〈PATA〉乙女座→マリンブルー

水瓶座→赤系のストライプ

という訳でした。よかったら試してみて下さいね。今月はこんな所で失礼します。まだまだ新ネタまってますんでよろしく。

9月24日渋谷オンエアーを皮切りにツアーがありますんで皆さん遊びにきて下さい。今回も私は出場させてもらいますんでよろしく。

それでは次回まで、ごきげんよう。

P.S ㋖占い「そんな物はあてにならん。おけらになるまで戦え！」by ㊕

——だそうなので今回は無しです。

俺のペット自慢

真矢（LUNA SEA）

本名はミクロ、小さいから。最近は段々言う事を聞かなくなって凶暴になってきたから無敵ちゃんって呼んでるの。飼い始めたきっかけは、寂しいから。本当は犬が欲しかったんだけど、泣くじゃない。ウサギは泣かないからね。もうかなり人間になついてるよ。性格も結構人なつっこい性格で、犬まではいかないけど、猫に近いかな。でも、ウサギっぽくきまぐれだけど。

よく、壁とかかんだり、床をつめでキーッってやったりするんだよね。ウサギって、土をほって自分の場所を作って生きてるじゃない。それがあるみたいなんだよね。だから、床とかによくキズがつくけど、まっ、そんなのはカワイイからいいかっていう感じ。

あと、寝てるとすぐ髪の毛を食べちゃうの。切って食べちゃうんだよ。オレの耳元で、なんか音がするなぁーって思って見てみると、オレの髪の毛食ってるの。だから寝る時はちゃんと小屋に入れてる。いっしょに寝て、気がついたらスポーツ刈りにされてたら大変ですよ（笑）。紙とかも食べるんだよ。だから本とか、ボロボロになっちゃうしさ。でも、カワイイからいいんだけど。

好物はね、ちゃんとしたウサギ・フードっていうのがあるんだけど。それはべつとして、人間の食べる物も好きで、チョコレートが好きなんだよね。言う事聞かなかったりすると、チョコレートの入っている箱をカラカラ鳴らすと、よってくるの。いちごポッキーとかも大好き。

写真を見てくれればわかると思うけど、ウサギってこういうカッコするイメージってあんまりないじゃない。でも、家にいる時は、こういうカッコばっかり。ベローンとしてる。あと、土をほるマネとかベッドの上で良くやってるから、いっしょにオレもやると怒るの。「オマエはやるなっ」って（笑）。

それと、トイレが好きなんだよね。トイレに木みたいのを置いているんだけど、食べちゃうの。オレ、朝顔を育ててるんだけど、みんな食べられちゃって、ダメなの。全然育たない。

顔をなでると目をつぶって、気持ち良さそうな顔をするんだ。やっぱり、顔を見るとホッとするし。すごくカワイイ。

ARTIST'S BOX

ミュージシャンが作るページ

KEN（LUIS-MARY）

いたずらは楽し

「中学生の時に、友達とみんなで下校して、小学校に潜入するんですよ。机って、木ですやん。彫刻刀で彫ってあるんですよ、いろんな言葉が。危ない方面の言葉とか。

その頃、『突然ガバチョ』って流行ってて（笑）、そのテレビにらめっこの言葉を書くんです、笑ける文章を。

それで、次の日また入って行ったら、その机が除外されてるんですよ。俺が使ってたやつが一番ひどかって、危ない言葉とか書いてあって、部屋の隅っこに押しやられて、新しい机が来ていたんです（笑）。

黒板には、"ブラックキャッツ参上"って、入ったら絶対書いてたんですよ。今言うけど、それは俺です（笑）。」

PICTURE GALLERY

ドラエモンだよ〜ん

ガオ〜

イラストレーター

LEZYNA

（ストロベリー・フィールズ）

L'Arc〜en〜Ciel

イラストレーター

HYDE

（L'Arc〜en〜Ciel）

IZUMI

IZUMIのプルトニウム劇場

画：IZUMI（AION）

「とくにこのへん！」が構想10年にして、ここによみがえる!?

（はじめに）

本名：IZUMI、昭和××年11月3日生（文化人にふさわしい文化の日）ある時はミュージシャン、又ある時は漫画家、そして又ある時は芸術家。彼はまさに人間のからを越えて、ネズミくんよりも軽く、リューくんよりも強い、実はスーパーマンなのかも知れないわけないね!! ではははじまり〜っ。

〈IZUMIからのメッセージ〉

ネズミくん、リューくんファンの皆さん、こんにちは!! いつもありがとう。アイオンのライヴが9月22日新宿パワーステーションで。そして10月にはツアーをやるんで来て下さい。ニューアルバム「愛音」もヨロシク!!

IZUMI 先生へのファンレターのあて先は、SHOXX or 〒107 東京都港区南青山4-13-15 （株）ディアフレンズ「IZUMI／」係

A ARTIST'S BOX

ミュージシャンが作るページ

とってもタメになるお料理教室

目玉どんぶりの作り方

大山正篤(ZIGGY)

「どんぶりに、ご飯をよそいます。それに、目玉焼きをのっけます。終わり(笑)。調味料なし。玉子は、半熟でのっけるのがポイントです。ハードボイルドに焼いてしまうと、何の意味もなくなってしまう（笑)。

お手軽で、栄養もほどほどで、なおかつ汚れるのが、フライパンとどんぶりひとつですむという、ひとり暮らしのアナタにおすすめです（笑)。」

OH, MY CHILDHOOD!

SUGIZO(LUNA SEA)

「性格が2つあって、家の中でジックリと物を作るのが好きな部分と、活動的に外で遊ぶのが好きな部分とね。その頃の思い出で一番強いのは、毎日バイオリンを習わされていた事かな。結構それが苦しかったかな。3才の時から高校位までで、中学になったら段々反抗する様になってやんなくなったけど。今になってみればもっとやっておけば良かったと思うけどね。だから、何にも考えずに遊べる子供じゃなかった。何か不安とか不満を持ちつつっていう。ただ、基本的な性格は今とあんまり変わらなくて、追求心が異常に強いっていうね。あとは、結構いじめっ子だったかな。ケンカばっかりしてた。凄い先生に怒られる子供だったし。だから結構、親とかにも迷惑をかけたと思う。

で、中学生の時は逆におもいっきり閉鎖的なやつだった。その頃は自分の中で色々な新しい発見や葛藤があったり、人生論とかも考えた時期で。とりあえずひねくれて、インキなやつだった。中学時代は今のオレが一番嫌いなタイプの憎たらしいやつだったね。」

自画像公開

「私は誰でしょう!?」

SHO(BY-SEXUAL)

クイズ「これは何だ!?」第6回

出題／RYÖ(BY-SEXUAL)

問題です。RYÖが画いたこのイラストのカメの名前は、何でしょうか!? ヒントは絵の中にあるョ。わかった人は、ハガキに答、住所、氏名を書いて、〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F 音楽専科社SHOXX「これは何だ⑥」係まで送ってね。正解者の中から、抽選で1名様にRYÖ直筆の、この絵をプレゼントしちゃうよ〜。

（〆切＝92年10月20日必着）

VOL.11の解答

正解は百太郎でした。みんな、たくさんハガキどうもネ! 幸運な当選者となったのは、東京都杉並区の大和田恵子だ!! ハズレたキミも、また頑張ろう。

失敬! DEANの先取りシネ・サロン

BY: DEAN(AION)

ハウスシッター 結婚願望

こんにちは、AIONのDEANです。この本が出る頃にはすっかり秋になっていると思いますが、皆さんは夏休みにどんな映画を観にいきましたか?

今回紹介するのは、ちょっと前に全米で公開された「ハウス・シッター」。出演しているのは、ゴールディ・ホーン（俺は昔からのファン）とスティーブ・マーティン。この2大スターの共演ということもあって、全米でもヒットした作品。内容はまぁ、フトしたことで出会ったこの2人の偽装結婚がさまざまな人間模様を浮き彫りにしていくコメディ・タッチのストーリー。今回この映画をNOVと一緒に見に行ったんで、まずNOVから感想をどうぞ。

NOV：お久しぶりです、NOVです。

DEAN：NOV、このコーナー初めてやった?

NOV：2回目や、「オーメン4」以来。

DEAN：また懲りずにお招きいたしました（笑）。で、今回のはどうやった?

NOV：俺の好みと言えば好み。コメディが好きでハッピー・エンドになるのが好き。今回のやつってコメディなんやけど、笑かすだけじゃなく、ちゃんとしたシリアスっぽさもあった、と。でも現実っぽくないけどね。

DEAN：そうかなぁ?

NOV：現実には有り得ないよ（笑）。

DEAN：俺はアメリカっぽいなって思ったけどなぁ、発想自体が。

NOV：それとコメディでも、その1部分だけ哀しい部分とかあるやん?俺ってそういうので泣けてしまうな。

DEAN：（笑）めっちゃ単純!

NOV：単純な人間だからね、私は（笑）。その部分で笑ったり、ついつい見入って泣いてしまうタイプやね。

DEAN：O型ならではやね（笑）。

NOV：今回の映画って両方兼ね備えてるから、二重の楽しみ方があるよって。ちゃいますか?（笑）

DEAN：NOVらしい（笑）。まぁ、俺もハッピー・エンドで終わるの好きやから良かったな。

NOV：今回、ひとりひとり人の顔が変わっていくのが面白かったな。主役のグエンいるやん?あの人、だんだん美人に思えてきた。

DEAN：あれってやっぱり役者の腕やろね、感情表現とかの。コメディやる役者ってうまい人多いよね。

NOV：うまいよなぁ。いろんな表情が出来るというか。

DEAN：あと、家族っていう部分?日本とアメリカの違いを感じさせる映画でもあった。

NOV：ホーム・パーティっていう感覚、俺メッチャ憧れるわ。

DEAN：俺も! ……といいながら、この対談はまだまだ続くんですが、スペースがありません（笑）。この先どんな話しが展開されたのかは、皆さんの目で確かめて想像して下さい。まぁ、そういう訳で前号でお知らせしたチャッキー情報は引続き募集中!（あて先は、SHOXX「失敬! DEANの先取りシネサロン〝ハイリー・ホー!!チャッキー〟」係まで）それとAIONのミニコミ、DEATHRASH BOUNDの2号が出来ましたので、購読希望の方は1000円を為替か書留で下記まで送って下さい。ではライヴ会場でお会いしましょう!ということで、今回はこれにて失敬!

〒163 新宿区新宿郵便局留
AION／DEATHRASH BOUND
購読希望 係まで。

ユニヴァーサル映画／UIP配給 監督／フランク・オズ 製作／ブライアン・グレイザー 出演／スティーブ・マーティン ゴールディ・ホーン 9月中旬よりニュー東宝シネマ1他全国東宝洋画系にて公開

SHOXX 恒例特別企画

ミュージシャンが語るシリーズ
今回のテーマ

「変身」

イラスト／シマあつこ

今回のテーマは、"もしも1日だけ変身できるとしたら、何になって何をしたいか?"。このコーナー始まって以来の"もしも〜だったら?"企画なのだ。だから、長さんになった気分で、さぁ、いってみよ〜っ!!

AION

SAB 「月並みですけど、透明人間ですね。で、殺人以外の犯罪をしたい。」

DEAN 「チャッキーになって、世界中を荒らしまくる。人殺しはしないから、のぞき。」

NOV 「プロ野球の選手。もちろん阪神タイガース。チャンスがくると、必ずホームランが打てて、三振する時は三振して周りの人達にはバレない、超人っていう役回りがいい。」

IZUMI 「神になりたい。すべてが手に入って、何でも出来る、人間が思っている神以上の神。」

Gilles de Rais

JOE 「女になって、ジル・ド・レイのライヴを見に行きます。ワンフとして。」

STRAWBERRY FIELDS

SHU-KEN 「ラブラブファイヤーになって、オジンガーに乗りたい (笑)。」

福井 「ウルトラさんになって、地球を守りたい (笑)。」

LEZYNA 「スーパーマンになって、地球を守りたい (笑)。」

SEISHIRO 「スパイダーマンになってビルの透き間をスイスイと通り抜けて、素早く現地に行くことができたらいいなと思います。」

LUNA SEA

RYUICHI 「透明人間になって、まだ僕のことを知らない、僕の好きな女の子の見上げる泣き出しそうな空になりたい。」

J 「女の人になってみたいな。女の人の考えてることとか知りたい。だから、違う人って意味だな、結局。」

真矢 「神サマになりたいですね。神サマってどういう人なんだろうって、自分で分かりたい。神サマになったら何が出来るのかなぁーとかね。そして、みんなから拝まれたい。拝んでくれてる人に、何を感じているのかって事も知りたい。そういうのを知って、本当に何かしてくれるんだったら、オレ神サマを拝みまくっちゃうからね。どれだけ能力を持っているか分かった上で拝む、とこういう訳です。
あと、オレの周りに直接いる人になって、他人から見たオレっていうのも知りたい。」

ZI : KILL

TUSK 「責任をすべて捨てて、たくさん人を殺したい。いらない物が多すぎる。」

SEI-ICHI 「すご腕のパチプロになってもうける。ちっちゃいね、夢が。」

JACKS'N'JOKER

TATSU 「透明人間になって、世の中の裏側を見てみたい。」

BY-SEXUAL

SHO 「女装は実際やったからなぁー。変身とかいうより、ドラえもんがいてくれたらいいなぁー。いわゆるのび太君になりたい。」

NAO 「国を動かすような偉い人。で、とりあえず横山やすしさんを当選させますね。」

DEN 「神様でしょう。ボーッとしていて

親愛なるファンならびに関係者の皆様へ

森重樹一

突然ですが、8月17日の日本武道館に於ける"ZIGGY COME ON EVERYBODY TOUR"の最終公演をもってギターの松尾宗仁、ドラムの大山正篤がバンドから脱退することが決定しました。

約一年半という活動休止期間(アルバムのレコーディングも含め)を経た我々の活動には残念ながら、終始どこかかみ合わない歯車のようなしっくりといかない感じがつきまとっており、各々のメンバーがその不確かな"ずれ"を違った形で捉えていたように思います。四人四様にバンドを存続させるべく努めてきましたが、この四人で既に約六年という時間、ZIGGYを続けてきて、個々の音楽的興味の対象や、音楽そのものに対する姿勢にも変化が見られるようになりました。メンバー全員にとって6年前のZIGGYと現在のZIGGYとはまるで別物なのです。バンドは生きているのだと改めて実感します。

変化や成長はそれ自体とても素晴しいことだと思うし、ZIGGYの四人のメンバーが確実に六年前よりミュージシャンとして人間として大きくなれたのなら、何を云う事もないです。但し、バンドという一つの共同体を中心に考えるのであれば、バンドの方向性が最重要視されなければなりません。そのために個人的には納得のいかないこともあるはずです。

今回、このような結果になったのにはいくつもの要素が複雑に絡み合っています。ただ、唯一、解って頂きたい点は、音楽は我々にとって最も愛すべきもので、人生そのもの、と言っても過言ではない、ということです。その音楽により誠実であるために各々がより自分を生かせる場所で活動するべきだと判断したということです。

今回は決定した事実を皆様に報告するだけしかできませんが、後日違った形でより詳しい事情を説明させて頂きたいと思います。

も一番怒られない人だからね。昔から言ってるんですよ。『何になりたい?』って聞かれると、神様って。」

RYO「女になって、オレへの文句を言わせてまた元のオレにもどる。きっと、ひどい事を言うハズだからね。それで、とっちめる。」

今度ライヴ見に来てよ

えー困るわー

Eins : Vier

HIROFUMI「飼いネコ。1日中好き勝手できれば、誰に飼われても。」

DIE IN CRIES

KYO「女の人になってみたいかな。性格がこのままで、形だけ女になっちゃったら意味がないんだけど。やっぱり、わからない部分ってすごく多いんだ女性って。」

東京 YANKEES

NORI「やっぱり透明人間とかになれるんだったらそうなって、若い女性とかが一杯入っているオフロとかで、一日ボーッとしていたいですね。」

UME「お金持ちの馬鹿息子かなんかになって、沢山金使って遊んでみたいですね。手始めに競争馬なんか買いまくって、一代でつぶしてみたいですね。」

AMI「小学生にもどって、やり直しをしたい(笑)。」

UDA「特にないですね。今のままで十分です。」

ZIGGY

森重「やっぱり、鳥になって空を飛びたいかな。鳥はいいなーと思うもの。よく俺の車にフンをかけていくのは許せないけど(笑)。あの無責任さと、でもきっとどっかで生きてくために争ったりとかしてて。義務もあり、そそうをしたりとかそういう勝手なこともしつつ、だけど空を飛ぶ自由があると。まさに私のいきたい境地かもしれない(笑)。」

黒夢

清春「女性になりたいです。自分のことを、好きになってくれる女性になりたいですね。自分が、どういう風に見えるのか。

あともうひとつ、絶対ムリですけど、モーリーさんになりたいです(笑)。」

臣「女性ですね。牧瀬里穂になって、1日中鏡を見てようかな(笑)。」

人時「自分の身近な人間になりたい。自分以外の人。自分がどんな人間かっていうのを、他人から見てみたい。」

DECAMERON

MASAYUKI「バビル2世になって、ロプロスの背中に乗ったり、ポセイドンと一緒に海へもぐったり、ロデムと一緒にたわむれたり。それで、悪党を退治したいですね。世の中の人の為に頑張りたいです。」

GARGOYLE

TOSHI「やっぱり、女性になってみたいですね。カツジくんと、ちょっとつきあおうかなみたいな。」

SILVER ROSE

KAI-KI「別に、エッチとかそういうのじゃないんですけど、透明人間になりたい。悪いことも何でもできるし。」

DEEP

JYU-ICHI「とりあえず、このまんまでいいです、別に。特になりたいものがないっていうか、満足してるわけじゃないですけど。といって、他に何がいいかなって思うと、特別ないですね。」

ATSUSHI「魔法使い。何でも可能だから。」

RAY「イイ女になって、モックンに抱かれたいです(笑)。あとは、AVとかやって、お金もうけしたいですね。あと、のび太に変身して、ドラえもんにいろいろ出してもらって、大金持ちになりたいです。」

JUN「俺もこのまんまでいいです。いっぱいあるけど、しぼれない。何かになれるんだったら、いろいろ考えます。そういう機会があったら。」

LADIES ROOM

百太郎「総理大臣になって、オレの意のままに国を動かしたい。百トラマンになって、怪獣と戦ってもいいけど…。あっ、女になってイッてみたい。」

GEORGE「プロ野球選手になって、試合に出たい。満員の観客の中で、試合に出たい。引退試合をやってほしい(笑)。1日だけでしょ、引退試合でいいや。」

LUiS-MARY

山下「野球選手にはなりたいなぁ。やっぱ西武の5番ぐらいが。5番・デストラーデ。」

KEN「蚊にでもなってみようかな。毛穴を探してみたい。」

丸山「女優かな。いろんなカッコイイ人と、何でもできるでしょ(笑)。あ、俳優の方がいいですよね、どっちかというと。でもやっぱり、いっぺん女になってみたいなぁ。」

HAINE「松雪泰子の彼氏になりたい。とりあえず、ナイス・ボディの女のコになってみたいですね。

以外とね、ドラえもんとかって損なんですよ。ドラえもんは絶対イヤ。のび太になりたい。で、僕がのび太になった場合は、もっとダンディで、キメキメな感じに(笑)。ドラえもんのつれになりたいです。」

岡本歩さん 渡辺かおるさん 坂牧宏美さん 渡辺珠美さん 他、みんなお手紙ありがとう。切手を入れてくれる方もいるのですが返事が書ききれなくてごめんね〜〜。

8ビートギャグ（国内版）
決死のフォトセッション

シマあっこ

ヘアー・メイクの亀山氏
☆子オヤジ
カメラマン 菅野氏
スタイリスト 高橋嬢（右） 須東嬢（左）

×月×日都内某所で HIDE&KYOのフォトセッションがあったので出かけて行きました

この日のHIDEのいでたちは

大槻ケンヂか戦メリみたい

大槻ケンヂ

戦場のメリークリスマスの坂本龍一

一方のKYOは

最初にHIDE 次にKYO そしてツーショット 最後にこの日のハイライトの水中バレエ……じゃなくて水に入っての撮影が待っていた

うわーっ

すてきなインテリア

ツーショット撮影に入るお二人さん

撮影に使ったお店の人

当店の会員に入会されますといろいろ特典がございますが

いかがでしょうかっ!?

は……はい

星子さんちょっとそこに立ってみてくれますか？

ケロ？

笑わすんじゃねーよー

きょ～おちゃん

二人が立つと絵になる店内も……

こちらですかぁー 菅野さーん

耽美に描こうと思ったんですが つい…

あっと言う間にポルターガイスト

はい そのまま垂らしてみて

お… おめーら何すっだ!

はーい お疲れさま 先にプールへ行っててください

う… は…い

そんなことは何も知らないHIDEちゃんユリを持つの図

くしゃっ!!

おっこりゃいい

……と店のユリを勝手に借りるオヤジ

お疲れさまー じゃ次行きましょう

すでに日は落ちかけ おまけに涼しかった この日―― どーなる 決死の撮影 ……

うっへ～～っ! ここに入るの?

ヒャ～～ッ かわいそ～～っ

こりゃー 寒いよなー

などと言いつつも人ごとのスタッフ

そんな中で一人テンションが高いのは…

へへーっ オレも入るんだーい

着替えのパンツ持ってきたもんねー

HIDEのスタッフ
KUMAちゃんの
災難

てくてく
イチニー
えーえ～～～いおしおきだっ！
うげげっ
ざっぱ～ん
あっKUMAちゃん！ひっど～～い
あはは

さて入ると
ひ～んヒデさ～ん
どすこーい
ギエッ!!こりゃ深いわ!!
わ～～い！カエルだカエル!!
どーりではしゃいでたわけだ
棒か何かないかな

………
おお～～～っ!!
不気味なシンクロチーム
お～っとっと濡れちまう

靴は脱いでくださいね
あの髪の色は落ちませんよねぇ？
大丈夫です！
ギャハハハヒデちゃんおかし～っ
さて行きましょうか
完全武装の菅野氏

そんでオレさー
あははははは……
次第に口数が多くなりハイになるKYO
ピクッ
お疲れさまー
プハー
う〜〜さみーよ〜っ
じゃ、そーゆーことで……お疲れさまでした〜〜〜……
こらこら
ペタペタ

どっへ〜〜っ!!
撮影は順調に進んでいった
うん いいね
上がると寒いから入ってよ〜っと
トプン
ねえねえKYOさまとは絡まないのー?

なし!
KYOを待つ HIDEの図
HIDEちゃん待つシリーズ②
コポポポ・・・
ヒデちゃん絡みたくてしょうがないんだ〜〜
は〜〜い お疲れさま〜〜っ
おーっ終わった終わったー!!
何だかんだ言いながらも定刻通り終わったのでした。…お疲れさん…。

(20 Aug. '92)

waku waku PRESENT

SHOXX 恒例スペシャル企画

またもやスペシャルなお品ばかり、バッチリご用意させて頂きました！　ホント、SHOXXって太っ腹♥さぁ、P128を読もーっ!!

1 HIDE(X)とKYO(DIE IN CRIES)

のⒶポラを２名様、ⒷHIDEとⒸKYOのサイン入りファイルをそれぞれ１名様に。

2 TAIJIとMASAKI(LOUDNESS)

のサイン入りポラを３名様に。どれが欲しいか忘れずに書いてくれ！

3 GEORGE (LADIES ROOM)

のサイン入りビニールポーチを１名様に。

4 THE DEAD P☆P STARS

のサイン入りファイルを１名様に。

5 GRANDSLAM

のポスターを５名様に。

6 AMI (東京YANKEES)

のサイン色紙を１名様に。

7 MASAYUKI (DECAMERON)

のサイン色紙を１名様に。

8 TOSHI(GARGOYLE)

のサイン色紙を１名様に。

11 SHOW-YA

のサイン入りファイルを
1名様に。

10 幻覚アレルギー

のステッカーを8名様に。

9 KAIKI(SILVER ROSE)

のサイン色紙を1名様に。

13 TATSU (JACKS' N' JOKER)

のサイン入りⒶポラを2名様
Ⓑうちわを1名様に。

12 ZI:KILL

のサイン入りファイルを
1名様に。

15 THREE EYES JACK

のⒶサイン入りパーソナルブック VOL. 2
Ⓑちゃちゃ丸のピックをそれぞれ5名様に。

14 黒夢

のⒶ3曲入りCDを3名様
Ⓑサイン入りファイルを1名様に。

カンタンな宛名書きの仕事

◉郵便の上書き主体の仕事です
◉男女・年齢・経験不問
◉字の上手・下手は問いません
◉全国どこでも自宅でできます
◉月収5万円上可能
★入会金・保証金は一切ありません★

★お急ぎの方はお電話で
☎03(3555)1277(代)
NIPPON-CHOKUHAN
日本直販1286係
〒104 東京都中央区築地4-4-15-1286

案内資料無料送呈
今スグ、電話かハガキで請求を！
資料送れ
●住所(〒)
●氏名
●年令
●電話番号

41円
104
東京都中央区築地4-4-15-1286
日本直販1286係

自宅仕事で一日数十分。月収5万円上可能！

16 BY-SEXUAL

のⒶサイン入りポラ（欲しい人の名前も書いといておくれ）をそれぞれ１名様
Ⓑサイン入りビニールバックを１名様に。

17 LUiS-MARY

のサイン入りうちわを１名様に。

18 ZIGGY

のバックを５名様に。

19 東京一家

のデモテープを20名様に。

20 Eins:Vier

のCDを２枚セットで３名様に。

アンケートのお願い

●下のアンケートに答えて、用紙を切り取り、ハガキに貼ってくれ（コピーはダメ）。
●わくわくプレゼント（P126～129）の中から欲しいプレゼントの番号を選び、アンケート用紙に書いて送ってくれたら、抽選で当ててしまったりするのさっ。
●あて先は、〒104　東京都中央区銀座５－１－７　数寄屋橋ビル５Ｆ　音楽専科社 SHOXX 編集部まで。
●〆切＝ 92年10月20日（当日消印有効）

●VOL.11プレゼント当選者発表

（敬称略）①静岡県　水野由佳子、江戸川区　森寿子、埼玉県　高橋智子、他４名②浜松市　古山友子、朝霞市　小林夕記、京都府　鈴木香澄、他２名③仙台市　松本春美、郡山市　小針博史、横浜市　東千鶴、他３名④文京区　中谷千里⑤沖縄県　又吉美緒⑥北葛飾郡　加藤絵里香⑦児玉郡　保延由美⑧岡山市　谷本一子⑨青森県　寺田由紀子、熊本市　吉田啓一、奈良県　西川聡子、大津市　鈴木直美、他２名⑩金沢市　谷口好美、山形県　高橋祐子、新潟県　下島由美子、神奈川県　桐ヶ谷直子⑪山梨県　小俣恵、春日井市　永田悠香、他１名⑫佐波郡　田中直子⑬愛知県　柴田貴子、浦和市　間山美加子、兵庫県　児嶋勇人、他７名⑭木県　金子絵麻⑮大宮市　千葉亜矢子、他３名⑯島根県　雁谷絵美子⑰岡山県　三上理恵⑱宮城県　鈴木美知子、大分県　石田裕実子⑲神戸市　木村祐介、千葉県　石川真奈美、他３名⑳大和市　沼倉千恵子、他２名㉑埼玉県　内田有希㉒滋賀県　滝石紀子㉓府中市　今美由紀㉔愛媛県　守谷安津子㉕船橋市　吉田麻希子㉖新潟県　丸山操

●今月号の記事一覧（アンケート★１～２）

①HIDE&KYO②X（NY記者会見・YOSHIKI武道館）③ラウドネス④レディースルーム⑤ザ・デッド・ポップ・スターズ⑥グランドスラム⑦一撃必殺舞踏会⑧SHOW-YA⑨ZI:KILL⑨LUNA SEA（真矢パーソナル・野音密着）⑩RYUICHI（LUNA SEA）司会・JOE（ジル・ド・レイ）&HIROFUMI（アインス・フィア）対談⑪TATSU（ジャクスン・ジョーカー）⑫ヴィジュアルショックス・インヴェイジョン⑬黒夢⑭スリー・アイズ・ジャック⑮インディーズHR最新情報⑯アーチストBOX⑰８ビートギャグ⑱プレゼント⑲ロックンロール日記⑳BY-SEXUAL㉑LUiS-MARY㉒ポスター

（キリトリ線）

SHOXX アンケート用紙 VOL.12

住所	〒　　　TEL（　　）				
氏名		年齢		男・女	

★印今月号の記事一覧参照

★１．今月号で良かった記事の番号を３つあげて下さい。
□□□　●その理由

★２．今月号でつまらなかった記事の番号を３つあげて下さい。
□□□　●その理由

３．あなたの好きなアーティストは？
（　　　）（　　　）（　　　）

４．上記以外で好きになりそうなアーティスト（インディーズ含む）は？
（　　　）（　　　）（　　　）

５．今月号（VOL.12）に対する意見・不満、または希望企画を聞かせて下さい。

６．欲しいプレゼントの番号
（P126～P129参照）

第1希望	第2希望	第3希望
番	番	番

24 HYDE(L'Arc~en~Ciel)

のイラスト（全メンバーサイン入り）を１名様に。

21 HIRO(Eins:Vier)、JOE(Gilles de Rais)、RYUICHI(LUNA SEA)

のサイン入りポラをそれぞれ１名様に。
どれが欲しいか書いて下され。

22 真矢(LUNA SEA)

のサイン入りポラを２名様に。

25 LEZYNA (STRAWBERRY FIELDS)

のイラストを１名様に。

23 LUNA SEA

Ⓐのバッヂⓑツアーパンフⓒステッカー
ⓓTシャツⓔナップザックをそれぞれ５名様に。

26 SHO(BY-SEXUAL)

のイラストを１名様に。

ROCKビデオ専門店

①爆発寸前ＧＩＧ（60分15曲 89年6月1日発売 4326円）
Ｘのファースト・ビデオ。89年３月16日渋谷公会堂のライヴを収録。

②刺激！VISUAL SHOCK VOL.2（60分10曲 89年12月24日発売 4300円）
Ｘ初のヒストリー・ライヴ・ビデオ。ビデオクリップ入り。

③VISUAL SHOCK VOL.3（60分9曲 91年9月30日発売 4800円）
復活したＸのビデオ。昨年のツアー、スタジオライヴ、クリップ、今回のツアーを含むオムニバスビデオ。

④無敵（60分11曲 92年２月21日発売 4800円）
91年10月29日、日本武道館にて決行されたエクスタシーサミットをビデオに。無敵の打ち上げ風景＋＆のオムニバス＆ビデオ。

⑤ボスッ！ ９号（45分 2874円）
Ｘを中心に有頂天、ナナ、アンジー他収録。Ｘがメジャーデビューする前のステージをバッチシ収録した貴重品。残庫若干有。

申し込み方法

■商品の申し込み方法
"Ｘ"他いろいろなロックビデオ有り。御希望の方は、タイトル名とあなたの住所、氏名、郵便番号、電話番号をはっきり明記し、商品代金と送料1000円（何本でもＯＫ）を合わせて現金書留で下記宛までお送り下さい。
●宛先 〒160 東京都新宿区西新宿1-12-12 河西ビルＢ２「レトロ・ハウス」
＊問合せは往復ハガキでお願いします。尚、品切、製造中止の場合は返金させて頂きます。

★1993年版ROCKカレンダー発売決定★

Ｘ、YOSHIKI、TOSHI、尾崎豊、ユニコーン等々、1993年版ROCKカレンダーリストが出来ました。カタログ希望の方は、62円切手２枚を同封の上、「ROCKカレンダー希望」と明記の上、レトロ・ハウスまで送って下さい。

〈レトロ・ハウス〉 〒160 東京都新宿区西新宿 1－12－12 河西ビルＢ２

大島暁美の

ロックンロール日記

初の単行本、大好評発売中!!

ミュージシャンたちが大笑いしてます(笑)

●×月×日
LUNA SEAの日比谷野音ライヴの日。INORANは以前「なんか、雨が降るような気がするなぁ」と心配していたけど、最高気温34度と死ぬほど暑い超真夏日だった。しかも、わたしは「彼らの晴れのステージだから、オシャレしてこ」と、黒の長袖の上下なんか着てっちゃったもんだから、開演前から暑さでバテ気味。真っ黒い服に身を包みながらも、元気に踊りまくるファンのみんなを見て、「やっぱり、若いと体力あるのね〜」と、痛感してしまった。

さて、この日のアンコールのとき、SUGIZOが「お前ら、いい塩梅か?」って叫んだのに、みんな、気がついた? 実は、この言葉には秘められた理由(そんな大げさなもんじゃないけど)があったのだ。いつものように、「地獄の軍団」メンバーで飲んでいたとき、筋少の「じーさんはいい塩梅」っていう曲が話題になってたの。それで、「いい塩梅」っていう言葉、なんか面白いよね」とみんなでいってたら、突然、HIDEが「SUGIZO、今度の野音で客席に向かって「お前ら、いい塩梅か?」って、いってみろ」って、いいだしたのだ。そしたら、SUGIZOくん、「わかりました。俺、絶対にいいます」ときっぱり。でも、まさか、本当にいうとは思ってなかったから、彼がこう叫んだとき、関係者席は大ウケにウケてしまったのだった。それにしても、SUGIZO、よくHIDEとの約束を覚えていたね。偉い!

そして、この日の打ち上げには、HIDE、PATA、IZUMI、NOV、TAKASHI等が顔を見せ、いつも以上に盛り上がっていた。それで、二件目の店に移動するとき。まず最初にメンバーが車で次の店へと向かっていったのだが、ふと見ると、なぜかHIDEの隣にINORANがちょこんと座っているではないか。「あれ、みんなと一緒に車で行くんじゃなかったの?」と聞いたら、「そのはずだったんですけどぉ。僕、おいていかれちゃったんです」とションボリ。「僕、いつも忘れられちゃう存在なんです」とショゲてるINORANを、HIDEが「じゃ、俺の車で一緒に行こう」と慰めていた。それにしても、この日の主役なのにおいていかれちゃうなんて、いかにものんびり屋のINORANらしいハプニングだよね(笑)。

●×月×日
真夜中に奇妙ないたずら電話がかかってきた。ちょうどこの日、哲ちゃんのアトリエでSUGIZOがヘアをやることになっていて、「遊びに来てね」なんていわれてたもんだから、わたしはてっきり、SUGIZOがいたずらしているのだとばかり、思っていた。それで、「何、馬鹿なこと、いってんのよ〜」なんどと鼻で笑っていたのだけど、どうも様子が違う。そしたら、なんとそれは、森重やMADなどと一日だけのセッションをするために、日本に帰ってきていたSHAKEだったのだぁ(笑)。1ヵ月くらい前、LUNA SEAのテープおこしをしているとき、「SUGIZOの声って、SHAKEに似てるな」とチラッと思ったことがあったのだが、本当に似てるの! SUGIZOは早口でSHAKEはスローテンポとしゃべり方は全然違うけど、声自体はそっくり。「いくらギャグをいってもわかってくれないから、俺の声を忘れちゃったのかと思ったよ」とSHAKEに文句をいわれてしまったが、まさか「SUGIZOと勘違いした」とはいえなかったわたしであった(笑)。

●×月×日
SHAKEのセッション・バンドのリハーサルを見に行く。あの真夜中のいたずら電話の用件は、「このバンドのライヴを、見においでよ」というお誘いだったのだが、本番当日、わたしは仕事が入っていて「見に行けない」といったら、「じゃ、リハーサルに遊びに来れば?」といわれたのだ。クリムゾンやローリング・ストーンズなどのコピーをやっていたこのバンド。リハーサルなのに、全員、大はりきりで超カッコよかったのだ! みんながすごく楽しそうに演奏している姿を間近で見れて、さすがにこのときばかりは「ん〜、これは役得だなぁ」と、感じてしまった。メンバーもスタッフもすごく盛り上がっていて、「来年は、このバンドでツアーをやりたい」なんて、騒いでいたよ。是非、実現してほしいな〜。

さて、そのリハーサルが終わった深夜、わたしは都内の某スタジオに顔を出した。HIDEやPATAが来年のカレンダー用の写真撮影をしていて、いつものメンバーが集まっているから、「遊びにおいで」と誘われたのだ。ま、これはつまり、「終わったら、飲みに行こう」ということなんだけどね(笑)。それで、実は、そこには新メンバーのHEATHもいたのだ。彼とはもう何度も顔をあわせていたのだが、今までは日記にも書けないでいたの。今だからバラしちゃうけど、あの「夜明けのラジオ体操」のときも「GOLDのHIDE'Sナイト」のときも、彼はちゃんとみんなと一緒にいたんだよ。でも、HEATHがメイクをして衣装を着ている姿を見たのは初めてだったんだけど、すっごくカッコよかった。わたしは彼が前のバンドでプレイしているところも一度見ているんだけど、ベーシストとしてもかなりの腕をもつ人なので、みんなも彼のプレイを楽しみにしていてね。「エックスに入って、いきなり海外で記者会見とかあって、緊張しない?」と聞いたら、「緊張よりも、嬉しいっていう気持ちのほうがずっと大きい」と答えていた彼。いつもニコニコしているマイ・ペースな感じの人だけど、きっと彼は大物だぞ!

●×月×日
「ロックンロール日記」単行本の原稿書きはすごくハードで、最後の1週間くらいはほとんど徹夜の連続だった。でも、ようやく最終デッドラインの前に書き終えて、写植のチェックを終えた翌日、LAに向けて出発。2日間貫徹して、よれよれ状態での旅立ちだった。これからLAで1週間、NYで1週間、TOSHIの本「MAKING OF TOSHI」の撮影&取材で、彼の追っ掛けをやるのだ。LAではレコーディングの他、ビデオ撮影、ジャケットや宣伝用の写真撮影と、超ハードな日々を送っていたTOSHI。でも、持ち前の超人的パワーで、いつもまわりのスタッフを笑わせながら、元気にレコーディングや撮影をこなしていた。

いちばん大変だったのは、LAから車で3時間ほど離れた砂漠に、3日間ロケに出かけたときのこと。スタッフが持ってた温度計の最高気温43度を、早々と午前11時に振り切ってしまったほどの灼熱地獄のなか(最高時は50度あったらしい)、彼は砂漠を走ったり寝っ転がったり、いい絵をとるために文句ひとついわずに頑張っている。ハイライトは、大がかりなクレーン車を使っての撮影。画面を見ると、まるでTOSHIが空を飛んでいるような錯覚に陥るほど、まわりの景色が流れるように変わり、すっごく素敵な映像が仕上がった。この映像は、彼のファースト・シングル「Made in Heaven」のプロモーション・ビデオで見られるから、お楽しみに!

そして、すべての撮影が終わり、彼がキャンピングカーに戻ってきた。スタッフが「TOSHI、お疲れ様。大変だったろ?」といったら、彼は「炎天下で他のスタッフのみんながあんなに頑張ってくれてるのに、俺が疲れたなんて、とてもいえないよ」と答えていた。わたしはちょうど隣の部屋にいて、TOSHIのこの言葉を偶然聞いたのだけど、彼の部屋には数人のスタッフしかいなかったのである。つまり、社交辞令でも取材用でもなく、彼は本音としてこう答えたのだ。見ているだけでバテてしまうようなあんな悪条件のなかで、素直にこんな言葉がいえるなんて、TOSHIは本当にすごい! このとき、スタッフが一丸となって、TOSHIの作品を最高のものにしようと頑張れたのは、彼のこんな純粋な気持ちが伝わっていたからに違いない。わたしはこのとき心の底から感動し、TOSHIのことを今まで以上に尊敬してしまったのだった。

●×月×日
LAでのスタジオ撮影がスケジュールの都合で飛んでしまい、結局、NYでも前半は時間「MAKING OF TOSHI」のために時間をさいてくれたTOSHI。でも、NYにはデヤケンさんの下のお兄さんエイジさんが住んでいて、出山三兄弟は少ないオフの時間を、一緒にゴルフに行ったりして楽しんでいた。YOSHIKIはNYでも相変わらず打ち合せに忙しく、ほとんど仕事をしていた。PATAは体調が悪く、しかも巨人の成績が悪いという情報を聞いてさらに落ち込み、ずっと部屋にこもっていた。HIDEは「クラブ活動」とかいいながら(笑)、夜のクラブ・シーンを徘徊するのに忙しく、HEATHはマイ・ペースでときどきHIDEと一緒に遊ぶ以外は、ひとりでホテルのまわりをうろうろしていた。でも、みんな記者会見が大成功のうちに終わり、エックスの世界進出を改めて実感したよう。これから、いよいよレコーディングに突入するわけだけど、今から次のアルバムが待遠しいよねっ!

●×月×日
記者会見の翌日NYを発って、日本に戻ってきたのが昨日。それで、そのままTOSHIのオールナイト・ニッポンの最終回を見に行って、打ち上げにも出て、明日はレディース・ルームのファンクラブ・ツアーに同行して、タイに出発するわたし。つまり、日本に一日しかいないで、またお出かけなのだ! ああ……わたしにやすらぎの日が来るのは、いったい、いつなのでしょう……くすん。

こ…これがミュージシャンの素顔なの??
全208ページ、
笑いすぎてアゴがガクガクにならないように、
十分注意してください。

SHOXX 92年9月号臨時増刊

大島暁美のロックンロール日記

ロック・ミュージシャンの取材こぼれ話、イッキにあれこれ!!
ここまで書いてイイのか?(笑)

イラスト シマあつこ

第1部▶ロックンロール
"酔いどれ"座談会
出席者＝HIDE、橘高文彦、
SUGIZO
第2部▶ロックンロール日記
「総集編」
犠牲者が続出!!
第3部▶ロックンロール
"セックス"座談会
出席者＝レディースルーム
第4部▶92年6月、狂乱の日々…
読んでるだけで二日酔しそう(笑)
第5部▶ロックンロール
"のんびり"座談会
出席者＝PATA、JOE、JIMMY
第6部▶ロックンロール日記
「番外編」
ま…まだあるんですかぁ?
第7部▶素顔のミュージシャンたち
もう、こうなるとボロボロでんな…
第8部▶ロックンロール
"詐欺師"座談会
出席者＝管野秀夫、亀山哲哉、
高橋恵美
第9部▶ギョーカイ裏話

発売前、キョーフにおののきなが
らLAへと飛び立った方々、本屋
さんの前は目を伏せて足早に立ち
去る方々、また何も知らない方々
etc.……世の中、ますますデス。

ついに暴露本、登場か!?(笑)

あなたの期待にこたえて(笑)、好評発売中!!
定価●980円(送料260円)

発行＝音楽専科社
〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F ☎03(3574)0201

4D POCKETの謎を探せ!

BY-SEXUAL

約1年振りに発売されたBY-SEXUALニューアルバム「4D POCKET」。佐久間正英をプロデューサーに迎え、ひと皮もふた皮も向けて大人になったBY-SEXUALの新しい魅力がいっぱい詰まったセクシーでアダルティーな名作だ。この半年の充電期間を有意義に過ごした結果がこれなんだろうな。そこで今回はその充電期間中のエピソードも含め、一風変わった全曲解説をお届けしよう。

INTERVIEW : YUSUKE KATOH
PHOTOGRAPHY : YOUSUKE KOMATSU
STYLING〈CONCEPT〉: EMI TAKAHASHI

SHAVOOM!

THUN

9月18日に発売されたBY-SEXUALの約1年振りのアルバム『4D POCKET』はもう聴いたかな？（しかし本当に9月18日に発売されてるんだろうなぁ？ このインタビューを読んでもらえばわかるんだけど、発売されたかどうか本当に不安ー）このアルバムを聴くとSHO・RYO・DEN・NAOの4人がこの半年間の充電期間を本当に有意義に過ごしたことがよくわかる（って、これもインタビューを読んでもらえればわかるけど、いまいち不安ー）

このアルバムを一言で表現するならば、そう、〝セクシー&アダルティー〟。いままでの元気いっぱいタテノリ路線からは想像もつかなかったおしゃれなメロディーとアレンジ。しかもBY-SEXUALの持ち味であるポップさにもますます磨きがかかってる。

オープニングにはぴったりのバリバリのダンスナンバー「GOOD LUCK」。アブノーマルな歌詞とエッチなブリッジがたまらない「IRON MAN」。シングルにもなっているミディアム・ポップナンバー「DEEP KISS」。充電期間に約2名ギャンブルに凝りまくった結果から生まれた、かどうかはわからないけど、サビがキャッチーな「BLACK JACK」。これはもうBY-SEXUALの十八番、サイキック・ダンスナンバー「TRASH CITY」。他のバンドがやったらヒッチャカメッチャカになっちゃう曲もBY-SEXUALがやるとちゃんとポップに仕上がるという見本の「CRASH」。これまたBY-SEXUALのお家芸「KID」。このアルバムの中ではこの曲が一番好きです、私は。まるで映画のワンシーンをみているようにロマンティックな「PERMANENT VACATION」。タイトルとはウラハラにキワドイ歌詞とSHOとRYOのツインボーカルがイカス「HAPPY BIRTHDAY FOR ME」。そしてラストに相応しいスロー・バラード「ADAM TO EVE」。

『4D POCKET』というタイトル通り、四次元の世界にトリップしてしまったようにバラエティーに富んだ作品群はまさにBY-SEXUALワールド。この半年間のお勉強の成果が十分に活かされています。はっきりいってBY-SEXUALの最高傑作といっても過言ではないでしょう、このアルバムは。

というわけで、今回はSHO・RYO・DEN・NAOの4人に1曲ずつコメントしてもらった。しかし、そこは流石のSHOXX、そんじゃそこらの全曲解説とはわけが違う。1曲ずつ歌詞の中から興味深い言葉を抜き出して、それから連想すること・まつわるエピソードなんぞを聞いてみたゾ。

それでは、奇想天外・抱腹絶倒の全曲キーワード・インタビューの始まり始まりぃ〜。

●ダメ

From「GOOD LUCK」

「二言目には『ダメ！』ばかり それで何もかもダメにして 賑やかにいきゃそれでいい 言い訳など後ですればいい」

RYO ダメ、目玉。

DEN 違うって、誰がしりとりしろっていったの（笑）。

RYO まあ〝ダメでもともと〟っていいますからね（笑）。まぁ、ダメでいいのは「ダァ〜メ♡」っていう感じだよね。

DEN 甘いダメ（笑）？

NAO 俺、強引にしようとしてそのまま終わったって話もある（笑）。若かりし頃の話だな（笑）。

RYO まぁ、その気があれば「ダァ〜メ、あとで♡」と来るからな（笑）。

DEN 「イヤッ♡」もいいよね（笑）。なんの話をしてるんだろう（笑）。

RYO あとは、買い物行って「ママこれ買って」「ダメ」っていわれたりとかね。

──例えばそれは何だった？

RYO あんま覚えてないなぁ。「ダメ」といわれ続けてもう22年（笑）。

DEN そう、親にはたいがい全部「ダメ！」っていわれてたからなぁ。

RYO でも「ダメ」っていわれることをしたいっていう気持ちはあるよね。

DEN 「ダメ」も続けばOKになる、と。

RYO 「ダメ」でないと「ダメ」とかさ。

DEN それを〝だめ押し〟という。

一同 おお、美しい（笑）ー

●危ないプレイ

From「IRON MAN」

「HARDすぎる 危ないPLAY おもいっきり野蛮になって WATER BEDの上 船出を楽しもう」

DEN 危ないプレイは、こっちに出て来る頃の器材車で、高速でハコ乗り状態。130㎞ぐらい出てるから顔がこんなんなってんねんな（笑）。

RYO 体液が車内に飛んでくるという（笑）。まさに危ないプレイだったな（笑）。

NAO ああ、よくやったなぁ。あと、これこそ〝ダメ〟になるかもしれないけど、高速のサービスエリアのトイレからトイレットペーパーをいっぱい取って来て走りながらそれを撒く（笑）。

DEN 「攻撃！ 発射！」とかいって（笑）。

SHO でもクルマ関係の危ないプレイは多いよね。

DEN ゴーカートに弾かれたりしたし。みんなで遊園地に忍び込んでスピードの速いゴーカートに乗ってて、真っ暗で、周り見えないでしょ？ コーナリングで曲がったらぶつかって俺はトボトボ歩いたの。そしたら後ろから来た後続車3台ぐらいに次々に跳ねられたの（笑）。

NAO それをみんなヘラヘラしながら見とったんやな（笑）。

DEN で、その一週間後ぐらいにこのバンドでライヴがあったんだけど、手の骨が開いてて、両方の。

RYO 初めての骨折か？

DEN いや、骨折じゃなくて脱臼かな？突き込んだ状態になってて、整骨院行って「3日で治してくれ！」っていったら「治るわけない！」とか言われて。足にもヒビが入ってたし。

RYO その横で笑って見てる俺らっていうのもひどいな（笑）。バイクとかクルマとか乗るからね、俗にいう〝無茶〟っていうヤツが多いよね。

DEN 無茶はNAO（笑）。

RYO NAOは〝無茶苦茶〟って感じだな（笑）。

DEN 前からトレーラーが走って来たりとか、コーナー攻めてて（笑）。

NAO あれは俺が悪いんじゃないよ。だって、高速コーナーがあって、そこを130㎞ぐらいで曲がってたんですよ。そしたら、前の車を抜こうとして横に出て11tぐらいのトレーラーが急に前に出て来て、あとホントちょっとのところでぶつかってましたよ。

DEN SHOは家襲われたりなぁ（笑）。

SHO それは俺が危ないんじゃないよ。

NAO SHOやんが危ないっていうよりは周りのヤツが危なかったっていう（笑）。

SHO マンションの下の部屋に住んでたヤツがちょっと危ないヤツで、ウチのドアのカギ穴にボンド流し込まれて「君はなにかヤバイことやってるだろう？」って。

RYO なによりも怖いですよ、クルマで怖いより怖い（笑）。

●ロマンティックなセリフ

From「DEEP KISS」

「ロマンティックなセリフも

SKERASH!

FRAKOOM!

FRAKOOM!

KWABAM!

たまにはいいだろうけど
オールシーズン焼けた肌には似合わない」

――ロマンティックなセリフっていうか、とっておきの口説き文句って感じかな。

DEN　それはNAOに任せた（笑）。

NAO　なんで俺よ（笑）？

RYO　地味にいってもいいですか？「はさませて」とかね（笑）。

NAO　こう改めて考えるといつもなんていってるんだろうなぁ？

RYO　作ったのでもいいよ。作ったのでいつもの（笑）。

NAO　飲みに行ってだなぁ、女の子がいるわけだ。その子はたいてい店員なんだけどな。

DEN　お前いつもそんなことしてんの（笑）。

RYO　そうだったのか（笑）。

NAO　で、「店が終わってから飲みに行こう」って。それで3人ぐらいの女の子がついて来るわけだな。

RYO　ロマンティックだなぁ（笑）。

NAO　でもよく飲みに行って「君の瞳に乾杯ー」とかいいますけどね。

DEN　すごいな、お前！

RYO　ヤなヤツだな（笑）ー

NAO　いやいや、そういうオヤジギャグをいうと受けるんですよ、そういうとこの女の子は…、ってなんで俺がこんな話をしなきゃなんないんだよ（笑）。

――SHOやんは？

SHO　俺は口下手だからね。

――じゃあ態度で？

RYO　すごいですねぇ。その方がすごいですよ。

DEN　でもSHOやん見てるとあんまりしゃべってないよね。

NAO　一緒に飲みに行ってもあんまりしゃべらないんですよ。SHOやんは、周りの雰囲気に合わせてて。

RYO　合わせてない、合わせてない（笑）。俺なんか必死になって盛り上げようとしてるのに横で「ちょっと、ちょっと」って女の子呼んで（笑）。

――じゃあ雰囲気で口説くと？

RYO　でもないなぁ。SHOやんは自分が泥酔してわからんようになったときに女の子に持って行かれるタイプやな（笑）。だから力持ちの女の子が多い（笑）。

SHO　で、目が覚めたら横に知らない女の子が寝てて（笑）。

RYO　DENの場合は目。その大きい目で見つめられるともうヘビに睨まれたカエルのように動かなくなったところをサッと（笑）。

DEN　おかしいなぁ？　俺はロマンていうのは星を眺めてたばこでも吸いながら……。

RYO　ブーブーブーブー、あれ、なんか警報鳴ってるで（笑）。

●匂い
from「BLACK JACK」

**「金持ち面したペンギン達を
ゲランの匂いを撒いた
ハイエナが狙っているぜ」**

DEN　匂いは、この間なにげに出たテレビの匂いはすごかったなぁ。

NAO　ダウンタウンの水曜日にやってる番組でお客さんが笑うと匂いの詰まった風船飛ばすんですよ。あれに出たんですよ。

――ああ、知ってる知ってる。何の匂いなの、あれ？

DEN　もうそのもの（笑）。ウンコでもね、100個ぐらい袋に詰3日ぐらい置いたのの空気をパフッてやったような。

NAO　トイレとかの臭さじゃなくて、そのものを直にかいだときの匂い。

RYO　現物支給って感じかな（笑）。

NAO　だからそんときもいってたんだけど、小さいときとか砂場とかで遊んでたらネコのウンコとか出て来て触っちゃってそれを匂ったときってすごいショックじゃないですか？　あんな感じなんですよ。

RYO　あれは迷惑ですよ。

――それは科学的に作ってるの？

DEN　香水メーカーが作ってるらしいんですけどね。で、科学合成じゃなくてもとのエキスを絞ってる状態に近いらしいんですよ。「なんてことするー　俺らは笑ってないぞー」って感じなんですよ（笑）。

――よかった、テレビから匂いが出なくて。

DEN　ねぇ。あんまり文明発達してもね…。

RYO　料理番組とかでもね、お腹いっぱいのときに中華料理の匂いとか出て来たら大変やろな（笑）。

DEN　二日酔いのときにウイスキーの匂いとかな（笑）。

――それぞれ好きな匂いは？

RYO　あんまりないなぁ。

SHO　香水とかつけるのも好きじゃないし。

DEN　必然的にスプレー臭いっていうのはあるけどね（笑）。スプレーの匂い嗅ぐと「ライヴだ！」って思ったりするし。

RYO　狭い所であれを嗅ぐと「楽屋」って感じがするからな。

NAME:RYŌ
BIRTH DATE:　th AUGUST 1970
PART:GUITER

DEN　それにたばこの匂いも混ざった日にゃぁ昔の楽屋とか思い出す。どっと疲れるもんな、あの匂い嗅ぐと（笑）。なんか闘志が張って来るもん、「ライヴだー」って。でも一番困るのは電車とか乗っててなにげに同じスプレーを使ってるおばさんが横に座ると「ライヴだー」ってなっちゃうこと。

SHO　なるかぁ（笑）？

DEN　なるよ。よぎるぞ、楽屋の光景が。パブロフの犬現象（笑）。

NAO　お香の匂いとか好きですね。けっこう家で焚く方だから。たまに焚くと落ちつくんですよね。合掌したくなる（笑）

DEN　いや、君たちはまだまだな。幼い頃から線香の匂いを毎朝嗅がされた俺にしてはそんなことは……。

NAO　線香とは違うってー（笑）

DEN　もう飯食えんぞ（笑）。もう前が見えなくなるくらい線香焚きやがるんですよ、ウチの家は。何を考えてるんだー（笑）

RYO　DENは線香の匂いに敏感やもんな、一緒に道歩いてても「あ、どっかで葬式やってるー」って（笑）。

NAO　君は匂いに敏感だよ。

RYO　一番鼻大きいからね（笑）。

DEN　そういう問題かなァ（笑）。

●夢の島
from「TRASH CITY」

**「夢の島から生まれてきた
ダストビンズレディーが挑発する
おさまりつかない奴らは
今夜の獲物になるのさ」**

NAO　俺の知ってるヤツで江ノ島と夢の島を間違えたヤツがいたなぁ。ごみ処理場って夢の島でしょ？　江ノ島見て「ああ、あれが夢の島か」って。

DEN　だからどうした（笑）？

NAO　夢の島ってドリーム・ランドやー

DEN　ああ、ドリーム・ランドよく行ったよな、奈良ドリーム・ランド。

――無人島に行きたいとかない？

DEN　ああ、行く予定だったんですけどね、行けなかったんですよ、話がまとまんなくて。東京湾にあるらしいんですよ、無人島が。で「行こうー」っつってたんですけど、情報聞くとどうやら犯罪者とかが全部そこに逃げてるらしいんですよ。相当危ないらしいんですよ（笑）。「おもしろいから行こうー」っつってたんですけど日にちが合わなくて行けなかったんですよ。

――それは危険だよ。それこそ〝危ないプレイ〟だよ（笑）。

DEN　ねぇ。行ってたら帰って来なかったかもしれない。

RYO　バンザーイー（笑）

DEN　コラッー（笑）　でも別にそういう

ZAP!

BLAM!

BA-BOOM

危ないことをしようと思ったわけじゃなくて太陽の下で素っ裸で歩けるっていうのは素晴らしいことじゃないか。

RYO　それがしたいのか、君は？

DEN　そうそう。いや、一人でだよ。「アハハー」とかいって牛乳とか飲んだら最高じゃないかー

RYO　酔っぱらったらいつでもやってるやん（笑）。

DEN　素っ裸じゃないからね。

—SHOやんは無人島に行きたいとか思わない？

SHO　ありますよ。

—一人で？　女の子はいらない？

SHO　いらない。

RYO　おお、言い切ったね。行ってきなさい（笑）。

DEN　この人の家は無人島化するからね。

—なにそれ？

DEN　連絡は来ないわ、ずっーと家から出てないとか。

—何してるの？

SHO　いや、いろいろ忙しいんですよ（笑）。

DEN　時間がゆっくり流れてるんだろうな、SHOやんの家は（笑）。

RYO　夢の島といえば、ハーレムー

DEN　そう、こんなヤツと一緒にいたくないから俺は無人島に行きたいんですよ（笑）。

●誓い
from「CRUSH」

「気付いた時には　既に遅すぎる
もう二度と乗らないと誓ったのに　また！」

DEN　ライヴ前にお酒は飲まない。

RYO　飲んどるやないけ（笑）ー

NAO　その隣で条件反射で一緒に飲んでしまった俺（笑）。

DEN　最悪だな（笑）。

RYO　まぁバカに誓いは必要ないと（笑）。

DEN　あ、素顔でライヴやってないけどね、まだね。

RYO　なんだお前？　どう繋げんねん？

DEN　俺は続いているぞ、ずっとー

RYO　別に誓ったわけじゃないやろ？

DEN　俺は誓ったもん、「絶対素顔ではライヴやらない！」って。誓いかぁ……「自殺しません」とかね。

NAO　「日本酒は飲まない」って一回誓ったが……。

DEN　無駄やったやろ（笑）？

NAO　無駄やった（笑）。そういう酒からみの誓いはいっぱいあるけど、全部破ってますからね（笑）。

—じゃあ今なにか誓おうか？

SHOXXの読者に誓おう！

（といってる横でカメラマンが先に帰るということで一同「お疲れさまでした！」）

NAO　よし、じゃあこれから仕事が終わっても「お疲れさま」とはいわない！

—絶対だな？（笑）

DEN　最低なヤツ（笑）。

NAO　マズイな、どんどん嫌われる（笑）。

RYO　よし、じゃあSHOやんになにか誓ってもらおう。「絶対インタビューで一番先にしゃべる！」とか（笑）。

SHO　（笑）。

DEN　とりあえず9月18日にアルバムが出る。

RYO　これは出すー（笑）

—なんやそれ？（笑）

RYO　けどその次はわからない（笑）。

—おいおい（笑）。「絶対解散しない！」っていうのはどお？

RYO　それは誓えないな（笑）。

●嘘
from「KID」

「BACK TO THE KIDS
嘘で伸びた鼻を捨てろ！」

—今までついた一番大きな嘘は？

DEN　よく聞かれるんですけどね、「今までについた一番大きな嘘ってなんですか？」って。このバンドやってることでしょう（笑）。

—おいおい（笑）。自分は嘘つきだと思いますか？

DEN　俺は今まで嘘ついたことない。

—それが嘘だろう！（笑）

DEN　そうそう（笑）。

—嘘で塗り固められた人生？（笑）

DEN　（笑）。でも嘘も突き通せば本当になるからね（笑）。突き通すことが大事（笑）。

—SHOやんは嘘つき？

SHO　うん。

—「うん」（笑）。

RYO　SHOやんは嘘つきやからなぁ（笑）。

DEN　まごうことなき（笑）

—RYOくんは？

RYO　俺はどうやろ？

DEN　一番嘘を突き通して来たタイプだよね（笑）。

RYO　そうそう（笑）。結局嘘つきバンドですよ（笑）。ただ突き通せるだけの根性があるかないか、ここに差が生まれて来るんですよ（笑）。でも嘘っていうよりハッタリの方が多いよね（笑）。

DEN　そう、はったりを突き通すと後に引けなくなってやらざるを得なくなる（笑）。

DEN　結果、嘘でなくなると（笑）。その理論でこのバンドずっとやって来ましたからね（笑）。

RYO　まぁ世にいう"行き当たりばったり"っていうことですね（笑）。

DEN　"見切り発車"とかね（笑）。ウチはたいがいそういうこと多いですよ（笑）。

—よく続いてるよなぁ（笑）。

NAME:DEN
BIRTH DATE:10th JUN 1970
PART:BASS

●バケーション
from「PERMANENT VACATION」

「PARAMANENT VACATION
それが二人の合言葉
もう準備はOKさ　さあ行こう」

—みんなバケーションは何してたの？

SHO　バケーションは……なんもしてないですね（笑）。

SHO　いや、普段よりは外でましたけどね。

DEN　すごいよな、半年ぐらいあったわけよ、休み。でも本当に何にもしてないもんな。

SHO　偉いでしょ（笑）。

—ずっと家にいたの？

DEN　無人島行ってるよりすごいと思うよ（笑）。何度か会った気はするけど。

—何度ぐらい？

DEN　半年間で5回以内じゃないかな？

RYO　俺は1回ぐらいやで（笑）。しかも連絡も取れないっていう（笑）。そういうの平気で出来るっていうのはすごいよな（笑）。

—NAOくんは？

NAO　俺は逆にずっとウロチョロしてましたね。競馬とスキーと、あとは飲み歩き。競馬は渋谷の場外馬券売り場に毎週土・日に。

—朝から？

NAO　いや、7レースぐらいからやるからお昼ぐらいに行って横の屋台で焼き鳥をつまみながらビール飲んでラジオ聴いて。

RYO　いくつや、お前（笑）ー

—収支決算はどうだった？

NAO　多いときで5万ぐらい勝ったけど結局はチャラかな？　ダービーも取ったんですけど当たり馬券無くしちゃったんですよ（笑）。

—DENくんは？

DEN　俺は泳いでましたよ、無人島に行けなかった悔しさで、プールで。やっと息継ぎが出来るようになりました（笑）。

—なぜまた？

DEN　なまって来たんですよ、身体が。ライヴ終わってすぐ休みになったから弛んで行くのがわかったんですよ、身体が。で、泳ぎに行ったら吐きましたね、初日は（笑）。すごいんですよ、他で泳いでる人が、パワースイマーみたいなこんなに筋肉ついたオヤジ

■VOL. 10→橘高文彦（筋肉少女帯）&DEN 対談カラー13ページ&スーパー・セッションライヴレポート1ページ■VOL. 11→SHO パーソナル・インタビュー8ページ+野音ライヴレポート2ページ

SKRAAOOM!

WHAP!

KZAP!

BRRAAAAAAAP

〈ライヴスケジュール〉9月22日＝千葉県文化会館、25日＝浦和市文化センター、10月6日＝愛知県厚生年金会館、24日＝大阪厚生年金会館、11月15日＝松本文化会館、17日＝新潟PHASE、23日＝NHKホール●問い合わせ☎03-3497-9555

が力泳してるんですよ。それに追いかけ回されて（笑）。で、調子に乗ってその速さで泳いだら30分もたなかったですよ、立てなかったですもん。でも今は負けないですけどね。

——そしてRYOくんは？

RYO あんまり休んだっていう記憶はないんですが、まぁ休みとなる日にはごく普通の21歳の生活をしてたような気がしますね。

——というと？

RYO スロット行って、単車いじって、夜な夜な連れの家に転がり込んで。そんなもんですね。

——スロットはどうだった？

RYO 実は買ったんですよ、スロットの台を。スロットは前から好きで毎日開店から閉店までスロットしてたいなと思っててやってみたんですけど、ケツが痛かった（笑）。

——なんかどれもつまんない休みだなぁ（笑）。

RYO それが楽しいんですよ（笑）ー

DEN 最初にいってたのとは大違いでしたからね。みんな「旅行行く」とかいってたんですけどね。

——一応計画はあったわけだ？

DEN あったんですよ。

RYO でも「疲れるから止めた」って（笑）。

NAO 僕は旅行のお金を競馬で使ってしまいましたからね（笑）。次は負けないぞー

●ハッピー・バースデー

from「HAPPY BIRTHDAY FOR ME」

「HAPPY BIRTHDAY
祝ってあげる
強引だけど ストレートだろう？」

——誕生日の思い出とかある？

RYO 去年はハワイだったんですよ。

——いいなぁ、それ。

SHO でも悲惨だったんですよ（笑）。21歳の誕生日の前の日の夜中だったから……。

NAO 日本ではもう誕生日を迎えてたんですよ。でも時差があるからハワイではまだで。

DEN で、「みんなでディスコでも行ってお祝いしてあげよう！」とかいってディスコ行ったら本人が入れないの、向こうは21からじゃないと入れなくて（笑）。

SHO 「君はダメだ。明日来い」っていわれて（笑）。

DEN でも「誕生日だから」ってひたすらいったんだけど店のおじさんに「ノー、ノー、ノー、ノー、明日来なさ～い」とかいわれて。

NAO そのままSHOやん見捨てて俺らだけ楽しく飲んでたっていう（笑）。「もういいや、お前帰れ！」って（笑）。

DEN 「まったく迷惑なヤツだー」とかいってな（笑）。

——ひどいなぁ（笑）。1日ぐらい、もうホント何時間かでしょ？ それぐらいおまけしてくれてもいいのにねぇ？

DEN そうやっていったんですけど全然聞き入れてくれませんでしたね。

NAO あと、俺一回だけ誕生日会やったことあるんですけどね、小学校のときに。東京から大阪に引っ越したばっかであんまり友達がいなかったから、とりあえず誕生会でも開いて友達を作ろうとして、ウチの親が奮発してマクドナルドでやったんですよ（笑）。

——あるある、マックの誕生日会！（笑）

RYO 恥ずかしいヤツー（笑）

NAO いや、もっと恥ずかしい話がこれから続くんだよ。でね、俺、はしゃいで食いまくって吐いちゃったんですよ（笑）。そしたら次の日からクラスの人気者でしたよ（笑）。

一同 （大爆笑）

NAO それでね、マクドナルドで1回誕生会をやるとそれから毎年その月になるとそいつの名前と誕生日が貼られるの「○○くん、誕生日おめでとうー」って（笑）

DEN 恥ずかしいー（笑）

SHO うわー、キテるわ、それ（笑）。

RYO そんなヤツやったんかー（笑）

NAO ちゃんとな、ドナルドもどきもおんねん！

——あのピエロみたいなヤツが？

NAO そうそうそうそう、ノッポさんみたいなヤツがね（笑）。その横で吐いちゃって（笑）。食ったポテト全部出しちゃって（笑）。

DEN 最低だな、お前ー（笑）

——これに勝てる話ないね（笑）。次の話題行こう！（笑）

●生まれ変わる

from「ADAM TO EVE」

「ああ すべて支配された後に想い出す
罪を犯してきた人々たちよ
ああ 白日夢から目覚め
生まれ変わるだろうか」

——次に生まれ変わるとしたら何がいい？

DEN 俺はもう、神様（笑）。

——神様になって何したい？

DEN ボーッとしたい。「悔い改めなさい」とかいって（笑）。

RYO 人に注文ばっかするんやろ(笑)？

DEN 空の上で踊ってるの、「ウヘヘヘヘヘェ」とかいって（笑）。「悔しかろう」とかいって（笑）。闘いを挑もうものなら「神を冒瀆するな！」とかいって（笑）。これ程ラクな商売はないね（笑）。

RYO 神様は商売か（笑）？

DEN 幸せそうやもんな、神様って。「私が神だー」とかいって（笑）。

RYO 胡散臭いわぁ（笑）ー

——NAOくんは？

NAO でも虫とか殺すときとか考えますよね、ふと、「もしかして俺が次生まれ変わってこれだったらどうしよう？」って。

DEN それは恐ろしいな。

RYO 君、きっと虫になるで（笑）。SHOやんは生まれ変わるときっとちょうちんあんこうになる。うなぎかな（笑）。

NAO ちょうちんあんこうとかうなぎとかもきっと表情はあんねん、笑った顔とか。

RYO あるかなぁ？ 楽しそうなうなぎ？

一同 （大爆笑）

RYO 捕まってもすごい気持ち良さそうにしてんの（笑）。

SHO さばかれて「何すんのや！」って（笑）？

RYO 泣き上戸のうなぎとかな（笑）。でも俺、生まれ変わるなら動物でいいや。ネコとか……百獣の王ライオンとか。

NAO 人間になれなかったとしたらかげろうかな？

——はぁ？ その心は？

NAO あっという間に死ねるじゃないですか？ すぐもう1回やり直せるでしょ（笑）。

——うまいっ（笑）。でももしもセミとかになっちゃったら大変だよ、7年も土の中にいて（笑）。

RYO それはイヤだなぁ（笑）。

NAO やっぱりあっという間に死ねるヤツがいいなぁ。亀とかは死んでもイヤだ（笑）。

さてさて、いかがでしたでしょうか、『4D POCKET』発売記念全曲キーワード・インタビュー。

通常のインタビューよりもこういう企画物の方がその人の人となりがよく出るもので、この半年間で一回りも二回りも大きく成長したBY-SEXUALの4人がわかってもらえらんじゃないかな？

このインタビューを読みながら『4D POCKET』を聴くと、またひとつ新しい世界が見えてくるかもね。

そのBY-SEXUAL、この最高傑作アルバムを引っ下げて9月22日の千葉県文化会館を皮切りにツアーに出ます。きっと全国各地で新しいBY-SEXUAL四次元ワールドを展開してくれることでしょう。なんかね、今回のツアーはいつも以上におしゃれして、出来れば恋人と一緒に観に行ってもらいたいですな。季節もぴったり、恋人たちの秋だしね（笑）。

衣装協力＝渋谷フロンティア、文化屋雑貨店

EEEYYYOOOWWWW!!

KWOOM!

PFAMM

By-SEXUAL

SKRA-
-ACKK!

ZAP

LUiS-MARY

DRIVE ME MAD

今までの先入観のウラをかいてていいかな、と。

〝ツアー終了後のスケジュールは、まだ何も決まってないんですよ、ちょっと暇になるかも？〟と言っていたLUiS-MARY。暇？とんでもない！曲作りにシングル・レコーディング、そのプロモーション・ビデオ撮影、そしてその次…と休む暇などありゃしない。と書くとけっこう過酷のようだが、本人達はいたってマイ・ペース。今回は、10月21日リリースのシングル「DRIVE ME MAD」を中心にいろいろ聞いてみたぞ！

INTERVIEW : REIKO ARAKAWA
PHOTOGRAPHY : MOTOI OHNISHI

—10月21日リリースのシングル「DRIVE ME MAD」だけど、いつ位から制作にとりかかったの？
丸山：7月前半に決めて、リハ入って。
HAINE：ツアー終わって、間もなく。
—あれ？ヒマだって言ってたじゃない？パワステ終わった直後は。
丸山：言ってるだけだったんです（笑）。あの頃はまだよかったんです。
HAINE：全然ヒマがない。で、曲作って7月アタマに曲選考して、なかばにはレコーディングして、と。日程っていつやった？
丸山：18日からだっけ？
HAINE：今回山中湖のスタジオでレコーディングして、16日から行って20日に帰ってきた。
—レコーディング前に曲選考ってどんな感じで曲が集まったの？
HAINE：10数曲？
—それじゃ、アルバム出来ちゃうじゃない。
HAINE：そうですね。僕のは意外とポップで…。
丸山：どこがや！（笑）
HAINE：なっ。（と周りに同意を求めるが無視される）けっこうキャッチー。
—誰が何曲持ってきてたの？
丸山：4、4（山下）、4（HAINE）、1（KEN）。
HAINE：俺のは、キャッチーすぎてやっぱりシングルには向かへんかった（笑）。
—ヘヴィなの作ってきたんじゃないの？
HAINE：いや、俺のはキャッチーで。自分ではキャッチーやと思ってんねんけど、人とは価値観が違うらしい（笑）。
—今回の「DRIVE ME MAD」は誰が？
丸山：僕で、『OPEN YOUR HEART』が山ちゃん。
—『砂漠の雨』のレコーディングから約何ヵ月？って感じだけど、取り組んだ姿勢っていうのは『砂漠の雨』とは全く切り放したものだったの？
丸山：全く別でしたね。
—この2曲を選んだ時に、次へのコンセプトって見えたんじゃない？
HAINE：どうなんやろ？ウチって、今まで楽曲聴いて、いいの選んでそれにあとからコンセプト的なものをつけてたから、あんまり考えてはいなかったと思うんですよ。次のアルバムへはまだですけど、『砂漠の雨』とは違うものを打ち出していこうっていうのはありますね。
—山中湖でのレコーディングはどんな感じで行なわれたの？
丸山：初日はリズム隊で、2日目ギター録って、3日目、歌録ってって感じです。
—じゃあ、わりとスンナリいけたんだ。
HAINE：ヴォーカルだけちょっと……。山中湖でちゃんと終わらそうと思ったんですよ。東京に帰ってきてからやるの嫌でしょ？（笑）せっかく山中湖行ってやったのに無理やった。カップリング曲は東京で録り直し。
—そうだったんだ。前半遊んでたの？
HAINE：遊んでましたよ。いや、遊んでない、遊んでないっ！（笑）歌詞出来てなかったから。
丸山：かぶとむし採りに行ってた。
HAINE：うっ！違う〜。歌詞作ってました。
KEN：ビリヤードにマージャン。
HAINE：違う〜っ。歌詞作ってました。
—リズム隊は終わってから何してたの？
丸山：西さんは歌詞作ってるように見えたけど、3人でテレビ見てましたね（笑）。
—（笑）今回のレコーディング誰が1番真剣に取り組んでたの？
HAINE：俺。
他3人：シーン
HAINE：俺、行ってからスグ歌詞作ってたもんな。
KEN：ビール飲みながら。
HAINE：（笑）どうでしょうね、斉藤さんと比留間さんが1番真剣に…。
丸山：取り組んでたと思うんですけど（笑）。
—自然に囲まれたところで遊びたい気持ちがフツフツと湧いてきたんじゃないかと。
山下：みんな結構遊んでましたけどね。
KEN：自分のパートが終わったら遊んでましたよ。
—自分のパートが終わった人は、何やって遊んでもいいんですよ。でも終わってなくて遊んだ人もいるようで。
HAINE：誰や？（笑）俺、向こうでケガするぐらい遊びましたね。
山下：クワガタ採りに行ったんですよ、ローディの人と3人で。メッチャ高い所におってね、〝クワガタや〜！〟って西さんが肩車でも届かへんから、それよりもっと高くしたら、バック・ドロップ状態で落っこちて。
HAINE：（笑）後頭部と腰強打しました。下ジャリやったもんなぁ。痛かった〜、もう。
—（笑）
HAINE：でもクワガタは離しませんでした（笑）。
—（笑）まぁ、お疲れさまでした、と。で、東京に帰ってきてTDも終わった訳ですね。曲の雰囲気ってかなりハードな印象を受けたんですけど。メロディアスでありながら、ハードな部分も打ち出していきたいっていう感じなの？
HAINE：今回のシングルって改めて聴くと両極だと思うんですよ。この2曲って対称的で、2面性、裏表みたいなのがある。で実際のところ、カップリングの方が表に出てこなアカンような感じがするんですよ。明と暗みたいな感じで、ポップだしキャッチーだし。でもあえてそれにしなかったのは、これから方向がハードになっていくとかじゃなくて、自分達の2面性を見せるのと今までの先入観のウラをかいてていいんじゃないかな、と。
—そして今日は暑い中、このシングルのビデオ・シューティングお疲れさまでしたって感じだったんですけど、4日前にも撮影があったそうだけど、それはどこで？
丸山：横浜の赤れんがの建物のところで。
KEN：俳優のように（笑）。
—そこと？
HAINE：さっきの代々木公園と原宿の竹下通り。
—ビデオに関しては、どんな話し合いをしたの？
HAINE：最初は廃車工場とか夢の島とかでロケしようって言ってたんだけど、許可がおりなかった。今、東京でロケ地探すのってかなりややこしいみたい。ま、でも楽しく出来たので編集はこれからですけど、いいのが出来るんじゃないでしょうか。
—このシングルを出した後の予定は？
HAINE：次のアルバムのレコーディングに入ります。
—えっ、そんなに早いの？
丸山：スグです。
HAINE：来月（9月）から制作にかかります。10月アタマから全開で飛ばして、その後にツアーです。
丸山：休む間もなくツアーです（笑）。
HAINE：年末あたりにショート・サーキットで全国回ろうかな、と。
—それは忙しそうで、いいじゃないですか。
一同：おかげさまで（笑）。

《バックナンバー》■VOL・3 →インタビュー■VOL・6 →HAINE パーソナル・インタビュー
■VOL. 9 →ルイ・マリー&ストロベリーフィールズ・パート別対談■VOL. 10→パワステ密着レポート

《ライヴ・スケジュール》11月23日＝横浜 7th アベニュー、26日＝新潟ジャンクボックス、27日＝前橋ラタン、29日＝長野 J、12月 1 日＝高知 ZE／YO、2 日＝高松オリーブホール、4 日＝広島ウッディーストリート、5 日＝福岡ビブレホール、7・8 日＝大阪バナナホール、10日＝名古屋ハートランド、11日＝京都ミューズホール、14日＝仙台141スタジオホール、19日＝市川クラブ GIO ●問＝アップル・ボックス（03・3407・2279）

親に貰った黒髪を
染めて散らした親不孝
泣いてくれるなおっ母さん
親や世間に逆らって
ついたその名も不良達(ヤンキース)

2nd ALBUM
"Overdoing"
10/1 ON SALE!!

●初回プレスのみ●
CDシングル付き(JOKER)
EXC-009S 税込定価¥3,200(税抜価格¥3,107)

GUEST GUITAR
PATA

CHORUS
"GASOLIN" HIDE·SCEANA·KAZZY·KUMA-CHAN
TSUBAKI·SHIGE·TETSU·SAB·FUKUDA

▶通販予約受付中◀
(通販特典付)

《通販申込方法》お申込は郵便振替にてお願いします。(電信不可)
郵便局に備え付けの郵便振替用紙の所定の欄にあなたの住所、氏名を記入し、裏の通信欄に①希望商品名②枚数③あなたの電話番号を明記し、CD代金と送料+手数料¥900(一枚に付き)を下記までお振り込みください。

振替口座番号:東京0-708676
加入者名:株式会社エクスタシーレコード

※他の商品をお申込みの際にも、以上の方法でお申込みください。
商品のお届けに20日前後かかりますので、ご了承ください。

EXTASY RECORDS
株式会社エクスタシーレコード
〒150 東京都渋谷区恵比寿西2-13-7 代官山Yビル4F
TEL.03-5458-6381

NKEES

●東京YANKEES TOUR SCHEDULE●

10. 8(木) 仙台ヤマハ6Fホール
10. 9(金) 山形レコ発サイン会
10.11(日) 札幌メッセホール
10.13(火) 北見夕焼けまつり
10.16(金) 青森クウォーター
10.18(日) 新潟JUNKBOX(サイン会)
10.24(土) 山形セッション
10.25(日) 会津短期大学体育館
10.27(火) 新宿パワーステーション
11. 金沢VAN VAN V4
11. 3(火) 高岡もみの木ハウス
11. 4(水) 名古屋ハートランド
11. 6(金) 名古屋ハートランド
11.12(木) 岡山ペパーランド
11.14(土) 博多Be-1
11.15(日) 大分TOPS
11.18(水) 広島ウッディーストリート
11.20(金) 高松クラブハウス
11.21(土) 徳島スエヒロプラザ
11.23(日) 難波ロケッツ
11.24(火) 難波ロケッツ

東京 YANKEES

1st ALBUM
Do the DIRTY
発売中!

●通販特典／校章バッチ
EXC-006 税込定価¥2,500(税抜価格¥2,427)

飲め！買え！打て！
…HIDE(X)談

骨は拾ってやるぜ！！
…YOSHIKI(X)談

東京 YA

インディーズ
メジャー
中古まで

円盤屋

CD
RECORDS
DEMOTAPE
VIDEO

通販ダイヤル 新譜予約受付中です!!
052(221)8067

通信販売大カンゲイ!! まずは電話でネ。

SISTER'S NO FUTURE
DYNAMITE TOMMY CRAZY DANGER NANCY KEN-chan

シスターズ・ノー・フュチャー

10/5発売ビデオ「ビデオ・スリル・ショウ」
限定10000本 ¥3,000
10/21発売2nd CD ¥
上記、2Wを円盤屋にてご予約の方のみ、先着300名様!
「シスターズ・ノー・フュチャー・ファンの集いにご招待します。
くわしくはTELにてどうぞ!!(名古屋地区のみ)

でかめろん&フリーウィル

円盤屋のみの発売!
デモ・テープ(すべて限定入荷です)
①「ビター・アンド・スウィート」5曲入りNAOKIプロジェクト¥1,545
②「RADIO.D.M.2」3曲+おしゃべり ¥1,030
③「RADIO.D.M.1」 ¥1,030
④「L.N.ダンステリア」NAOKI+シーナプロジェクト ¥1,030
⑤「メリークリスマス・フォーユー」 ¥1,545
⑥「しいもんきい」㊙ デモテープ ¥2,060
⑦「エンゼルス・パーティー」デカメロンのデモテープ ¥2,060
⑧「しいもんきい」1stデモテープ ¥2,060

ダイ・イン・クライズ

6曲入りニューアルバム
初回のみボーナスCDシングル付!
9/23発売! ¥2,300
円盤屋にて強力予約受付中
●ニューシングルも同時発売 ¥930

ジキル

●スティルアライヴーザ・ベストI
(ライヴCDです!) ¥3,000
10/21発売ニューシングル
10/28発売ニューアルバム
円盤屋にて予約受付開始です!

なんと、円盤屋が、日本のインディーズをガンガンかけてしまう
FM番組をはじめたぞ!!
ロッキンfの読者の君もリクエストをどんどんと書いて送ってくれ!
毎週10名様に番組のプログラムテープを差し上げますよ!

FM三重「ロックの出てきた日」 金曜日0:00AM→1:00AM
▶78.9▶ ●リクエストのあて先は、円盤屋までハガキでどーぞ。

エックス

ニュービデオ「TOKYO・DOME・3DAYS」
10/上旬発売! ¥10,000(2巻組)
●TOSHI ソロデビュー!
10/21発売 ソロシングル
12月にフル・アルバムも発売です。—予約受付中!—

アイオン

2ndCD愛音
先着でポスター付!
¥3,000
2ndシングル愛音
CDISARRAYのライヴを収録! ¥930
—好評発売中!—

ユナイテッド

2ndフルアルバム
「ヒューマン・ズー」
9/26発売!
円盤屋のみの予約特典あり! ¥2,800
予約受付中!

▶君の聴かなくなったCD高価買取します!50枚以上は着払いで…査定価格連絡後、現金書留で送ります!

特製バッチ付
シルバーローズ
Keen Kiss Me
円盤屋のみの特典付!! ¥2,800
●1st CDも、もちろんあります。

ルナシー
1st CD ¥3,000
●ベストセラー!!

ルナシー
イメージ ¥3,000

ジンクス
1st CD ¥2,500

黒夢
中絶 ¥1,500

バナナフィッシュ
B.F. ¥2,000

ガーゴイル
ふれぶみ ¥3,300
各種CDあります。

ジキル
トゥモロウ ¥3,000

ジキル
クローズダンス
¥3,000

ジキル
真世界 ¥2,500

カラー
チェリーズ・ワールド ¥3,090
円盤屋のみ生写真付!

幻覚アレルギー ¥3,800
ノイズアレルギーXXX ¥3,800
●1st CD「マウストゥマウス」もあります

ジョリーピックルス
黒じゃない世界
¥3,090

デカメロン
ブルーストレンジャー ¥2,575
●1st CD 名曲アルバム ¥3,090もあります。

ジル・ドレイ
殺意 ¥3,000
●1st CD「ダムドピクチャーズ」あります。

アルバトロス
アー・ユー・ハングリー?
¥2,575

ビリー&スラッツ
ひとつ目うさぎの大逆襲 ¥3,090
1st CDもあります。

ルイ・マリー
砂漠の雨 ¥3,000
各種CDあります。

ベルゼルブ
Mr.Ree ¥3,090

ストロベリーフィールズ
ダンスラマ ¥2,153
各種CDあります

デランジェ
ラヴィアン・ローズ ¥3,000
各種CDあります。

レディースルーム
SEX SEX SEX ¥3,000
各種CDあります。

アルカード
ロンドンアフターミッドナイト
¥2,800

ザ・ゾルゲ
デットリィ・サンクチュアリィ
¥3,000

アサイラム
ブラインドアイズ ¥2,884
各種あります。

東京ヤンキース
ドゥ・ザ・ダーティ ¥2,500
★2nd CDは10月発売/予約受付中です

アイオン
ヒューマングリフマン ¥3,090
AION各種あります!

ローゼンフェルド
ピッグス・オブ・ザ・エンパイヤ
¥3,090

サクリファイス
ティアーズ ¥2,800

ローシェッド
スピッツ&ソウルズ
¥2,800

シェルショック
プロテストアンドレジスタンス
¥3,090

ユナイテッド
ビーストドミネイツ'92 ¥1,900
Newアルバムも予約してネ!

スペルバウンド
エスケイプ ¥1,400
GOODなパワーメタル!

デットクロウ
ボムドアンドブラステッド ¥2,580
もうすぐ復活か?

ガーリックボーイズ
サイコスラッシュ ¥3,000
New CDは10月にハウリング・ブルより発売です!

ニューキーパイクス
1st CD!! ¥2,884

ガスタンク
ガスタンクボックス
¥4,120

クォーターゲイト
BAKI+DOOM
¥3,000

ココバット
ココバットクランチ
¥2,575

サバートブレイズ
サバート・アクトII
¥2,812

ヘヴィメタルフォースIII
オムニバス/エックス、サーベルタイガー収録 ¥2,575

オペレーション"Z"
ザズルレコードのオムニバス
¥3,090

エマージェンシー・エクスプレス
1992(オムニバス)
¥2,800

EPシングル
BAKI「KOROSE」 ¥1,030
先着20名様サイン入りです。

ビデオ
ダイ・イン・クライズ
WEEPING・SONG ¥2,577
各種ビデオあります。

ビデオ
ラウドネスブラック
ウィンドウ ¥3,800

ビデオ
ルナシー
イメージ・リアル ¥4,800

ビデオ
ゼータVOL.12幻覚アレルギー
スペシャル ¥3,800
ゼータ・各種あります。

View Point
インディーズ・ファン・マガジン
¥391

YOSHIKI
インタビュー+写真集
¥2,900

NEW RELEASE & BEST SELLERS

インディーズ メジャー CD・ビデオなどどんなものでもあります おさがしのCDはTELで!

- 東京ヤンキース 2nd CD ¥ 10月発売
- ラルク・アン・シェル 1st CD ¥ 9/25発売
- スリー・アイズ・ジャック/3ソングス ¥1,400
- ギルトフェイス/SABAKI ¥2,800
- JACK(ジル・ド・レイのギター)ソロアルバム ¥2,575
- セブンス・ヘブン/ホープ・ユー・ライク・イット ¥2,000
- しいもんきい(VTR)/ルシアンゲーム ¥2,575
- ジャクスン・ジョーカー(SCD)/ ¥930
- TATSU/ROCK LOVE ¥3,000
- TATSU(SCD)/COWBOY ¥930
- 木暮武彦/EARLY・L・A・WORKS ¥3,000
- DOOM/NEWCD ¥ 10月発売
- ストロベリーフィールズ/ミニCD ¥ 10月発売
- バイ・セクシャル/Newシングル ¥1,000 9/18発売
- バイ・セクシャル/Newアルバム ¥2,800 9/18発売
- しいもんきい/ちょうちんふかし ¥2,266 再プレス入荷!
- ラウドネス/スローターハウス(SCD) ¥1,000 ライヴ入り!
- G.I.S.M/DETESTation ¥2,575
- LIPCREAM/CLOSE TO THE EDGE ¥2,575
- LIPCREAM/9SHOCKING TERROR ¥2,369
- ピズム/ダンス(デモテープ) ¥412
- エルドリッチ/ムーンフォークプロジェクト(デモテープ) ¥1,030
- EZRA/増殖人間(デモテープ) ¥1,030
- YBO²/ライヴ3(デモテープ) ¥1,545
- アムネシア/アムネシア(デモテープ) ¥824
- 「レージング・フューリー1st CD ¥2,500」

今月の円盤屋はデモテープ大募集月間!だ。
インディーズ・バンドのみなさん、どんどんTELしてもってきて下さい!!
待っていますヨ

手軽な通信販売もやってるぞー。
★TEL注文、日本全国どこでもOK/ 即日発送/
★「早く、安く」商品をお手元にお届けできる 代金引換システム をご利用下さい。
〈方法〉①TELで希望商品、住所、氏名をお知らせ下さい。
②即日、商品を発送致します。
③代金は商品到着時に明記してある金額(送料を含む)を郵便局員にお支払い下さい。
※ハガキによるお申し込みも受付中。
希望商品名(第2希望まで)、住所、氏名、電話番号を明記の上お申し込み下さい。
★現金書留、郵便為替による通販も承り中/
まずTELで在庫確認の上、代金+送料(全国一律800円)を、下記の宛先までお送り下さい。

円盤屋 〒460 名古屋市中区大須2-27-30(西大須ビル1F)
TEL(052)221-8067 FAX(052)211-1815(FAX24時間OK)

●自主制作CD.LP.デモ テープ.VIDEO等大募集します。(詳しくはTELで)11:00AM〜9:00PM 年中無休

T−SECRETレーベル 第一弾

VO: GO

G: MAY

1. FAKE
2. DEAD SILENCE
3. L. S. D.

限定・ジャケットデザイン・CD

Schedule

9/26(SAT)
目黒　ライブ・ステーション
10/11(SUN)
目黒　鹿鳴館 "SHOXX'イベント"
11/3(TUE)
原宿　ルイード "イベント"
11/8(SUN)
目黒　鹿鳴館
WITH:BILLY & THE SLUTS

PHOTO BY NORIO KAJIKI

ILLUSTRATED BY YOSHIHITO TOMOBE

●購入方法・・・現金書留でCD，
送料＋包装代込みで¥2,000円を
アレイスター「T−SECRET」係まで。

=CDの購入、またはプレス連絡先=
アレイスター　〒163-91新宿郵便局私書箱 364号
TEL & FAX.03-3346-1895

=バンドに関するお問い合わせ=
JACK OFFICE
〒354 埼玉県富士見市関沢2-28-1
TEL.0492-55-5789

THREE EYES JACK

3 SONGS MINI ALBUM
Now On SALE!
¥1,400(TS-001)

ハイ　クオリティーサウンド！
ローコスト　豪華ジャケット！

DR: YUKARI

B: CHA-CHA-MARU

DISTRIBUTED BY HARA GAKKI CO.,LTD
HRGレコードセンター　〒170 東京都豊島区西巣鴨1-11-13 TEL.03-3949-9607

THREE EYES JACK

P☆P STARS 結成!!

快感

1992年
7月20日

THE DEAD

死の

POP 4 DRUGS 発表

等一切不明

ANARCHIST RECORD

1992年11月21日 THE DEAD

現段階詳細

Manufactued and Distribuuted by NIPPON CROWN

SRC MAIL ORDER

12-316
Y82チョーカー
¥1,500

13-303 水晶皮ひもネックレス ¥3,000

13-304 竜十字架ネックレス ¥2,200

13-332 ハニーネックレス・ハート 皮革 ¥1,200

13-333 ハニーネックレス・すかしバックル 皮革 ¥1,500

18-021 3連ブレス ¥2,980
18-022 ゴールドブレス(大)10㎜幅 ¥1,500
18-023 ゴールドブレス(小)5㎜幅 ¥1,200
18-011 シルバーリングブレス(12本セット) ¥1,440

18-024 リング付ブレス
¥3,500

17-020 目玉リング(大)
¥2,500 フリー
17-051 ボーンハンド
¥1,200 フリー
17-043 ブラックリング
¥2,500 フリー
17-049 目玉リング(小)
¥1,600 フリー

14-021
黒手袋ロング
¥4,700
(レースもあり)
14-022
レース手袋
¥2,980
14-025
エナメル手袋ロング
(指なし)
¥7,800

12-307
マグネットピアス
(黒&赤)¥2,000
2ヶずつ計4ヶ
磁気で付きます。

12-318
イヤーカフ・ノーマルセット ¥1,600
(大小各1ヶ)

14-010 レザーグローブ
(ビョウ付) ¥3,600
皮革/黒/フリー
14-005 レザーグローブ
(ビョウなし) ¥2,980

33-002 リップ&フェイスカラー
各 ¥1,600 黒、紫、赤、青
33-004 マニキュアセット(赤&黒)
¥1,280/2色入り

33-006 手染め 各¥4,000
赤、紫、黒、オレンジ、緑、青
(ブリーチしてからですとよりきれいに染まります)
33-007 ブリーチ剤 ¥3,000

01-340 ワンサイドケープジャケットDX ¥24,800
ポリエステル/黒/フリー/着丈85㎝

01-285 ベルトジャケット
¥19,800 ポリエステル/
黒/フリー/着丈95㎝

01-283 ZIPジャケット
¥21,800 ポリエステル/
黒/フリー/着丈85㎝

01-303 プリーツカラージャケット ¥19,800
ポリエステル/黒/フリー/
着丈79㎝

02-288 十字切り替えブラウス ¥10,800
レーヨン/黒地白十字、
白地黒十字/フリー

08-419 プリーツワイドパンツ ¥16,800 ポリエステル/
黒/フリー/
パンツ丈102㎝

08-101 レザーパンツ
¥8,800 合皮/黒/
28、30、32インチ

08-344 ダブルバックルパンツ ¥11,800
ポリエステル/黒/
フリー/W～76㎝

08-402 ワイドパンツ
¥11,800 ポリエステル/
黒/フリー/W～76㎝

08-343 スリムパンツ
¥11,800 ポリエステル/
黒/フリー/W～76㎝

02-289 スカーフ付ブラウス ¥9,800
ポリエステル、レーヨン/
白、黒/フリー

41-408 きりかえスカート
¥6,500 黒/アセテート、
ナイロン、レーヨン/フリー

長袖Tシャツ 綿/フリー

35-159 PNDブリーチ紫
¥3,820(赤もあります)

35-221 エンジェル ¥5,800
(同じバックプリントあり)

35-230
ローズサソリ ¥4,980

41-409
編上げスカート
¥6,500 黒/ナイロン、
アセテート/フリー

01-338 ボレロ(ベロア)
¥5,900 黒/アセテート、
ポリエステル/フリー
06-004 プレーンビスチェ
¥6,500 黒/ポリウレタン/
フリー/B80
08-408 フリルショートパンツ
¥7,900 黒/綿、ナイロン、
レーヨン/フリー

01-317 モヘアセーター
¥10,000 アクリル/
紫×黒、赤×黒、黒/フリー
08-135
ブラックスリムパンツ
¥8,800 綿/黒/
28、30、32インチ
(赤もあります)

02-211
ストラップシャツ
¥8,900
綿/黒/フリー

35-128
ベルト付Tシャツ
¥6,800
綿/黒/フリー

13-325
ブラックネックレス
¥3,980 長さ250㎝
01-337
ボレロ(シフォン)
¥5,500
黒/ポリエステル/フリー
41-407
レースロングスカート
¥9,800 黒/ナイロン、
レーヨン/フリー

09-2012
ウエスタン・ダブルリング ¥17,800
皮革/黒/
24.5～27㎝

09-0812
ブーツ812
¥1,7800
皮革/黒/
メンズ24～27
レディスM
(22.5～23)
L(23.5～24)

01-339 ボレロ(レース)
¥7,800 黒/ナイロン、
レーヨン/フリー
41-410 フリルスカート
¥7,900 黒/綿、ナイロン、
レーヨン/フリー

●SRCの商品はスキンヘッド、コンフュージョンのブランドより特選したものをご紹介しております。

お申し込み方法

★ハガキでオーダーする人は
下記の要領で必要事項を書いてポストへ

41 〒151
東京都渋谷区
代々木3の15の3
アベビル205
SRC
SH9係

①〒住所(フリガナ)
②氏名(フリガナ)㊞
③生年月日
④電話番号(必ず)
⑤希望商品名・商品番号
⑥数量・色・サイズ
⑦保護者名㊞18才以上の方は必要ありません

★FAXでオーダーできます
ハガキと同じように必要事項を書いて
03-3378-6300
年中無休 ※必ずSH9係と書いて下さい。

★デンワでオーダーする人は
日・祭を除くAM10:00～PM6:00
03-3378-6200

●商品はオーダー受付後2週間前後でお届けいたします。●代金のお支払いは、商品到着後1週間以内に送金して下さい。●万一届いた商品に破損等があった場合は新品と交換いたします。●郵便切手(10%増)でもお申し込みOK。●お買上げ合計が1万円以上の場合は代金引換です。

荷造り送料は均一800円です。●何点お申込みされても800円だけです。
●全商品消費税を含んだ価格です。

SRC
〒151 東京都渋谷区代々木3-15-3 アベビル205
★どうぞお気軽にお問い合せください

原宿駅
竹下通り
●マクドナルド
●クレープ店
★SKIN HEAD
★CONFUSION

原宿店
●営業時間
AM11:00～PM8:00
●原宿駅竹下通り口より約100m
●SHOP SKIN HEAD 03-3497-9856
●SHOP CONFUSION 03-3497-9867

カタログ無料急送
オリジナル新作カタログ Vol. 14発行中!
ご希望の方はハガキに
①住所②氏名③SH9係
カタログ希望と書き左記まで

OFFICE & SHOP スタッフ募集!
写真を添えて履歴書急送せよ

●お急ぎの方は電話で確認の上、現金書留でご注文願います。また、急送希望の方は原則的に郵便物500円増、小包1,000円増になります。

SHOXX

1992 11月号

ショックス

Vol.12

発行人:荒井敏行
編集人:星子誠一
発行:音楽専科社　〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F
☎(03)3574-0201(代) FAX:(03)3574-8548

Victor
"HIS MASTER'S VOICE"

JVC

※JVCは、日本ビクターの世界ブランドです。

小さきだけを誇るコンポには、したくなかった。

Miclodio

撮影協力:軽井沢高原教会

CDサイズのコンポ、音のビクターから。

まず、実物を見ておどろく、その稀なる小ささに。
そして、音を聴いておどろく、そのクオリティの高さに。
タテ置きなら、幅わずか458㎜。だから、さまざまなシチュエーションにスッと収まる。
あなたの部屋の、大好きな場所に心地いい、CDサイズのコンポです。

ディスクサイズ・コンポ UX-5

標準価格 65,800円(税別)

(視覚のアメニティ) ◆音の臨場感を鮮やかに映し出す、大きく見やすいバックライト付ディスプレイ
(サウンドの光沢) ◆聴きたい音楽ジャンルのテイストを、簡単操作で引き出せるサウンドメニュー
◆音楽にメリハリをつけ、その魅力をグッと際立たせる重低音AIスーパーバス
(快適な操作性) ◆居ながらにして気軽にリモコン開閉できるCDドア◆多機能フルリモコンを装備

●あなたが録音したものは、個人として楽しむなどのほかは、著作権上、権利者に無断で使用できません。●ビクターへのお問い合わせ、カタログ請求は、型名および住所、氏名、電話番号をご記入のうえ…〔ビクターお客様ご相談センター〕東京:〒113 東京都文京区本郷3丁目14-7 ビクター本郷ビル TEL03-5684-9311/大阪:〒543 大阪市天王寺区小橋町10-16 大阪ビクタービル TEL06-765-4161 R係へ。日本ビクター株式会社

VICTOR CREATES IT.

雑誌04537-11　定価750円(本体728円 送料260円)　Printed in Japan　株式会社プロスト

T1004537110750